第564集

川原平(1)遺跡Ⅱ【第1分冊 本文・観察表編】

二〇一六・三

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第564集

川原平(1)遺跡Ⅱ

－ 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 －

【第１分冊 本文・観察表編】

２０１６年３月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第564集

川原平（1）遺跡Ⅱ

（かわらたい）

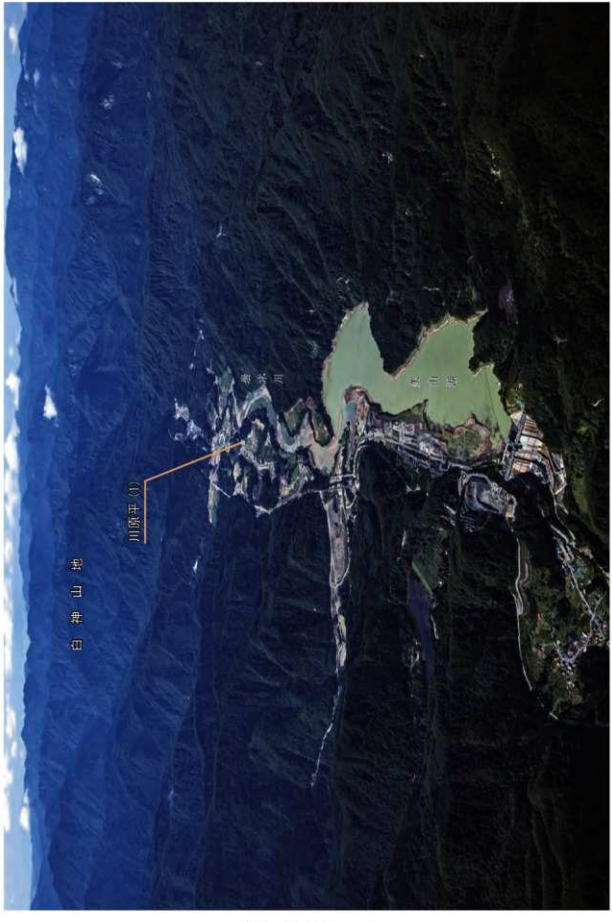
－ 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 －

【第１分冊 本文・観察表編】

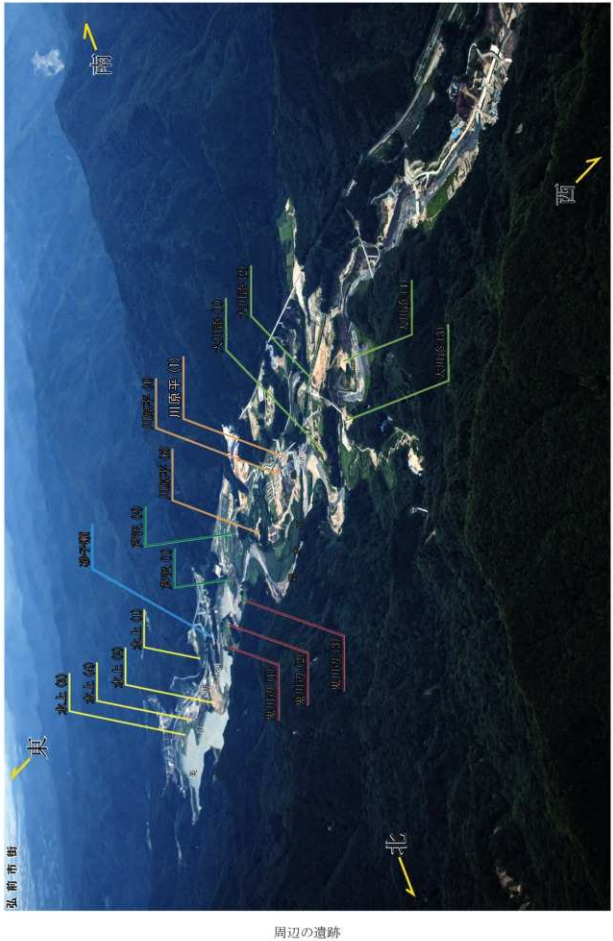
２０１６年３月

青森県教育委員会

巻頭写真２



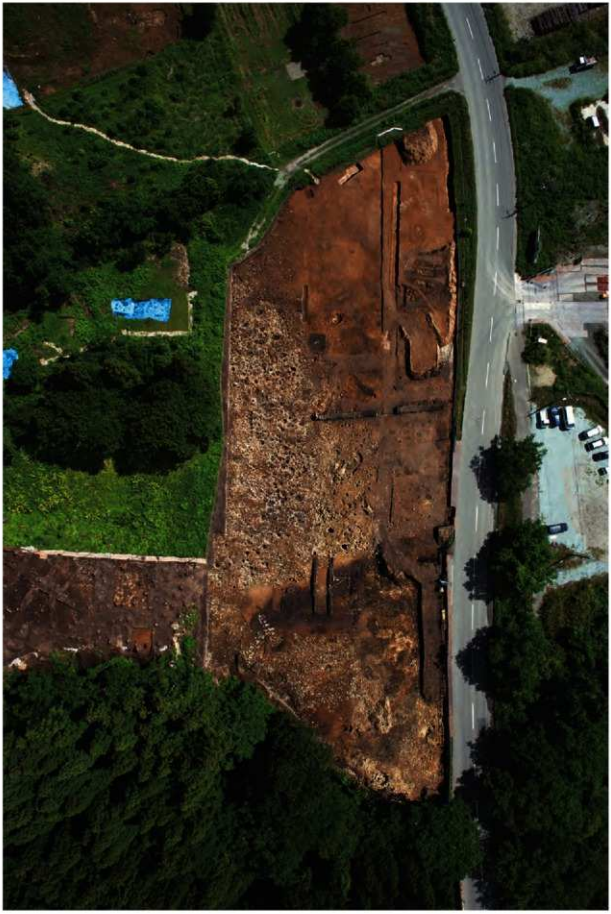
遺跡の位置(北東から)
(提供：津軽ダム工事事務所)



周辺の遺跡

遺跡全景（北東から）

遺跡全景（南西から）



空中写真（2011年・2013年合成：左方が北）

石棺状配石全景（南から）

石棺状配石・SI101・遺物包含層（北西から）

SQ18 西石組（南から）

SQ14（南から）

後期7－4期の土器

後期8期の土器

晩期１a期の土器

晩期３期の土器

人面付香炉（図21-1）

人面付土器（左：図21-2 ， 右：図92-11）

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成15年度から津軽ダム建設事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。

川原平(1)遺跡については平成15・23・25～27年度に発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代後期末～晩期にかけての竪穴住居跡・土坑・土器埋設遺構・配石遺構・遺物包含層等が確認され、縄文時代の集落が営まれていたことがわかりました。遺物は土器・土製品、石器・石製品等が多量に出土しました。特に縄文時代後期後葉～晩期にかけての遺物は、この地域では稀少な出土例として注目され、晩期の亀ヶ岡文化を考える上で貴重な発見となりました。

この調査成果が、埋蔵文化財の保護と研究に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成２８年３月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長　三　上　盛　一

例　言

1　本書は、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所による津軽ダム建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成23年度・平成25年度に発掘調査を実施した西目屋村川原平(1)遺跡の発掘調査報告書である。

2　川原平(1)遺跡の所在地は中津軽郡西目屋村大字川原平字福岡地内、青森県遺跡番号は343009である。

3　川原平(1)遺跡の発掘調査報告書は、既に1冊目が刊行(2006 第409集『川原平(1)・(4)遺跡・大川添(2)遺跡・水上遺跡』)されており、本書は2冊目となる。報告範囲は、第409集で「C区」とした県道北側の平坦部における、平成23年度(2011年)調査区と平成25年度(2013年)調査区の石棺状配石周辺が該当する。

※ 本遺跡の発掘調査は平成26～27年度も実施され、3冊目以降の報告書刊行が予定されている。

4　発掘調査と整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所が負担した。

5　発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成23年5月11日～平成23年10月28日
	平成25年5月7日～平成25年11月14日
整理・報告書作成期間	平成24年4月1日～平成25年3月31日
	平成25年4月1日～平成26年3月31日
	平成26年4月1日～平成27年3月31日
	平成27年4月1日～平成28年3月31日

6　本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、報告書抄録記載の編著者が担当し、執筆者名は文末に記した。既刊の第409集と本書の内容が異なる場合は、本書が優先する。なお、発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合においても本書が優先する。

7　発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務の一部については委託により実施した。

基準点・水準点測量	株式会社キタコン
空中写真撮影	株式会社シン技術コンサル
土器の図化作業の一部	株式会社アルカ、株式会社ラング
石器の図化作業の一部	株式会社アルカ、株式会社ラング
土器の復元の一部	株式会社文化財ユニオン、株式会社吉田生物研究所
漆製品の保存処理	株式会社吉田生物研究所
遺物の写真撮影	シルバーフォト、フォトショップいなみ

8　石器の石質鑑定は調査員の柴正敏 氏に依頼した。

9　地形図(遺跡位置図等)は、国土地理院発行の地図を合成・加工して使用した。

10　測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。

11　遺構については、その種類を示すアルファベットの略号と算用数字を組合せた番号を付した。基本的な略号は、以下のとおりである。
SI－建物跡　SN－焼土遺構　Pit－柱穴　SK－土坑　SQ－石棺状配石・配石遺構　SR－土器埋設遺構

12　遺物については、取り上げ順に種別ごとの略号と番号を付した。略号は、以下のとおりである。
P－土器　　S－石器　　C－炭化材　　特－土・石・漆製品

13　土層の色調表記には、『新版標準土色帖 2005年度版』(小山正忠・竹原秀雄)を用い、遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。土層断面図には、水準点を基にした海抜標高を付した。

14　図版中で使用した網掛けの説明は各図中に記したが、一部は観察表中に記したものもある。

15　遺構実測図および遺物実測図の各図版にはスケールを付している。

16　遺物観察表における(　)内計測値は残存値を示す。

17　遺物写真には、実測図の図番号を付した。実測図の掲載を省き、写真のみで報告した遺物もある。
縮尺は不同である。

18　発掘調査及び整理・報告書作成における出土品・実測図・写真等は現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

19　発掘調査及び整理・報告書作成に際し、下記の方々と機関からご協力・ご指導いただいた(敬称略、順不同)。
青森県立郷土館　　秋田県立博物館　　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
大館郷土博物館　　大湯ストーンサークル館　　辰馬考古資料館　　西目屋村教育委員会
弘前大学人文学部北日本考古学研究センター　　山形県埋蔵文化財センター
會田容弘（郡山女子短期大学）　　関根達人　片岡太郎　田中克典（弘前大学人文学部）
松本建速（東海大学文学部）

目　次

第１分冊　本文編

第１章　調査の概要
第１節　調査に至る経緯…… 2
第２節　調査の経過…… 2

第２章　調査および報告の方法
第１節　発掘作業の方法…… 8
第２節　整理・報告書作成作業の方法…… 11
第３節　報告の方法…… 12

第３章　遺跡の環境
第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 15
第２節　遺跡の立地と基本層序…… 20

第４章　遺跡の概要
第１節　遺跡の概要…… 29
第２節　遺構の概要…… 30
第３節　遺物の概要…… 33

第５章　縄文時代の検出遺構と出土遺物
第１節　検出遺構…… 37
1　建 物 跡 (SI)…… 37
2　焼土遺構 (SN)…… 45
3　単独で検出された柱穴 (Pit)…… 59
4　土　　坑 (SK)…… 60
5　石棺状配石 (SQ)…… 62
6　配石遺構 (SQ)…… 72
7　土器埋設遺構 (SR)…… 79
第２節　出土遺物…… 91
1　遺物の出土状態…… 91
2　土器集中域（ブロック）について……101
3　剥片集中域について……110
4　セクションベルトにおける遺物取り上げ…113
5　土器（縄文時代後期後葉から晩期）……119
6　剥片石器・自然礫・石斧……149
7　礫 石 器……155
8　土 製 品……159
9　石 製 品……161
10　漆 製 品……165
11　アスファルト関連遺物……165
12　赤色顔料原礫……165
13　焼成粘土塊……165
14　そ の 他……166

第３節　縄文時代後期中葉以前の土器…… 167

第６章　弥生時代以降の遺物
第１節　出土遺物…… 168
1　弥生土器……168
2　土 師 器……168
3　近世以降の遺物……169

第７章　調査の成果と課題
第１節　遺　構…… 170
1　検出遺構の時期区分……170
2　遺物包含層の成り立ちについて……171
3　石棺状配石の時期と系譜……172
4　土器埋設遺構……172
第２節　遺　物…… 173
1　土　器……173
2　石　器……183
3　その他の遺物……186

引用参考文献…… 187
検出遺構一覧表…… 190
遺物観察表…… 196
報告書抄録…… 309

第２分冊　図版編
遺構実測図…… 1
遺物実測図…… 33

第３分冊　写真図版編
遺跡・遺構写真…… 1
遺物写真…… 91

図 版 目 次

【第１分冊】

図Ⅰ　遺跡の位置(1:100,000)

図Ⅱ　遺跡の位置(1:25,000)

図Ⅲ　遺跡の位置(1:25,000)
遺跡の範囲・調査前の地形(1:2,000)

図Ⅳ　遺跡の範囲・各年度の調査範囲・
本書の報告範囲 …… 1

図Ⅴ　調査区域図・グリッド配置図 …… 9

図Ⅵ　平成15年度調査時のグリッドと
本報告におけるグリッドとの位置関係 …… 13

図Ⅶ　周辺の遺跡 …… 16

図Ⅷ　土層図作成地点 …… 23

図Ⅸ　Sec1・Sec5・Sec7 …… 24

図Ⅹ　Sec2・Sec3西面/東面 …… 25

図ⅩⅠ　基本土層東壁①・東壁②・南壁① …… 26

図ⅩⅡ　調査区内の地形(調査終了後)と
土層図作成地点 …… 27

図ⅩⅢ　調査区内の地形(調査終了後)と
土層図作成地点・遺構配置 …… 28

図ⅩⅣ　集落構成の状況（概念図） …… 31

図ⅩⅤ　川原平(1)遺跡と矢石館遺跡の位置関係 …… 32

図ⅩⅥ　遺構配置図(1:200) …… 35

付 図　遺構配置図(1:100)

図① SQ14・SQ18の呼称と部分名称 …… 68

図② SQ14・SQ18の石番号 …… 69

図③ 座標を記録している土器の出土地点 …… 71

図④ 重量分布（土器） …… 94

図⑤ 重量分布（剥片） …… 96

図⑥ 区域区分図 …… 99

図⑦ 遠距離接合の例 …… 100

図⑧ 土器の出土位置（ブロック07） …… 104

図⑨ 土器の出土位置（ブロック08） …… 105

図⑩ 土器の出土位置（ブロック09） …… 106

図⑪ 土器の出土位置（ブロック11） …… 107

図⑫ 土器の出土位置（ブロック12） …… 108

図⑬ 土器の出土位置（ブロックⅡS103） …… 109

図⑭ 剥片集中域1 …… 111

図⑮ 土器の出土位置（Sec1・ⅣR-35～37） …… 115

図⑯ 器形区分図（1） …… 122

図⑰ 器形区分図（2） …… 123

図⑱ 土器の出土位置（ⅣO-42） …… 136

図⑲ 土器の出土位置（ⅣO・P-43） …… 137

図⑳ 土器の出土位置（ⅣN-44） …… 138

図㉑ 土器の出土位置（ⅣN-45・46） …… 139

図㉒ 土器の出土位置（ⅣO-44） …… 140

図㉓ 土器の出土位置（ⅣP-44） …… 141

図㉔ 土器の出土位置（ⅣO-45） …… 142

図㉕ 土器の出土位置（ⅣP-45） …… 143

図㉖ 土器の出土位置（ⅣT-33・34） …… 144

図㉗ 土器の出土位置（ⅣR-42～44） …… 145

図㉘ 土器の出土位置（ⅣR-46） …… 146

図㉙ 土器の出土位置（ⅣR-47） …… 147

図㉚ 土器の出土位置（ⅣS-48・49） …… 148

図㉛ 後期7-4期の土器 …… 175

図㉜ 後期８期の土器 …… 176

図㉝ 晩期1a期の土器 …… 177

図㉞ 晩期1b期の土器 …… 178

図㉟ 晩期３期の土器 …… 179

図㊱ 晩期２期・４期・５期の土器 …… 180

図 版 目 次

【第２分冊】

遺構図１　建物跡(SI01)
遺構図２　建物跡(SI02)
遺構図３　建物跡(SI04)
遺構図４　建物跡(SI05・SI06)
遺構図５　建物跡(SI101)
遺構図６　焼土遺構(SN01～SN09)
遺構図７　焼土遺構(SN10～SN16・18)
遺構図８　焼土遺構(SN19～SN28)
遺構図９　焼土遺構(SN29～SN35)
遺構図10　焼土遺構(SN37～SN53)
遺構図11　土坑(SK01～SK05)
遺構図12　石棺状配石(SQ14・SQ18)完掘状況
遺構図13　石棺状配石(SQ14)検出状況
遺構図14　石棺状配石(SQ14)側壁上部礫の配置・掘方・完掘
遺構図15　石棺状配石(SQ18)西石組検出状況
遺構図16　石棺状配石(SQ18)西石組側壁上部礫の配置・掘方
遺構図17　石棺状配石(SQ18)西石組完掘状況
遺構図18　石棺状配石(SQ18)西列石・東列石
遺構図19　石棺状配石(SQ18)東石組検出状況と完掘状況
遺構図20　配石遺構(SQ01～SQ02)
遺構図21　配石遺構(SQ03～SQ08)
遺構図22　配石遺構(SQ09～10・12)
遺構図23　配石遺構(SQ11・16・41)
遺構図24　配石遺構(SQ19)
遺構図25　土器埋設遺構(SR01～SR09)
遺構図26　土器埋設遺構(SR10～SR18)
遺構図27　土器埋設遺構(SR19～23・25)
遺構図28　土器埋設遺構(SR24・25～36)

遺物図１　建物跡出土遺物（１）
遺物図２　建物跡出土遺物（２）
遺物図３　建物跡出土遺物（３）
遺物図４　焼土遺構出土遺物（１）
遺物図５　焼土遺構出土遺物（２）
遺物図６　焼土遺構出土遺物（３）
遺物図７　柱穴出土遺物
遺物図８　土坑出土遺物
遺物図９　配石遺構出土遺物（１）
遺物図10　配石遺構出土遺物（２）
遺物図11　配石遺構出土遺物（３）
遺物図12　配石遺構出土遺物（４）
遺物図13　配石遺構出土遺物（５）
遺物図14　土器埋設遺構出土遺物（１）
遺物図15　土器埋設遺構出土遺物（２）
遺物図16　土器埋設遺構出土遺物（３）
遺物図17　土器集中域出土遺物（１）
遺物図18　土器集中域出土遺物（２）
遺物図19　土器集中域出土遺物（３）
遺物図20　土器集中域出土遺物（４）
遺物図21　土器集中域出土遺物（５）
遺物図22　土器集中域出土遺物（６）
遺物図23　土器集中域出土遺物（７）
遺物図24　土器集中域出土遺物（８）
遺物図25　剥片集中域出土遺物
遺物図26　Sec1出土遺物（１）
遺物図27　Sec1出土遺物（２）
遺物図28　Sec1出土遺物（３）
遺物図29　Sec1出土遺物（４）
遺物図30　Sec1出土遺物（５）・Sec2出土遺物（１）
遺物図31　Sec2出土遺物（２）
遺物図32　Sec2出土遺物（３）
遺物図33　Sec3出土遺物（１）
遺物図34　Sec3出土遺物（２）
遺物図35　Sec5出土遺物（１）
遺物図36　Sec5出土遺物（２）
遺物図37　Sec7出土遺物（１）
遺物図38　Sec7出土遺物（２）
遺物図39　Sec7出土遺物（３）
遺物図40　包含層(区域A)出土土器（１）
遺物図41　包含層(区域A)出土土器（２）
遺物図42　包含層(区域A)出土土器（３）
遺物図43　包含層(区域A)出土土器（４）
遺物図44　包含層(区域A)出土土器（５）
遺物図45　包含層(区域A)出土土器（６）
遺物図46　包含層(区域A)出土土器（７）
遺物図47　包含層(区域A)出土土器（８）
遺物図48　包含層(区域A)出土土器（９）
遺物図49　包含層(区域A)出土土器（10）
遺物図50　包含層(区域A)出土土器（11）
遺物図51　包含層(区域A)出土土器（12）
遺物図52　包含層(区域A)出土土器（13）
遺物図53　包含層(区域A)出土土器（14）
遺物図54　包含層(区域A)出土土器（15）
遺物図55　包含層(区域A)出土土器（16）
遺物図56　包含層(区域A)出土土器（17）
遺物図57　包含層(区域A)出土土器（18）
遺物図58　包含層(区域A)出土土器（19）
遺物図59　包含層(区域A)出土土器（20）
遺物図60　包含層(区域A)出土土器（21）
遺物図61　包含層(区域A)出土土器（22）
遺物図62　包含層(区域A)出土土器（23）
遺物図63　包含層(区域A)出土土器（24）
遺物図64　包含層(区域B)出土土器（１）
遺物図65　包含層(区域B)出土土器（２）
遺物図66　包含層(区域B)出土土器（３）
遺物図67　包含層(区域B)出土土器（４）

図 版 目 次

【第２分冊】

遺物図68　包含層(区域B)出土土器（５）
遺物図69　包含層(区域B)出土土器（６）
遺物図70　包含層(区域B)出土土器（７）
遺物図71　包含層(区域B)出土土器（８）
遺物図72　包含層(区域B)出土土器（９）
遺物図73　包含層(区域B)出土土器（10）
遺物図74　包含層(区域B)出土土器（11）
遺物図75　包含層(区域B)出土土器（12）
遺物図76　包含層(区域B)出土土器（13）
遺物図77　包含層(区域B)出土土器（14）
遺物図78　包含層(区域B)出土土器（15）
遺物図79　包含層(区域B)出土土器（16）
遺物図80　包含層(区域B)出土土器（17）
遺物図81　包含層(区域B)出土土器（18）
遺物図82　包含層(区域C)出土土器（１）
遺物図83　包含層(区域C)出土土器（２）
遺物図84　包含層(区域C)出土土器（３）
遺物図85　包含層(区域C)出土土器（４）
遺物図86　包含層(区域C)出土土器（５）
遺物図87　包含層(区域C)出土土器（６）
遺物図88　包含層(区域C)出土土器（７）
遺物図89　包含層(区域C)出土土器（８）
遺物図90　包含層(区域D)出土土器（１）
遺物図91　包含層(区域D)出土土器（２）
遺物図92　包含層(区域D)出土土器（３）
遺物図93　包含層(区域D)出土土器（４）
遺物図94　包含層(区域D)出土土器（５）
遺物図95　包含層(区域D)出土土器（６）
遺物図96　包含層(区域D)出土土器（７）
遺物図97　包含層(区域D)出土土器（８）
遺物図98　包含層(区域D)出土土器（９）
遺物図99　包含層(区域D)出土土器（10）
遺物図100　包含層(区域D)出土土器（11）
遺物図101　包含層(区域D)出土土器（12）
遺物図102　包含層(区域D)出土土器（13）
遺物図103　包含層(区域D)出土土器（14）
遺物図104　包含層(区域D)出土土器（15）
遺物図105　包含層(区域D)出土土器（16）
遺物図106　包含層(区域D)出土土器（17）
遺物図107　包含層(区域D)出土土器（18）
遺物図108　包含層(区域D)出土土器（19）
遺物図109　包含層(区域D)出土土器（20）
遺物図110　包含層(区域D)出土土器（21）
遺物図111　包含層(区域D)出土土器（22）
遺物図112　包含層(区域D)出土土器（23）
遺物図113　包含層(区域D)出土土器（24）
遺物図114　包含層(区域D)出土土器（25）
遺物図115　包含層(区域D)出土土器（26）
遺物図116　包含層(区域D)出土土器（27）
遺物図117　包含層(区域E・区域F)出土土器
遺物図118　包含層出土土器(十腰内Ⅳ群以前)
遺物図119　石器（１）　石鏃-1
遺物図120　石器（２）　石鏃-2
遺物図121　石器（３）　石鏃-3
遺物図122　石器（４）　石鏃-4
遺物図123　石器（５）　石鏃-5
遺物図124　石器（６）　石槍
遺物図125　石器（７）　石錐-1
遺物図126　石器（８）　石錐-2
遺物図127　石器（９）　石錐-3
遺物図128　石器（10）　石篦-1
遺物図129　石器（11）　石篦-2・両面調整石器-1
遺物図130　石器（12）　両面調整石器-2
遺物図131　石器（13）　石匙-1
遺物図132　石器（14）　石匙-2
遺物図133　石器（15）　石匙-3
遺物図134　石器（16）　石匙-4
遺物図135　石器（17）　石匙-5
遺物図136　石器（18）　石匙-6
遺物図137　石器（19）　石匙-7
遺物図138　石器（20）　石匙-8
遺物図139　石器（21）　石匙-9
遺物図140　石器（22）　石匙-10
遺物図141　石器（23）　石匙-11
遺物図142　石器（24）　石匙-12
遺物図143　石器（25）　石匙-13・微細剥片・削器-1
遺物図144　石器（26）　掻器-1・削器-2
遺物図145　石器（27）　削器-3
遺物図146　石器（28）　削器-4・両極-1
遺物図147　石器（29）　両極-2・二次加工-1
遺物図148　石器（30）　二次加工-2
遺物図149　石器（31）　異形石器
遺物図150　石器（32）　微細剥片
遺物図151　石器（33）　石核-1
遺物図152　石器（34）　石核-2
遺物図153　石器（35）　石核-3
遺物図154　石器（36）　石核-4
遺物図155　石器（37）　石核-5
遺物図156　石器（38）　石核-6
遺物図157　石器（39）　石核-7
遺物図158　石器（40）　石核-8
遺物図159　石器（41）　石核-9
遺物図160　石器（42）　石核-10
遺物図161　石器（43）　接合資料・剥片
遺物図162　石器（44）　石斧-1
遺物図163　石器（45）　石斧-2
遺物図164　石器（46）　石斧-3
遺物図165　石器（47）　石斧-4

遺物図166　石器(48)　磨石-1
遺物図167　石器(49)　磨石-2
遺物図168　石器(50)　磨石-3・凹石-1
遺物図169　石器(51)　凹石-2
遺物図170　石器(52)　凹石-3
遺物図171　石器(53)　凹石-4
遺物図172　石器(54)　凹石-5
遺物図173　石器(55)　凹石-6
遺物図174　石器(56)　凹石-7・敲石
遺物図175　石器(57)　石錘・礫器・砥石-1
遺物図176　石器(58)　砥石-2・石皿-1
遺物図177　石器(59)　石皿-2
遺物図178　石器(60)　石皿-3
遺物図179　石器(61)　石皿-4
遺物図180　石器(62)　赤色顔料が付着している石器-1
遺物図181　石器(63)　赤色顔料が付着している石器-2
遺物図182　土製品(1)　土偶-1
遺物図183　土製品(2)　土偶-2
遺物図184　土製品(3)　土偶-3
遺物図185　土製品(4)　土偶-4
遺物図186　土製品(5)　土偶-5
遺物図187　土製品(6)　土偶-6
遺物図188　土製品(7)　土偶-7
遺物図189　土製品(8)　耳飾-1
遺物図190　土製品(9)　耳飾-2
遺物図191　土製品(10)　耳飾-3・土玉・垂飾品
遺物図192　土製品(11)　ミニチュア土器・その他
遺物図193　土製品(12)　土製円盤-1
遺物図194　土製品(13)　土製円盤-2
遺物図195　石製品(1)　岩版類・有孔石製品
遺物図196　石製品(2)　円盤状石製品-1
遺物図197　石製品(3)　円盤状石製品-2
遺物図198　石製品(4)　円盤状石製品-3
遺物図199　石製品(5)　石棒・石剣・石刀類-1
遺物図200　石製品(6)　石棒・石剣・石刀類-2
遺物図201　石製品(7)　石棒・石剣・石刀類-3
遺物図202　石製品(8)　石棒・石剣・石刀類-4
棒状石製品・石製模倣品-1
遺物図203　石製品(9)　石製模倣品-2
遺物図204　石製品(10)　擦痕の見られる石製品
自然礫利用石製品
遺物図205　漆製品・アスファルト関連遺物
遺物図206　弥生土器・土師器

写真図版目次

【第3分冊】

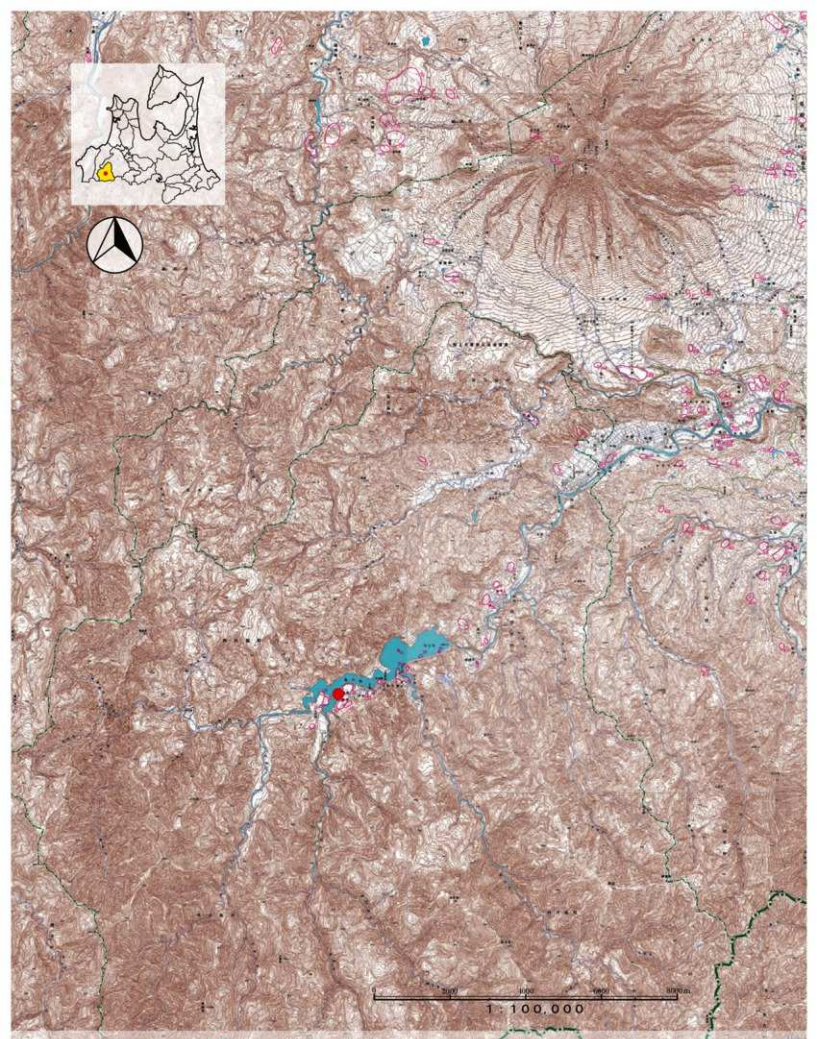
写真1　空中写真（1948年 米軍撮影）
写真2　空中写真（1975年撮影）
写真3　津軽ダム遺跡群（上流から）
写真4　岩木川右岸の状況（北から）
写真5　調査区全景 2011年・2013年
写真6　空中写真 2011年・2013年
写真7　2013年調査区
写真8　2013年調査区・ SQ18と西側包含層
写真9　SQ18周辺・IVT-34周辺・33 ライン以西
調査区中央部・調査区東側
写真10　2003年の調査
写真11　2011年・2013年の調査
写真12　2011年・2013年の調査 (2)
写真13　2011年・2013年の調査 (3)
写真14　基本層序 Sec1・Sec2・Sec3
写真15　基本層序 Sec3
写真16　基本層序 Sec2・Sec5
写真17　基本層序 Sec5・Sec7
写真18　基本層序 東壁①・東壁②・南壁
写真19　建物跡（SI01）
写真20　建物跡（SI02）
写真21　建物跡（SI04）
写真22　建物跡（SI05・06）
写真23　建物跡（SI101）
写真24　建物跡（SI101）
写真25　焼土遺構（SN01～04）
写真26　焼土遺構（SN05～08）
写真27　焼土遺構（SN09～12）
写真28　焼土遺構（SN13～19）
写真29　焼土遺構（SN21～25）
写真30　焼土遺構（SN26～29）
写真31　焼土遺構（SN30～33）
写真32　焼土遺構（SN34・35・37・38）
写真33　焼土遺構（SN38・39・41）
写真34　焼土遺構（SN43・44・49・53）
写真35　柱穴（IVR-38周辺の二列弧状に並ぶPit0041～0043）
柱穴（Pit0018・0536）
写真36　柱穴（SI101Pit0187・0535）
柱穴（Pit0035・0072・0126）
写真37　柱穴（IV0-36付近のPit・Pit0034・0137・0720）
写真38　土坑（SK01～05）
写真39　石棺状配石（SQ14・18）・配石遺構（SQ16）
写真40　石棺状配石（SQ14）
写真41　石棺状配石（SQ14）
写真42　石棺状配石（SQ18）
写真43　石棺状配石（SQ18）
写真44　石棺状配石（SQ18）
写真45　石棺状配石（SQ18）
写真46　配石遺構（SQ16）・石棺状配石（SQ18）

写真図版目次

【第3分冊】

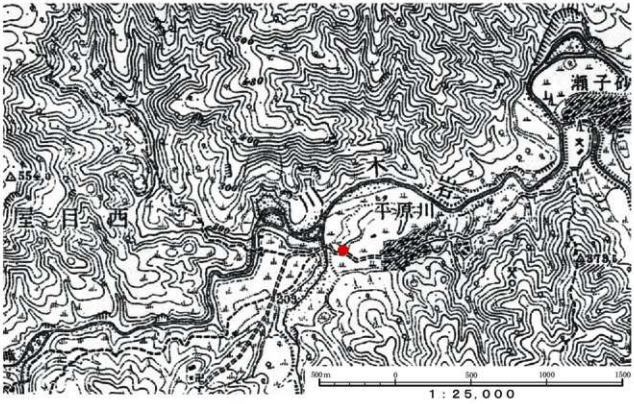
写真47　石棺状配石(SQ14)年代測定試料採取地点
写真48　石棺状配石(SQ18)年代測定試料採取地点
写真49　配石遺構（SQ01・02）
写真50　配石遺構（SQ02～07）
写真51　配石遺構（SQ08～10）
写真52　配石遺構（SQ11・12・41）
写真53　配石遺構（SQ19）
写真54　土器埋設遺構（SR01～04）
写真55　土器埋設遺構（SR05～10）
写真56　土器埋設遺構（SR09～13）
写真57　土器埋設遺構（SR14～17）
写真58　土器埋設遺構（SR18～23・25）
写真59　土器埋設遺構（SR19～25）
写真60　土器埋設遺構（SR26～29）
写真61　土器埋設遺構（SR29～32）
写真62　土器埋設遺構（SR33～36）
写真63　ブロック07
写真64　ブロック08
写真65　ブロック09
写真66　ブロック11
写真67　ブロック12-1
写真68　ブロック12-2
写真69　ブロック旧SI03-1
写真70　ブロック旧SI03-2
写真71　剥片集中域
写真72　Sec1遺物出土状況
写真73　Sec2・3・5・7遺物出土状況
写真74　Sec5・7遺物出土状況
写真75　遺構外遺物出土状況（1）
写真76　遺構外遺物出土状況（2）
写真77　遺構外遺物出土状況（3）
写真78　遺構外遺物出土状況（4）
写真79　遺構外遺物出土状況（5）
写真80　遺構外遺物出土状況（6）
写真81　遺構外遺物出土状況（7）
写真82　遺構外遺物出土状況（8）
写真83　遺構外遺物出土状況（9）
写真84　遺構外遺物出土状況（10）
写真85　遺構外遺物出土状況（11）
写真86　遺構外遺物出土状況（12）
写真87　遺構外遺物出土状況（13）
写真88　遺構外遺物出土状況（14）
写真89　遺構外遺物出土状況（15）
写真90　遺構外遺物出土状況（16）
写真91　人面付注口土器
写真92　2003年調査の重要遺物
写真93　建物跡出土遺物（SI01・02・04～06）
写真94　建物跡・焼土遺構出土遺物
　（SI101・SN01・03・25・31）
写真95　焼土遺構出土遺物（SN32・33・35・38）
　配石遺構出土遺物（SQ12）
写真96　焼土遺構・柱穴出土遺物
　（SN39・42～44・49・Pit0004～0126）
写真97　柱穴・土坑・配石遺構出土遺物
　（Pit0128～1117・SK01・04・05・SQ01・06）
写真98　配石遺構出土遺物（SQ07～09・11）
写真99　配石遺構出土遺物（SQ11・16・41）
　石棺状配石出土遺物（SQ14・18）
写真100　配石遺構出土遺物（SQ19）
写真101　土器埋設遺構出土遺物（SR01～04・06～13）
写真102　土器埋設遺構出土遺物（SR14～23・25・27）
写真103　土器埋設遺構出土遺物（SR28・30・32～35）
写真104　ブロック07・08出土土器
写真105　ブロック09出土土器
写真106　ブロック11出土土器
写真107　ブロック12出土土器（1）
写真108　ブロック12出土土器（2）
写真109　ブロック旧SI03出土土器（1）
写真110　ブロック旧SI03出土土器（2）
写真111　ブロック旧SI03出土土器（3）
　剥片集中域1・2・4出土石器
写真112　剥片集中域1・2出土石器
写真113　剥片集中域3・4出土石器
写真114　Sec1出土土器（1）
写真115　Sec1出土土器（2）
写真116　Sec1出土土器（3）
写真117　Sec1出土土器（4）
写真118　Sec2出土土器（1）
写真119　Sec2出土土器（2）
写真120　Sec3出土土器
写真121　Sec5出土土器（1）
写真122　Sec5出土土器（2）・Sec7出土土器（1）
写真123　Sec7出土土器（2）
写真124　Sec7出土土器（3）
写真125　遺構外出土土器（1）
写真126　遺構外出土土器（2）
写真127　遺構外出土土器（3）
写真128　遺構外出土土器（4）
写真129　遺構外出土土器（5）
写真130　遺構外出土土器（6）
写真131　遺構外出土土器（7）
写真132　遺構外出土土器（8）
写真133　遺構外出土土器（9）
写真134　遺構外出土土器（10）
写真135　遺構外出土土器（11）
写真136　遺構外出土土器（12）
写真137　遺構外出土土器（13）
写真138　遺構外出土土器（14）
写真139　遺構外出土土器（15）
写真140　遺構外出土土器（16）

写真141　遺構外出土土器（17）
写真142　遺構外出土土器（18）
写真143　遺構外出土土器（19）
写真144　遺構外出土土器（20）
写真145　遺構外出土土器（21）
写真146　遺構外出土土器（22）
写真147　遺構外出土土器（23）
写真148　遺構外出土土器（24）
写真149　遺構外出土土器（25）
写真150　遺構外出土土器（26）
写真151　遺構外出土土器（27）
写真152　遺構外出土土器（28）
写真153　遺構外出土土器（29）
写真154　遺構外出土土器（30）
写真155　遺構外出土土器（31）
写真156　遺構外出土土器（32）
写真157　遺構外出土土器（33）
写真158　遺構外出土土器（34）
写真159　遺構外出土土器（35）
写真160　遺構外出土土器（36）
写真161　遺構外出土土器（37）
写真162　遺構外出土土器（38）
写真163　遺構外出土土器（39）
写真164　遺構外出土土器（40）
写真165　遺構外出土土器（41）
写真166　遺構外出土土器（42）
写真167　遺構外出土土器（43）
写真168　遺構外出土土器（44）
写真169　遺構外出土土器（45）
写真170　遺構外出土土器（46）
写真171　遺構外出土土器（47）
写真172　遺構外出土土器（48）
写真173　遺構外出土土器（49）
写真174　遺構外出土土器（50）
写真175　遺構外出土土器（51）
写真176　遺構外出土土器（52）
写真177　遺構外出土土器（53）
写真178　遺構外出土土器（54）
写真179　遺構外出土土器（55）
写真180　遺構外出土土器（56）
写真181　遺構外出土土器（57）
写真182　遺構外出土土器（58）
写真183　遺構外出土土器（59）
写真184　遺構外出土土器（60）
写真185　遺構外出土土器（61）
写真186　遺構外出土土器（62）
写真187　遺構外出土土器（63）
写真188　遺構外出土土器（64）
写真189　遺構外出土土器（65）
写真190　遺構外出土土器（66）
写真191　遺構外出土土器（67）
写真192　遺構外出土土器（68）
写真193　建物跡・柱穴出土土器（SI101・Pit0176～0743）
写真194　配石遺構出土土器（SQ01・02・05・11・16・19）
写真195　石棺状配石・土器埋設遺構・Sec3出土土器
（SQ14・18・SR05・24・26・31）
写真196　Sec2・遺構外出土土器（写真のみ掲載）
写真197　遺構外出土土器
（アスファルト付着土器・漆付着土器）
写真198　遺構外出土石器（1）
写真199　遺構外出土石器（2）
写真200　遺構外出土石器（3）
写真201　遺構外出土石器（4）
写真202　遺構外出土石器（5）
写真203　遺構外出土石器（6）
写真204　遺構外出土石器（7）
写真205　遺構外出土石器（8）
写真206　遺構外出土石器（9）
写真207　遺構外出土石器（10）
写真208　遺構外出土石器（11）
写真209　遺構外出土石器（12）
写真210　遺構外出土石器（13）
写真211　遺構外出土石器（14）
写真212　遺構外出土石器（15）
写真213　遺構外出土石器（16）
写真214　遺構外出土石器（17）
写真215　遺構外出土石器（18）
写真216　遺構外出土石器（19）
写真217　遺構外出土石器（20）写真のみ掲載
写真218　遺構外出土石器（21）
剥片集中（1・3・4）出土石器 写真のみ掲載
写真219　遺構外出土石器（22）
写真220　遺構外出土石器（23）
写真221　遺構外出土石器（24）
写真222　遺構外出土石器（25）
写真223　遺構外出土石器（26）
写真224　遺構外出土石器（27）
写真225　遺構外出土石器（28）
写真226　遺構外出土石器（29）
写真227　遺構外出土石器（30）
写真228　遺構外出土土製品（1）
写真229　遺構外出土土製品（2）
写真230　遺構外出土土製品（3）
写真231　遺構外出土土製品（4）
写真232　遺構外出土土製品（5）
写真233　遺構外出土石製品（1）
写真234　遺構外出土石製品（2）
写真235　遺構外出土石製品（3）
写真236　遺構外出土石製品（4）
写真237　遺構外出土石製品（5）
写真238　遺構外出土石製品（6）
写真239　遺構外出土石製品（7）
写真240　遺構外出土漆製品
写真241　遺構外出土アスファルト関連遺物・赤色顔料
写真242　弥生土器・土師器・陶磁器・近世以降の土器



図Ⅰ　遺跡の位置（●部分）（本図は、国土地理院発行の25,000分の1地図画像「雄里」・「十面沢」・「枯木平」・「岩木山」「川原平」・「陰奥田代」・「冷水岳」・「尾太岳」を25%縮小・合成したものである。）

図Ⅱ　遺跡の位置　（本図は、国土地理院発行の50,000分の１地図画像「川原平」を200%拡大したものである。）



図Ⅲ　遺跡の位置・遺跡の範囲・調査前の地形

（上図は、大正6年発行の50,000分の1地形図「川原平」を200%拡大したものである。）

図Ⅳ　遺跡の範囲・各年度の調査範囲・本書の報告範囲

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成14年に、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所（以下「津軽ダム工事事務所」）から青森県教育庁文化財保護課（以下「県文化財保護課」）へ津軽ダム建設予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する協議の依頼があり、これを受けて同年7月に、津軽ダム工事事務所、県文化財保護課、西目屋村教育委員会の三者により、現地踏査と津軽ダム建設工事の工程・内容、津軽ダム建設予定地内の埋蔵文化財調査の進め方等についての協議が行われた。その後、県文化財保護課による分布調査が実施され、津軽ダム建設予定地常時満水地区内の埋蔵文化財調査対象範囲を12地区、総面積約768,000㎡と確定した。

発掘調査は、青森県埋蔵文化財調査センターが担当することとなった。川原平(1)遺跡の発掘調査については平成15年度、同23年度、同25年度～27年度まで行っており、報告書は平成15年度調査に関する1冊（青森県埋蔵文化財調査報告書 第409集）をこれまでに刊行している。

第2節 調査の経過

（1）発掘作業の経過

本書に係わる平成23年度と平成25年度の作業経過について記す。

平成23年度は、川原平(4)遺跡B区から調査を開始し、6月からは清水バイパス工事に伴う導水管埋設工事部分を優先して行うこととなった。この導水管埋設範囲は、平成15年度の調査区を含む区域で、縄文時代の遺物が多量に出土した地点でもあることから、遺物包含層の層位的な状況や遺構の有無に留意しながら作業を進めた。

平成25年度は、平成23年度調査区の北側を調査対象とした。結果、建物跡や石棺状配石など、集落構成の要素が多数検出され、縄文時代後期後葉から晩期にかけて継続的に営まれた集落跡であることが判明してきた。

発掘調査体制

平成23年度(第２次調査　調査期間 平成23年５月11日～同年10月28日)

調査主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	松田　守正(平成24年３月定年退職)
次　長	成田　滋彦(平成24年３月定年退職 現文化財保護主幹)
総務ＧＭ	木村　繁博(平成24年３月定年退職)
調査第二ＧＭ	川口　潤
総括主幹	笹森　一朗(調査担当者　現調査第三ＧＭ)
文化財保護主事	岡本　洋(調査担当者　現文化財保護主査)

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越　潔	国立大学法人弘前大学名誉教授・故人(考古学)
調 査 員	葛西　勵	前青森短期大学教授(考古学)
〃	上條　信彦	国立大学法人弘前大学人文学部講師(考古学)
〃	柴　正敏	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授(地質学)
〃	島口　天	青森県立郷土館主任学芸主査(地質学　現学芸主幹)

平成25年度(第３次調査　調査期間 平成25年５月７日～同年11月14日)

所　長	柿崎　隆司(現文化財保護課 主幹専門員)
次長(総務ＧＭ)	高橋　雅人(現中南教育事務所長)
調査第三ＧＭ	白鳥　文雄(平成26年３月定年退職)
文化財保護主幹	齋藤　岳(調査担当者　現総括主幹 調査第三ＳＭ)
文化財保護主幹	木村　高(調査担当者)
文化財保護主査	岡本　洋(調査担当者)
文化財保護主事	髙橋　哲(調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調 査 員	藤沼　邦彦	青森県文化財保護審議会委員(考古学)
〃	三浦　圭介	青森中央学院大学非常勤講師(考古学)
〃	福田　友之	青森県考古学会会長(考古学)
〃	柴　正敏	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授(地質学)
〃	上條　信彦	国立大学法人弘前大学人文学部准教授(考古学)
〃	佐々木辰雄	日本地質学会会員・故人(地質学)
〃	山口　義伸	日本第四紀学会会員(地質学)

発掘作業日誌

平成23年度(2011)

【5月】11日　川原平(4)遺跡B区の掘削を開始。
18日　川原平(4)遺跡B区の遺構精査と川原平(1)遺跡の掘削、旧トレンチの清掃を行う。
27日　川原平(4)遺跡B区の調査終了。川原平(1)遺跡の調査に着手。
【6月】7日　川原平(1)遺跡の測量基準杭の設置。遺構精査を開始。
9日　2003年確認の配石遺構1・2(SQ01・02)の全体を検出。
10日　導水管埋設工事が入ることが判明。年度内引渡しが決定される。
【7月】5日　遺物包含層中に遺構が確認され、進捗は遅滞気味となる。
【8月】2日　漆櫛や漆器が出土。多量の遺物に対処するため作業員を増員、プレハブ増設。
【10月】20日　空中写真撮影。
28日　発掘を終了。

平成25年度(2013)

【5月】7日　調査開始。
8日　東捨場地区と柱穴地区(ともに『報告書Ⅳ』以降で報告予定)の表土を重機で除去。
9日　調査区西側の落ち込み部分が、開田に伴う埋め立て部分であると判明。
15日　平成23年度(2011)の試掘範囲に多数の柱穴を確認。
16日　基準杭を増設。
【6月】4日　一部作業員は川原平(4)遺跡へ移動する。
20日　調査区西端の一部範囲について調査終了。
21日　堆積土(遺物包含層)に関して、地質の調査員と議論する。
【7月】2日　北側の雑木伐採開始。
12日　川原平(4)遺跡へ移動していた作業員が戻る。
19日　北側の調査を開始、北東部、北西部とも掘削を開始。
30日　石棺状配石の全景を撮影。
【8月】20日　石棺状配石周辺の三次元実測を実施。
28日　空中写真撮影。
【9月】8日　現地見学会開催。
24日　今回報告範囲の調査終了。
【10月】21日　盛土遺構(『報告書Ⅲ』で報告予定)の調査完了。
31日　空中写真撮影。
【11月】6日　SQ21(『報告書Ⅲ』で報告予定)の下部から緑色凝灰岩製の玉が出土。
14日　調査終了。

(2)整理作業の経過

本報告書の刊行事業は平成24年度から実施することとなり、平成27年12月28日までの期間で行った。
平成26年度以降の整理は、本書に係わる内容以外についても同時並行している。

整理・報告書作成体制

平成24年度(2012)

整理主体　青森県埋蔵文化財調査センター

調査第二GM	川口　潤
総括主幹	笹森　一朗
文化財保護主事	岡本　洋

平成25年度(2013)

整理主体　青森県埋蔵文化財調査センター

調査第三GM	白鳥　文雄(平成26年３月定年退職)
文化財保護主幹	木村　高
文化財保護主査	岡本　洋

平成26年度(2014)

整理主体　青森県埋蔵文化財調査センター

調査第三GM	笹森　一朗
文化財保護主幹	齋藤　岳
文化財保護主幹	佐々木　雅裕
文化財保護主幹	木村　高
文化財保護主幹	茅野　嘉雄
文化財保護主幹	畠山　昇
文化財保護主査	岡本　洋
文化財保護主査	岩井　美香子
文化財保護主事	高橋　哲

平成27年度(2015)

整理主体　青森県埋蔵文化財調査センター

調査第三GM	笹森　一朗
総括主幹	齋藤　岳
文化財保護主幹	佐々木　雅裕
文化財保護主幹	木村　高
文化財保護主幹	成田　滋彦
文化財保護主幹	畠山　昇
文化財保護主査	岡本　洋
文化財保護主査	岩井　美香子
文化財保護主事	高橋　哲
文化財保護主事	中澤　寛将
文化財保護主事	久保　友香理

整理・報告書作成作業の経過

平成24年度(2012)

【4月】 土器類の接合・復元作業と石器類の分類作業を開始した。
【8月】 石器の実測図作成を株式会社アルカに委託した。
【11月】 遺構実測図・遺構データ等の整理作業を開始。
土器の接合・復元および石器類の分類作業を行った。
遺構から出土した焼骨の同定を聖マリアンナ医科大学澤田純明助教に依頼した。
【12月】 石器の実測図作成を株式会社ラングに委託した。
漆製品の塗膜分析を漆器文化財科学研究所に委託した。
遺構から出土した炭化材の樹種同定を株式会社吉田生物研究所に委託した。
土器の実測図作成を株式会社アルカに委託した。
【1月】 掲載遺物の選別、土器類の接合・復元・図化、石器類の分類・図化を継続した。
土器片の抽出を行い、断面実測・拓本等の図化作業を進めた。

平成25年度(2013)

【4月】 掲載遺物の選別、土器類の接合・復元・図化、石器類の分類・図化を継続した。
アスファルトの分析を国立大学法人弘前大学理工学研究科氏家良博教授に依頼した。
漆製品の保存処理を株式会社吉田生物研究所に委託した。
【6月】 黒色物質塊及び土器内付着黒色物質の分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。
【7月】 放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所に委託した。
【11月】 遺構実測図のトレースを開始した。
土器類の接合・復元・図化、石器類の分類・図化作業を継続した。
【12月】 整理作業の効率化を図るため、土器の実測図作成を株式会社アルカに委託した。
【1月】 掲載遺物の選別、土器類の接合・復元・図化、石器類の分類・図化を継続した。
土器片の抽出を行い、断面実測・拓本等の図化作業を進めた。

平成26年度(2014)

【4月】 報告書掲載遺物の抽出を行った。遺物の整理作業、図化作業を継続した。
石器の実測図作成を株式会社ラングに委託した。
【6月】 人面付注口土器の復元を株式会社文化財ユニオンに委託した。
【7月】 漆製品の保存処理・分析を弘前大学人文学部上條信彦准教授に依頼した。
整理作業の効率化を図るため、土器の実測図作成を株式会社ラングに委託した。
【8月】 整理作業の効率化を図るため、石器の実測図作成を株式会社アルカに委託した。
【9月】 整理作業の効率化を図るため、土器の実測図作成を株式会社アルカに委託した。
【10月】 シルバーフォト、フォトショップいなみに掲載遺物の撮影を委託した。
【11月】 土器類の接合・復元・図化作業、石器類の分類・図化作業を継続した。
トレースが終了した遺構実測図から図版への割り付け作業を開始した。

遺物の分類・整理を進め、遺物観察表の作成を開始した。

【12月】 掲載遺物の選別、土器類の接合・復元・図化、石器類の分類・図化を継続した。
土器片の抽出を行い、断面実測・拓本等の図化作業を進めた。

【1月】 遺物のトレース、図版への張り付けを開始した。

平成27年度(2015)

【4月】 出土遺物の図化・トレース作業及び図版作成作業を行った。
人面付香炉型土器等の復元を株式会社吉田生物研究所に委託した。

【6月】 調査成果を総合的に検討して、まとめ等の原稿作成を開始した。

【8月】 土器の集合写真をシルバーフォトに委託した。
報告書の割付・編集作業を行った。

【11月】 印刷業者との契約事務が完了後、原稿及び版下を入稿した。

【12月】 3回の校正を経て、報告書を刊行した。

(笹森・木村)

第２章　調査および報告の方法

第１節　発掘作業の方法

平成15年度調査で把握された川原平(1)遺跡の様相は大きく、①多量の遺物を含む遺物包含層の存在、②時期は後期後葉から晩期初頭(県内では類例僅少)、③同時期の土偶や土製品・石製品などの共伴、④土坑・焼土状遺構・配石遺構等の存在、という４項目にまとめられる。

平成23年度以降の発掘調査ではこれら４項目の情報を重視し、遺物の層位的な取り上げ、土器に共伴する各種遺物の的確な取り上げ、包含層中における遺構の有無確認、等々に留意した。

結果、大型の建物跡や石棺状配石など、希少な集落構成要素が検出され、縄文時代後期後葉から晩期全般にわたる継続的な集落跡であることが判明してきた。

【測量基準点・水準点の設置・グリッド設定】(図Ⅴ・図Ⅵ)

平成15年度調査で使用した測量基準は日本測地系であり、その後、平成23年３月11日発生の東日本大震災の影響で生じた座標ずれの可能性も考慮し、平成23年度調査では、世界測地系に基づく測量杭の設置(４級基準点測量、中心線測量、仮ＢＭ設置測量)を改めて業者に委託した。

基準点測量は、調査完了となった周辺遺跡との整合性を図るため、東日本大震災発生以前の電子基準点成果を与件として使用した。下表は既設基準点と新設点の一覧である。

点　名	X	Y	H	備　　考
3-9	58546.144	−51524.853	205.368	新設基準点
3-10	58520.213	−51659.743	−	
K(1)C-1	58563.630	−51461.692	204.620	新設点
K(1)C-2	58551.011	−51546.501	205.374	
K(1)C-3	58550.357	−51598.347	204.134	
K(1)C-4	58586.816	−51575.266	203.802	

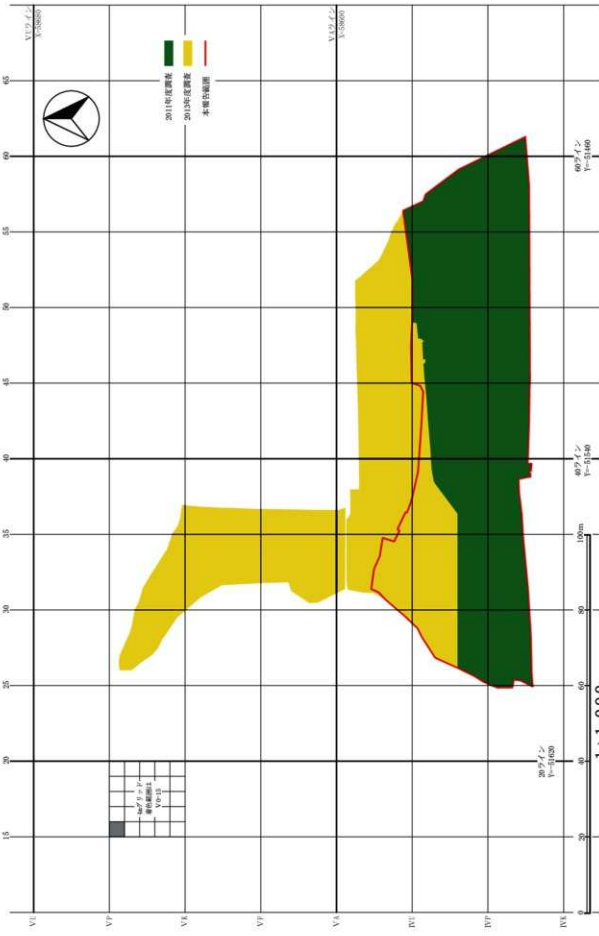
※座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系。

※平成15年度(2003年)調査時のグリッド(青埋報第409集)は、東日本大震災の影響で生じた座標ずれとは別の要因でずれていたことが判明している(図Ⅵ参照)。

１グリッドは４×４ｍとし、原点から北方向(南北ライン)にローマ数字(Ⅰ～Ⅴ)とアルファベット(Ａ～Ｙ)を組み合わせた名称を、原点から東方向(東西ライン)へは算用数字(１、２、３…)を付した。南北ラインでは４ｍ北進する毎に「ＩＡ」、「ＩＢ」…とアルファベットが進み、ＩＹ(ＩＡから100ｍ)に達すると、ローマ数字が繰り上がり「ⅡＡ」が始まるようにした。東西ラインは４ｍ東進する毎に算用数字が１ずつ増えるようにした。

グリッドの名称は、南北ライン(ローマ数字＋アルファベット)と東西ライン(算用数字)を組み合わせ、ＩＡ－１、ＩＡ－99のように表し、各グリッドの名称は、南西隅のライン交点杭を用いた(図Ⅴ参照)。グリッド設置の基準原点(ＩＡ－０)の座標はＸ＝58200.000、Ｙ＝−51700.000である。

※平成15年度(2003年)調査時のグリッド(青埋報第409集)名は、これとは異なる方法で付されている(図Ⅵ参照)。



図Ⅴ　調査区域図・グリッド配置図

【基本土層】

基本土層については、各地点における土層観察のために、適宜深掘りを行い、表土から下位にローマ数字を、細分層については小文字のアルファベットを付けて呼称した。土層の色調表記には、『新版標準土色帖2005年度版』(小山正忠・竹原秀雄)を用いた。

【表土等の調査】

表土(第Ⅰ層)の除去には部分的に重機を用い、掘削の省力化を図ったが、表土層の薄い部分については第Ⅱ層以下の土層を傷つけないように人力で行った。出土した遺物はグリッド単位で取り上げた。

【遺物包含層の調査】

遺物包含層は層位毎に人力で掘削した。出土した遺物はグリッド単位で取り上げ、必要に応じてドットマップや微細図を作成した。

【遺構の調査】

検出遺構には、種別毎のアルファベット略号と算用数字を組合せた番号を付した。

建　物　跡	ＳＩ	本報告
焼　土　遺　構	ＳＮ	
単独で検出された柱穴	Ｐｉｔ	
土　　坑	ＳＫ	

石 棺 状 配 石	ＳＱ	本報告
配　石　遺　構		
土 器 埋 設 遺 構	ＳＲ	
盛　土　遺　構	Ｍ	次巻報告予定

セクションベルトは、遺構の形態・大きさに応じて2分割または4分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。

土層には算用数字を付し、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。色調表記には、『新版標準土色帖2005年度版』(小山正忠・竹原秀雄)を用いた。

実測と遺物の取り上げは簡易遣り方測量と㈱CUBIC製「遺構実測支援システム」を併用し、縮尺は1/20を基本とし、遺構の規模や性格に応じて変更した。

【写真撮影】

写真撮影は、原則として35㎜モノクローム・35㎜カラーリバーサルの各フィルムカメラ及びデジタルカメラ(キャノン製 EOS７Ｄ　5184×3456ピクセル 約1800万画素)を併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。

ラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影は業者に委託した。

(笹森・木村)

第2節　整理・報告書作成作業の方法

遺構の構築時期や変遷、遺物包含層の形成過程等に重点を置いて整理・報告書作成作業を進めた。

【図面類の整理】

遺構の平面図や堆積土層断面図等は、簡易遣り方で主に作成したため、各遺構毎に図面修正を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

【写真類の整理】

35㎜モノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35㎜カラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、遺構や遺物包含層からの遺物の出土状態、遺構の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35㎜カラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付し、ハードディスク・ＤＶＤ等に保存した。

【遺物の洗浄・注記と接合・復元】

遺物の洗浄を早期に終え、接合・復元作業を進めるようにした。遺物の注記は、調査年度・遺跡名、遺構名・グリッド名、層位、取り上げ番号等を略記したが、直接注記できない剥片石器等については、収納したチャック付きポリ袋に注記した。また、接合・復元にあたっては、出土地点・出土層等を点検しながら入念に行った。

【報告書掲載遺物の選別】

遺物全体の分類を行った上で、所属時代(時期)・型式・器種等の分かる資料等を主として選別し、漆付着遺物・アスファルト付着遺物等の特殊な遺物はできるだけ多くを抽出し、可能な限り掲載した。

【遺物の観察・図化】

充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、観察表・計測表等を作成した。一部の遺物については、写真のみで報告した。

【遺物の写真撮影】

業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

【トレース・版下作成】

遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、ペンによる手作業と㈱CUBIC製「トレースくん」、アドビシステムズ㈱製「Adobe Illustrator CS4」を用いたデジタルトレースを併用し、実測図版・写真図版等の版下は「Adobe Illustrator CS4」と「Adobe InDesign CS4」で主に作成した。

【調査成果の検討】

各遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。また、遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・品種構成・個体数等について検討した。

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

(笹森)

第３節　報告の方法

本遺跡の発掘調査報告書は、既に１冊目が刊行(2006 第409集『川原平(1)遺跡・川原平(4)遺跡・大川添(2)遺跡・水上遺跡』)されており、本書はその続刊に相当する。

本書における報告範囲は、平成23年度(2011年)調査区に平成25年度(2013年)調査区の一部(2011年調査の遺物包含層の連続部分で石棺状配石周辺を含む)を加えた地区である。

【今回の報告範囲と各年度の調査範囲】(図Ⅳ・Ⅴ)

今回の報告範囲について、各年度の調査範囲との関係で具体的に示すと、平成23年度(2011年)調査区は緑色の範囲、平成25年度(2013年)調査区は黄色の範囲、それらにまたがるかたちで赤線で囲まれた部分が本書における報告範囲となる。

水色で示された範囲は、平成26年度(2014年)と平成27年度(2015年)を合わせた調査区に相当するが、この範囲は、今回報告範囲外の平成25年度(2013年)調査区とともに、３冊目以降(『川原平(1)遺跡Ⅲ』以降)で報告の予定である。

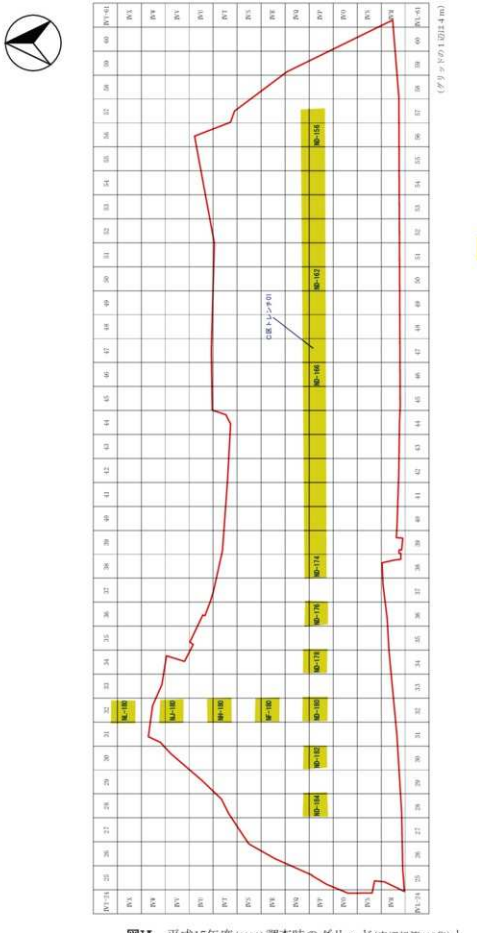
【今回の報告内容と各年度の調査内容】(下表)

前巻と本報告書とのつながり、そして本報告と次巻以降の報告内容について、調査経過の概略とあわせてまとめた表を示す。

調査	年度	調査概略	遺物箱数	備考
第1次	平成15年度(2003)	農道を境に西側平坦地を川原平(1)遺跡、東側平坦地を川原平(4)遺跡とする。県道28号を境に、川原平(1)遺跡をC区(北側)とD区(南側)に分割。C区には遺物包含層が確認され、D区は削平により調査不要と判断される。	79箱	既報告『第409集』
第2次	平成23年度(2011)	C区の中で、清水バイパス工事に伴う導水管埋設工事部分を優先的に調査。平成15年度調査区をほぼ踏襲。後期後葉から晩期の建物跡・土坑・焼土遺構・土器埋設遺構・配石遺構・柱穴など各種遺構を検出。	843箱	**本報告『Ⅱ』**(第409集で報告した遺物を写真92に再掲)
第3次	平成25年度(2013)	第2次調査で確認した各種遺構を追加検出。石棺状配石・日時計形組石を伴う土坑・盛土遺構等の希少遺構を新規に検出。多数の柱穴検出により、後期後葉から晩期の居住域が判明。調査区北西端に縄文時代中期後半の遺構群を検出。	755箱	『Ⅲ』(第565集)
第4次	平成26年度(2014)	３基の盛土遺構、西～北東の斜面に大規模捨場を３箇所(北捨場・北東捨場・西捨場)検出。平坦地の東域にも捨場１箇所(東捨場)を検出。東捨場は本報告の「遺物包含層」と川原平(4)遺跡の遺物包含層と一連のものであることが判明。	4144箱	今後報告予定『Ⅳ』以降
第5次	平成27年度(2015)	前年度に引き続き、西捨場・平坦地(柱穴群)・盛土遺構・北捨場南側の小規模捨場等を調査。西捨場からは漆製品・木製品・種実等の有機質遺物が豊富に出土。調査終了。	1636箱	

【平成15年度(2003年)調査時のグリッドについて】

第１節発掘作業の方法の「グリッド設定」の項においても触れたが、平成15年度(2003年)調査時のグリッドは、東日本大震災の影響で生じた座標ずれとは別の要因でずれていたことが、平成23年度(2011)の調査で判明している。また、平成15年度調査のグリッド名も、平成23年度(2011)以降とは付け方が異なっている。これらについては図Ⅵを参照いただきたい。



図Ⅵ 平成15年度(2003)調査時のグリッド(青埋報第409集)と本報告におけるグリッドとの位置関係

【遺構の分類】

今回報告する遺構は大きく７種に分類される。分類・報告基準等を下表に示す。

	遺構種別	分類・報告基準等
1	建物跡 SI	一般的に「住居跡」と呼称されているものを「建物跡」とし、壁面を検出できなかったものもあることから、「竪穴」は付していない。 柱穴列と炉跡の位置関係により、両者組み合わせて新規登録したものもある。
2	焼土遺構 SN	地床炉や石囲炉と推定されるものを含む。
3	単独で検出された柱穴 Pit	弧状に並ぶ一連のものであっても建物跡としての抽出を今回は控えた。 これらは『Ⅲ』以降で一括報告の予定。
4	土坑 SK	特記事項なし。
5	石棺状配石 SQ	青森県域において「石棺墓」と呼称されてきた遺構の一種だが、墓として認定するに至らないことから、「石棺状配石」とした。略号は配石遺構と同様のＳＱを用いた。
6	配石遺構 SQ	石囲炉や「石棺状配石」との類縁を想定させるものもこれに含めた。
7	土器埋設遺構 SR	掘方を確認できなかったものが相当数あるが、「埋設」遺構とする。

【遺構名の変更】

発掘調査段階の遺構略称は、本報告書の作成過程で一部変更となった(下表)。発掘調査図面・写真等には調査時の遺構名が記されている。

調査時の遺構名	本報告の遺構名	備考
SI03	土器ブロック	
SN16	SN16	SN17・SN20 を含む
SN17	SN16 に統合	
SN20	SN16 に統合	
SN33	SN33	SN40 を含む
SN36	SQ41	焼土確認できず
SN40	SN33 に統合	
SN45	SI101 に含む	
SN46	SI101 に含む	
SN47	SI101 に含む	
SN48	SI101 に含む	

調査時の遺構名	本報告の遺構名	備考
SQ09	SQ09	SQ13 を含む
SQ13	SQ09 に統合	
SQ16	SQ16	SQ17 を含む
SQ17	SQ16 に統合	
SX01	(剥片集中域１)	
Ⅳ R-35 配石	SQ19 に変更	
(S-244)	(剥片集中域２)	
(S-207)	(剥片集中域３)	
(S-201)	(剥片集中域４)	

【遺物の掲載】

各種遺物の抽出・掲載基準は各執筆者の報告のとおりである。

実測図は、遺構内出土遺物、土器集中域、剥片集中域…というように、目次に準じた掲載順となっており、遺構内出土遺物の図版および写真図版は種別の異なるものが１図版に混在しているが、観察表は土器観察表、剥片石器観察表、礫石器観察表…のように、種別順に記載されている。

【自然科学的分析】

平成15年度(2003)の調査以来、放射性炭素年代測定や樹種同定、漆製品の塗膜分析など多くの分析を外部に委託しているが、これらの成果については今回報告以外の地区で得たものとあわせて、最終報告書に一括掲載する予定である。ただし、本報告における遺構・遺物の記載にあたり、それらの結果を部分的に引用している箇所がある。

(木村)

第3章　遺跡の環境

第1節　遺跡の位置と周辺の遺跡

（1）遺跡の位置

川原平(1)遺跡(以下「本遺跡」)の所在する西目屋村は、青森県の南西域に位置し、県境[1]を挟んで南には、秋田県藤里町が接している(図Ⅰ左上：行政区画境界線)。

図Ⅰで明らかなように、本遺跡は広大な山々に囲まれ、北北東に岩木山、そして南西一帯には世界自然遺産「白神山地」がそびえている。白神山地の雁森岳を源とする「大川」は、津軽平野を広く潤す一級河川「岩木川」の源流であり、本遺跡は岩木川とその支流「大沢川」の合流地点(右岸)に立地している(図Ⅱ)。

図Ⅰや図Ⅱなど現在の地形図で見ると、岩木川は相当な川幅を持ち、本遺跡は川岸あるいは湖岸に位置するように見えるが、この広い川は、昭和35年(1960年)竣工の「目屋ダム」によるダム湖であり、「美山湖」と命名されている。地形図にはその満水時が表現されている。

図Ⅲ上部に掲げた大正6年発行の地形図をみると、本遺跡の北側には大きく蛇行する「岩木川」、西側には「大沢川」が存在し、両河川の周囲には砂礫が堆積し、その一段上位にはかつての氾濫原を利用した水田が認められる。

この地形図により、本遺跡はダム湖(美山湖)形成以前において、「岩木川」と「大沢川」からは適度な距離をおいて立地していた状況を推察できる。なお、この状況に近い風景は、昭和23年(1948年)米軍撮影の空中写真(第3分冊　写真1)やダム水位の低下により湖底が露出した巻頭写真4でもイメージ可能である。蛇行する「岩木川」と直線的な「大沢川」、これら両河川を見下ろしながら平坦な台地に居を構えていたムラ人達の姿が想像される。

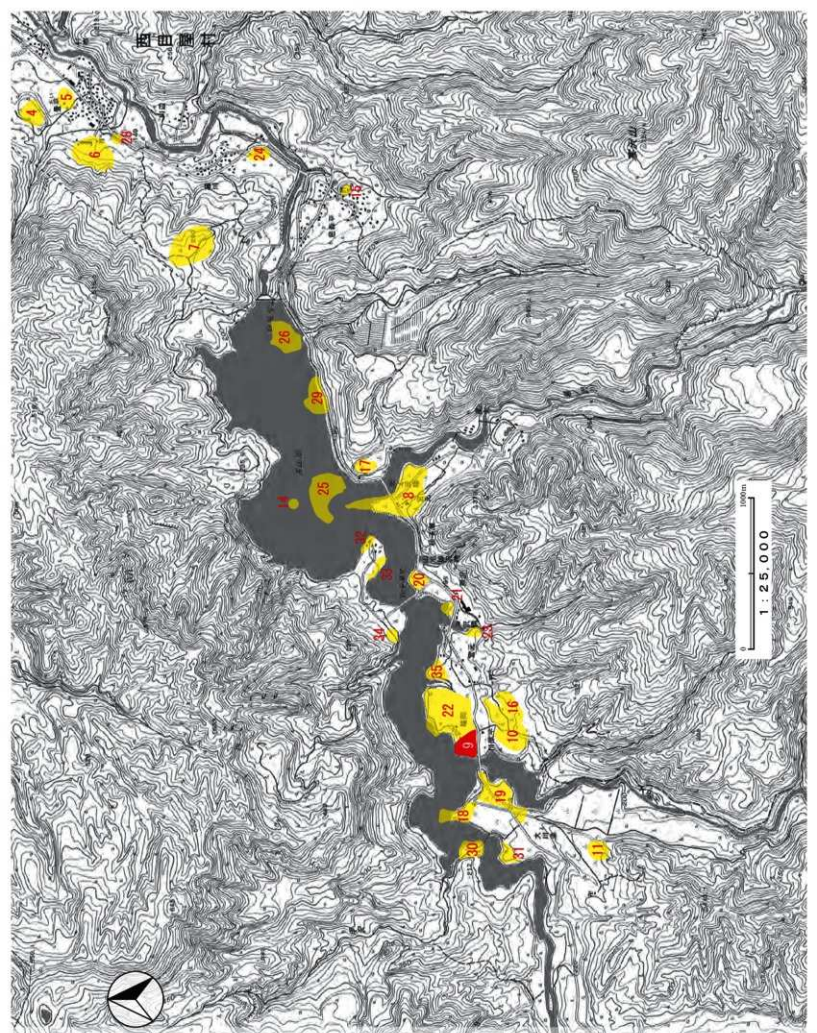
（2）周辺の遺跡

平成27年8月末の時点で西目屋村内には35の遺跡が登録されており、図Ⅶの遺跡分布図には、6遺跡を除く全遺跡(29遺跡)が収まっている。多くが「美山湖」周辺に集中しているように見えるが、これは津軽ダム建設に先立つ「美山湖＝目屋ダム」周辺の調査によって増加したものであり、先人が「美山湖」周辺を意図的に選択した結果を示すものではない。

上述のように、美山湖の湖底にはかつての「旧岩木川」やその氾濫原である平坦地が存在し、上流の暗門川、支流の大沢川や湯ノ沢川付近の地形環境等を考慮すると、津軽ダムに沈む範囲の外側には、まだ多くの遺跡が眠っていることが推察される[2]。このような視点については今後の研究に委ねることとし、以下では図Ⅶの空間内に収まる遺跡群について述べる。

表1と2は図Ⅶと連動する表である。表1は県教委文化財保護課作成の平成27年8月末時点の遺跡地名表からこれら29遺跡を抜粋し、文献の有無を付加したもの、表2は29遺跡のうち、津軽ダム関連調査遺跡の既刊報告書の抄録に記された17遺跡の時期を転記したものである。

遺跡間の関係を検討するには、土器編年に基づく時間的な要素整理が前提であるが、それは17遺跡



図Ⅶ　周辺の遺跡

（遺跡番号は下2桁のみを表記・美山湖の範囲は満水時の状態）

表１　遺跡地名表(青森県教育委員会文化財保護課作成　平成27年８月現在)

遺跡番号	遺跡名	フリガナ	所在地 (西目屋村大字)	時代	種別	文献 (3桁数字は青理報No.)
3430 04	村市	ﾑﾗｲﾁ	村市字稲葉	中世	散布地	
3430 05	稲葉(1)	ｲﾅﾊﾞｶｯｺｲﾁ	村市字稲葉	縄文(後)	散布地	
3430 06	稲葉(2)	ｲﾅﾊﾞｶｯｺﾆ	村市字稲葉	平安	散布地	
3430 07	芦萢	ｱｼﾔﾁ	藤川字瀬の上	縄文(後)	散布地	
3430 08	砂子瀬	ｽﾅｺｾ	砂子瀬字宮元	縄文(中・後・晩)	集落跡	466・482・513・543
3430 09	**川原平(1)**	**ｶﾜﾗﾀｲｶｯｺｲﾁ**	**川原平字福岡**	**縄文(後・晩)**	**散布地**	**409**
3430 10	川原平(2)	ｶﾜﾗﾀｲｶｯｺﾆ	川原平字福岡	縄文(後)	散布地	
3430 11	焼山	ﾔｹﾔﾏ	川原平字大川添	縄文	散布地	
3430 14	砂子瀬村元	ｽﾅｺｾﾑﾗﾓﾄ	砂子瀬字村元	縄文(中)	散布地	福田1984
3430 15	寒沢	ｻﾑｻﾜ	居森平字寒沢	縄文	散布地	
3430 16	川原平(3)	ｶﾜﾗﾀｲｶｯｺｻﾝ	川原平字福岡	縄文	散布地	
3430 17	水上(1)	ﾐｽﾞｶﾞﾐｶｯｺｲﾁ	砂子瀬字水上、宮元	縄文(中・後)	集落跡	409・452
3430 18	大川添(1)	ｵｵｶﾜｿﾞｴｶｯｺｲﾁ	川原平字大川添	縄文	散布地	500
3430 19	大川添(2)	ｵｵｶﾜｿﾞｴｶｯｺﾆ	川原平字大川添	縄文	散布地	409・482・515
3430 20	芦沢(1)	ｱｼｻﾞﾜｶｯｺｲﾁ	砂子瀬字芦沢	縄文	散布地	500
3430 21	芦沢(2)	ｱｼｻﾞﾜｶｯｺﾆ	砂子瀬字芦沢	縄文	散布地	540
3430 22	川原平(4)	ｶﾜﾗﾀｲｶｯｺﾖﾝ	川原平字福岡	縄文(中・後)	散布地	409・527・539
3430 23	川原平(5)	ｶﾜﾗﾀｲｶｯｺｺﾞ	川原平字宮元、	縄文	散布地	
3430 24	瀬の上	ｾﾉｳｴ	藤川字瀬の上	縄文(後・晩)	散布地	
3430 25	水上(2)	ﾐｽﾞｶﾞﾐｶｯｺﾆ	砂子瀬字水上	縄文(中)	集落跡	514・528
3430 26	水上(3)	ﾐｽﾞｶﾞﾐｶｯｺｻﾝ	砂子瀬字水上	縄文(中)	散布地	466・528
3430 28	稲葉(3)	ｲﾅﾊﾞｶｯｺｻﾝ	村市字稲葉	平安	散布地	
3430 29	水上(4)	ﾐｽﾞｶﾞﾐｶｯｺﾖﾝ	砂子瀬字水上	縄文(後・晩)	散布地	466・500
3430 30	大川添(3)	ｵｵｶﾜｿﾞｴｶｯｺｻﾝ	川原平字大川添	縄文	散布地	544
3430 31	大川添(4)	ｵｵｶﾜｿﾞｴｶｯｺﾖﾝ	川原平字大川添	縄文	散布地	542
3430 32	鬼川辺(1)	ｵﾆｶﾜﾍﾞｶｯｺｲﾁ	砂子瀬字鬼川辺	縄文	散布地	541
3430 33	鬼川辺(2)	ｵﾆｶﾜﾍﾞｶｯｺﾆ	砂子瀬字鬼川辺	縄文	散布地	541
3430 34	鬼川辺(3)	ｵﾆｶﾜﾍﾞｶｯｺｻﾝ	砂子瀬字鬼川辺	縄文	散布地	541
3430 35	川原平(6)	ｶﾜﾗﾀｲｶｯｺﾛｸ	川原平字宮元	縄文(後)、平安	集落跡	

全ての報告完了後に行うことが適切である。よってここでは表２にまとめた各遺跡の時期についてごく簡単に確認しておく程度とする。

17遺跡を見渡すと、古代以降は極めて僅少で、縄文時代が圧倒的多数を占めている。しかも草創期から晩期までの６期すべてが認められ、断続的ながらも長期的な人間活動の存在が想定される。特に、①中期中葉～後期前葉、②後期後葉～晩期という２つのまとまった時間帯において、同時並行する遺跡が多くなっていることも分かる。

①と②の期間は、人間活動が活発だった期間とみることができそうだが、①と②の間に相当する「後期中葉」の遺跡が極端に希薄である状況に注意したい。この現象は、「後期中葉」に何らかの社会的変化（集落移転や人口減少など）があったことを想像させるが、これまで「後期中葉」と認定してきた時間幅の、実際時間の長さがその前後に比べてどのくらい差があるのか、さらには、西目屋遺跡群の「後期中葉」の土器に対するこれまでの認定方法や、破片資料の中に「後期中葉」が紛れていなかったか等、慎重な再点検が行われる必要がある。いずれにせよ、各遺跡の様相や遺跡間の関係を考える上で、「後期中葉」という時間帯を重視すべきであることに変わりはない。当然ながらこの視点は、川原平(1)遺跡を考える上でも重要なものとなる。

(3)周辺の遺跡と川原平(1)遺跡

先述の「②後期後葉～晩期」という時間帯は本遺跡の主体となる時期に重なる。後期後葉～晩期後葉という長期にわたり、集落として連綿と続いた本遺跡の成立～展開～解体に至る様々な要因を考える上で、前段階である「後期中葉」、そして後続段階である「晩期末葉～弥生前期」までの時期を有す他遺跡との比較[3]は必須である。周辺の17遺跡をみる限り、第一候補として挙げられるのは、地図№8の砂子瀬遺跡である。

第543集『砂子瀬遺跡Ⅳ』によれば、「後期前葉から後葉に至るまで継続して集落が営まれ」(P220)、「砂沢式に比定されるものも少量出土」(P216)しているという。また、砂子瀬遺跡は、建物跡が環状に分布し、岩木川とその支流「湯ノ沢川」の合流地点に立地している点など、本遺跡との類似要素を有している。

本遺跡を総合的に理解するためには、砂子瀬遺跡を含む周辺遺跡や秋田県域北部の遺跡群との比較検討が肝要となることは言うまでもない。

(木村)

引用・参考文献(周辺の17遺跡の文献については表2参照)

江坂輝彌 1965「青竜刀形石器考」『史学』第38巻第1号 三田史學會
奥山 潤 1954「縄文晩期の組石棺－秋田県北秋田郡早口町矢石館遺跡－」『考古学雑誌』第40巻第2号
富樫泰時 1983「青竜刀形石器」『縄文文化の研究』9 雄山閣
福田友之 1984「西目屋村砂子瀬村元出土の遺物」『青森県考古学』第1号 青森県考古学会
村越 潔 1984『増補 円筒土器文化』雄山閣

註

1)本遺跡から県境までは直線距離で約10km。本報告の「石棺状配石」と類似する「組石棺」が検出された秋田県大館市矢石館遺跡(奥山1954)までは、直線距離で約31km(図XV)。

2)図Ⅶの「美山断」は満水時の状況を示すため、いくつかの遺跡は水中にあるように見える。

3)本遺跡東隣の川原平(4)遺跡(地図№22)は、大正7年構築の道路(図Ⅲ下参照)を境界ラインとして、西側＝川原平(1)遺跡、東側＝川原平(4)遺跡というように、個別登録されたものである(図Ⅶ参照)。川原平(4)遺跡は、本遺跡から続く同一の平坦面に立地し、地形的には本遺跡と区分できず、時期的にも本遺跡と重なる部分が多い(下記註7)。よって、川原平(4)遺跡は同一遺跡として捉えるべき存在であるため、本文中では川原平(4)遺跡を意図的に省いている。

4)書名の「川原平(1)・(4)遺跡」とは、「川原平(1)遺跡」と「川原平(4)遺跡」の2遺跡を指している。

5)「水上遺跡」は現在、「水上(1)遺跡」として登録されている。

6)川原平(6)遺跡の報告書は現在作成中。中期末葉・縄文時代後期末葉～晩期初頭が確認されている。
(『平成25年度津軽ダム建設事業に伴う西目屋村川原平遺跡外発掘調査概要』平成25年12月)。

7)川原平(4)遺跡は4冊目の報告書作成中。中期中葉～後葉・後期末葉・晩期後半・晩期後葉が確認されている。
(『平成26年度津軽ダム建設事業に伴う西目屋村川原平(1)遺跡外発掘調査概要』平成26年12月)。

表 2　津軽ダム関連調査遺跡の既刊報告書と掲載遺跡の時期（時期は抄録から転記　ゴシック体以外は全て縄文時代）

刊行年	報告書（青埴堀）番号	報告書名	遺跡名	水上				砂子瀬	芦沢		川原平		大川添				鬼川辺			備考
			調査ハル	(1)	(2)	(3)	(4)		(1)	(2)	(1)	(4)	(6)	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	
				17	25	26	29	8	20	21	9	22	35	18	19	30	31	32	33	34	
2006	第409集	『川原平(1)・(4)遺跡・大川添(2)遺跡・水上遺跡』		縄　文							後期後半～晩期前半	記載無し			記載無し						註4
2008	第452集	『水上遺跡Ⅱ』		中期後葉～晩期前葉																	註6
2009	第466集	『砂子瀬遺跡・水上(3)遺跡・水上(4)遺跡』				後期後半～晩期	中期中葉～後葉	後期前半													
2010	第482集	『砂子瀬遺跡Ⅱ・大川添(2)遺跡Ⅱ』						後期初頭～前葉前葉～後期後葉							縄　文						
2011	第506集	『大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡』					中期～晩期		中期～後期				後期中期中葉～晩期								
2012	第513集	『砂子瀬遺跡Ⅲ』						後期前葉後期後葉													
2012	第514集	『水上(2)遺跡』			前期末葉～中期末葉																
2012	第515集	『大川添(2)遺跡Ⅲ』													前期末葉～後期後葉						
2013	第527集	『川原平(4)遺跡Ⅱ』									中期末葉～後期初頭中世～近世										
2013	第528集	『水上(2)遺跡Ⅱ・水上(3)遺跡Ⅱ』			前期末葉～後期初頭	前期初頭～後期末葉															
2014	第539集	『川原平(4)遺跡Ⅲ』									早期中葉～後期後半～晩期前葉古代以降										
2014	第540集	『芦沢(2)遺跡』							中期中葉～後期前葉後期後葉～晩期初頭晩期後葉												
2014	第541集	『鬼川辺(1)遺跡・鬼川辺(2)遺跡・鬼川辺(3)遺跡』																包含層後期後葉古墳～近世	中期晩期	中期中葉～中期後葉	
2014	第542集	『大川添(4)遺跡』															後期前葉後期末葉				
2014	第543集	『砂子瀬遺跡Ⅳ』						早期中期中葉後期前葉後期中葉後期後葉時期													
2014	第544集	『大川添(3)遺跡』														記載～晩期中期後葉～後期初頭古墳時代					
備　考											註7		註6								

第２節　遺跡の立地と基本層序

遺跡周辺の地形・地質については既刊報告書で述べられており(島口2006、山口2014)、本報告書では省略する。今回報告範囲の発掘調査を終えた後に、北側の斜面部や西側に位置するさらに下位の段丘面に遺跡範囲が広がることが分かったため、次年度に刊行する報告書で地形・地質について改めてまとめる。本節では遺跡の立地と報告範囲の層序について記載する。

(１)遺跡の立地

川原平(1)遺跡は岩木川上流右岸に位置し、遺跡のすぐ西側で岩木川本流と支流である大沢川が合流している。合流点付近の水面標高は172mである。川原平(1)遺跡は河成段丘低位面に立地しており、標高およそ205mの平坦地に遺跡の主体がある。同じ段丘面には川原平(4)遺跡や川原平(6)遺跡が登録されている。本遺跡の南限は県道であり、この南側では2003年調査において遺構や遺物包含層が検出されていない。東側は大正時代に開削された道路で川原平(4)遺跡と区切られているが、地形的には平坦地が連続している。川原平(1)遺跡と川原平(4)遺跡の境界は、地形による区分ではなく登録にあたっての便宜的なものである。遺跡の北側および西側は段丘崖であるが、2013年調査では北側斜面に遺物包含層の存在が判明し、2014年調査では大沢川に面した一面下の段丘(標高約190m)にも遺物包含層が発見された。前者は北捨場、後者は西捨場としてそれぞれ調査が行われている。なお、2014年には目屋ダムの満水時には水没する、岩木川河道に近い遺跡北側隣接地(標高約180m)で文化財保護課による試掘調査が行われた。少量の摩滅した土器が出土したが遺跡は広がらないことが分かり、川原平(1)遺跡の範囲が確定した(青森県教育庁編2015)。川原平(1)遺跡で最も標高が高い場所は、県道沿いのⅣM-40～44グリッドにかけてである。地山面はほぼ平坦であるが、Sec3ではその途中ⅣRグリッド列付近から緩やかに北に傾斜している。また、37～38グリッド列付近にも起伏があり、西側が1mほど低い。この地形は調査前の地形図(図Ⅳ)では耕地の畦畔として、また調査図面ではSec1・5・7の緩やかな傾斜として表れている(図Ⅸ)。報告範囲の北側には柱穴が密集しており、この部分が主要な居住空間と考えられ、報告範囲内には主に遺物包含層が広がる。西側ではおおむね203m以下が段丘崖となっており、崖の高さは10～15mである。

西捨場は段丘崖の下に位置し、川原平(4)遺跡E区(標高185m)と同じ段丘面に立地する。川原平(4)遺跡E区では縄文時代早期の包含層と後期後葉・晩期前葉の遺構が検出され、中期の遺物も散布している。この段丘面は川沿いに形成された狭い段丘であるが、縄文時代の各時期に利用されたことが窺える。しかし、最大幅が20m程度と拠点的な集落を構えるには狭いことから、川原平(1)遺跡や川原平(4)遺跡A区など規模の大きな集落の中心は、岩木川河床から30mほど高い広い平坦地に立地することになったと考えられる。

(２)基本層序(図Ⅷ～Ⅺ)

川原平(1)遺跡の土層は、2003年調査(青埋文編2006)で区分したものを2011年調査でも引き継いでおり、その区分に従って遺物を取り上げている。すなわち、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：造成土、Ⅲ層：黒色土、Ⅳ層：低位河成段丘堆積物の４区分である。各層の解釈については調査の進展に伴い若干の変

更がある。2003年調査の時点でⅡ層に対して造成土という表現を用いたのは、水田造成や県道敷設に伴う客土を含んでいると判断したためであった。2011・2013両年の調査では明確に客土と判断できる部分は見つかっておらず、Ⅱ層とした部分はⅢ層の上部が撹乱を受けたものと考えられ、独立した層名を付す根拠はなくなった。しかしながら、多くの遺物をⅢ層として取り上げを済ませており、層名変更は整理作業の都合上適当ではないので、Ⅱ層という表記は残すこととした。Ⅰ層の解釈についても、発掘調査範囲は旧耕作地以外を含むため、表土という表現が適切であろう。

また、Ⅳ層とした部分は礫やローム、両者の混合層など地点によって多様であるため、図中ではその表記を残して( )内にできるだけ土質を記すこととし、本文中では一括して「地山」と呼称することとした。

基本土層とその解釈を再掲すれば、次の通りである。

Ⅰ層：表土(耕作土含む)。

Ⅱ層：本来はⅢ層であったが、耕地や道路の造成時に撹乱を受けた部分(縄文時代の遺物を含む)。

Ⅲ層：耕作等による新しい時代の撹乱を受けていない縄文時代の堆積層。

漸移層：Ⅲ層とⅣ層の間にある、遺物を含まない自然堆積土。

Ⅳ層：人的な撹乱が及んでいない堆積土。

Ⅰ層は調査区の全域に認められるが、色調は一様ではない。Ⅱ層の分布は、その性質上水田造成が行われた範囲に限られ、色調や混入物は下位のⅢ層を反映している。通常はⅠ層に含まれると解釈してよい。Ⅲ層は縄文時代の遺物包含層ということで一括しており、地点によって色調や混入物に差異がある。Ⅲ層はセクションベルト以外では細分しておらず、また異なるセクションベルト間では細別の数字は対応しない。Sec1・Sec5・Sec7それぞれにⅢ-2層はあるが、それぞれが別の堆積層ということである。報告範囲の中央部ではⅢ層が平坦部で30㎝程度、斜面部では50㎝を超える厚さがあり(図Ⅷの黄色部分)、色調は黒色に近い。遺物や礫、炭化物を多く含むことから自然に発達した土壌ではなく、土やモノを捨てる行為の反復で堆積したものと考えられる。地山の上部には漸移層が確認できる。東側では黒色土が発達せず、地山の上部に土壌化の進行が弱い褐色土が堆積している(図Ⅺ)。少量ながらこの褐色土にも縄文時代の遺物が含まれるため、Ⅲ層としている。この区域では地山にも礫が含まれていないことを反映してかⅢ層中に礫はほとんど含まれない。地山とⅢ層の境界には凹凸がみられ(写真18-1)、削平を受けたわけではなく縄文時代を通じて土地利用の頻度が低い場所であったと考えられる。西側(図⑥ 区域E)では漸移層が確認できず、Ⅲ層も安定した堆積ではない。この部分は耕作地を造成するために削平を受けた可能性が高い。

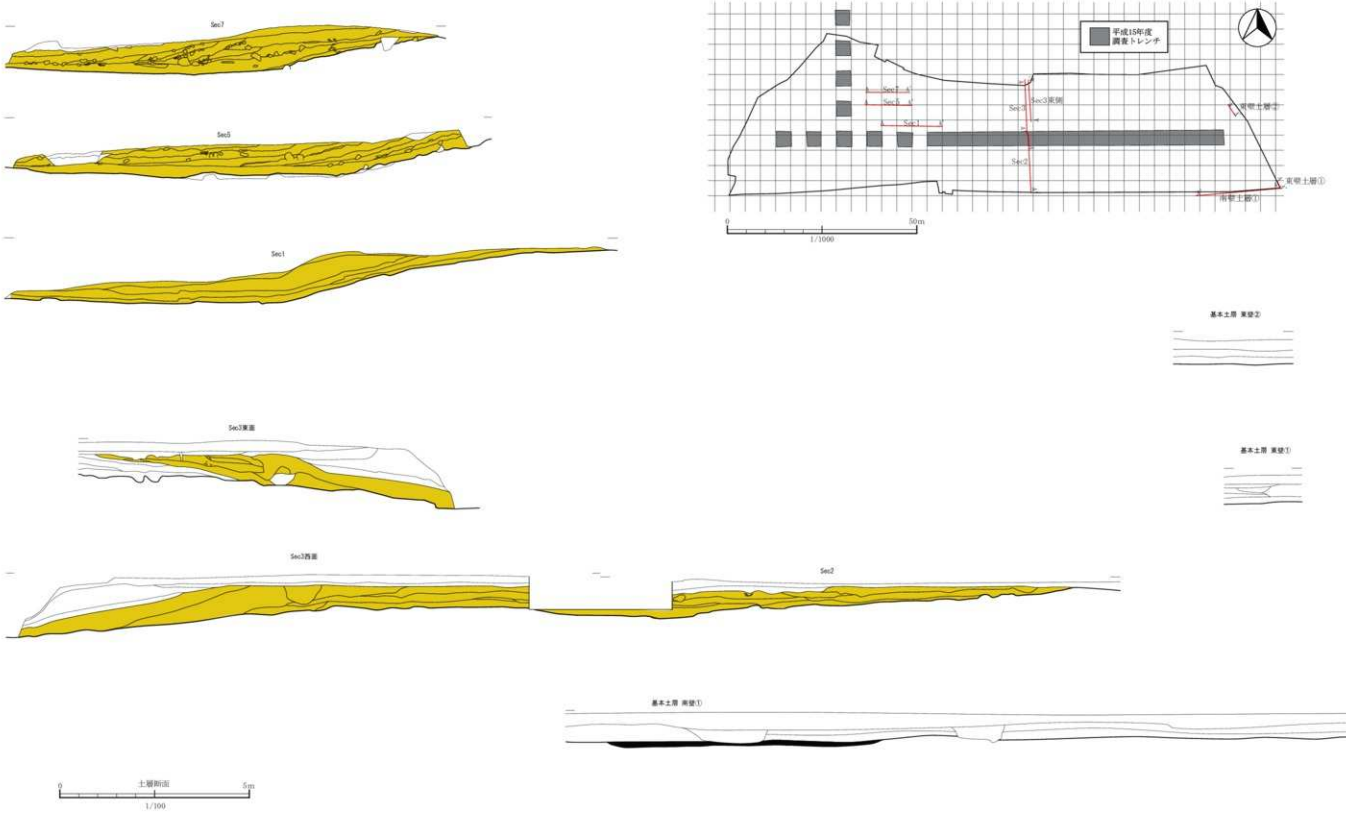
地山には場所によって差があり、大きくは礫層とロームに分けられる。ロームの上に礫層が堆積しているように思われるが、同一断面でその上下関係を把握できた場所はないのでⅤ以降のローマ数字は付していない。また、Ⅲ層との境界部分には漸移層とした遺物を含まない明褐色～黒褐色土が確認できる場所もある。この漸移層が確認できない場所は、削平を受けている可能性が高い。ロームと記載した黄褐色土は、実際にはシルト質の部分も多く、隣接する川原平(4)遺跡では地山中に礫が多い部分とシルトが多い部分があることが知られており、礫は段丘形成過程で岩木川で発生した土石流が自然堤防のように堆積したためとされている(島口2013)。南壁土層ではロームは西に向かうにつれて、漸移的に白色粘土に移行する。白色粘土の上部は暗色帯を形成しており、炭化物を含む。この粘土層

から炭化材サンプルを採取し分析している。炭化材はすべて細片となっており、粘土層にパックされた状態であった。混入可能性は低いと判断したが、年代測定結果は4,540±20yrBP(11KAWA(1)-01)で、樹種はクリと同定された。この値は4,600～4,300yrBPとされる円筒上層式の年代にあたり(辻・中村2001)、縄文時代中期に粘土層の上部が撹乱を受けていると考えられる。報告範囲では円筒上層c式(図118-1)が出土しているため、この頃の人間活動を反映している可能性がある。この白色粘土は2011年調査中に採取し、三内丸山遺跡保存活用推進室に提供した。その後2012年度の土器製作体験学習に利用され、良質の粘土であったという評価が得られている。粘土サンプルは保管しているが、現時点では火山灰分析・胎土分析は行っていない。遺跡内では単独あるいは土器に伴って白色粘土が出土しており(写真90)、南壁土層にみられる白色粘土は中期だけではなく後期・晩期にも利用された可能性がある。

(岡本)

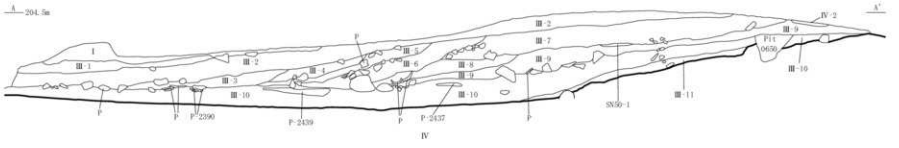
引用文献

島口天 2006「遺跡周辺の地形・地質」『川原平(1)・(4)遺跡・大川添(2)遺跡・水上遺跡』青埋報第409集
島口天 2013「川原平(4)遺跡A区の地形・地質」『川原平(4)遺跡Ⅱ』青埋報告書第527集
辻誠一郎・中村俊夫 2001「縄文時代の高精度編年」『第四紀研究』第40号第6巻
山口義伸 2014「遺跡周辺の地形及び地質について」『川原平(4)遺跡Ⅲ』青埋報第539集


Sec7
Sec5
Sec1
Sec3東面
Sec3西面
Sec2
平成15年度
調査トレンチ
Sec7
Sec5
Sec1
Sec3
Sec3東側
Sec2
東壁土層②
東壁土層①
南壁土層①
0
50m
1/1000
基本土層 東壁②
基本土層 東壁①
基本土層 南壁①
土層断面
0
5m
1/100

図Ⅷ　土層図作成地点

Sec7

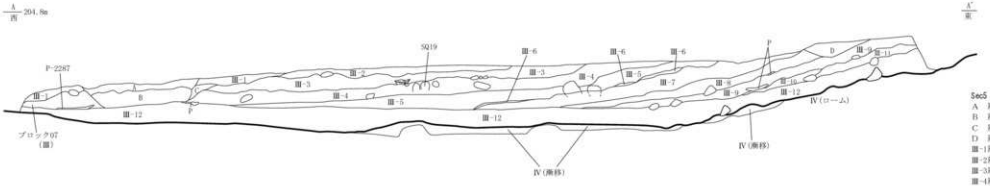


Sec7
Ⅰ 層 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物(φ1～10mm)2% 礫(φ5～10mm)1% 来関に10YR2/3黒褐色土5%含む
Ⅲ-1層 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物(φ1～20mm)5% 褐色粒(φ1～5mm)1% 礫(φ15～40mm)1%
Ⅲ-2層 黒褐色土(10YR2/3) 炭化物(φ1～10mm)7% 礫(φ5～30mm)5% 西端でブロック07を含む
Ⅲ-3層 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物(φ1～20mm)10% 礫(φ5～30mm)3%
Ⅲ-4層 褐 色 土(10YR4/4) 炭化物(φ1～10mm)2% 礫(φ1～40mm)5% 10YR5/8黄褐色土塊2%含む
Ⅲ-5層 暗褐色土(10YR3/4) 炭化物(φ1～10mm)2% 礫(φ5～50mm)5%
Ⅲ-6層 黒褐色土(10YR2/3) 炭化物(φ1～10mm)3% 礫(φ5～100mm)10%
Ⅲ-7層 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物(φ1～20mm)8% 礫(φ10～70mm)5%
Ⅲ-8層 黒褐色土(10YR2/3) 炭化物(φ3～10mm)10% 礫(φ10～100mm)5%
10YR5/6黄褐色土粒(φ1～5mm)2%
Ⅲ-9層 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物(φ1～30mm)5% 礫(φ10～100mm)3%
10YR2/1黒色土3%含む 円礫(φ5～10mm)2%
Ⅲ-10層 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物(φ1～2mm)1%以下 礫(φ2～70mm)2%
10YR4/4褐色土粒(φ1～5mm)3% 上面にブロック09と11を含む
Ⅲ-11層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ20～50mm)8% 10YR4/4褐色土粒(φ1～2mm)1% 炭化物(φ1～5mm)1%
Ⅳ 層 褐 色 土(10YR4/6) ローム 礫(φ20～30mm)3%

Pit650
黒褐色土(10YR2/3) 炭化物(φ1～3mm)1% 礫(φ5～20mm)2% 10YR3/4暗褐色土5%含む

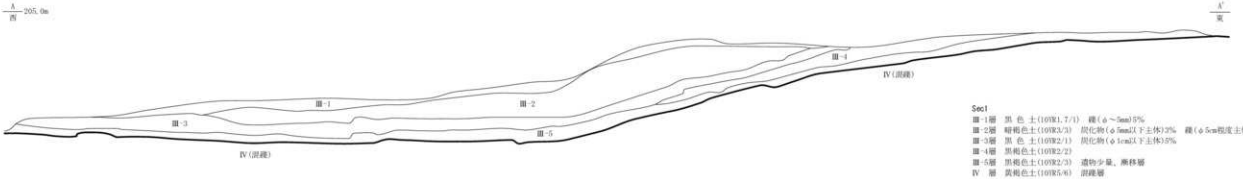
SN50
暗褐色土(7.5YR3/4) 炭化物(φ1～5mm)1% 礫(φ5～15mm)1%

Sec5



Sec5
A 層 褐 色 土(10YR4/4) 礫(φ～110mm) 炭化物僅少 礫ほとんど入らない
B 層 黒 色 土(10YR2/1) 礫(φ～70mm)5% 炭化物(φ～15mm)1%
C 層 黒 色 土(10YR2/1) 礫(φ25～65mm)10% 炭化物(φ～30%)3%
D 層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ～60mm)5% 炭化物(φ～15mm)2%
Ⅲ-1層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ～110mm)30% 炭化物僅少
Ⅲ-2層 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ～130mm)5% 炭化物僅少
Ⅲ-3層 黒褐色土(10YR2/2) 礫(φ～120mm) 炭化物(φ～30mm)多数
Ⅲ-4層 黒褐色土(10YR2/3) 礫(φ～240mm)30～40%程 炭化物(φ～20mm)
Ⅲ-5層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ～100mm)10% 炭化物(φ～15mm)2%
Ⅲ-6層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ～70mm)7% 炭化物(φ～10mm)7% 炭化物密集
Ⅲ-7層 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ～230mm)10% 炭化物(φ～70mm)3%
Ⅲ-8層 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ～160mm)5% 炭化物(φ～20mm)2%
Ⅲ-9層 黒褐色土(10YR2/3) 礫(φ～110mm)20% 炭化物(～20%)15%
Ⅲ-10層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ～100mm)15% 炭化物(φ～10mm)2%
Ⅲ-11層 褐 色 土(10YR4/6) 礫(φ～140mm)20% 炭化物(φ～20mm)2%
Ⅲ-12層 黒褐色土(10YR2/2) 礫(φ～180mm)10% 炭化物(φ～10mm)1%
ブロック07 Ⅲ層 黒褐色土(10YR2/3) 礫(φ5～140mm)20% 炭化物(φ～5mm)1%
土器集積部分 ブロック07土器集積(P-2287)礫も集中
Ⅳ 層 黒褐色土(10YR3/2) 礫(φ～10mm)3% 撹拌層
Ⅳ 層 暗褐色土(10YR3/3) 10YR4/6褐色土50% 礫(φ15～50mm)10%
Ⅳ 層 褐 色 土(10YR4/6) 礫(φ～180mm)20%

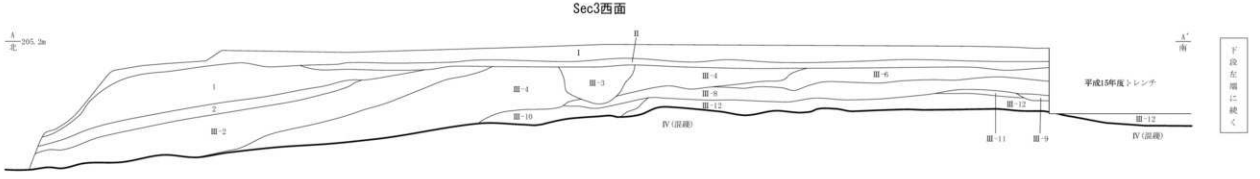
Sec1

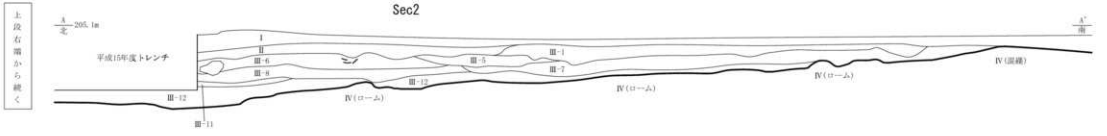


Sec1
Ⅲ-1層 黒 色 土(10YR1.7/1) 礫(φ～5mm)5%
Ⅲ-2層 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物(φ5mm以下土体)3% 礫(φ5cm程度土体)10%
Ⅲ-3層 黒 色 土(10YR2/1) 炭化物(φ1cm以下土体)5%
Ⅲ-4層 黒褐色土(10YR2/2)
Ⅲ-5層 黒褐色土(10YR2/3) 遺物少量、撹拌層
Ⅳ 層 黄褐色土(10YR5/6) 混礫層

0 2m
1/50

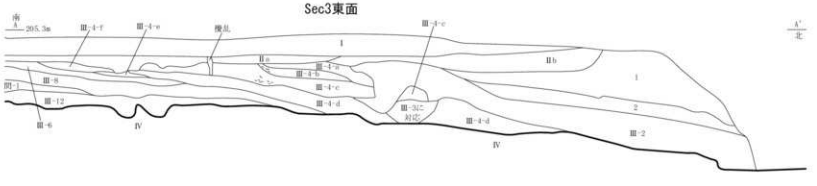
図Ⅸ Sec1・Sec5・Sec7





Sec3西面
Ⅰ 層 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒(φ1～3mm)3%
Ⅱ 層 黒 色 土(10YR2/1) ローム粒(φ1～5mm)5% 焼化物(φ1～2mm)3% 焼土粒10%
1 層 黒褐色土(10YR2/3) 小礫(φ1～200mm)90% 焼化物(φ1～2mm)1%
2 層 黄褐色土(10YR5/6) ローム粒(φ1～3mm)3%
Ⅲ-2層 黒 色 土(10YR2/1) 小礫(φ1～200mm)50% 焼化物(φ1～3mm)2%
Ⅲ-3層 暗褐色土(10YR3/4) 小礫(φ1～300mm)30% 焼化物(φ1～5mm)5%
Ⅲ-4層 褐 色 土(10YR4/4) 小礫(φ1～300mm)20% 焼化物(φ1～5mm)3% 土器、石器混入
Ⅲ-6層 暗褐色土(10YR3/3) 小礫(φ1～150mm)70% 土器、石器多数混入 焼土粒2%
Ⅲ-8層 黒 色 土(10YR2/1) 小礫(φ1～100mm)20% 焼化物(φ1～5mm)5% ローム粒(φ1～2mm)3% 土器、石器混入 焼土粒5%
Ⅲ-9層
Ⅲ-10層 黒褐色土(10YR2/3) 小礫(φ1～200mm)10% 焼化物(φ1～3mm)3%
Ⅲ-11層 黒褐色土(10YR2/2) 小礫(φ1～50mm)10% ローム粒(φ1～7mm)3%
Ⅲ-12層 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒(φ1～5mm)5% 焼化物(φ1～2mm)1%
Ⅴ 層 褐 色 土(10YR4/6) 小礫(φ1～10mm)5% 焼化物(φ1～3mm)3%

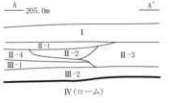
Sec2
Ⅰ 層 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒(φ1～3mm)3% 表土(耕作土)
Ⅱ 層 黒 色 土(10YR2/1) ローム粒(φ1～5mm)5% 焼化物(φ1～2mm)3% 焼土粒10% 水田床土(Ⅲ-1層を母材とする撹乱層)
Ⅲ-1層 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒(φ1～3mm)3% 土器、石器多数混入 焼土粒5%
Ⅲ-5層 暗褐色土(10YR3/4) 小礫(φ1～100mm)50% 土器、石器混入 焼土塊(φ1～20mm)5%
Ⅲ-6層 暗褐色土(10YR3/3) 小礫(φ1～150mm)70% 土器、石器多数混入 焼土粒7%
Ⅲ-7層 黒褐色土(10YR2/3) 焼化物(φ1～5mm)10% 小礫(φ1～50mm)30% 土器、石器混入 焼土塊(φ1～50mm)3% 上面に土器多い
Ⅲ-8層 黒 色 土(10YR2/1) 小礫(φ1～100mm)20% 焼化物(φ1～5mm)5% ローム粒(φ1～2mm)3% 土器、石器混入 焼土粒5%
Ⅲ-11層 黒褐色土(10YR2/2) 小礫(φ1～50mm)10% ローム粒(φ1～5mm)3%
Ⅲ-12層 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒(φ1～5mm)5% 焼化物(φ1～2mm)1%
Ⅳ 層 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒(φ1～2mm)1%未満 焼化物(φ1～2mm)1%未満 ローム への漸移層
Ⅴ 層 褐 色 土(10YR4/6) 小礫(φ1～10mm)5% 焼化物(φ1～3mm)3% 黄褐色ローム(混礫ローム)



Sec3東面
1層 黒褐色土(10YR2/3) 小礫(φ1～200mm)90% 焼化物(φ1～2mm)1% 水田造成土
2層 黄褐色土(10YR5/6) ローム粒(φ1～3mm)3% 水田造成土
Ⅰ層 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒(φ1～3mm)3%
Ⅱ層 黒 色 土(10YR2/1) ローム粒(φ1～5mm)5% 焼化物(φ1～2mm)3% 焼土粒10%
Ⅳ層 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒(φ1～2mm)1%未満 焼化物(φ1～2mm)1%未満 ローム への漸移層
Ⅲ-2層 黒 色 土(10YR2/1) 小礫(φ1～200mm)50% 焼化物(φ1～3mm)2%
Ⅲ-4a層 黒褐色土(10YR3/2) 焼化物粒(φ～8mm)3% 礫(φ～100mm)20%
Ⅲ-4b層 黒褐色土(10YR2/3) 焼化物粒(φ～10mm)7% 礫(φ～90mm)15% 南側下部に土器片集中
Ⅲ-4c層 暗褐色土(10YR3/3) 焼化物(φ～40mm)10% 礫(φ～200mm)4% 中央下部に土器片集中
Ⅲ-4d層 暗褐色土(10YR3/4) 焼化物粒(φ～5mm)3% 礫(φ～80mm)10% 焼土粒(φ3～5mm)2% 南側下部に土器片
Ⅲ-4e層 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 焼化物(φ～20mm)7% 礫(φ～20mm)3%
Ⅲ-4f層 黒褐色土(10YR2/2) 焼化物(φ～20mm)5% 礫(φ～80mm)10% 焼土粒(φ～10mm)2%
問-1層 黒褐色土(10YR2/3) 焼化物(φ1～13mm)3% 礫(φ1～80mm)10% 暗色粒(φ1～3mm)1% 小礫混入

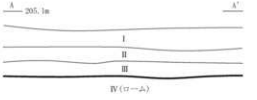
図X Sec2・Sec3西面/東面

基本土層 東壁①



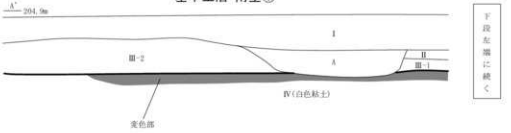
基本土層 東壁①
Ⅰ層　灰黄褐色土(10YR4/2)　10YR4/4 褐色土 5%　焼化物(φ～10mm)1%
Ⅱ-1層　褐　色　土(10YR4/4)　焼化物(φ～20mm)1%
Ⅱ-2層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　焼化物(φ～5mm)1%
Ⅱ-3層　褐　色　土(10YR4/6)　10YR5/6 黄褐色土 5%　焼化物(φ～5mm)1%
Ⅱ-4層　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　焼化物(φ～7mm)1%
Ⅲ-1層　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　焼化物(φ～5mm)3%
Ⅲ-2層　にぶい黄褐色土(10YR4/7)　10YR5/6 黄褐色土 7%　焼化物(φ～5mm)10%
Ⅳ層　黄褐色土(10YR5/6)　焼化物(φ～3mm)1%

基本土層 東壁②

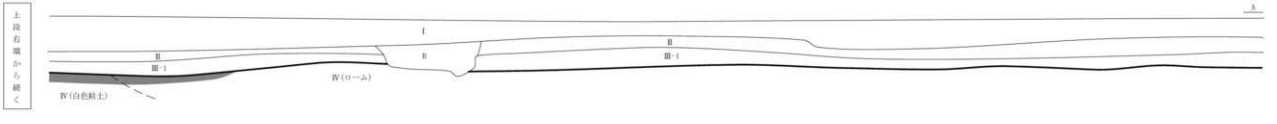


基本土層 東壁②
Ⅰ層　灰黄褐色土(10YR4/2)　10YR4/4 褐色土 10%　焼化物粒(φ～10mm)1%
Ⅱ層　褐　色　土(10YR4/4)　焼化物粒(φ～5mm)1%
Ⅲ層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　10YR5/6 黄褐色土 10%　焼化物(φ～10mm)10%
Ⅳ層　黄褐色土(10YR5/6)　10YR4/3 にぶい黄褐色土 10%　焼化物(φ～3mm)1%　層上部、やや汚れあり

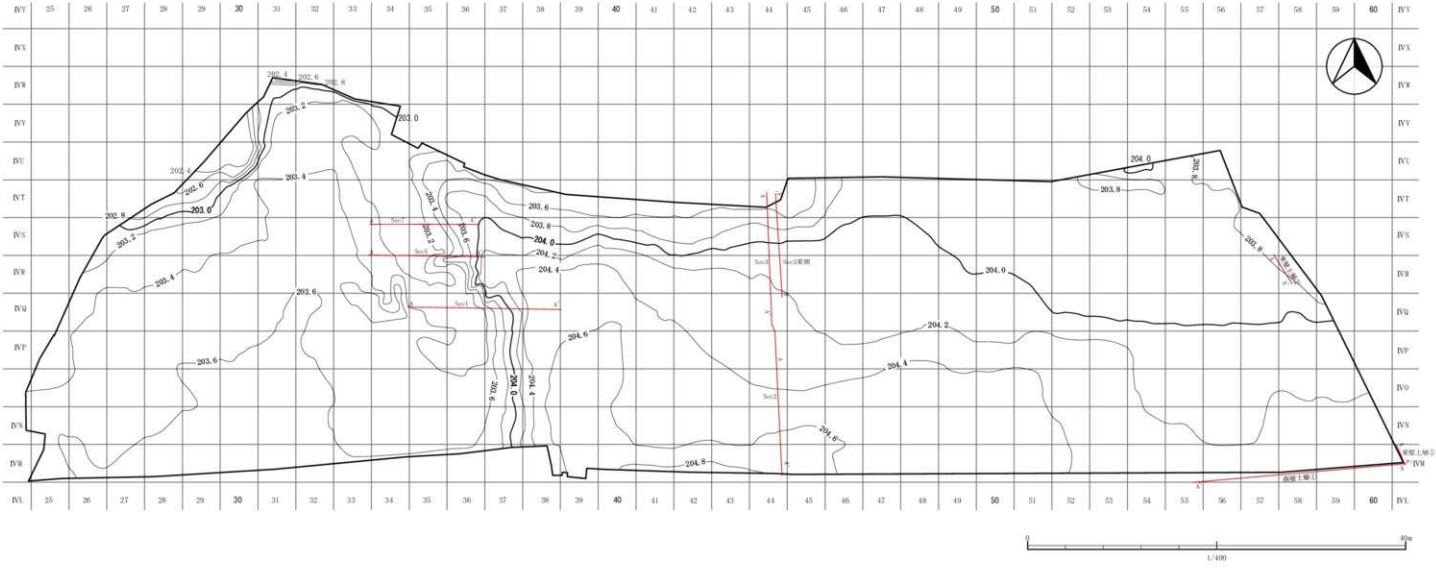
基本土層 南壁①



基本土層 南壁①
Ⅰ層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　10YR2/3 黒褐色土 20%　ローム粒(φ1～20mm)10%　焼化物(φ1～5mm)5%
A層　褐　色　土(10YR4/4)　ローム粒(φ1～3mm)3%　焼化物(φ1～2mm)3%
B層　褐　色　土(10YR4/6)　焼化物(φ1～5mm)5%　ローム粒(φ1～2mm)1%
B層　暗褐色土(10YR3/3)　焼化物(φ1～5mm)5%　ローム粒(φ1～2mm)1%未満　東壁①のⅡ-3に相当
Ⅲ-1層　暗褐色土(10YR3/4)　10YR2/3 黒褐色土 10%　焼化物(φ1～5mm)3%　ローム粒(φ1～3mm)1%未満
Ⅲ-2層　褐　色　土(10YR4/6)　焼化物(1～3mm)5%
Ⅳ層　黄褐色土(10YR5/6)　10YR6/4 にぶい黄橙色土 30%　10YR5/4にぶい黄褐色土10%
Ⅳ層　　白色粘土(図の上部は暗色帯となっており、焼化物を含む)



図XI　基本土層 東壁①・東壁②・南壁①


IV'Y 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 IV'Y
IV'X
IV'W
IV'V
IV'U
IV'T
IV'S
IV'R
IV'Q
IV'P
IV'O
IV'N
IV'M
IV'L
202.4
202.6
202.8
203.0
203.2
203.4
203.6
203.8
204.0
204.2
204.4
204.6
204.8
Sec1
Sec2
Sec3
Sec4
Sec5
Sec6
Sec7
Sec8
Sec9
Sec10
Sec11
Sec12
Sec13
Sec14
Sec15
Sec16
Sec17
Sec18
Sec19
Sec20
Sec21
Sec22
Sec23
Sec24
Sec25
Sec26
Sec27
Sec28
Sec29
Sec30
Sec31
Sec32
Sec33
Sec34
Sec35
Sec36
Sec37
Sec38
Sec39
Sec40

図Ⅻ 調査区内の地形(調査終了後)と
土層図作成地点・遺構配置

第4章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要

川原平(1)遺跡(以下「本遺跡」)は、西目屋村役場から南西に約9㎞、岩木川とその支流である大沢川の合流点付近に立地し、東西約170m、南北約130mの範囲として登録されている(図Ⅰ～Ⅳ)。微地形的にみると、遺跡の中央は標高201～205mを測る平坦地、その西側～北側～北東側は段丘崖で、特に西側は標高186mまで落ち込む急斜面となっている。平坦地と川床の高低差は約30mである。

南側は県道28号岩崎西目屋弘前線を挟んで、川原平(2)遺跡が載る台地へと緩やかに繋がり(図Ⅶ)、東側は大正7年に構築された道路を境界線として、川原平(4)遺跡が連続している(図Ⅲ・Ⅳ)。

昭和34年(1959年)刊行の『目屋ダム建設記念 砂子瀬部落誌』によれば、「縄文文化時代遺蹟」として、(イ)砂子瀬村警鐘台遺蹟、(ロ)砂子瀬小学校々地、(ハ)砂子瀬村芦萢の城址、(ニ)川原平村西端大沢の降り口、(ホ)川原平村ハタフク遺蹟、(ヘ)川原平村焼山、の6箇所(6遺跡)が挙げられている。

本遺跡は「(ニ)川原平村西端大沢の降り口」に相当するようであるが、この「大沢の降り口」が川原平(4)遺跡との境界をなす大正期構築の道路と推定され、「…凶作の救済事業として営林署が開いたもので、その際ここから多くの土石器が出土したという。この辺の台地の開墾した所には、今も多くの破片が散在している。縄文後期及晩期のものである。」と記されている(成田 1959)。

以後、本遺跡は多くの土石器の出土するところとして地元住民に認識されてきたようである。

以下、本遺跡の概要について述べるが、例言～第2章で記したように、本遺跡は今後数冊の続刊が予定されており、ここで確定的な概要を述べることは不可能である。しかしながら、報告範囲外の情報が無い中で本書を有効に活用するのも難しい。よって以下では、現時点で判明している本遺跡の大枠を概観しながら、本報告の占める位置や課題等を簡単に説明する程度とする。

本遺跡の最初の発掘調査が行われたのは、平成15年(2003年)である。この時点でも「多くの土石器」を確認し、それは「遺物包含層」として把握され、「後期後半の大型中空土偶」の出土などが注目された(青森県埋蔵文化財調査センター 2006 第409集)。

平成23年度(2011年)は、「遺物包含層(本報告)」の調査と並行しながら、建物跡・土坑・焼土遺構・土器埋設遺構・配石遺構など、集落を構成する各種遺構(本報告)を多数検出し、縄文時代後期後葉から晩期にかけての集落跡であることを確定する。

平成25年度(2013年)の調査では、径10mを超す大型建物跡を数棟含む、多数の柱穴群(建物跡群)の検出により、遺跡中央域の平坦地は主に居住域として長期利用されていたことが判明し、2011年調査の「遺物包含層(本報告)」は、この居住域の外側に形成されたものであることも明らかとなる。さらに、「石棺状配石(本報告)」・「日時計形組石を伴う土坑」・「盛土遺構」などの希少な遺構を検出する。

平成26年度(2014年)は、西側～北側～北東側の斜面に大規模な捨場を発見する。各捨場は「西捨場」・「北捨場」・「北東捨場」と呼称され、平坦地の東域に「東捨場」も検出する。これら捨場のあり方より、

平坦地を中心にした居住域の外側に捨場が配置されるという空間利用の大枠が明瞭となった。

調査最終年の平成27年度(2015年)は、西捨場の一部に広がる湿地性の包含層から漆製品・木製品・種実等の有機質遺物など、縄文時代晩期の物質文化研究における重要資料が多量に出土する。

本遺跡の主体は、縄文時代後期後葉～晩期後葉まで継続した集落である。長期にわたる建物の建て替えと遺物の廃棄、この２つの事項より、平坦地を中心に居住域を形成し、その外側を廃棄域とする空間利用の状況も同じく長期継続していた可能性が高い。これは時間的な細分に基づいた遺構の整理完了後に明確となる。なお、東隣の川原平(4)遺跡で検出されている晩期中葉～後葉の土坑墓群も含めて考えると、居住域・廃棄域・墓域という３領域が明確になる[1]。

晩期集落跡の全体像を知ることができる本遺跡は、東北地方における亀ヶ岡文化研究に欠かすことのできない重要遺跡と言える。（木村）

註

1）本遺跡における空間利用の状況については、各種要素を時系列で整理した上で、川原平(4)遺跡を含めて考える必要がある。

引用文献

成田末五郎 1959「第14章第１節 14、遺蹟と沿革」『目屋ダム建設記念 砂子瀬部落誌』十和田岩木川総合開発協議会

第２節　遺構の概要[1]（図XIV・XVI・付図 参照 〔次巻以降の報告予定遺構も含む〕）

遺構は、縄文時代中期後半と縄文時代後期後葉～晩期後葉の大きく２つの時期に分かれる。

（１）縄文時代中期後半（次巻報告予定）

本遺跡における最古の遺構は、中期後半のものである。種別は竪穴建物跡と土坑の２種であり、これらは平坦部がやや突出する北西端にまとまっている（図XIV）。ここは、岩木川と大沢川の合流状況を見下ろせる地点であり、該期の遺構の集中理由との関連がうかがわれる。

特徴的と言えるのは大型の土坑である。円形を呈し、径は約３m前後、深さは２m近くのものもあり、数基の類例が川原平(4)遺跡に検出されているが、希な遺構と言える。

（２）縄文時代後期後葉～晩期後葉

遺構は平坦地の全域に分布し、本遺跡の主体を占める。種別は、建物跡[2]・焼土遺構・柱穴（建物跡）・土坑・石棺状配石・配石遺構・土器埋設遺構、盛土遺構の８種[3]である。また、平坦地の東域には「東捨場」、平坦地の縁辺から続く斜面には「西捨場」・「北捨場」・「北東捨場」があり、中央部の平坦地は主に居住域、その外側は概ね捨場という空間利用が認められる[4]。

【建物跡】

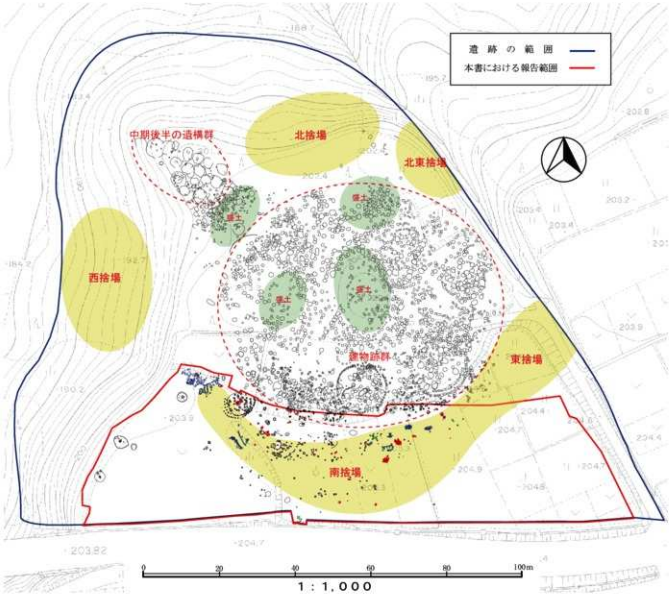
今回報告の「建物跡」は平坦部南西域に散発的に分布し、報告数は６棟と少ないが、今後報告予定の平坦地中央の柱穴群は、高密度な分布状況と弧状～環状に巡る柱穴（壁柱穴）の存在により、限定範囲に建物が晩期を通じて繰り返し建て替えられていた状況をよく示している。これらは、水田造成等

による削平を受けたものが多く、壁面、床面、炉跡などがほとんど残っていないため、個々の建築構造の細部推定は難しいが、壁柱穴の並びから平面規模の推定はある程度可能と思われる。

【遺物包含層と焼土遺構・土器埋設遺構・配石遺構】

今回報告の「遺物包含層」は、建物跡群の南側に弧状に広がり、その東端は「東捨場」につながる。こうした状況より、本章に限ってこの遺物包含層を「南捨場」と仮称する。なお、「南捨場」と「東捨場」は平坦地に形成された捨場であり、「西捨場」・「北捨場」・「北東捨場」とは状況が異なる。

多量の遺物を包含する「南捨場」には、多くの遺構が構築されている。特に焼土遺構[5]・土器埋設遺構・配石遺構の３種は、「南捨場」の範囲に集中しており、これらが相互に関連している可能性は十分考えられる[6]。ただし、具体的にそれを解き明かすためには、「南捨場」の形成過程（使用の変遷）と３種の遺構との時間的な関係の整理が前提となる。何らかの儀礼行為を執り行う空間だった…等々の議論を進めるより、後期後葉～晩期中葉における空間区分の傾向や各空間における遺構間の親和性や排他的関係等、視覚的に把握可能な情報を用いた基礎的作業が優先である。



図Ⅳ　集落構成の状況（概念図）

特に、土器埋設遺構は、明らかにいくつかの群を構成しながら構築されており(付図)、各群の時期や群を構成する意味、群内における個々の個体のあり方など、考えるべき要素は多い。

【石棺状配石】

今回報告の遺構の中で特に注目されるのは、「石棺状配石」である。これは従来、青森県域においては「石棺墓」と呼称されてきたものに構造が類似するが、墓としての認定根拠に不足があると判断し、今回はこのような表現を用いている。

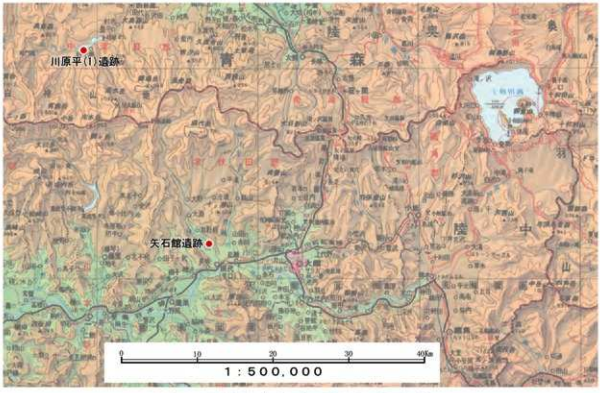
時期は、掘方出土の土器や炭素年代測定の結果より、「縄文時代後期末葉頃」と判断され、これまでの「石棺墓」の時期(中期末葉～後期前葉)より下ることは確実である。時空的、構造的に近いと考えられる遺構[7]は、秋田県大館市(旧田代町)矢石館遺跡(奥山1954)と同県大仙市(旧神岡町)落合遺跡(奈良・豊島1967)にあり、特に矢石館遺跡は本遺跡から直線で31kmという至近距離に所在し(図XV)、「組石棺」という名称で５基が「大部分大洞B期に属する」(P51)と報告されている。

矢石館・落合の２例はともに古い調査で、しかも時期が晩期という少数例だったために、研究俎上に載る機会が非常に少なかったが、今後は関東・中部・北陸地方の類例とともに、本遺跡例と対比されるべき重要遺構となる。

【日時計形組石を伴う土坑・盛土遺構】

次巻以降の報告となるが、「日時計形組石を伴う土坑」と「盛土遺構」も注目すべき遺構と言える。日時計形組石を伴う土坑は、平坦地の北西域に２基検出され、うち１基からは緑色凝灰岩製の玉が約30点ほど出土している。構築時期は晩期前葉と推定され、これも秋田県域等に類例が散見される。

盛土遺構はこれら日時計形組石を伴う土坑の上部に形成されており、晩期後葉の遺物を包含している。盛土遺構も見方によっては「捨場」と捉えることが可能だが、ここでの両遺構の関係は、先述の「焼土遺構・土器埋設遺構・配石遺構／南捨場」の関係とは異なり、時間差による上下重複である。(木村)



図XV　川原平(1)遺跡と矢石館遺跡の位置関係

註

1）報告書作成中であることから、今後訂正される表現等が含まれている可能性がある。

2）一般的に「住居跡」と呼称されてきたものを「建物跡」とし、壁面を検出できなかったものもあることから、「竪穴」は付さないこととした。柱穴列と建物の位置関係により、両者組み合わせて新規登録したSI101などの例もあるが、弧状に並ぶ一連のものなど、今回報告範囲の中には未だ数棟の存在が認められる。これら平面形的に不完全な柱穴列の、建物跡としての抽出・認定は最終刊でまとめて行う予定である。

3）分類方法によって種類数は変わる。８種という数値は概数を示すためのもので、特に深い意味は無い。

4）細かくみれば、「南捨場」内にSI101建物跡と弧状の柱穴列（建物跡の一部：今回は遺構名付さず）、「南捨場」外にも建物跡（SI01・04・06）が認められるが、本遺跡中央部に高密度で検出されている建物跡の総数はこれらの比ではない。ここでは例外的少数を除いて、最大公約数的に述べている。

5）焼土遺構は、建物跡の炉跡である可能性もある。

6）これら３種の遺構の機能について、それぞれ単独で追究しても限界があることは明らかである。併存しない遺構同士であっても、捨場という空間に対する意識が同じであるために結果的に集中する場合など、様々な可能性が想定される。

7）類例として扱われてきた秋田県北秋田市（旧森吉町）深渡遺跡検出の「SQS12石棺様組石」（秋田県埋文セ1999）は、その後の再調査で「中世の炉である可能性が高い」（P193）とされた（秋田県埋文セ2006）。

引用文献

奥山　潤　1954「縄文晩期の組石棺－秋田県北秋田郡早口町矢石館遺跡－」『考古学雑誌』第40巻第2号
奈良修介・豊島昌　1967『秋田県の考古学』郷土考古学叢書3　吉川弘文館
秋田県埋文セ　1999『深渡遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』秋調報第286集　秋田県教委
秋田県埋文セ　2006『深渡遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ－』秋調報第407集　秋田県教委

第３節　遺物の概要（次巻以降の報告予定遺物も含む）

平成15年(2003年）の調査以来、出土遺物は7457箱にのぼる。種別は、縄文時代の前期～晩期の土器・石器・土製品・石製品・木製品・漆製品・骨角製品・アスファルト関連遺物・赤色顔料原礫・焼成粘土塊、弥生土器、土師器、近世以降の陶磁器・銭貨などである。

量的に主体を占めるのは後期後葉～晩期後葉の土器・石器である。後期中葉以前の遺物は全体の１％にも満たず、晩期末葉以降は段ボール箱１つに収まる程度である。よって、本遺跡の遺物はほとんどが後期後葉～晩期後葉の遺物で占められている、と表現できる内容と言える。

（１）縄文時代後期中葉以前

土器では、円筒下層ｄ式、円筒上層ｃ式、榎林式、大木８ｂ式、最花式、十腰内Ⅰ群、十腰内Ⅳ群の各種型式がみられるが、これらに明確に伴う石器類は少ない。

（２）縄文時代後期後葉～晩期後葉

【土　器】

量的にはほとんどが捨場からのものであり、時間的には８段階程度に大別される。各段階は概ね、十腰内Ⅴ群の後半、十腰内Ⅵ群、大洞B1式、大洞B2式、大洞BC式、大洞C1式、大洞C2式、大洞A式、というものである。これら連続する各型式は、集落変遷を考える時間軸になり得るとともに、各種遺物の帰属時期決定や秋田県域出土資料との属性比較など、重要な役割を果たす。

遺跡全体における時期ごとの多寡については未だ判明していないが、捨場単位で分割するとそれぞれに認められる。例えば、本報告の「遺物包含層（南捨場）」は、十腰内Ⅴ群の後半～大洞B1式と大洞

C1式が多い。このことから、大洞B2～BC式、大洞C2式以降における捨場としての利用は少なかったことが分かる。このように、捨場単位に表れる時期ごとの多寡と、平坦地に構築された建物跡の時期別分布が判明すれば、集落内での使用～廃棄の動態を具体的に推察できる。

また、使用状況における特殊例として注目したいものに、底部に漆が厚く付着したものや、アスファルトを保存していたと思われるものなど、作業容器として使用された可能性のあるものや、焼けひずみのある土器(焼成失敗か)なども出土しており、これら特殊な土器類は、本遺跡における生業等を示唆する可能性を持つ。なお、赤黒二彩の漆塗浅鉢や脚部に精巧な透かしを彫り込んだ台付浅鉢など、技術工芸的レベルの高い晩期中葉のものや、人面付・獣面付、人面と獣面の両方が付いた後期後葉～晩期前葉の土器など、当時の精神世界をうかがい知ることのできる資料も認められる。

【土製品】

土偶をはじめ玉類や耳飾、土製円盤・亀形土製品など各種認められる。いわゆる遮光器土偶やその成立以前と思われる優品などが豊富に出土している。

【石　器】

石器は、この時期における一般的な器種のほとんどが出土しているほか、アスファルト付着石器や黒曜石製石器、赤色顔料が付着する磨石・凹石・石皿などもみられ、多種多様である。これらは、器種組成などの具体化のみならず、物流の実態からその利用形態に至るまで、多くの有効情報を含んでいる。本遺跡の地理的位置を勘案すれば、アスファルトは秋田県域から、黒曜石は日本海側(出来島・漆浦等)から、概ねこういったルートが想定されるが、本遺跡では帰属時期(帰属型式)ごとの盛衰などについても明らかにできる可能性がある。

【石製品】

玉類・石棒・岩版など各種みられ、特に円盤状石製品の多出は注意すべき現象と言える。アスファルト付着のものや加工途中のもの等、製作～使用～廃棄という一連の流れを推察できる可能性があり、本遺跡における生業等と関わりを持つ可能性もうかがわれる。

【有機質遺物】

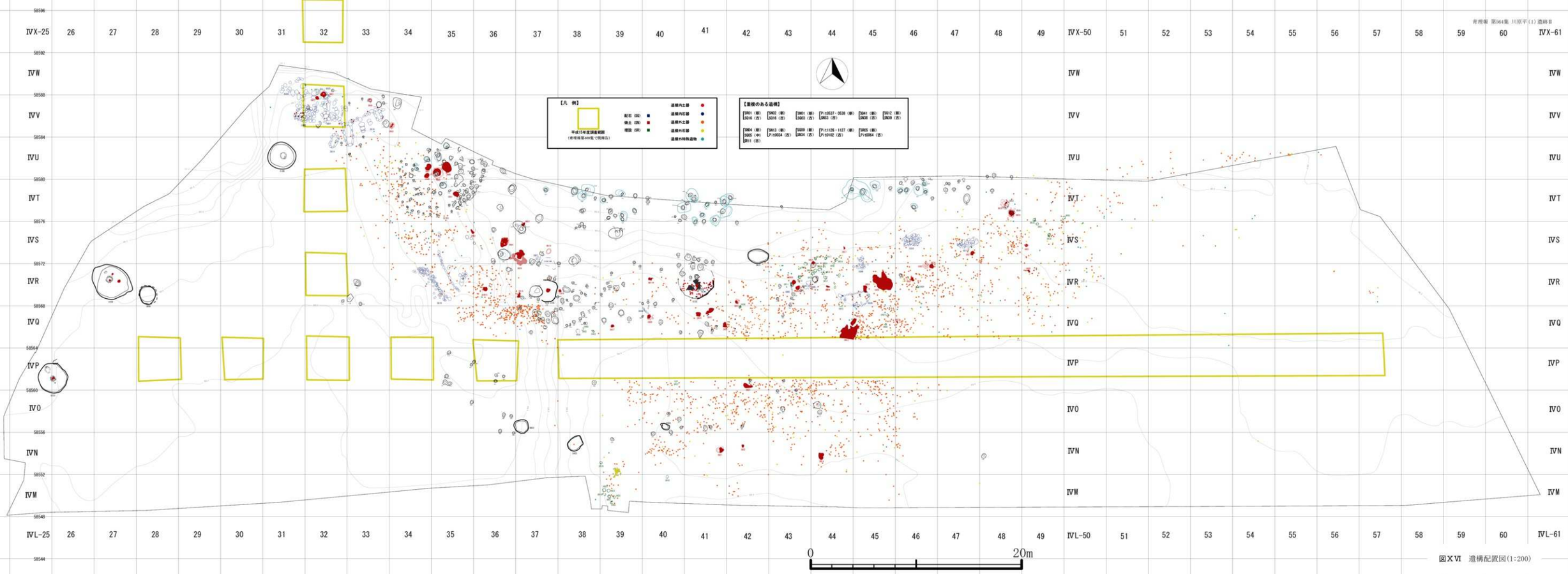
漆製品として堅櫛や腕輪、籃胎漆器などが出土している。これらは塗膜のみを残すかたちで、散発的に各捨場から出土しているが、西捨場の下位層の一部に広がる有機物(種実や樹皮等)を多量に含む湿地性堆積層からは、木胎を保つ良好な状態のものから漆濾布まで多様なものが出土している。勿論、ここからは他の木製品も多く出土し、筵状木製品や柱材、割材等の加工木、丸められた樹皮や蔓を巻いた不明品など様々なものがみられる。これらに加え、この層からは若干ながら針や刺突具、牙玉等の骨角器や魚骨なども出土し、岩木川上流域における内水面漁業を考える上で極めて貴重である。

【その他】

アスファルト塊・赤色顔料塊・粘土塊・焼成粘土塊・焼骨・琥珀などがある。これらについては帰属時期と出土状態の検証や科学分析の結果を踏まえ、最終刊で位置づけを行う予定である。

(3)縄文時代晩期末葉以降

弥生土器(?)と推定される土器片、平安時代の土師器片、近世以降の遺物として、18世紀代の肥前から近代までの陶磁器・土器、銭貨が出土している。　(木村)



図XVI 遺構配置図(1:200)

第５章　縄文時代の検出遺構と出土遺物

本章で触れる遺構・遺物の時期は、下表(表5-1)のとおりとする。

表5-1　時期区分

				本報告		青森県史(関根2013)	型式等		備考
後期		後葉	瘤付土器				十腰内Ⅴ群		本文中で7-3期以前を瘤付土器前半とした
				7-3期		7期3段階			
				7-4期		7期4段階	(十腰内Ⅴ群に欠落する時期)		瘤付土器第Ⅲ段階(小林2008)
		末葉		8期		8期	(十腰内Ⅵ群)		瘤付土器第Ⅳ段階(小林2008)
晩期	前半	初頭	亀ヶ岡式土器	1期	1a期	1a期	大洞B	大洞B1	
		前葉			1b期	1b期		大洞B2	
				2期		2期	大洞BC		
		中葉		3期		3期	大洞C1		
	後半			4期		4期	大洞C2		
		後葉		5期		5期	大洞A		
		末葉		6期		6期	大洞A′		

第1節　検出遺構

1　建物跡

報告範囲で検出した建物跡は6棟である。このうちSI101は、整理過程で建物跡として認定したため、3桁の遺構番号を与えた。

第１号建物跡（SI01　遺構図1、写真19、遺物図1-1～11）

【位置・確認】ⅣP－25・26グリッドに位置する。Ⅲ層掘削後、地山面で黒色土の落ち込みとして確認した。段丘の落ち際に構築されており、Bラインの土層からⅢ層を切って作られている事が分かる。

【規模・形状】2.9×2.8mの円形で、確認面から床面までの深さは30㎝程度である。

【堆　積　土】8層に区分した。1・2層が廃絶後の堆積土、3層は炉内堆積土、4・6層は周溝および貼床、5層は炉石掘方覆土、7・8層がPit覆土である。遺物取り上げ層位の上層は1層、下層は2層、貼床は4～6層に対応する。

【壁・床面】住居は段丘縁辺に構築されており、北西では壁の立ち上がりがはっきりしない。床面はほぼ全面が貼床であるが、硬化範囲は確認できなかった。貼床と周溝覆土の区別は困難で、構築時に同時に埋め戻されたと推定できる。柱穴および周溝は床面では検出できず、貼床を掘り下げる過程で判明した。

【柱穴・施設】炉跡を挟むようにPit1・2が検出され、この2基が主柱穴と考えられる。やや広めに柱穴を掘り、床面構築と同時に埋め戻しているらしい。柱痕は確認できない。Pit1の上部で確認された2個の礫は、破損した石皿(11)である。炉を構築する際に据え置かれたようだが機能は不明である。

Pit2の上部で確認された礫は、後述する組石の一部である。周溝は全周しており、溝内の深い落ち込みは壁柱の可能性もあるが、本数が少ない。北西側に機能不明の組石が確認された。床面に礫を方形に配置しており、床上には礫が5cmほどのぞいていた。組石の内寸は、40×30cmである。組石内に焼土、硬化範囲は確認できなかった。後期後葉の住居では出入口に石を据えるものがあり、その流れをくむ出入口に関わる施設の可能性もある。

【 炉 】中央に石囲炉がある。角礫ないし亜角礫を直径40cmの円形に配置しており、床面を10cmほど掘り込んだ地山を火床面としている。地山面にわずかな被熱が認められる。

【出土遺物】遺物は少なく、土器はいずれも構築または埋没過程での混入と考えられる。1・5は晩期1bの深鉢で、2も同時期の可能性がある。3・4は同一個体で、晩期1a期の注口土器である。6は縄文地に沈線で文様が施文されており、晩期1a期の浅鉢であろうか。7は深鉢底部であるが、底部の縁が高台状の痕跡をとどめており、晩期初頃～前葉の可能性が高い。8・9は二次加工剥片、10・11は石皿である。石器は11を除き混入した遺物と判断できる。

【小 結】小型の竪穴住居跡である。貼床出土土器から晩期前葉の住居と考えられる。 (岡本)

第２号建物跡（SI02 遺構図2、写真20、遺物図1-12～27）

【位置・確認】ⅣR－41グリッド他に位置する。Ⅲ層掘削後、地山面で不整な暗褐色土の落ち込みとして確認した。東西方向に延びる盛土遺構の北側に地山層を床面として構築されている。

【規模・形状】南東壁の一部が残存するだけで、規模・形状については不明である。円形の掘方であれば直径は3m程度の可能性がある。確認面から床面までの深さは最大でも5cm程度である。

【堆 積 土】暗褐色土を主体とする単層である。円礫の混入が比較的多い。

【壁・床面】前述したように、壁は南東側の一部のみ残存しており、その他では壁の立ち上がりがはっきりしない。床面は地山と思われ、明確な貼床や硬化範囲は確認できなかった。床面の直上には炭化物層や焼土層が見られ、焼失家屋の可能性も考えられる。床面直上出土の炭化材1点を樹種同定した結果、サクラ属と判明した。なお、詳細は今後の報告書に掲載する。

【柱穴・施設】明確な柱穴や付帯施設は検出されなかった。

【 炉 】地床炉が1基検出された。長短軸44cmの不整形で、地山を火床面としている。被熱層の厚さは3～4cmを測る。

【出土遺物】床面からの出土遺物は少なく、埋没過程で混入したものが多いと思われる。後期後葉～晩期前葉に属する土器13点、剥片石器1点、礫石器2点を図化した。12は床面出土の深鉢で、頚部に多条の沈線が施されていることから晩期1b期に属すると考えられる。13・14は沈線間に刻目が施されており、後期7-4期の深鉢である。15は入組文の一部が確認できるため、晩期1a期の深鉢である。16は器種が不明であるが、晩期1期に属するものであろう。17は晩期2期の壺、18は晩期2～3期の注口土器である。19は晩期1期の台付鉢、20は後期末～晩期初頭の壺である。21～24は粗製深鉢であるが、器壁が薄いので晩期の所産であろう。24は底部が高台状で晩期初頭に属する。25は削器で、刃部に光沢が確認できる。26は磨石で、端部にも使用痕がある。27は石皿で、機能面を下に向けて床面で出土した。

【小 結】小型の竪穴住居跡と考えられる。出土土器から晩期前葉の住居と考えられる。

(笹森)

SI03は欠番とし、同遺構番号で取り上げた遺物は土器集中域：ブロック旧SI03として報告する。

第４号建物跡（SI04　遺構図3、写真21、遺物図2-1～7）

【位置・確認】ⅣR-27グリッドに位置する。Ⅲ層掘削後、地山面で黒色土の落ち込みとして確認した。SI01の北側にあり、同じく段丘の落ち際に構築されている。

【規模・形状】3.7×3.2mの不整な楕円形で、確認面から床面までの深さは20cm程度である。

【堆　積　土】1・2層は廃絶後の堆積土である。掘方とした部分が貼床に当たる。貼床で晩期前葉、堆積土で晩期後葉の土器が出土しており、廃絶後は長期間窪地になっていたことが推定される。

【壁・床面】床は緩やかに中央が窪んでおり、平坦ではない。部分的に貼床が施され、炉の周辺に硬化範囲が確認できる。壁の立ち上がりははっきりしない。

【柱穴・施設】炉の北西側に機能不明の組石が設置されている。扁平な礫を並べて床に設置しており、機能時も床面に突き出ていたと考えられる。

【　炉　】床面中央からやや北西に寄った場所に石囲炉を設置している。設置場所周辺の地山を掘り下げ、埋め戻した後に炉を組んでいる。主に小ぶりな亜角礫を二重にして円形に配置しており、このような石の配置はSN38にもみられる。炉の内径は40cmであるが被熱範囲は狭く、火床面は床面より5cmほど低い。炉の外側にも床面に２箇所の被熱範囲が確認されたが、この機能は不明である。

【出土遺物】いずれの遺物も混入したものである。1・2は貼床、3・4は1層で出土した。1は晩期2～3期の深鉢であろう。2は後期7-4期で、沈線間の刻目と貼瘤が確認できる。3・4は晩期5期の深鉢である。5は剥片の接合資料で、使用痕は確認されない。6・7は小型の石核である。本建物跡に関連する自然科学分析の結果は下記のとおりで、詳細は今後の報告書に掲載する。炭化材の年代はいずれも晩期初頭～前葉の値である。

・検出面(1層)出土炭化材。年代測定：11KAWA(1)-02・2,980±20yrBP、樹種同定：クリ。

・炉1層出土炭化材。年代測定：13KAWA(1)-59・2,900±20yrBP。

【小　結】小型の竪穴住居跡である。貼床出土土器から晩期前葉の住居と考えられる。炭化材の年代はやや古く出ているが、後代の炭化物の混入ではなく、矛盾するものではない。

（岡本）

第５号建物跡（SI05　遺構図4、写真22、遺物図2-8）

【位置・確認・重複】ⅣR－37に位置し、Ⅲ層で確認した。埋没後にPit0019が掘削されており、本遺構が古い。平坦地の端に位置している。

【規模・形状】残存長は南北約2mである。西壁の立ち上がりは不明だが、平面形はほぼ円形を呈すると考えられる。確認面からの深さは20cmである。

【堆　積　土】黒褐色土の単層である。

【壁・床面】地山を床面とし、貼床は施されていない。

【柱穴・施設】検出していない。

【　炉　】地床炉である。40×35cmの不整円形で、地山を掘りくぼめることなく火床面としている。被熱の深さは4cmである。

【出土遺物】遺物は少なく、8のみが図化できた。廃絶後に混入した遺物である。後期8期の有文深鉢である。
【小　結】小型の竪穴住居跡である。出土遺物が少なく時期判断が難しい。覆土出土土器のうち時期が特定できるものは後期末葉であり、本遺構より新しいPit0019でも後期の遺物しか出土していないことから考えると、本遺構も後期末葉に属する蓋然性は高い。

(岡本)

第6号建物跡（SI06　遺構図4、写真22、遺物図2-9）
【位置・確認】ⅣU－31グリッドに位置する。地山面で確認した。
【規模・形状】2.7×2.5mの円形で、確認面から床面までの深さは10cm程度である。
【堆 積 土】1～2層は廃絶後の堆積土、未注記部分が貼床である。
【壁・床面】壁はほとんど残存していない。床は貼床で、多くの部分が硬化している。
【柱穴・施設】検出していない。
【　炉　】中央に石囲炉がある。石を直径60cmの円形に配置しており、底面をやや窪ませた地山を火床面としている。地山面にわずかな被熱が認められる。
【出土遺物】遺物は少なく、9のみが図化できた。覆土に混入したものであり、晩期1b期の深鉢である。本建物跡に関連する自然科学分析の結果は下記のとおりで、詳細は今後の報告書に掲載する。
・炉2(炭化物)層出土炭化材。年代測定：13KAWA(1)-60・3,020±20yrBP
・炉2(炭化物)層出土炭化材。年代測定：13KAWA(1)-61・3,115±20yrBP
【小　結】小型の竪穴住居跡である。出土遺物が少なく時期判断が難しい。覆土出土土器は晩期前葉、年代測定結果は後期後葉の値を示す。晩期中葉以降の遺物を含まないことや近辺の小型住居(SI01・SI04)が晩期前葉だということから考えれば、本遺構も晩期前葉に属する蓋然性は高い。

(岡本)

第101号建物跡（SI101；整理段階での推定復元　遺構図5、写真23,24,36、遺物図3、写真193-1～26）
【関連する遺構番号】報告書作成段階で建物跡と認定し、現地調査で使っていない3桁の建物番号を与えた。単独の遺構として調査した下記の焼土遺構4基、Pit82基をまとめたものである。なお、Pit番号の太字は掲載した出土遺物があることを示す。下線はそのうち写真掲載のみの土器があることを示す。Pit0189などの遺構図の水色線は、平面図作成後に面下げをし、掘り拡げた最終形状である。

SN45・46・47・48

Pit**0187**・0188・**0189**・0190・0191・**0535**・0540・**0542**・0544・**0545**・0546・0550・**0555**・0556・0586・0587・0588・0589・0590・0591・0592・0593・0594・0595・0596・0597・**0598**・0599・0600・0601・0602・0603・0604・0605・0606・0607・0608・0609・0610・0611・0612・0613・0614・0619・**0620**・0621・0622・**0623**・0624・0628・**0631**・0632・**0642**・0643・**0644**・0645・0646・0647・0648・0649・0666・0667・0668・0669・0670・0671・0672・0673・**0674**・0675・0676・0692・0693・0695・0710・0711・0712・0713・0714・0715・0716・1175

【位置・確認・重複】ⅣT-34～36、ⅣU-34～36グリッドに位置する。現地調査では建物跡として確定しておらず、整理過程で建物跡と認定した。重複する遺構のうちSN41と剥片集中3(S-207)はSN45より検出標高が高く、本建物が古い。ブロック09とブロック12はSN45より検出標高が低いので、本建物が新しい。

周辺域を含めた調査の経過は次のとおりである。Ⅲ層掘削中にSN45とした大型石囲炉を検出した。建物範囲にあたるグリッドはセクションベルトを設けずにⅢ層を掘り下げていた範囲であり、SN45周辺部はその時点ですでに掘り下げを終えていたため、炉石の上端よりも標高の高い場所が存在せず、建物跡の覆土や建物跡に伴う壁の有無を確認することはできなかった。SN45検出後は建物跡が存在した可能性が高いと考えて、SN45を中心とする十字のセクションベルトを設定して慎重に周囲を掘り下げた。SN45の南側には焼土を含まない炭化物の範囲が、その外側には焼土が帯状に広がる範囲を確認したが、硬化面がないため明瞭な床面を把握することはできず、土層観察からも貼床層を認定することはできなかった。このため現地ではSN45が建物に伴うという判断はできず、単独の焼土遺構として調査を進めた。弧状に並ぶPitを明瞭に確認できたのは、SN45周辺を検出面から20cmほど掘り下げた後のことである。このPit列も円形に全周するものはなかったため、現地調査の時点では建物番号を付与しなかった。

【規模・形状】弧状に並ぶPitを5列確認した。どの列も全周しない。最も外側に並ぶPit列の内側に相当する部分を建物範囲と考えた。どの弧をとっても中心はSN45付近であるため、これらは円形建物の壁柱跡で、建て替えを示している可能性が高い。最大となる最外Pit列の推定径は9mほど、最小となる列の推定径は5mほどである。Pit同士には明瞭な切り合い関係がなく、床面や建物跡廃絶後の堆積土も把握できていないため、建物跡が拡大していったのか縮小していったのかを判断することはできない。直径5mの建物に対して直径1mの石囲炉というのは大きいように思うので、常識的に判断すればSN45は建物が最大になった最終段階の炉ということになろう。また、列に属さないPitがどの時点の建物に伴うかは不明である。建物構造が竪穴式か平地式かを判断するには基礎的な情報が不足しているものの、次のように整理して竪穴構造であった蓋然性が高いことを指摘しておく。①最外Pit列の外側(Pit0671～0676の東側)に部分的ではあるが段差が存在し、壁の痕跡の可能性がある。②SI101の範囲はその南側と西側で後期後葉から晩期初頭の多量の遺物が出土しているのに比べて、明らかに遺物の出土量が少ない。またSN45周辺ではⅢ層に含まれる礫の量が周囲より少ない。これは晩期初頭までの包含層を削り、さらに床にあたる部分の礫を取り除いて建物を作った可能性を示唆する。③SI101のセクションポイントC'付近でSec7の土層と対比した場合、当該地点ではSec7-Ⅲ-10層に相当する土層のみが確認され、Sec7-Ⅲ-9層より上位に相当する土層を欠いていることが分かる。急斜面ではない場所で堆積した土層が自然に失われることは考えにくく、SI101の構築にあたって当時の地表面を掘り下げる地形改変があった可能性が高い。最外Pit列のすぐ外側までは晩期1期の包含層が安定して存在しており、この場所に建物を構築する場合平地式では削り残した包含層が崩れてくるため、竪穴構造と考えた方が自然である。

【堆積土】SN45の検出標高より下位の堆積状況しか記録できなかった。SN45周辺1層はしまりがなく炭化物や焼土を多く含んでおり、建物廃絶後の堆積層と考えられる。焼土や炭化物を集中的に含むことから、本建物が焼失住居であった可能性を示唆する。炭層・周辺炭層と注記したものもこれに含む。

SN45周辺2層は、その上面を建物床面とする掘方の覆土(貼床層)と考えられる。底面ラインははっきりせず、2層とⅢ層の区分は困難である。

遺物の取り上げ層について述べると、SN45検出前はすべてグリッドⅢ層として取り上げており、SN45の標高より高いかどうかは主に日付で、取り上げ番号が付されているものについてはその標高値で判断した。SN45確認後の取り上げ遺物についてはSN45周辺Ⅲ層としたものが多く、この層名のものはSN45周辺1層～2層の遺物である。SN45周辺1層・2層として取り上げたものはセクションベルト内の遺物である。土層観察で2層の上面が床面にあたるのではないかという判断をした後に掘り下げた、2層下端ラインよりも下位の遺物は床下、またはⅢ層床下という層名を用いている。焼土は床面が被熱したもので、焼土自体が堆積したものではない。焼土出土遺物は被熱時にはすでに床面以下に含まれていたと考えられる。床下・Ⅲ層床下という層は、建物構築以前の堆積土である。

【壁・床面】壁や床面は調査時点で確認できなかった。最外Pit列に属するPit0676から0671の東側にはPit列に沿って10cm程度の地山の段差が検出されている。段差の下端標高は、SN45火床面とほぼ同じか数cm高い。つまり、推定される建物床面よりも高い位置に存在する不自然な地山の段差であり、建物の壁の一部の可能性がある。SN45を確認後、それより低い部分は注意して掘り下げたが、明瞭な硬化面・貼床を検出することはできなかった。セクションベルトの観察から、Pit0187がSN45周辺1層の下から掘り込まれていることが分かる。1層には炭化物を多量に含む部分があり、炭化物は水平に堆積している。このことからPit0187が本建物跡を構成する柱の一つであるならば、SN45周辺2層の上面を床面とする可能性が高い。

【柱穴・施設】建物跡の範囲に弧状に並ぶPit列を5列確認した。最も外側をA列、最も内側をE列と便宜的に呼称し、各列を構成するPitは、それぞれの次のとおりである。記載順は時計回りとした。

A列:Pit0594・0593・0713・0712・0711・0710・0676・0674・0673・0672・0671・0648・0647・0643・0596・0599・0666・0667・0668・0628・0716・0608

B列:Pit0714・0542・0590・0591・0695・0592・0675・0693・0692・0670・0669・0649・0646・0645・0644・0597・0600・0642・0606・0607・0609・0632・0612・0611

C列:Pit0601・0603・0631・0621・0610(0601と0603は並列)

D列:Pit0602・0604・0605・0622・0620・0614・0613(0604と0605は並列)

E列:Pit0715・0540・0589・0588・0555・0556・0550・0624・0623・0598

列に該当しないもの:A列とB列の間／Pit0587・0586、E列より内側／Pit0191・0187・0545・0619・0546・0544・0190・0535・0189・1175・0595、SN45内／Pit0188

Pitの確認標高はSN45より下位(建物跡の床面相当よりも低い位置)で、確認層序はⅢ層である。一部のPit(A・B列に属するPitのうちセクションポイントA'から時計回りにC'までの間に位置するもの)は、地山の標高が高い部分に掘り込まれているため、地山面で確認した。

SN45の範囲内で検出されたPit0188は火床面を切って掘られており、SN45より明らかに新しい。柱であるならば本建物跡には伴わないものである。

A列のPit0643と0596の間、B列のPit0644と0597の間はPitが途切れており、建物入口などを示している可能性はないか、検討が必要である。

Pit0187とPit0535はSN45をまたぐように位置しており、主柱穴の可能性がある。同様に、やや大

きなPitであるPit0555とPit0189もSN46をまたぐように位置している。Pit0187は覆土が黄褐色土と黒褐色土の互層からなり、柱痕も確認される。底面では柱の根固めのようなものも検出された(写真36-1・2)。Pit0535は柱痕周囲に石が円形に並び、柱の周囲に根固めをした様子がわかる(写真36-3)。Pit0535は地山が礫層でなく、意図的に石を埋めていると考えてよい。近隣では砂子瀬遺跡で後期の掘立柱建物跡の柱穴で、柱周囲に石が用いられている(青埋文編2012)。晩期の建物跡の柱穴の柱周囲に石が用いられる例は、秋田県戸平川遺跡SB161で確認されている(秋埋文編2000)。

【 炉 】SN45：推定される建物の中央にある石囲炉である。石は欠けることなく円形に配されており、石で囲われた部分の内径は95cmである。火床面は推定される床面の高さよりわずかに低い場所にあったようである。火床面の中央にPit0188がある。炉の廃絶後に掘られたと考えられ、SI101と無関係の可能性が高いが、SN45が土器埋設炉であった場合、土器の抜き取り痕とも考えられる。Ⅲ層(あるいは2層)が15cmの深さで被熱している。焼土の上部は平坦に検出されたため、火床面が窪んでいた様子はうかがわれない。そうだとすれば、SN45焼土から出土した図3-1、写真193-2はSI101構築時にその場所にあったものであり、炉の使用とともに混入したのではないことになる。

SN46：SN45の東に位置する。被熱範囲は95×80cmの楕円形で、Ⅲ層(あるいは2層)が10cmの深さで被熱している。地床炉と考えられる。火床面標高は、SN45とほぼ同じである。

SN47：SN45の西に位置する。被熱範囲は60×40cmの楕円形で、Ⅲ層が10cmの深さで被熱している。火床面標高は、SN45とほぼ同じである。

SN48：SN45の西に位置する。被熱範囲は50×35cmの楕円形で、Ⅲ層が5cmの深さで被熱している。火床面標高は、SN45とほぼ同じである。

【出土遺物】本遺構に関連する遺物は、図化できたものを図3に、写真のみ掲載の土器を写真193にまとめた。

図化した遺物は次のとおりで、番号は図3における遺物番号である。規模の大きい建物跡であるが、覆土相当部分も含めて範囲内の出土土器は少ない。伴う石器も少なく、床面にあたる部分で石皿が出土した程度である。1はSN45焼土内で出土した深鉢である。頚部に羊歯状文が確認でき、晩期2期に属する。2はPit0187で出土した後期7-4期の深鉢である。3～5は異系統土器と考えられ、後期後葉から晩期前葉にかけての北海道系の可能性がある。3は口縁に2条の沈線が巡らされ、沈線間には竹管による円形刺突が施される。4・5は同一個体で、口縁部から頚部にかけて縄文RLを施文した後に刻目列が多段に施される。6・7は床面より上位で出土した晩期前葉の台付鉢である。8は床面付近で出土した後期末葉の壺である。9～11は後期7-4期の深鉢で、建物構築以前にこの場所に存在したものであろう。12・13は後期8期の深鉢である。14・15は晩期2期の浅鉢で、SN45の検出以前に取り上げたものである。16は凹石で、床面より上位で取り上げた。建物に伴うものとは言いがたい。17は床面に相当する部分(Pit0189直上)で、機能面を上にして出土した石皿である。

写真のみを掲載した遺物は次のとおりで、番号は写真193における遺物番号である。( )内に出土地点を示した。1(SN45焼土直上)は注口土器の体部片で、強い稜が確認できるため晩期1期のものである。2(SN45焼土)は焼土中から出土したもので、先述のように炉の設置段階ですでにその位置にあったものと考えられる。注口土器の体部片で、磨消縄文が施されている。磨消部は彫去されており、晩期3期と考えられる。3・4(SN45周辺炭層)は後期の深鉢である。5(SN45周辺2層)は注口土器の頚部屈

曲部である。頚胴部界の段差から、晩期1期と考えられる。18はⅢ層下部で出土した後期7-4期の深鉢で、出土状況は写真80-2に示した。Pit群の調査時に出土したものである。19～26(SN45周辺Ⅲ層床下)は晩期1期以前の土器片である。6(Pit0555)、7(Pit0620)、8(Pit0542)、9(Pit0644)、10(Pit0598)、11(Pit0535)、12(Pit0642)、13(Pit0545)、14(Pit0631)、15(Pit0623)、16(Pit0189)、17(Pit0674)はそれぞれ本建物を構成するPit出土遺物である。ほとんどが晩期1期以前の遺物であるが、8は口縁端部を欠くものの頚部には沈線と貼付突起が認められ、晩期4期の半精製鉢と考えられる。

SN46～48の焼土内でも土器が出土しているが、小片が少量で、時期決定の指標にならない。SN47で無文の瘤付土器が出土したほかは粗製土器で、後期後葉から晩期のものと思われる。

本建物跡に関連する出土土器のうち、時期比定可能な有文土器を層ごと整理すると下記のとおりである(3-●は図3-●の、193-▲は写真193-▲の略)。

床面より上位の覆土相当層(グリッドⅢ層・1層・S240下・焼土直上)で出土した遺物:
後期7-4期／193-3　後期8期／193-4　晩期1期／193-1　晩期2期／3-6,3-7,3-14
床面付近で出土した遺物(SN45周辺Ⅲ層・炭下焼土):
後期8期／3-8,3-12,3-13　晩期2期／3-15
床面より下位にあたる部分(2層・床下・Ⅲ層床下・焼土)で出土した遺物:
後期7-4／3-9,3-10,3-11　後期8期／193-19,193-23
晩期1期／193-20,193-21,193-24,193-25,193-26　晩期2期／3-1　晩期3期／193-2
Pitの遺物:
後期7-4期／3-2　後期8期／193-12
晩期1期／193-7,193-9,193-10,193-11,193-13,193-14　晩期4期／193-8

本建物跡に関連する炭素年代測定結果は下記(測定番号・出土位置・測定値)のとおりである。このほか、Pit0587出土炭化材の年代測定を委託中である。なお、詳細は今後の報告書に掲載する。

13KAWA(1)-55・SN45焼土直上炭化材・2,900±20yrBP
13KAWA(1)-56・SN45焼土直上炭化材・2,930±20yrBP
13KAWA(1)-57・SN45周辺炭層・2,895±20yrBP
13KAWA(1)-58・SN45周辺炭層・2,915±20yrBP

中央値は、2,930～2,895yrBPの間に分布する。2,900yrBP前後にまとまっていることから、この値は信頼できると考えられる。建物跡の炭素年代は最も新しい値をとって2,895yrBP以降と考える事ができる。

【小　結】床面を挟んだ上下で晩期2期の土器が出土しており、晩期前葉以降に建てられた建物であることは確実である。SN45出土の晩期3期の土器、Pit0542出土の晩期4期の土器は建物の年代を晩期中葉とする根拠になるが、炭化材の年代測定結果は最も新しいもので2,895yrBPであり、整合しない。ここでは遺物を優先して、晩期3期か4期かを定めず建物跡の年代を晩期中葉と結論する。

(岡本)

表5-2　SN45に用いられた礫

石番号	石　材	重量(Kg)
S-1	安山岩	4.7
S-2	花崗閃緑岩	2.6
S-3	砂　岩	2.9
S-4	花崗閃緑岩	5.2
S-5	安山岩	2.6
S-6	花崗閃緑岩	6.4
S-7	花崗閃緑岩	9.4
S-8	緑色凝灰岩	5.1
S-9	緑色凝灰岩	8.2
S-10	安山岩	3.6
S-11	安山岩	4.5
S-12	花崗閃緑岩	6.3
S-13	安山岩	7.1
S-14	花崗閃緑岩	5.6

2 焼土遺構

検出した焼土遺構は42基である。時期が確定できるものは少なく、晩期初頭のSN15、晩期前葉のSN31、晩期中葉のSN13・41の4基である。集中地点は特に認められないが、遺物の出土量が少ない範囲には分布せず、遺物包含層の形成と連動した遺構といえる。包含層出土土器はほとんどが後期後葉～晩期後葉に属しており、包含層の形成は後期後葉以降に本格化し晩期後葉で途絶している。このため、Ⅲ層内で検出された焼土遺構は後期後葉～晩期に属するといえる。また、後期後葉よりも古い遺構や土器がほとんど確認されないことから、地山面で確認された焼土遺構も後期後葉より古いと積極的に考えることは難しく、時期が特定できない焼土遺構の帰属時期は後期後葉～晩期と推定した。焼土遺構のほとんどは遺構形成当時の地表面が被熱しているとみられ、平面で認識した焼土範囲を断ち割ると断面では被熱が確認できず、焼土が縮小しているようにみえるものもあるが、平面の修正はしていない。写真で土坑状に見えるものもあるが、明確な掘り込みを伴うものは少なく、調査時に焼土部分を掘削したため窪みとなっているものが多い。現地性の焼土という認識で調査したものに対して焼土遺構の番号を付したが、最終的にSN45のように建物に伴うことが判明した例もある。焼土遺構の機能については、屋外炉のほかに検出できなかった住居である可能性も考慮する必要がある。なお、土器埋設炉以外の遺物はほとんどの場合、遺構に伴うものではなく、遺構形成以前にその場所に埋まっていたものである。

第１号焼土遺構（SN01　遺構図6、写真25、遺物図4-1・2）

【位置・確認・重複】ⅣＷ－32グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。2003年調査範囲に重なるが、当該調査で掘り下げていなかった部分である。SQ03と重複し、上位に位置する本遺構が新しい。

【規模・形状】土器埋設炉であり、土器の周囲は最大径50㎝ほどの不整形にⅢ層が被熱している。

【土器埋設状況】土器を設置した掘方は不明である。土器は個体の下半部が埋設されていた。土器内の堆積土から口縁破片が出土しているが、胴部上半の破片は出土していない。埋設当初のから胴部上半・口縁を欠失していたかどうかについては不明である。

【堆　積　土】1層は焼土の混入がなく、遺構廃絶後の堆積土と考えられる。2層は土器内焼土で、よく焼け締まっている。3層は遺構に伴う堆積土ではなく、Ⅲ層が被熱した部分で、被熱の深さは7㎝である。

【出土遺物】2が埋設された土器、1が同一個体と思われる口縁破片である。口唇に刻目が連続し、特に文様は認められない。外面はケズリ調整である。底部は平底でナデ調整が施される。晩期2期の深鉢と考えられるが、類似する土器は報告範囲では出土していない。

【小　結】埋設された土器の特徴から、晩期前葉の遺構と考えられる。なお、下部で検出したSQ03とは無関係と判断している。　（岡本）

第２号焼土遺構（SN02　遺構図6、写真25）

【位置・確認・重複】ⅣＶ－32グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。SN01に隣接し、火床面は同一レベルにある。2003年の調査範囲に重なるが、当該調査で掘り下げていなかった部分である。SQ16と重複し、上位に位置する本遺構が新しい。

【規模・形状】地床炉であり、被熱面は21×26cmの不整円形を呈する。
【堆 積 土】Ⅲ層が被熱しており、掘り込みはもたない。被熱の深さは3cmである。被熱の程度は弱い。
【出土遺物】なし。
【小　結】SN01と同一レベルにあることや、SQ16の上部に位置することなどから晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。（岡本）

第３号焼土遺構（SN03　遺構図6、写真25、遺物図4-3）
【位置・確認・重複】ⅣR－43グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。SN04に隣接し、同一レベルにあるが重複はない。
【規模・形状】地床炉であり、被熱面は43×36cmの不整円形である。
【堆 積 土】焼土はⅢ層が被熱したもので、掘り込みはもたない。被熱の深さは5cmで、下部の礫は劣化していないため、被熱の程度は弱い。
【出土遺物】焼土中の土器1点(3)を掲載した。口縁部に2条の細沈線、外面に縄文RLが施文される。口唇の面取りが強いため、後期に遡る可能性がある。遺構に伴うものではなく、当時の地表直下に含まれていたものである。
【小　結】焼土出土土器から、後期後葉～晩期の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。（岡本）

第４号焼土遺構（SN04　遺構図6、写真25）
【位置・確認・重複】ⅣR－43グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。SN03に隣接し、同一レベルにあるが重複はない。また、本遺構の下部でSQ05・SR11が検出されており、本遺構は両者より新しい。
【規模・形状】地床炉であり、被熱面は42×36cmの不整円形である。
【堆 積 土】焼土はⅢ層が被熱したもので、掘り込みはもたない。被熱の深さは8cmで、下部の礫は劣化していないため、被熱の程度は弱い。
【出土遺物】焼土中からは晩期の有文土器が出土しているが、遺構に伴うものではなく図化していない。
【小　結】焼土中から晩期の土器が出土しており、晩期以降の遺構である。本遺跡では弥生時代以降の遺構は検出されていないため、本遺構は晩期に属すものと考えられる。詳細な時期は不明である。
（岡本）

第５号焼土遺構（SN05　遺構図6、写真26）
【位置・確認】ⅣQ－41グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【規模・形状】地床炉であり、被熱面は50×37cmの不整形を呈する。
【堆 積 土】2層に分層できた。1層は暗褐色土で炭化物粒の混入が比較的多い。2層は暗赤褐色土で、よく焼け締まっている。堆積土全体に焼骨片を含んでいる。明確な被熱層は認められない。
【出土遺物】縄文土器片が少量出土しているが、本遺構に伴うものかは不明である。1層出土炭化材の自然科学分析を行った。樹種はマタタビ属、年代測定結果は2,960±20yrBPである。詳細は今後の報告書に掲載する。
【小　結】年代測定結果から、晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。（笹森）

第６号焼土遺構（SN06　遺構図6、写真26）

【位置・確認】ⅣQ－41グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【規模・形状】地床炉であり、被熱面は43×38cmの不整形を呈する。

【堆　積　土】2層に分層できた。1層は赤褐色土､2層は暗褐色土で被熱が弱い。

【出土遺物】縄文土器片が少量出土しているが、本遺構に伴うものかは不明である。また、破砕した焼骨が出土したが、同定は不可能であった。

【小　結】確認層位より、後期後葉～晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

（笹森）

第７号焼土遺構（SN07　遺構図6、写真26）

【位置・確認】ⅣQ－39グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【規模・形状】地床炉であり、被熱面は33×24cmの不整楕円形を呈する。

【堆　積　土】暗褐色土の単層である。

【出土遺物】破砕した焼骨が出土したが、同定は不可能であった。年代測定を現在委託中である。

【小　結】確認層位より、後期後葉～晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

（笹森）

第８号焼土遺構（SN08　遺構図6、写真26）

【位置・確認】ⅣQ－40グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【規模・形状】石囲炉である。セクションラインでは石囲部の外形は60cmを測る。火床面は石囲部の西側に偏って形成され、30×25cmの不整形を呈する。石囲部の東側は石の並びが乱れており、一部破壊されている可能性もある。

【堆　積　土】2層に分層できた。1層は炭化物が混入した黒色土である。火床面の上部はやや窪んでいる。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小　結】確認層位より、後期後葉～晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

（笹森）

第９号焼土遺構（SN09　遺構図6、写真27）

【位置・確認】ⅣR44グリッドに位置し、Ⅲ層(Sec3－Ⅲ－8層相当)掘削中に確認した。

【規模・形状】地床炉であり、被熱面は25×35cmの不整楕円形である。被熱範囲の外にも炭化物が散布している。

【堆　積　土】Ⅲ層が被熱しており、掘り込みはもたない。被熱の深さは4cmである。

【出土遺物】遺構に伴う遺物はない。

【小　結】本遺構が検出されたSec3－Ⅲ－8層では後期末葉の遺物が、遺構上部を覆うSec3－Ⅲ－4層では晩期中葉の遺物が出土している。後期末葉～晩期中葉の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

（岡本）

第10号焼土遺構（SN10　遺構図7、写真27）

【位置・確認】ⅣQ－41グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【規模・形状】地床炉であり、被熱面は90×43cmの不整形を呈する。

【堆 積 土】2層に分層できた。1層は褐色土、2層は暗褐色土で被熱の程度は弱い。

【出土遺物】遺物は出土していない。1層出土炭化材（写真27-4右端）の自然科学分析を行った。樹種はクリ、年代測定結果は3,020±20yrBPである。詳細は今後の報告書に掲載する。

【小　結】年代測定結果から、後期後葉～晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

（笹森）

第11号焼土遺構（SN11　遺構図7、写真27）

【位置・確認】ⅣR－40グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【規模・形状】地床炉であり、被熱面は45×33cmの不整形を呈する。

【堆 積 土】2層に分層できた。1層は暗赤褐色土、2層は暗褐色土で炭化物粒の混入が比較的多い。

【出土遺物】縄文土器片が少量出土しているが、本遺構に伴うものではない。

【小　結】確認層位より、後期後葉～晩期の遺構であるが、伴う遺物がなく詳細な時期は不明である。

（笹森）

第12号焼土遺構（SN12　遺構図7、写真27）

【位置・確認】ⅣR－42グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【規模・形状】西側半分が破壊された石囲炉で、石は5個残存する。長軸15cmほどの亜円礫を配置している。石組みの内側に、30×24cmの楕円形に被熱範囲が確認された。

【堆 積 土】1層は埋没過程で堆積したもの。2層はⅢ層が被熱したもので、掘り込みを伴うわけではない。被熱の深さは4cmである。設置された石の掘方は確認できない。

【出土遺物】遺構に伴う遺物はない。

【小　結】確認層位より、後期後葉から晩期の遺構であるが、伴う遺物がなく詳細な時期は不明である。

（岡本）

第13号焼土遺構（SN13　遺構図7、写真28）

【位置・確認・重複】ⅣS－44グリッドに位置し、Ⅲ層（Sec3-Ⅲ-4層相当）掘削中に確認した。本遺構はPit0034より新しい。

【規模・形状】地床炉であり、被熱面は33×27cmの不整楕円形である。

【堆 積 土】Ⅲ層が被熱しており、掘り込みはもたない。被熱の深さは4cmである。

【出土遺物】焼土中で晩期粗製土器が出土したが、遺構に伴うものではない。

【小　結】Sec3-Ⅲ-4層は晩期中葉の堆積層であるため、本遺構も晩期中葉に属すると考えられる。

（岡本）

第14号焼土遺構（SN14　遺構図7、写真28）

【位置・確認】ⅣR－37グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【規模・形状】地床炉であり、被熱面は50×25cmの不整形である。

【堆 積 土】Ⅲ層が被熱しており、掘り込みはもたない。被熱の深さは3cmである。

【出土遺物】焼土中で後期末葉の有文土器が出土しているが、遺構形成以前の遺物と考えられ図化していない。

【小　結】確認層位より、後期末葉～晩期の遺構であるが、伴う遺物がなく詳細な時期は不明である。

（岡本）

第15号焼土遺構（SN15　遺構図7、写真28）

【位置・確認】ⅣR－36グリッドに位置し、Ⅲ層(Sec1－Ⅲ－2層相当)掘削中に確認した。

【規模・形状】地床炉であり、被熱面は45×40cmの不整円形である。

【堆 積 土】Ⅲ層が被熱していると思われ、掘り込みはもたない。被熱の深さは5cmである。

【出土遺物】礫は包含層に含まれるもので、遺構とは関連しない。

【小　結】Sec1－Ⅲ－2層は縄文時代晩期1期の堆積層であるため、本遺構も晩期初頭に属するものと考えられる。

（岡本）

第16号焼土遺構（SN16　遺構図7、写真28）

【位置・確認】ⅣS－36・37グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。調査時のSN17・20を本遺構に統合した。

【規模 ・形状】焼土は北側に80×60cmのやや濃い焼土が、周囲に少量の焼土を含む範囲があり全体として1．6×1．1mの範囲に不整形な広がりをみせる。

【堆 積 土】焼土は黒褐色土中にブロック状に混入しているため、現地性のものではなく移動された焼土の可能性もある。

【出土遺物】焼土中で晩期土器が出ているが、遺構に伴うものではない。

【小　結】焼土中の出土土器から、晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

（岡本）

SN17：欠番(SN16に統合)

第18号焼土遺構（SN18　遺構図7、写真28）

【位置・確認】ⅣR-38グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【規模・形状】被熱範囲は24×28cmの不整円形で、被熱の深さは３cmである。

【堆 積 土】Ⅲ層が被熱しているようだが、被熱は弱く、黒褐色土が主体である。

【出土遺物】出土していない。

【小　結】確認層位より、後期後葉～晩期の遺構であるが、詳細な時期を決定できない。　（岡本）

第19号焼土遺構（SN19　遺構図8、写真28）
【位置・確認】ⅣS－37グリッドに位置し、地山面で確認した。
【規模・形状】地床炉であり、被熱面は60×40の楕円形である。
【壁・底面】地山にわずかの窪みがあり、窪み内部の地山面が4㎝の深さまで被熱している。
【堆 積 土】褐色土の単層で、焼土を含む堆積土である。
【出土遺物】出土していない。
【小　結】包含層の形成時期から、後期後葉～晩期の遺構と推定しているが、伴う遺物がなく詳細な時期は不明である。

（岡本）

SN20：欠番(SN16に統合)

第21号焼土遺構（SN21　遺構図8、写真29）
【位置・確認】ⅣN－41グリッドに位置し、Ⅲ層下部掘削中に確認した。
【規模・形状】地山面を浅く掘り込んでおり、その規模は70×55㎝の楕円形である。
【堆 積 土】焼土が上部に散っており、地山の一部が被熱している。1層に焼土が含まれる。
【出土遺物】出土していない。
【小　結】確認層位より、後期後葉～晩期の遺構であるが、伴う遺物がなく詳細な時期は不明である。

（岡本）

第22号焼土遺構（SN22　遺構図8、写真29）
【位置・確認・重複】ⅣN－42グリッドに位置し、地山面で確認した。
【規模・形状】掘り込みはもたず、被熱範囲は被熱範囲は20×15cmの楕円形である。
【堆 積 土】地山が深さ5cmまで被熱している。
【出土遺物】出土していない。
【小　結】包含層の形成時期から、後期後葉～晩期の遺構と推定しているが、伴う遺物がなく詳細な時期は不明である。

（岡本）

第23号焼土遺構（SN23　遺構図8、写真29）
【位置・確認・重複】ⅣP－42グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【規模・形状】掘り込みはもたず､83×35cmの不整楕円形に焼土が広がる。
【堆 積 土】焼土と黒褐色土が混合しており、Ⅲ層中に捨てられた焼土の可能性ある。
【出土遺物】出土していない。
【小　結】確認層位より、後期後葉～晩期の遺構であるが、伴う遺物がなく詳細な時期は不明である。

（岡本）

第24号焼土遺構（SN24　遺構図8、写真29）

【位置・確認】ⅣN－44グリッドに位置し、Ⅲ層下部掘削中に確認した。

【規模・形状】掘り込みはもたず、56×44cmの不整形に焼土が広がる。

【堆　積　土】Ⅲ層が被熱している。被熱の度合いは1層がより強い。

【出土遺物】出土していない。

【小　結】確認層位より、後期後葉～晩期の遺構であるが、伴う遺物がなく詳細な時期は不明である。

（岡本）

第25号焼土遺構（SN25　遺構図8、写真29、遺物図4-4～6）

【位置・確認】ⅣR・ⅣS－46グリッドに位置し、Ⅲ層下部掘削中に確認した。

【規模・形状】土器が埋設され、周辺に礫が配置される。土器埋設石囲炉の形態を示す。石囲部は長さ20cm前後の長円礫をほぼ円形に配置し、北西部に開口部を持つ。

【土器埋設状況】土器より大きめの掘方を有し、土器設置後に周辺をⅣ層を使い充填している。土器は口縁部のない1個体(6)が埋設されている。礫を確認した状態で遺構を半截しているが、堆積土中から口縁部片は出土してない。口縁部を欠失した状態で埋設されたいた可能性が高い。

【堆　積　土】土器内部は3層に分層され、最下層に炭化物を多量に含んでいる。2層はにぶい黄褐色土で、人為堆積の様相を呈している。土器外面に接する層の被熱度合いが強く、厚さは3～7cmを測る。

【出土遺物】土器内堆積土2層中から粗製深鉢(4・5)が出土している。ともに器壁が薄く、4は口唇の面取りが弱く、5の底部は顕著な高台状ではないことから晩期前葉以降の土器である可能性が高い。

【小　結】構築面より下層では遺物図103-8を含む後期後葉の土器が出土している。晩期に属する有文土器は伴わないが、出土した粗製土器は晩期に属すると考えられるため、本遺構は晩期の遺構と考えてよい。ただし、詳細な時期は不明である。

（笹森）

第26号焼土遺構（SN26　遺構図8、写真30）

【位置・確認】ⅣR－46グリッドに位置し、Ⅲ層下部掘削中に確認した。

【規模・形状】掘り込みは持たず、45×25cmの不整形に焼土が広がる。

【堆　積　土】Ⅲ層が被熱し、厚さは3cmを測る。

【出土遺物】出土していない。

【小　結】確認層位より、後期後葉～晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

（笹森）

第27号焼土遺構（SN27　遺構図8、写真30）

【位置・確認】ⅣS－47グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【規模・形状】地床炉であり、被熱面は43×32cmの楕円形である。

【堆　積　土】掘り込みはもたず、Ⅲ層が4cmの深さで被熱している。

【出土遺物】焼土の下位からP-1612・1613（いずれも非掲載）が出土しているが、これらはⅢ層に含ま

れていたもので遺構に伴うものではない。
【小　結】確認層位より後期後葉～晩期の遺構であるが、伴う遺物がなく詳細な時期は不明である。P-1612・1613よりも新しい時期の遺構だが、当該土器は粗製土器であるため時期を絞り込むことは困難である。火床面はSQ11脇のP-1614(遺物図11-2)出土レベルよりも上に位置する。

(岡本)

第28号焼土遺構（SN28　遺構図8、写真30、遺物図4-7～9）
【位置・確認】ⅣS-48グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。検出時は焼土範囲が2箇所に分かれていたが、半截したところ東側の焼土は確認面にわずかにみられるのみであったため、西側のみをSN28として扱った。
【規模・形状】焼土は30×16㎝の範囲に不整形に広がる。
【堆 積 土】掘り込みは持たず、Ⅲ層が被熱している。
【出土遺物】焼土周辺で出土した3点(7～9)を図化したが、これらを含む層が被熱したということであって、遺構に伴うものとはいえない。
【小　結】出土土器は後期後葉～晩期初頭までのものであり、遺構の時期もおおむねそれと一致するだろうが、詳細な時期を絞り込むことはできない。

(岡本)

第29号焼土遺構（SN29　遺構図9、写真30）
【位置・確認】ⅣQ-44・45グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【規模・形状】焼土は73×36㎝の範囲に楕円形に広がる。
【堆 積 土】掘り込みは持たず、Ⅲ層が被熱している。
【出土遺物】出土していない。
【小　結】確認層位より、後期後葉～晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

(笹森)

第30号焼土遺構（SN30　遺構図9、写真31）
【位置・確認】ⅣR-46グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【規模・形状】焼土は直径40㎝の円形に広がる。
【堆 積 土】掘り込みは持たず、Ⅲ層が被熱している。2層に区分でき、2層の被熱は弱い。
【出土遺物】なし。焼土に接して出土した土器は、本遺構の形成前にその場にあったものである。
【小　結】確認層位より、後期後葉～晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

(笹森)

第31号焼土遺構（SN31　遺構図9、写真31、遺物図4－10・11）

【位置・確認】Ⅳ S－48グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【規模・形状】伏せ置かれたか逆位で埋設された、底部を欠く小型有文深鉢の内部で火をたいた可能性がある。焼土の広がりは土器の内部に収まっている。土器埋設炉の一形態と考えられる。

【堆 積 土】土器に対する掘方は明確ではないが、１・２層は本来同じもので、この部分が土器設置に伴って動かされた土と考えられる。その上面が火床面となったことでより強く熱を受けた部分が変色し、1層と捉えられたものである。

【出土遺物】10が設置された土器本体である。11は同一の取り上げ番号に含まれていた破片で、いずれも晩期1b期の土器である。

【小　結】焼土に伴って出土した土器により、晩期前葉の遺構と考えられる。

（岡本）

第32号焼土遺構（SN32　遺構図9、写真31、遺物図4－12・13）

【位置・確認】Ⅳ S－48グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【規模 ・形状】土器内底面の上部に22×10㎝の不整楕円形の焼土範囲があり、土器下部にも被熱が確認された。横位あるいは正位に土器が埋設された、土器埋設炉の可能性もある。

【堆 積 土】土器上部の焼土は断面図の作成以前に掘りあげた。堆積は薄いものであった。土器に対する掘方は明確ではなく、土器下部の焼土はⅢ層が被熱したものと捉えている。土器上部の焼土はやや強く被熱しており、火床面は土器上部（正位埋設の場合は土器内部）と考えられる。

【出土遺物】12は焼土北側で正位で出土した土器底部である。その南側にあった胴部とは同一個体の可能性もあったが接合しない。後期後葉～晩期の粗製土器と思われ、底部が高台状であるため晩期初頭までのものである可能性が高い。13は12とは別個体で、後期7－4期の土器である。13が埋設されたものかどうかは不明である。

【小　結】焼土に伴って出土した土器より、後期後葉～晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

（笹森）

第33号焼土遺構（SN33　遺構図9、写真31、遺物図4－14～17）

【位置・確認】Ⅳ Q－44・45グリッドに位置し、Ⅲ層下部掘削中に確認した。SN40を統合し、本遺構として報告する。

【規模・形状】掘り込みは持たない。南側は2003年調査のトレンチ部分にあたり、全容を窺うことはできない。残存部分で、155×145㎝の不整形に焼土が広がる。

【堆 積 土】Ⅲ層が被熱している。土層断面の観察から南側に向かい傾斜している様子が窺え、窪地に形成された焼土遺構の可能性もある。Ⅲ層の細分は基本層序Sec3の区分とは一致しない。

【出土遺物】焼土範囲からは多くの土器片が出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。時期が分かるものを選んで掲載した。14は焼土範囲外から出土した破片と接合して完形に復元された壺で、後期末葉～晩期初頭のものである。15は後期7～8期の深鉢で、口縁部の突起と沈線間の刻目が確認できる。16は口縁に小突起が付された粗製深鉢、17は台付深鉢の底部と考えられる。16・17も形

態から晩期初頭より古いものと考えられる。14の土器内部から出土した炭化クルミの年代測定結果は、3,070±20yrBPである。また、焼土からは焼骨が出土した。1層出土の1点と同遺構の存在するSec Ⅲ内出土の1点について骨組織形態学的検討を依頼した。結果はいずれもイノシシ・ニホンジカ・クマなどの動物に相当する可能性が高いとの報告である。自然科学分析の詳細は今後の報告書に掲載する。
【小　結】焼土の確認面はSec3－Ⅲ－6～8層に相当する。8層では後期8期（遺物図33－3）、6層では晩期3期までの土器が出土しており、本遺構は後期末葉～晩期前半に形成されたものといえるが、詳細な時期は不明である。

（笹森）

第34号焼土遺構（SN34　遺構図9、写真32）
【位置・確認・重複】ⅣR－45グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。本遺構はSQ09より古い。
【規模・形状】掘り込みは持たない。64×38cmの不整形に焼土が広がる。
【堆 積 土】Ⅲ層が被熱し、厚さは3cmを測る。
【出土遺物】焼土下や検出面から土器片が出土しているが、本遺構に伴うものかどうか不明である。
【小　結】確認層位より、後期後葉～晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

（笹森）

第35号焼土遺構（SN35　遺構図9、写真32、遺物図4－18～22）
【位置・確認】ⅣR－45グリッドに位置し、Ⅲ層下部掘削中に確認した。
【規模・形状】掘り込みは持たない。2.1×1.3mの不整形に焼土が広がる。
【堆 積 土】Ⅲ層が被熱し、厚さは最大8cmを測る。
【出土遺物】焼土範囲の中で、焼土よりも上面から土器片が出土している。その意味では遺構に伴っている遺物とは言い難い。18は後期8期の注口土器、19は後期後葉～晩期の土器で、底部が高台状であることから晩期初頭以前のものである。20～22は同一個体の深鉢で、21は焼土範囲外で出土した。20・22は器表の二次被熱が顕著である。いずれの破片にも内面にベンガラの付着が確認でき、赤色顔料の精製に関わる土器である。ただし、本遺構とは直接関連しないかも知れない。
【小　結】確認層位や出土遺物より、後期後葉～晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

（笹森）

SN36：欠番（SQ41に振り替え）

第37号焼土遺構（SN37　遺構図10、写真32）
【位置・確認】ⅣS－44グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【規模・形状】掘り込みは持たない。焼土の広がりは西側を記録しておらず、現存長の最大は32cmであるが形状等は不明である。
【堆 積 土】Ⅲ層が被熱し、厚さは10cmを測る。
【出土遺物】出土していない。

【小　結】確認層位より、後期後葉～晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

(笹森)

SN38・SN39およびその上部につくられた配石遺構SQ12・SQ41の関係

SN38・SN39は同一レベルで隣接しており、両者が最も接近している箇所では20cmほどの間隔である。SN38が埋まった(または埋められた)後に、その上部にSQ41が構築された。同様にSN39が埋まった(または埋められた)後に、その上部にSQ12が構築された。SN38・SN39は近接するが重複しないため、お互いを認識できる状態で作られたものであり、同時期に併存したと考えられる。SQ41とSQ12についても同一レベルに構築されており、この両者も同時併存の可能性が高い。また、SQ41・SQ12はそれぞれSN38・SN39の直上に構築されたもので、下部の焼土遺構を認識して作られたと考えてよい。ただし、上部と下部の差は各々15cmあり、これをいつの時点でかさ上げしたのかは不明である。

SN39の脇、北東部分で遺物図6-2が出土しており、この土器を含む部分を基盤としてSN38・SN39が作られている。また、SN39の上部(SQ12の下部)では遺物図5-5が出土している。6-2は後期後葉の土器、5-5は晩期中葉の可能性があるため、SN38・SN39は後期後葉～晩期中葉までの遺構、SQ12・SQ41は晩期中葉またはそれ以降の遺構である。

(岡本)

第38号焼土遺構(SN38　遺構図10、写真32,33、遺物図5-1・2)

【位置・確認・重複】Ⅳ T-48グリッドに位置し、SQ41の下部(Ⅲ層)で確認した。層位はⅢ層のなかでも下位にあたる。上部のSQ41直下(15cm下)に構築されており、本遺構が古い。また、隣接してSN39が存在する。

【規模・形状】石囲炉であり、石は円形に配置され全周している。部分的に石が内外二重に並べられている。このような石の配置はSI04の炉にもみられる。並んだ石の内径は50cmで、この部分に48×45cmの被熱範囲が円形に広がる。

【壁・底面】Ⅲ層中を火床面としており、掘り込みはもたない。火床面は平坦である。

【堆 積 土】配置された礫の掘方は確認できなかった。遺構に伴って堆積した土があるわけではなく、1層は廃絶後の堆積土、2層は火を焚いたためにⅢ層が被熱した部分で、被熱の深さは13cmである。火床面中央付近に被熱していない軟質の黒色土部分があり、撹乱扱いで掘り抜いた。この部分は直径・深さとも12cmで、土器が埋設された場所である可能性もある。

【出土遺物】2は炉石に転用された砥石である。1は炉の脇から出土した敲石だが、炉とは直接関連しない。

【小　結】後期後葉～晩期中葉に作られたものであるが、詳細な時期を決める根拠がない。

(岡本)

第39号焼土遺構（SN39　遺構図10、写真33,52、遺物図5-6,6-1・2）

【位置・確認・重複】ⅣT-48グリッドに位置し、SQ12の下部(Ⅲ層)で確認した。層位はⅢ層のなかでも下位にあたる。上部で検出したのSQ12直下(15㎝下)に構築されており、本遺構が古い。また、隣接してSN38が存在する。

【規模・形状】石囲炉であり、その内側に焼土が、さらに焼土の下部には敷石がある。焼土を囲む石は半円状に配置され、全周しない。このうち1点は非常に大きな石皿で、最高点は焼土が確認された面から30㎝上方に達し、上部のSQ12に用いられた礫の最高点と同じ高さである。敷石は3点の平らな石からなり、上面をほぼ水平に並べられていた。半円状に並べられた炉石の内径は62㎝で、その部分に40×15㎝の被熱範囲が不整形に広がる。石組みの規模に比して被熱範囲は小さく、下部の敷石に劣化が見られないため被熱の程度も弱い。炉石の配置が構築当初から全周していなかったかどうかについては、抜き取り痕をきちんと押さえられなかったため不明である。ただし、敷石との関係から、円形に石を設置することはできなかったとみられる。

【壁・底面】Ⅲ層中に構築されており、炉に伴う掘り込みはもたない。

【堆　積　土】設置されたどの石も掘方は不明である。1層とした焼土は現地性と判断して焼土遺構にしているが、焼土範囲が炉の規模に対して小さいため、確認された焼土は石組みに伴う堆積土の可能性も捨てきれない。つまり、本遺構は炉ではなく配石遺構で、焼土は配石遺構覆土に混入した可能性もあるということである。

【出土遺物】炉石に転用された石皿が3点あり、5-6・6-1を図化した。また、2は構外側の構築面で出土した後期7-4期の深鉢である。

【小　結】後期後葉～晩期中葉に作られたものであるが、詳細な時期を決める根拠がない。

(岡本)

SN40：欠番(SN33に統合)

第41号焼土遺構（SN41　遺構図10、写真33）

【位置・確認・重複】ⅣT-35グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。Ⅲ層でも上位にある遺構である。本遺構は平面位置ではSI101の範囲内であるが、SN45より検出標高が高いため、SI101の廃絶(埋没)後に形成された遺構である。

【規模・形状】地床炉である。掘り込みはもたず、55×40㎝の楕円形に焼土が広がる。

【堆　積　土】Ⅲ層が8㎝の深さで被熱している。

【出土遺物】遺構に伴う遺物はない。

【小　結】伴う遺物がなく詳細な時期は不明であるが、欠番となったSN42焼土直下では晩期前葉の土器(遺物図6-3)が出土している。また、本遺構が精査された5月下旬ごろに、ⅣT-35グリッドで出土していた遺物は遺物図78-2など晩期中葉の土器であり、本遺構より古いSI101も晩期中葉の遺構と判断されている。これらに加えてⅣT-35グリッドでは晩期後葉の遺物が出土していないため、本遺構も晩期中葉の遺構である可能性が高い。

(岡本)

SN42：最終的に現地性の焼土ではないと判断し、欠番。ただし、隣接する位置で確認されたSN41の時期判断のためにSN42焼土直下で出土した土器片を遺物図6-3として掲載。

第43号焼土遺構（SN43　遺構図10、写真34、遺物図6-4）

【位置・確認・重複】Ⅳ V-34グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。ブロック08と重複するが、上位に位置する本遺構が新しい。

【規模・形状】土器埋設石囲炉である。石組みは楕円形でほぼ全周する。用いられた石は自然石である。石組みの内径は30×40㎝で、その内側は土器を設置するための掘方となっており、中央に土器が設置される。焼土は土器内外に散在する。

【土器埋設状況】土器を設置した深さ20㎝ほどの掘方が確認された。掘方を半分ほど埋めた後に、底部を欠く土器が正立状態で埋設されていた。炉石は掘方および土器の埋設と同時に設置されたようである。

【堆　積　土】1～3層に焼土が含まれている。土器を埋設した後にその内側で火を焚いたと推定される。土器外の焼土は掘方覆土が被熱したものであろう。

【出土遺物】4が埋設された土器であるが、劣化が激しく接合が進まなかったため口縁部のみを図化した。口唇が面取りされない晩期の粗製深鉢である。口唇の特徴からは前葉以降の可能性が高い。

【小　結】埋設された土器の特徴から、晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

（岡本）

第44号焼土遺構（SN44　遺構図10、写真34、遺物図6-5）

【位置・確認】Ⅳ S-36グリッドに位置し、地山直上で確認した。

【規模・形状】石囲炉である。石組みは円形でほぼ全周する。石組みの内径は45㎝であるが、被熱範囲は石組みの外側にも広がっている。

【壁・底面】地山を少し掘りくぼめて火床面としている。

【堆　積　土】1～3層に焼土が含まれており、これらは遺構の使用に伴って堆積したと判断した。

【出土遺物】堆積土中で出土した5は、晩期前葉の壺の可能性がある。また、1層でやや大き目の炭化材が出土しており、放射性炭素年代測定を実施した（13KAWA(1)-63・2,890±20yrBP）。年代測定の詳細は今後の報告書に掲載する。

【小　結】堆積土中で晩期前葉の土器が出土しており、晩期前葉以降の遺構である。放射性炭素年代の測定値もそれと矛盾しない。

（岡本）

SN45～48：**建物跡(SI101)の項で記載。**

第49号焼土遺構（SN49　遺構図10、写真34、遺物図6-6）

【位置・確認】Ⅳ V-33グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。層位はⅢ層の最も下位である。SQ18と近接するが直接の重複関係はない。本遺構に埋設された土器の上端は、SQ18に用いられた石

の上面より明らかに低く、一部の石の設置面(石の底面)とほぼ同じである。
【規模・形状】土器埋設炉である。焼土は土器内外で確認された。土器外の焼土はⅢ層が被熱したものである。土器の周囲に細かい炭化物が散っている範囲がある。
【土器埋設状況】土器の周囲に掘方が確認され、土器の下端は掘方底面とほぼ一致する。掘方内には底部を欠く土器が正立状態で埋設されていた。
【堆 積 土】Ⅲ層の上面で火を焚いたと考えられる。
【出土遺物】6が炉体土器で、口唇が面取りされない晩期の粗製深鉢である。口唇の特徴からは前葉以降の可能性が高い。炉内で出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施した(13KAWA(1)-62・2,870±20yrBP)。年代測定の詳細は今後の報告書に掲載する。
【小 結】埋設された土器の特徴および炭素年代の測定結果から、晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

(岡本)

第50号焼土遺構(SN50 遺構図10)遺構としての掲載写真なし。Sec7土層断面写真に含まれる。
【位置・確認】ⅣS-35グリッドに位置し、Sec7南壁のⅢ-9層上面で確認した。
【規模・形状】地床炉で、掘り込みはもたない。南半部は焼土遺構と気づかずに掘削した部分である。
【堆 積 土】Ⅲ層が4cmの深さで被熱している。
【出土遺物】遺構に伴う遺物はない。
【小 結】Sec7-Ⅲ-9層では後期後葉～晩期初頭の土器が出土しており、該期の遺構と考えられる。

(岡本)

第53号焼土遺構(SN53 遺構図10、写真34)
【位置・確認・重複】ⅣS-37グリッドに位置し、周囲を地山面まで掘り下げた時に確認した。Pit0537・0538と重複する。現地での記録に不備があり新旧関係の確定に躊躇を覚えるが、本遺構が古いと判断した。
【規模・形状】地床炉で、火床面はややくぼんでいた可能性がある。被熱範囲は40×30cmの不整形である。
【堆 積 土】地山が2cmの深さで被熱している。
【出土遺物】遺構に伴う遺物はない。
【小 結】包含層の形成時期から、後期後葉～晩期の遺構と推定しているが、伴う遺物がなく詳細な時期は不明である。

(岡本)

3　単独で検出された柱穴(Pit　遺物図7、写真193-27～35)

建物として組むことのできない、単独で検出した柱穴は225基である。確認した順に番号を付した。空白の番号となっている柱穴は、今後刊行される報告書に掲載されるものである。個別の図は掲載しておらず、配置状況や規模は構配置図を参照いただきたい。Pit番号と所在グリッド、確認面からの深さ等は文末の柱穴一覧表に示した。柱穴はⅢ層中での検出が容易でなく地山面で確認したものが多い。柱穴の存在に気づかずに検出できなかったものも多いと思われる。規模は大小様々だが、柱痕が確認されたものは少なく、ほとんどが黒褐色～褐色土の単層である。柱穴内で出土した遺物のうち時期が判明する遺物は図化、あるいは写真のみを掲載したが、ほとんどはⅢ層中に存在したものが埋め戻しの段階で混入したものと思われ、構築時期を直接示すものではない。分布状況をみると遺物が多く出土した範囲に存在する柱穴が多く、遺物包含層の形成と連動していると考えられる。時期不明の柱穴も遺物包含層の形成時期である後期後葉～晩期と考えてよいだろう。遺物包含層形成の最終段階である晩期5期の土器が出土したPit0128・0436・0542は、晩期後葉の可能性が高い。Pit0126は後期後葉～晩期の土器が出土しておらず、この1基は中期後葉に構築された可能性がある。

ⅣR-38周辺では柱穴の集中がみられる。特に二列の弧状に並ぶ柱穴、すなわち外側のPit0036～0047、内側のPit0053・0052・0048・0051・0050・0111・0114・0115・0116・0108は何らかの遺構の一部を構成する可能性がある。内外の弧はそれぞれ7mほどの長さで確認されており、建物跡と考えた場合は直径が10m以上を想定する必要がある。硬化面等も確認されておらず、地山の高低差もあるため現段階では積極的に建物跡の一部とすることはできない。写真35-5は外側の弧に属すPit0041～0043である。Pit0041・0043では柱の周囲を固めたような石の配置が確認される。

弧状に並ぶ柱穴の北西では、規模の大きな柱穴が確認された。Pit0018・0019・0536・0102は掘方の直径が1mを超え、Pit0018・0019は深さも1m以上である。Pit0536は計測値では1mを下回るが、Sec5のセクションベルト上部からⅢ-11層を切って掘り込まれており(写真35-4)、本来の深さは1.2mを超える。Pit0018・0019・0536・0547は方形に配置されるようにみえ、各柱穴の中心間の距離は4.5～5mである。これらの柱穴は底面標高が203.1m程度である。Pit0018・0536では柱痕が確認され、直径は確認面で60cm、底部で40cmほどである。Pit0019・0547では柱痕は確認されていない。出土遺物はPit0019・0536で図化可能な破片が出土しており、後期後葉～晩期初頭の土器が出土している。Pit0018では晩期前葉の壷破片が出土しているが図化していない。Pit0547では遺物が出土していない。また、Pit0019・0018・0102が列状に配置されるようにもみえるが、Pit0102は底面標高が203.3m程度でやや浅い。いずれにしても現地での検討が不十分なため、これらの柱穴を積極的に建物跡として提示することはできない。

Pit0035では底面から白色粘土の塊が出土した(写真36-4)。Pit0072では堆積土中から焼骨破片が出土している。同定された焼骨と同じく獣骨と思われるが、分析はしていない。Pit0126では最花式および中期後葉の土器のみが出土した。複数個体の破片であり土器埋設遺構ではないように思われる。周囲に同時期の遺構はないが、Pit0126が位置するⅣ0-44グリッドではⅢ層からも中期後葉の土器が出土している(遺物図118-2・7)。

Pit0208などの遺構図の水色線は、平面図作成後に掘り拡げた最終形状である。　(岡本)

4 土 坑

検出された土坑は5基である。調査区内に散在し、いずれも機能は不明である。

第1号土坑（SK01 遺構図11、写真38、遺物図8-1・2）

【位置・確認】ⅣS-42グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【規模・形状】本来は楕円形と考えられるが、先行して掘り下げた東側では確認できなかった。短軸1.35m、長軸の残存長は1.1m、確認面からの深さは35cmである。

【壁・底面】Ⅲ層を掘り込んでおり、底面もⅢ層中である。底面は平坦部がなく壁はゆるやかに立ち上がる。

【堆 積 土】2層に分けられた。覆土中の礫は周囲の遺構外と比べて少ない。2層は人為堆積の可能性があり、1層は窪んだ場所に自然堆積したものであろう。

【出土遺物】1・2が出土しており、両者は同一個体である。頚胴部界の屈曲と頚部沈線から、晩期4期と考えられる。

【小 結】出土土器から、晩期中葉の土坑と考えられる。

（岡本）

第2号土坑（SK02 遺構図11、写真38）

【位置・確認】Ⅳ0-37グリッドに位置し、Ⅲ層下部で確認した。

【規模・形状】1.3×1.4mの不整円形で、確認面からの深さは40cmである。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。東側の方が立ち上がりの角度が急である。

【堆 積 土】黒褐色土の単層で覆土中の礫は少ない。人為堆積の可能性がある。

【出土遺物】混入と考えられる土器細片が出土しているが、時期は特定できず、図化できた遺物はない。

【小 結】確認面や出土遺物より、縄文時代の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

（笹森）

第3号土坑（SK03 遺構図11、写真38）

【位置・確認】ⅣN-38グリッドに位置し、Ⅲ層下部で確認した。

【規模・形状】1.2×1.5mの不正楕円形で、確認面からの深さは10cmである。

【壁・底面】確認できる掘り込みは浅く、壁の立ち上がりははっきりしない。底面は傾斜している。

【堆 積 土】暗褐色土の単層である。堆積要因は判断できない。

【出土遺物】図化できた遺物はない。

【小 結】後期後葉～晩期の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

（岡本）

第４号土坑（SK04　遺構図11、写真38、遺物図8-3～6）

【位置・確認】Ⅳ0-40グリッドに位置する。地山面で確認した。

【規模・形状】90×55cmの不正楕円形で、確認面からの深さは13cmである。

【壁・底面】底面は平坦でなく、壁はゆるやかに立ち上がる。

【堆　積　土】褐色土の単層で、堆積要因は判断できない。

【出土遺物】壁際の底面で5が正位で出土した。底部を欠く晩期3期の鉢で、本土坑に伴うものと推定される。3・4・6は覆土中で出土した、図化可能な破片である。

【小　結】底面で出土した土器から、晩期中葉の土坑と考えられる。

（岡本）

第５号土坑（SK05　遺構図11、写真38、遺物図8-7）

【位置・確認】ⅣR-28グリッドに位置し、地山面で確認した。

【規模・形状】開口部は1.7×1.5mの楕円形で、底面はそれより一回り大きい。確認面からの深さは70cmである。

【壁・底面】底面は平坦で、壁はオーバーハングしている部分が多い。

【堆　積　土】9層に分けられた。暗褐色土を主体とし、褐色土が混入する。壁の崩落を繰り返し、自然埋没したと考えられる。

【出土遺物】覆土中で7が出土した。同一個体の破片は多いものの、胴部下半・底部はない。屈曲をもつ深鉢で、口縁部・頸部に沈線が施文されている。本遺跡の主要な時期である後期後葉～晩期の一般的な深鉢ではなく時期不明であったため、土器外面の付着炭化物を採取し炭素年代測定を実施した（13KAWA(1)-46・3,020±20yrBP）。測定結果の詳細は、今後の報告書に掲載する。

【小　結】小型のフラスコ状土坑の可能性がある。出土深鉢の炭素年代測定結果から、後期後葉～晩期初頭の土坑と推定される。

（岡本）

5 石棺状配石

SQ14・SQ18両遺構は土坑壁に沿うように石を巡らせ、また巡らせた石の上部に蓋のような置き石を設置しており、青森県におけるこれまでの発掘調査では「石棺墓」として扱われてきた遺構である(SQ01も同類の遺構である可能性は高いが、調査年度が異なっており直接の比較ができなかったため本項では除いている)。石棺墓は青森県内の調査では中期末葉～後期前葉に属する遺構とされ、近隣の水上(2)遺跡では良好な保存状態のものが多数発見されている。墓とされた根拠は、かつて同様の石組遺構内から人骨を検出した例(平賀町教委編1981)があるためである。SQ14・SQ18はそれらの石棺墓と同じような構造ではあるが、人骨は検出されていない。また、両遺構に伴う土器は後期後葉以降の土器であり、遺構内および周辺では中期末葉～後期前葉の土器は出土しておらず、明らかに石棺墓とは異なる時期に構築されたものである。両遺構については2013年度中は石棺墓と呼称(青埋文編2013a・b)しており、遺物の取り上げ層位にも棺という語は用いているが、この正式報告では墓と断定できないため「石棺状配石」として報告する。石棺状配石という用語は新潟県龍峰遺跡(中郷村教委1987)の借用であるが、墓という言葉を使わずにSQ18・SQ14を報告するための措置であり、龍峰遺跡と川原平(1)遺跡を関連があるものとして扱いたいという意図はない。遺構の形状も異なっており、龍峰遺跡では配石上面に蓋のように置かれた石はない。これとは別に、秋田県大館市矢石館遺跡では晩期(大洞B式)の「組石棺」が検出されている(奥山1954)。こちらは川原平(1)遺跡とは地理的にも時間的にも近く、関連する可能性はあるが、本報告では墓と断定することを避けて組石棺の呼称は採用しなかった。

報告書抄録の遺構数ではSQ14・SQ18を配石遺構の数に含めず、石棺状配石(列石を伴う):3基とした。3基の内訳はSQ14、SQ18東石組、SQ18西石組で、列石は遺構数としては数えていない。本項の事実記載では石棺状配石自体に1号、2号などの名称は新たに付さず、調査時の遺構単位で記載した。

なお、これまでにSQ14・SQ18を石棺墓として紹介した文献が確認できる(新潮社編2014、児玉2015、鈴木保2015)が、遺跡の正式報告としては石棺状配石であり、帰属時期は「縄文時代後期末葉頃」を正式な見解とする。

遺構を説明する用語の整理 (図①)

・構築面:石組や列石を配置した当時の地表面という意味である。厳密な意味では石組掘方の掘り込み面は認識できないので、「遺構検出写真で見えている遺構周囲の高さ」程度の意味で用いている。

・側壁:平面長方形を基調に連続して配置された石。楕円形に見える場合もある。石棺状配石の主体をなす石である。四周に石を巡らせているため、各辺を方角によって北側壁・東側壁・南側壁・西側壁とした。

・石組:側壁・側壁上部礫・上面礫を合わせて石組とするのが本来であろうが、失われていることも考えられるので、ここでは四周の側壁を合わせたものを指して石組とする。

・側壁上部礫:側壁の上部にあり、側壁を支点として石組の内側に突出するように平置きされた石を指す。

・上面礫:石組の上部に蓋のように置かれた石。閉塞を意図していないようなので、蓋という呼称は適切ではない。側壁上部礫の上に置かれた小さめの石もこの区分に含める。

・内部礫：石組を構成する石ではなく、石組内で単独に出土した石である。
・石組掘方：石組を設置するために設けた土坑であり、この内部に石組が配される。石組と掘方の間の堆積土(掘方覆土)は石組を固定するための土であり、裏込め土と呼称する場合もある。
・充填礫：側壁の隙間や列石の空白部を埋めるように置かれた小ぶりの石。

配石に用いられた石の番号（図②）

SQ14・SQ18に用いられた石には個別の番号を付しており、その番号が分かる図を掲載した。遺跡から持ち帰って埋蔵文化財調査センターで保管している石については、個別の石の重量と石質を記載した表（表5-3・5-4）を付した。表に記載されていない石は現地で廃棄した。本文および表中では個別番号をS-●のように記載した。

第14号配石遺構（SQ14　遺構図12～14、写真39～41，47、遺物図11-4～7、写真195-1・2）

【位置・確認・重複】ⅣU-32グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。石組周囲はⅢ層でも地山に近い部分である。使われた石の最高点は隣接するSQ18より高く、調査でもSQ18より先に検出された。

【規模・形状】石棺状配石に区分した配石遺構である。石組の平面形は楕円形に近く、石組外寸は短軸約80㎝、長軸約1．5mである。石組内寸は短軸の北壁寄りで約50㎝、南壁寄りで約30㎝と南壁側が狭くなっている。内寸長軸は1．15mである。底面から側壁上端までの高さは、西側壁で30㎝程度、東側壁で25㎝程度である。石組掘方は不整楕円形で、長軸約1．6m、短軸約1．1mと石組規模よりやや大きく掘られており、北西側で膨らみが大きい。石組に使われた礫は合計で241kg、最大のものはS-6の34．4kgである。使用石材は緑色凝灰岩と花崗閃緑岩が主体である。内部礫に石皿が2点含まれるが、組石に使われた石はすべて自然石で、転用された石器や人為的な加工はない。側壁の石は土坑壁に沿って立て並べるように配置されるのが基本であるが、北側壁の石（S-27・36）は掘方底面に接しておらず、掘方を埋め戻す過程で平置きされたものである。

【堆　積　土】A-A'の土層断面より、堆積土は4層に区分され、1・2層が石組内の堆積土、3・4層が掘方の埋め戻し土である。1層は自然堆積の可能性がある暗褐色土、2層は石組内を人為的に埋め戻したものと考えられる均質な褐色土である。2層は地山の色調に近かったため、調査当初は地山と誤認して掘削していなかった。

【出土遺物】遺構周辺はⅢ層がそれほど発達しておらず、Ⅲ層に含まれる遺物も少量であった。ⅣU-32グリッド出土遺物で図化したものはなく、SQ14検出前にⅢ層で取り上げた遺物も特定できていない。

遺構に伴う土器はいずれも小片である。11-4・5と写真195-1は、石組内である2層で出土した。11-4・195-1は後期後葉～晩期の粗製深鉢、5は円筒下層式で前期後葉に属するものと思われる。写真195-2は掘方（S33脇）で出土している。後期後葉～晩期の粗製深鉢と考えられる。構築面では後期後葉～晩期の粗製深鉢片が出土している（整2351・掲載外）。6・7は縁のない石皿である。6はS-29・7はS-1として取り上げたもので、いずれも内部礫に区分される。

下記の通り4点の炭化物について年代測定を行った。すべて木炭片（炭化材）で、樹種同定は委託中である。なお、詳細は今後の報告書に掲載する。

13KAWA(1)-14・掘方出土炭化材・3,630±20yrBP、13KAWA(1)-15・掘方出土炭化材・2,960±20yrBP、13KAWA(1)-16・掘方出土炭化材・4,240±20yrBP、13KAWA(1)-17・掘方出土炭化材・3,450±20yrBP。

13KAWA(1)-14以外の出土位置の座標は押さえていないが、写真47におおよその場所を示した。いずれも石組裏込め土に含まれていたもので、SQ14構築以前の炭化物である。以下、写真47-1を1、13KAWA(1)-14を試料14のように記載する。1はSQ14を北西から見ており、試料14は矢印で示した竹串の場所で出土した。3はSQ14を南東から見ており、矢印で示した白線は石組掘方の範囲である。試料15・16は掘方に含まれていた炭化物である。出土地点は特定できない。4もSQ14を南東から見ており、試料17は掘方内でもS-33脇で出土した土器片の下にあったものである。4試料のうち最も新しい測定値は試料15の2,960±20yrBPで、SQ14の構築年代はこれより新しいと考えられる。2,960±20yrBPは、本遺跡では後期末葉～晩期初頃の土器付着炭化物の測定値の範囲に収まる。なお、先行研究では試料16の測定値4,240±20yrBPが榎林式(辻2006)、試料14の測定値3,630±20yrBPが後期前葉(西本2009)、試料17の測定値3,450±20yrBPは後期中葉(秋田2008)に相当する。本遺跡では少量ながら中期後半、後期前葉の土器が出土しており、その時期の人間活動に伴う炭化物がSQ14の掘方に混入したものと考えられる。後期中葉の土器は出土していないため、その時期を示す炭化物の由来は不明である。

内部礫S-30下部では微細な骨片が出土している(写真41-6)。色調が白色であり、被熱していると考えられる。本遺跡の包含層中では各所で焼骨片が出土しており、本遺構の堆積土に含まれていたとしても積極的に遺構に伴うものとは認めがたい。SQ14出土焼骨は同定していないが、遺跡内で出土した他の焼骨で同定されたものの中に人骨は含まれていない。

【小　結】石組掘方内で後期後葉～晩期の粗製土器が出土している。晩期に下ることが確実な有文土器はない。炭化物の年代測定結果で最も新しい年代値はこれと矛盾しない。隣接するSQ18は晩期初頭に埋没したようであり、本遺構の構築時期も後期末葉頃と考えることができよう。

(岡本)

第18号配石遺構(SQ18　遺構図12・15～19、写真39,42～48、遺物図11-11～17、写真195-3～16)

【位置・確認・重複】ⅣU-V-33グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。遺構周辺のⅢ層は、Ⅲ層の中でも地山に近い部分で、構築面より下部にはほとんど遺物が含まれない。SQ16の石がS-90の上に倒れかかるように検出されており、本遺構が古い。また、直接重複しないがSQ14より低い位置にSQ18の石組が構築されており、本遺構が古いと考えられる。

【規模・形状】同一の配石遺構として捉えた範囲が広く、東西約4.5m、南北約2.5mの範囲に広がる。図①上段で示したように、本遺構は西石組、東石組、北列石、西列石、東列石の五つの配石単位の組み合わせで成り立っており、東西の両石組は石棺状配石である。西石組の平面形はほぼ長方形だが、南側がやや狭くなっている。石組外寸は短軸北壁寄りで90cm、短軸南壁寄りで70cm、長軸225cmである。石組内寸は短軸がおおむね50cmで推移し、北・南両壁に近いところでは40cmとやや狭まる。長軸は175cmである。底面から側壁上端までの高さは、北側壁で50cm、南側壁で35cm、東西の側壁では最も低い所で22cmである。底面から側壁上部礫の上端までは35～45cmである。石組掘方は2.6×1.2mの不整楕円形で、石組の南側がやや広くなっている。側壁として設置された石の直下である掘方底

面には、窪みが認められる場所がある。側壁の据わりをよくするために、予め掘方の一部に窪みを設けていたと考えられる。東西側壁の上部には、側壁上部礫が設置されていた。側壁上部礫は横断面で見ると石組内側が高くなるよう、下側で側壁上端に接して斜めに置かれていた。上面礫は側壁上部礫のさらに上に設置された石であるが、東西の側壁上部礫両方にかかるように検出されたものはなく、側壁上部礫の間に置かれたような状態で検出された。石組北側では側壁上部礫・上面礫がなく、石組内の堆積状況からも石組内のほとんどは埋め戻されていると考えられるため、上面礫は石組の閉塞を目的としたものではなく、北側では当初から存在しなかった可能性が高い。北列石は西石組側壁上部礫のS-46に重なるように置かれたS-44を西端とし、S-8までの間3.7mに直線的に配置されている。S-25とS-37の間がやや開くため、列石は東西に分けられる可能性もある。列石上端の高さは一定でなく、S-38のように立石に近いもの、S-37のように平置きされたもの、S-35のように短軸が垂直になるように置かれたものなど様々である。また、各石の下端はある程度高さが揃っているが、列石下部に掘方は確認できなかった。東石組は北列石の一部であるS-16を北側壁として取り込むように石組を構築している。石組内寸は長軸85cm、短軸25cmである。検出時は、石組の上面を覆うように上面礫が配されていた。西石組やSQ14と異なり側壁上部礫は存在しない。側壁はすべて石組外側に開くように斜めに設置されている。石組周囲に明瞭な掘方は確認できなかった。西列石は3個の石がⅢ層中に平置きされ、石の隙間に充填礫が配される。掘方は確認されなかった。東列石は2個の石がⅢ層中に平置きされ、これも明瞭な掘方は確認されていない。これらの五つの配石単位の構築順序は、石同士の重なりから西石組→北列石→東石組の順といえる。東西列石は他の単位と石が重ならないが、①北列石から派生しているように見え、②西列石と西石組の長軸角度、東列石と東石組の長軸角度がおおむね揃っている。①・②から東西両列石の構築は、石組および北列石の設置後に行われた可能性が高い。これらの構築が一連の行為として行われたか、時間をおいて部分ごとに行われたかについては調査結果からは言及できない。

SQ18の構築順序をまとめると以下のとおりである。まず、西石組を設置するための土坑(西石組掘方)がⅢ層を掘り込んで掘削される。掘方内に長方形の石組が設置され、石組外側と掘方壁の間に裏込め土が充填される。側壁に斜めにかかるように側壁上部礫が設置される。石組内を埋め戻した後、その上部に上面礫が設置される。西石組の側壁上部礫(S-46)に重なるように北列石西端のS-44が設置され、さらに東に延びるように北列石が配置される。S-37とS-25の間が開いており、列石の設置が一旦中断された可能性もある。その場合はこの時点で西列石が設置されてもよい。北列石の完成後に東石組が設置され、上面礫が置かれる。石組完成後に東西の列石が設置される。

上面礫のほとんどは使用痕のないことを確認した後廃棄したため、保管していない。保管している石の合計重量は1,182kg、最大のものはS-83の78.4kgである。配石に使われた石はすべて自然石で、転用された石器や加工、使用痕のあるものは含まれていない。

【堆 積 土】西石組に関わる堆積土は遺構図15に示しており、1・2・4・5・A1～A4の8層に区分された。3層は欠層である。B-B'ラインの①・②層はⅢ層に相当し、遺構に伴うものではない。5層およびA1～A4層は石組を設置した後に掘方を埋め戻した土である。4層は石組内の埋め戻し土で非常に均質な土である。2層も全体に水平堆積しており、埋め戻し土であったと考えられる。上面礫は4・2層で石組内を埋めた後に置かれている。4・2層は腐食が進んだ土ではなく、Ⅲ層に比べると明らかに色調が

淡いため流入土ではない。1層は遺構完成後の流入土の可能性がある。B-B'ラインでは側壁であるS-74・81がそれぞれ西側に、A-A'ラインではS-55が南側に倒れているようにみえる。側壁が本来正立していたとすれば、側壁上部礫が側壁上端に接して置かれ、側壁上部礫の間を架け渡すように上面礫を置くことができる。その場合、上面礫と2層との間に10～20cmの空間ができるため、1層は遺構完成後の流入土ということになるであろう。その後、側壁が倒れたため上面礫が落下して検出時の状況になったと考えられる。東石組に関わる堆積土は遺構図19に示しており、1～3層および3層類似土の4層に区分された。石組掘方は明瞭でないが、側壁の下にみられる3層が掘方覆土の可能性がある。側壁の内側には、下部から3層に類似した土・2層が水平に堆積しており、少なくともこの二つの層が埋め戻された後に上面礫が置かれたと考えられる。1層はその後の流入土であってもよいが、上面礫と2層との間には空間があったとしてもわずかである。東西列石の下部に掘方は確認できない。ただし、東列石のS-27・28の直下は小石を含まない黒色土で、Ⅲ層よりも石組掘方に近似する。本来は掘方をもっていたか、石の設置にあたって周囲とは別の土を寄せてきた可能性もある。

【出土遺物】遺構はⅢ層を掘り込み、あるいはⅢ層中に礫を置くなどして構築されているが、遺構周辺および上部のⅢ層に含まれる遺物は少量であった。ⅣU・V-33グリッド出土遺物で図化したものに遺構範囲上部で出土したものはなく、同じグリッド内で遺物が多く出土するのはブロック08・09に近い南東側である。図③に座標を記録している土器の出土地点を示した。構築面より下部の包含層中では遺物が少量しか出土せず、晩期であることが確実な有文土器は含まれていない。SQ18付近の包含層で出土した土器では、北列石の北側で後期後葉の個体(81-10)が出土し、出土標高は203.49mと列石底面とほぼ同じである。晩期初頭の個体である78-8・79-10は東西列石の南で出土し、出土標高はそれぞれ203.66m・203.53mで東列石上面とほぼ同じか高い位置である。また、遺構検出過程において、西石組上面礫の直上で後期末葉～晩期初頭の台付深鉢の台部が出土した(写真42-4:P-2059・掲載外)。

遺構に直接関わる部分で出土した土器は少ない。11-11は西石組の覆土上位で出土した、後期後葉の有文深鉢口縁部である。11-12は西石組の掘方A1層で出土した、後期末葉～晩期初頭の壺または注口土器の破片ではないかと思われる。同層では写真195-15・16も出土している。摩滅した破片が多いものの、後期後葉～晩期の粗製深鉢と考えられる。11-13は側壁上部礫であるS-68の下部で出土しており、掘方に含まれていたものである。後期後葉～末葉の有文深鉢体部破片である。写真195-14も掘方(東石組S-2下部)で出土した、後期後葉～晩期の粗製深鉢である。写真195-7は北列石S-71の下部で出土した、後期後葉～晩期の粗製深鉢である。写真195-9は北列石S-23の下部で出土した、後期後葉～晩期の浅鉢または壺と考えられる。

構築面およびⅢ層として取り上げたものは、遺構の構築前に基盤となるⅢ層に含まれていた土器である。11-14・15はⅣV-33構築面で出土している。14は後期末葉の有文深鉢体部破片、15は中期後半の深鉢口縁であろう。写真195-5は北列石S-38付近の構築面で出土した、後期後葉～晩期の粗製深鉢である。11-16・17は配石を除去して、ⅣV-33グリッドをを掘り下げていく過程で出土した。16は口唇の面取りが明瞭な後期後葉～晩期初頭の粗製深鉢、17は15と同一個体の可能性がある中期後半の深鉢体部破片と考えられる。同様にSQ18の下部であるⅢ層から出土した土器として、写真195-3・4・6・8・10～13があり、3・4以外は出土位置の座標を記録している。3は精良な胎土で、後期末葉～晩期初頭の壺または注口土器の体部破片である。4は後期末葉～晩期の粗製土器で、器壁が薄い。6・8・

10・12も同様の粗製深鉢である。11はⅢ層下部の漸移層に近い部分から出土した、中期後葉の深鉢である。13は凝灰岩のような小礫を含む胎土が図11-15に似ており、中期の深鉢の可能性がある。本遺構に関連して出土した土器は、中期に属するもの以外縄文時代後期後葉～晩期のものであり、有文土器はすべて後期に属す。

下記の通り6点の炭化物について年代測定を行った。樹種同定は委託中である。なお、詳細は今後の報告書に掲載する。

13KAWA(1)-18・列石下・3,660±20yrBP、13KAWA(1)-19・配石直下・4,100±20yrBP、

13KAWA(1)-20・埋土・3,480±20yrBP、13KAWA(1)-21・掘方・3,030±20yrBP、

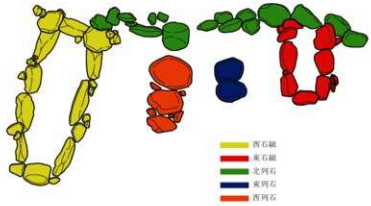
13KAWA(1)-22・配石直下・3,610±20yrBP、13KAWA(1)-23・掘方・4,070±20yrBP。

13KAWA(1)-18以外の出土位置の座標は押さえていないが、写真48におおよその場所を示した。以下、写真48-1を1、13KAWA(1)-18を試料18のように記載する。試料18・19・22は列石下、試料20は石組内の覆土下層、試料21・23は石組掘方(裏込め土)から採取したもので、SQ18構築以前の炭化物である。1は検出時のSQ18を南から見たものである。試料18はS-23の、試料19・22はS-36の下部で出土した。試料19と22は別破片である。3は西石組内部の堆積状況を東から見たものである。試料20は石組内下層の黄褐色土(4層)に含まれていた。4は完掘時の西石組を南東から見たもので、5は南側壁の断ち割り部を拡大したものである。試料21はS-55の裏込め土であるA2層で、試料23はS-83の裏込め土から出土した。6試料のうち最も新しい測定値は試料21の3,030±20yrBPで、SQ18の構築年代はこれより新しいと考えられる。3,030±20yrBPは、本遺跡では後期後葉の土器付着炭化物の測定値の範囲に収まる。なお、先行研究では試料19・23の測定値4,100±20yrBP・4,070±20yrBPが榎林式～最花式(辻2006)、試料18・22の測定値3,660±20yrBP・3,610±20yrBPが後期前葉(西本2009)、試料20の測定値3,480±20yrBPは後期中葉(秋田2008)に相当する。本遺跡では少量ながら中期後半、後期前葉の土器が出土しており、その時期の人間活動に伴う炭化物がSQ18の掘方等に混入したものと考えられる。後期中葉の土器は出土していないため、その時期を示す炭化物の由来は不明である。

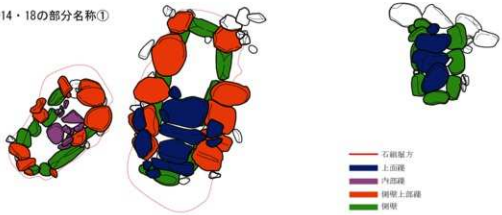
【小　結】列石下および掘方からは、確実に晩期に下る有文土器は出土していない。炭化物の年代測定値もこれと矛盾しない。配石上部では晩期初頭の可能性がある土器が出土している。これらから、後期末葉頃構築された遺構で、晩期初頭には上面礫を含めて配石全体が埋まっていたと考えられる。なお、中期末葉～後期前葉の石棺墓との関係であるが、現時点では不明とせざるを得ない。

(岡本)

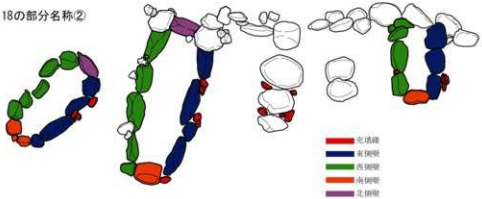
SQ18の呼称



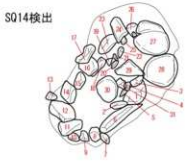
SQ14・18の部分名称①

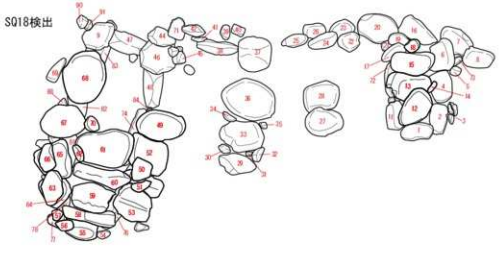


SQ14・18の部分名称②



図① SQ14・SQ18の呼称と部分名称





図② SQ14・SQ18の石番号

表5-3 SQ14に用いられた礫

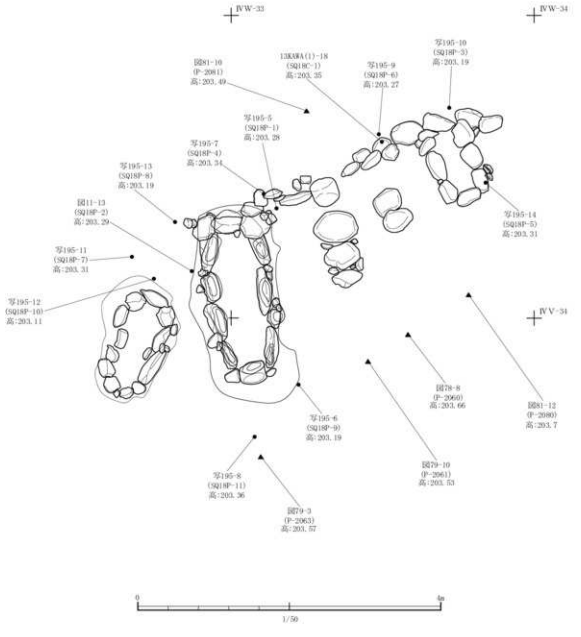
石番号	石 材	重量 (Kg)
S- 6	花崗閃緑岩	34.4
S- 8	凝 灰 岩	5.8
S- 9	緑色凝灰岩	7.1
S-14	安 山 岩	18.4
S-15	緑色凝灰岩	13.8
S-16	安 山 岩	5.6
S-18	凝 灰 岩	12.0
S-23	花崗閃緑岩	24.2
S-26	凝 灰 岩	21.4
S-27	緑色凝灰岩	16.0
S-28	緑色凝灰岩	15.0
S-30	緑色凝灰岩	7.2
S-32	花崗閃緑岩	5.5
S-33	花崗閃緑岩	26.8
S-34	緑色凝灰岩	0.6
S-35	凝 灰 岩	21.2
S-36	緑色凝灰岩	6.4
S-37	緑色凝灰岩	0.5

合計 241kg
(最大はS-6の34.4kg)

表5-4 SQ18に用いられた礫

石番号	石 材	重量 (Kg)
S- 1	緑色凝灰岩	7.0
S- 2	緑色凝灰岩	8.1
S- 3	緑色凝灰岩	1.5
S- 4	緑色凝灰岩	11.4
S- 6	花崗閃緑岩	20.8
S- 7	緑色凝灰岩	10.5
S- 8	凝 灰 岩	5.0
S- 9	緑色凝灰岩	17.0
S-11	凝 灰 岩	12.8
S-16	凝 灰 岩	13.0
S-17	花崗閃緑岩	8.6
S-19	凝 灰 岩	3.9
S-20	花崗閃緑岩	20.4
S-21	安 山 岩	0.5
S-22	安 山 岩	5.2
S-23	花崗閃緑岩	7.2
S-24	安 山 岩	6.5
S-25	緑色凝灰岩	8.4
S-26	花崗閃緑岩	5.8
S-27	花崗閃緑岩	16.0
S-28	花崗閃緑岩	18.0
S-29	安 山 岩	7.7
S-30	凝 灰 岩	0.9
S-31	凝 灰 岩	0.5
S-32	緑色凝灰岩	1.4
S-33	花崗閃緑岩	30.6
S-34	凝 灰 岩	0.6
S-35	凝 灰 岩	0.5
S-36	花崗閃緑岩	47.2
S-37	安 山 岩	25.8
S-38	花崗閃緑岩	27.4
S-39	緑色凝灰岩	1.2
S-40	緑色凝灰岩	2.7
S-41	緑色凝灰岩	0.9
S-42	緑色凝灰岩	2.0
S-43	緑色凝灰岩	1.2
S-44	凝 灰 岩	7.0
S-45	緑色凝灰岩	1.9
S-46	安 山 岩	46.2
S-47	花崗閃緑岩	71.0
S-48	花崗閃緑岩	76.8
S-49	花崗閃緑岩	40.9
S-52	花崗閃緑岩	34.8
S-53	緑色凝灰岩	27.8
S-54	緑色凝灰岩	1.1
S-55	緑色凝灰岩	46.0
S-64	緑色凝灰岩	14.0
S-65	緑色凝灰岩	43.6
S-34	凝 灰 岩	39.9
S-35	凝 灰 岩	41.3
S-36	花崗閃緑岩	42.7
S-37	安 山 岩	44.1
S-68	花崗閃緑岩	51.0
S-71	緑色凝灰岩	3.1
S-72	緑色凝灰岩	12.0
S-73	緑色凝灰岩	0.7
S-74	花崗閃緑岩	67.0
S-75	緑色凝灰岩	10.2
S-76	安 山 岩	33.0
S-77	緑色凝灰岩	4.6
S-78	緑色凝灰岩	21.6
S-79	緑色凝灰岩	0.5
S-80	緑色凝灰岩	3.7
S-81	花崗閃緑岩	46.0
S-81	花崗閃緑岩	2.4
S-82	花崗閃緑岩	52.7
S-83	花崗閃緑岩	78.4
S-84	凝 灰 岩	0.9
S-85	緑色凝灰岩	2.1
S-86	緑色凝灰岩	1.5
S-87	凝 灰 岩	0.7
S-88	緑色凝灰岩	0.6
S-89	凝 灰 岩	0.9
S-90	凝 灰 岩	1.2
S-91	緑色凝灰岩	0.7
S-100	花崗閃緑岩	18.8

合計 1,182kg
(最大はS-83の78.4kg)



図③ 座標を記録している土器の出土地点

6 配石遺構

後期後葉～晩期の配石遺構を15基調査した。

第１号配石遺構（SQ01 遺構図20、写真49、遺物図9-1～6、写真194-1）

【位置・確認・重複】Ⅳ-32グリッドに位置する。2003年調査で並んだ礫の上面を確認し、配石1とされた。2011年に改めてSQ01として精査した。重複はないが、当初本遺構の一部として考えた礫を含むSQ16が同一平面上で接している。また、SQ02も確認面のレベルが同じである。

【規模・形状】遺構図20上部に検出状況平面図を掲載した。楕円形に並べられた7個の大礫（白色で表示：以下外周礫と表記）の内側に2個の大礫（青色で表示；以下上部礫と表記）が突き刺さるような状態で検出された。外周礫の周囲には最終的に土坑が確認され、また設置に伴う裏込めは確認できなかったことから、外周礫は土坑壁に接して据え置かれたものと推定できる。外周礫および土坑の内寸は、上端で100×75㎝、下端で50×35㎝である。外周礫上端から土坑底部までの深さは45㎝である。

【堆 積 土】配石上部を確認した後、平面を図化するまでの清掃中に出土した遺物を確認面として取り上げた。2層は安定した褐色土で、外周礫の設置後に埋め戻されたのであろう。1層は周辺のⅢ層と同質で、上部礫の隙間を埋めるように入り込んだ土だと考えられる。上部礫は一見すると外周礫の内側に落ち込んでおり、外周礫に蓋のように架け渡された石が内部に落下したように見える。しかし、蓋石と考えるには外周礫上端を結ぶ長さに対して上部礫の長軸寸法が不足している。また、蓋石が落下したなら2層と上部礫の間には本来空間があったことになり、2個の上部礫では外周礫内側の空間を密封できないため、上部礫が落下するまでの間に2層の上部には1・2層とは別の土が自然に堆積するはずである。以上のことから、上部礫は設置当初から埋め戻された2層に接するように置かれたと考えるのが妥当である。

【出土遺物】1～4は確認面、5は1層出土であり、いずれも後期に属する。6は確認面出土の礫石器で、重量が1.7kgあり凹石に分類するには大きいため台石とした。194-1は後期末葉～晩期初頭の台付深鉢である。

【小 結】確認面・石組内とも出土土器は後期後葉～晩期初頭のものであり、晩期初頭には配石上面が埋まっていたと考えらる。構築時期は出土土器同様、後期後葉～晩期初頭の間であり、それ以上絞り込むことは困難である。なお、本遺構はSQ14・SQ18と同類の石棺状配石である可能性がある。

（岡本）

第２号配石遺構（SQ02 遺構図20、写真49，50、遺物図9-7～11、写真194-2～4・7・8）

【位置・確認・重複】Ⅳ-31・32グリッドに位置する。2003年調査で並んだ礫の上面を確認し、配石2とされた。2011年に改めてSQ02として精査した。重複はないが、SQ16が同一平面上で接しており、SQ01も確認面のレベルが同じである。

【規模・形状】最大長40㎝ほどの亜円礫が同一レベルに据え置かれている。石材はほとんどが花崗岩で構成され、凝灰岩が少量混じる。人頭大の円礫を主体としており、河床から選択的に礫を運搬したのであろう。配石上面の高低差は礫の大きさによってややばらつく。東辺はほぼ直線に見えるがその

他は整えられておらず、平面形は不整形である。エレベーションAラインで2．1m、同Bラインで1．55mの規模である。配石下に土坑は存在せず、礫設置の掘方も確認できなかった。

【堆 積 土】本遺構は掘り込みをもたないので、堆積土は存在しない。出土層位の確認面というのは配石上部を確認した後、平面を図化するまでの清掃中に出土した遺物を指す。また、SQ02配石下とSQ02直下は、配石に用いられた礫の下部で出土した遺物を指す。出土位置のSQ02南というのは配石と上下関係にあるものではなく、配石に用いられた礫が据え置かれた面で出土した配石範囲外の出土遺物を指す。

【出土遺物】出土遺物はいずれも後期後葉～晩期の遺物である。9-7～10は確認面で出土した。9は後期8期に属し有文土器では最も時期が下るものである。11は構築面で出土したもので、後期7-4期以降に遺構が作られた根拠となる。194-2は配石下で出土した無文の注口土器体部で、色調と胎土の質感から後期末葉～晩期初頭と考えられる。

【小 結】配石下部、あるいは構築面であるSQ02南で出土した時期の特定が可能な土器は後期後葉～晩期初頭のものである。確認面出土土器も後期後葉～晩期初頭に収まる。これらから、後期後葉以降に構築され、晩期初頭には埋まりきっていたと考えられる。

（岡本）

第３号配石遺構（SQ03 遺構図21、写真50）

【位置・確認・重複】ⅣW-32グリッドに位置し、SN01の下部で確認した。本遺構はSN01より古い。

【規模・形状】Ⅲ層中に小礫が配置されている。外周はおおむね長方形をなし、140×70cmの規模である。礫上端の高低差はほとんどない。配石下に土坑は存在せず、礫設置の掘方も確認できなかった。

【堆 積 土】本遺構は掘り込みをもたないので、堆積土は存在しない。

【出土遺物】遺構に伴う遺物はない。

【小 結】後期後葉～晩期前葉の遺構であることは確実だが、詳細な時期は不明である。

（岡本）

第４号配石遺構（SQ04 遺構図21、写真50）

【位置・確認】ⅣQ-40グリッドに位置する。Ⅲ層掘削中に南東から北西方向にやや弧状に延びる礫と、やや離れた2個の礫を確認した。

【規模・形状】80×70cmの範囲に計8個の礫で構成され、一部で複列の構造をなしている。

【堆 積 土】礫群の下部に掘り込みは認められず、Ⅲ層中に構築されている。

【出土遺物】伴う遺物はない。

【小 結】検出層位より、後期後葉～晩期の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

（笹森）

第５号配石遺構（SQ05 遺構図21、写真50、写真194-5・6・9～11）

【位置・確認・重複】ⅣR-43グリッドに位置する。Ⅲ層掘削中に南北方向に直線状に延びる礫群を確認した。本遺構はSN04より古く、SR11より新しい。

【規模・形状】計6個の礫で構成され直線状に配置される。直線距離で94cmを測り、明確な掘方は検出できなかったが、礫は比較的深くⅢ層中に入り込み安定している。
【堆 積 土】礫群の下部に掘り込みは認められなかった。
【出土遺物】伴う遺物はなく、石列の下部で出土した5点の土器片を写真のみ掲載した。いずれも後期後葉～晩期の粗製土器で、時期の特定は困難である。
【小　結】検出層位や出土遺物から、後期後葉～晩期の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

(笹森)

第６号配石遺構（SQ06　遺構図21、写真50、遺物図9-12～14）
【位置・確認】ⅣR-43グリッドに位置する。Ⅲ層掘削中に円礫のまとまりと偏平礫を利用した石皿1点を確認した。
【規模・形状】130×60cmの範囲に礫が集中する。石皿の上下に円礫が見られる。
【堆 積 土】礫の下部に掘り込みは認められなかった。礫を覆う堆積土は1層とした。黒褐色土を主体とし、小さな円礫が多く含まれている。遺物包含層を構成するⅢ層の一部に相当するものである。
【出土遺物】遺構に伴う遺物とは言いがたいが、周辺から出土した土器片2点を図化した。12は後期8期の深鉢、13は後期後葉～晩期の粗製土器である。14は配石を構成する石皿である。
【小　結】周辺の出土土器から、後期末葉の可能性があるが、詳細な時期は不明である。　(笹森)

第７号配石遺構（SQ07　遺構図21、写真50、遺物図9-15～18）
【位置・確認】ⅣR・S-37グリッドに位置する。地山面まで掘り下げて礫の集中範囲を確認した。
【規模・形状】145×75cmの不整楕円形に、長軸20cm以下の礫が集められたように置かれており、その西側に長軸30cm程度の礫が数個、長軸を横方向にして立てられている（前者を集積礫、後者を大型礫とする）。
【堆 積 土】集積礫は地山に接していない。集積礫の外側に広がる黒褐色土も地山を掘り込んで堆積しているわけではないので、本遺構は掘り込みをもたないと判断した。つまり、Ⅲ層の中に礫の集中がみられると理解している。大型礫の一部は地山に突き刺されように検出された。周囲の地山の礫はこのように立っていないので人為的に埋められたものと理解したいが、掘方は確認できなかった。
【出土遺物】土器3点（15～17）、石器1点（18）を掲載した。すべて礫集中範囲の中、あるいは礫下のⅢ層から出土したもので、礫の集積時に混入したものであろう。15・16は同一個体の粗製土器で、外面は条痕調整されている。口唇がきちんと面取りされており後期末葉～晩期初頭に属するものである。17の有文土器は沈線間に刺突が多く入り、後期末葉のものと考えられる。18は敲石である。
【小　結】伴出した土器から、後期末葉～晩期初頭に構築されたものと推定できる。

(岡本)

第８号配石遺構（SQ08　遺構図21、写真51、遺物図9-19）
【位置・確認】ⅣR・ⅣS-45グリッドに位置する。Ⅲ層掘削中にまとまりのある礫群を確認した。
【規模・形状】140×120cmの範囲に長さ20cm前後の長円礫が集中する。

【堆 積 土】礫群下部に掘り込みを有し、堆積土は3層に分層できる。1層はにぶい黄褐色土、2層は褐色土、3層は黒褐色土を主体とし、人為堆積の様相を呈している。礫は1・2層に集中する。
【出土遺物】堆積土中から完形の壷(19)が正立状態で出土した。晩期3期に属し、外面は赤彩される。
【小 結】出土遺物から、晩期中葉の遺構と考えられる。 (笹森)

第９号配石遺構（SQ09 遺構図22、写真51、遺物図10-1～6）
【位置・確認・重複】ⅣR-45グリッド他に位置する。Ⅲ層掘削中に礫の広がりを確認した。調査時のSQ13を統合したものである。重複するSN39より上位で確認されており、本遺構が新しい。また、南西部分でSR35が検出されているが、新旧関係は不明である。
【規模・形状】長軸260cm、短軸140cmの範囲内に楕円形、あるいは隅丸長方形状に近い形で礫が配置されていたものと思われるが、南西部分ではSec3のベルト内で礫が検出されない部分があり、当初から礫の配置が閉じていなかったものと考えられる。北西隅内側と南側中央部に単位配石が1基ずつ認められる。
【堆 積 土】礫を覆う堆積土は1層で、黒褐色土を主体とする。遺物包含層を構成するⅢ層に相当するものと思われ、小礫や炭化物を多く含む。
【出土遺物】土器4点、石器2点を図示した。1は下部の包含層に伴う遺物の可能性が高く、後期8期の注口土器である。2は晩期4期の鉢、3は晩期3期の大型壷で、これらが配石遺構構築時の土器と考えられる。4は地文をもたない粗製土器で、伴う有文土器から晩期中葉に属する可能性がある。5は石匙で、つまみ部にアスファルト状の黒色物質が付着している。遺構に直接伴うものかどうかは不明である。6は配石を構成する石として転用された石皿である。使用面に赤色顔料が付着している。
【小 結】出土遺物から、晩期中葉の遺構と考えられる。 (笹森)

第10号配石遺構（SQ10 遺構図22、写真51）
【位置・確認】ⅣR-45グリッド他に位置する。Ⅲ層掘削中に集中する礫を確認した。
【規模・形状】長軸190cm、短軸120cmの範囲内に多数の円礫が集中し、上下に重なる礫も見られる。被熱した礫は見られない。
【堆 積 土】礫の下部に掘り込みは見られない。
【出土遺物】遺物は出土していない。
【小 結】検出層位から後期後葉～晩期の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。隣接するSQ11と類似した構造であり、関連する遺構の可能性がある。
(笹森)

第11号配石遺構（SQ11 遺構図23、写真52、遺物図10-7～11-3、写真194-12）
【位置・確認】ⅣS-47グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【規模・形状】Ⅲ層中に礫を据え置き、あるいは礫を積んだ遺構である。配石下部に土坑などの施設はなく、礫を設置した掘方も確認できなかった。平面形は不整形で、長軸2m、短軸1mの範囲に礫が集まっている。配石上面の高低差は礫の大きさによってややばらつく。用いられた礫はこぶし大から長

軸45cmのものまで様々である。
【堆 積 土】本遺構は掘り込みをもたないので、堆積土は存在しない。
【出土遺物】3は配石に用いられた礫で、石皿を転用したものである。出土時は機能面を下に向けていた。7～10、1・2は配石範囲外のⅢ層、写真194-12は配石下のⅢ層で出土したものである。いずれも後期後葉～後期末葉に属し、本遺構構築前にⅢ層に含まれていた土器と考えられ、完形土器も遺構に直接伴うものではなさそうである。写真194-12は粗製土器であるが胎土に小礫を含み、器表では小礫周辺にクラックを生じていることが特徴的で、この質感の土器は後期末葉に多い。
【小 結】配石上部で出土した遺物を明確にできないが、配石構築面および配石下部では晩期土器が出土していない。後期後葉～後期末葉に構築された遺構である。

(岡本)

第12号配石遺構 (SQ12 遺構図22、写真52、遺物図5-3～5)
【位置・確認・重複】ⅣT-48グリッドに位置し、Ⅲ層中で確認した。SN39の上部につくられており、本遺構が新しい。また、SQ41と隣接する。これらの関係についてはSN38・SN39の項で詳説した。
【規模・形状】Ⅲ層中に礫をコの字状に配置している。長軸60cm、短軸45cmであるが、礫は内側に倒れるように設置されており、機能時にどの部分が露出していたかは不明である。
【堆 積 土】礫を設置した掘方は確認できなかった。
【出土遺物】下部で検出したSN39と対比するため、出土遺物はSN39の部分で掲載している。3・4は石組みに用いられたもので、石皿の転用である。いずれも破損箇所はなく、機能面を内側に向けていた。5は土器の内面を上にして石に囲まれるように出土しており、遺構に伴うものと考えられる。口縁付近が内屈する粗製深鉢で、このような器形は一般的なものではないが、類似した器形は晩期中葉に伴う(遺物図52-11)ようである。
【小 結】出土した土器の特徴から、晩期中葉以降の遺構と考えられる。周辺では晩期後葉の土器が出土しておらず、晩期中葉に収まる可能性が高い。

(岡本)

SQ13：欠番(SQ09に統合)

第16号配石遺構 (SQ16 遺構図23、写真46、遺物図11-8～10、写真194-13・14・16)
【位置・確認・重複】ⅣV・W-31・32に位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。調査時はセクションポイントF付近より西側をSQ16、東側をSQ17としたが、分離する明確な根拠がないので、全体をSQ16として報告する。SN01・SN02・SQ03・SR01より下部に位置するため、本遺構はこれらより古い。SQ18北西端の小さい礫に覆い被さるように検出された礫があるので、本遺構はSQ18より新しい可能性が高い。また、SQ01・SQ02に接するが、新旧関係は不明である。
【規模・形状】平面図として図化したものは69個であるが、大小様々の自然石からなり、すべてⅢ層中に置かれたように検出された。立石は確認できず、掘方をもつものもない。地山に含まれる礫よりも大きく、円磨度も高い。外部から持ち込まれたものであることは明らかなため、配石として認定した。

本遺構とした石は6.6×2.8mの範囲に広がる。これらが意図的に並べられたものか、より大きな配石が破壊されたものか、または遺跡内に運ばれてきたものの並べられてはいないのかについては判断できない。Eラインでは6個の石が直線的に並んでいるようにもみえる。

【堆 積 土】石の下はⅢ層で、地山直上に置かれたものはない。掘方は確認しておらず、堆積土と呼べるものはない。

【出土遺物】石の下部で出土した3点を図化した。8・9は後期7-4期の深鉢である。10は粗製土器だが口唇の面取りが顕著で、後期後葉～晩期初頭の可能性が高い。写真のみを掲載したものでは13が構築面、14がSQ17S-21下で出土した。16はⅣV-32グリッドにおいて配石下のⅢ層から出土した土器のうち、時期決定の指標となりうる5点である。左下の有文土器は晩期初頭に下る可能性がある。遺構検出の過程では、後期末葉～晩期初頭の土偶(遺物図186-2)が出土している。

【小 結】出土土器から、後期後葉～晩期初頭に構築されたものと考えられる。

(岡本)

SQ17：欠番(SQ16に統合)

第19号配石遺構（SQ19 遺構図24、写真53、遺物図12-1～7、13-1～5、写真194-15・17・18）

【位置・確認・重複】ⅣR-34・35、ⅣS-35グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。東側の石列の一部は2011年調査で検出されたが、当該年の未調査区域に延びていくため、全体の精査は2013年に行った。ブロック11・12よりも上位に位置する。

【規模・形状】Ⅲ層中に並べられた、あるいは置かれた2条の石列と集石を一つの遺構として捉えた。これらを便宜的に東側から集石、東石列、西石列と呼称する。構築位置が西向きの斜面途中にあるため、集石→東石列→西石列の順に礫の底面標高が低くなっている。東石列北端から南端までは6m、西石列北端から南端までは4.4m、集石部の長軸は1.35mである。また、西石列西端から集石東端までは5.2mを測る。2条の石列は南東から北西に延びており、末端が撥形に開く。東石列は長軸10～45cmの礫を、礫長軸が連なるように並べられている。集石は特に配置されたようではなく、まとめておかれただけのようにみえる。

【堆 積 土】設置された礫の掘方は確認されていない。礫設置面を2層、その下部を2層とした。両者とも遺構に伴うものではなくⅢ層であり、石列の内外で土質の違いは明確ではない。列石列間の堆積層はSec5-Ⅲ-4層に対応する。遺物の取り上げについては石列の間の遺物だけを1層として取り上げている。Ⅲ下としたものは石列より下部の遺物、SQ19東としたものは石列外側の構築面で出土したものである。

【出土遺物】構築時期の判断に使える土器を図化した。1・2は晩期1b期と考えられ、石列間で出土した。3は後期8期の深鉢で、礫設置面より下で出土した。4は本来礫設置面より下に包含されていたものだが、一部破片は石列間で出土した。晩期1a期の深鉢である。5は礫設置面直下で出土した晩期1a期の注口土器である。また、写真のみを掲載した土器が3点ある。15・17は礫設置面直下で出土した晩期初頭の土器、18は石列間で出土した後期末葉～晩期初頭の土器である。6は集石を構成する礫として転用された石皿、7は石列間で出土した凹石である。剥片石器類は遺物図13に掲載したが、遺構の機能と直接

関連したものではない。1は掻器、2～5は石核で、いずれも珪質頁岩製である。

【小　結】配石下部で出土した土器は晩期1a期を下限とするため、遺構の構築時期は晩期初頭である。配石直上の出土土器は晩期1期が最も新しいため、構築後それほど期間を置かずに埋まった可能性が高い。

（岡本）

第41号配石遺構（SQ41　遺構図23、写真52、遺物図13-6）

【位置・確認・重複】Ⅳ T-48グリッドに位置する。SN38の上部につくられており、本遺構が新しい。SQ12と隣接する。これらの関係についてはSN38・SN39の項で詳説した。検出時の礫配置から石囲炉と考えてSN36としたが焼土が確認できず、炉ではないと判断してSQ41に振り替えた。

【規模・形状】9個の礫が部分的に隙間を空けて不整円形に配置されている。内径は35×30㎝である。

【堆 積 土】Ⅲ層中に構築されており、礫の掘方は不明である。掘り込みをもたないので堆積土はない。

【出土遺物】6は礫器が転用され、配石の一部として使われたものである。石材はデイサイトで三角柱状を呈し、一側辺に打痕が認められる。

【小　結】SQ12と同時期と考えられる。晩期中葉の可能性が高い。

（岡本）

7　土器埋設遺構

検出した土器埋設遺構は36基である。粗製深鉢を埋設したものが多く時期を明確にできるものは少ないが、すべて遺物包含層が形成された時期と同じ後期後葉～晩期のものであり、明らかに晩期後葉に下る土器は認められないため、晩期中葉までに埋設されたと考えてよい。また、器壁が薄いものが多いので、後期よりは晩期に属するものが多いように思われる。SR07・28の2基は有文土器が埋設されており前者が後期後葉、後者が晩期初頭である。また、SR27は口縁突起の形状から後期末葉～晩期初頭である。SR16は伴出土器から晩期中葉と考えられる。このほか土器の底部形状からSR06が晩期初頭以前、検出層位からSR01、19～23、25が晩期前葉、SR35が後期末葉以降と考えられる。同一または隣接グリッドに土器埋設遺構がなく、全くの単独で存在するものはSR01・07の2基のみで、その他は何らかのまとまりをもって存在するようである。特にⅣQ-38では4基が、ⅣM-39ではSR19～23・25の5基が、ⅣR・S-43・44の接する付近ではSR08～17・26・34・36の13基が集中しており、近接しながらも重複しない状況は、互いの存在を認識しながら埋設された様子が窺える。ただし、蓋や上面配石などの付属施設は確認できない。土器埋設状況は正立31、倒立4、不明1である。正立のうち22基は当初から底部を欠いた状態で埋設されたようで、本遺跡の特徴的な埋設状況といえる。掘方が明瞭に確認できたものはないが、断割りは土器の周囲に限られており埋設された土器に対して掘方が大きいことは調査時点で考慮されていなかった。土器内に埋納されたことが明らかな遺物、あるいは人骨など埋設土器の機能を明らかにできるようなものは出土していない。調査時の取り上げ不備等により埋設土器本体が行方不明(SR05・24・29)、あるいは土器の遺存状況が悪く接合が進まなかったなどの理由で土器を掲載できなかったり、破片で掲載せざるを得なかったものが多数ある。

第１号土器埋設遺構（SR01　遺構図25、写真54、遺物図14-1）

【位置・確認・重複】ⅣW-32グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。SQ16の範囲に重なっているが、本遺構が上位に位置しており新しい。土器埋設遺構としては単独で立地する。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できず、土器内外がほぼ同色同質の土である。胴部下半から底部を欠く粗製深鉢(1)が正立状態で埋設されていた。土器外面には縄文LRが不規則に施され、煮沸に用いられた痕跡がある。口縁部が内湾する器形で、口唇には面取りが施される。

【堆　積　土】土器内は暗褐色土の単層である。

【伴出遺物】埋納物なし。

【小　結】埋設された土器の特徴から後期後葉～晩期の遺構であるが、SQ16より新しいことや土器の口唇が面取りされることから晩期前葉の可能性が高いように思われる。

（岡本）

第２号土器埋設遺構（SR02　遺構図25、写真54、遺物図14-2）

【位置・確認・重複】ⅣQ-38グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。重複は見られないが、本遺構を含め4基の土器埋設遺構が近接する。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】明確な掘方は確認できず、土器内外がほぼ同色同質の

土である。胴部下半から底部を欠く粗製深鉢(2)が正立状態で埋設されていたものと思われるが、埋設当初から口縁を欠失していたかどうかは不明である。
【堆 積 土】土器内は黒褐色土の単層で、ローム粒や炭化物粒を含んでいる。
【伴出遺物】土器片と礫が数個土器内から出土したが、混入したものと考えている。
【小 結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(笹森)

第３号土器埋設遺構(SR03 遺構図25、写真54、遺物図14-3)
【位置・確認・重複】ⅣQ-38グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。重複は見られないが、本遺構を含め4基の土器埋設遺構が近接する。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】明確な掘方は確認できず、土器内外がほぼ同色同質の土である。口縁部及び胴部下半から底部を欠く粗製深鉢(3)が正立状態で埋設されていたものと思われるが、埋設当初から口縁を欠失していたかどうかは不明である。
【堆 積 土】土器内は暗褐色土の単層で、炭化物粒を微量に含む。
【伴出遺物】伴う遺物は出土していない。
【小 結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(笹森)

第４号土器埋設遺構(SR04 遺構図25、写真54、遺物図14-4)
【位置・確認・重複】ⅣQ-38グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。重複は見られないが、本遺構を含め4基の土器埋設遺構が近接する。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われる。胴部下半から底部を欠く粗製深鉢(4)が正立状態で埋設されていたものと思われるが、埋設当初から口縁を欠失していたかどうかは不明である。
【堆 積 土】土器内は暗褐色土の単層で、ローム粒や炭化物粒を含む。
【伴出遺物】伴う遺物は出土していない。
【小 結】埋設された土器の特徴から後期後葉～晩期の遺構である。

(笹森)

第５号土器埋設遺構(SR05 遺構図25、写真55、写真195-18・19)
【位置・確認・重複】ⅣQ-38グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。Pit0064より上位で検出されており、本遺構が新しい。なお、本遺構を含め4基の土器埋設遺構が近接する。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方をしていたものと思われる。口縁部及び胴部下半から底部を欠く粗製深鉢が正立状態で埋設されていたものと思われるが、埋設された土器本体は調査での収納時に他の遺物に混在した可能性が高く、ほとんどが行方不明となり整理段階で発見できなかった。発見できた遺物は破片で、写真のみを掲載した(18・19)。煮沸に用いられた痕跡がある。

【堆 積 土】土器内の堆積土は2層に分層され、上層は黒褐色、下層は暗褐色を呈している。
【伴出遺物】伴う遺物は出土していない。
【小　結】埋設された土器の特徴や周辺の遺構から、後期後葉～晩期の遺構と考えられる。

(笹森)

第６号土器埋設遺構（SR06　遺構図25、写真55、遺物図14-5・6）
【位置・確認】ⅣQ－42グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できなかった。粗製深鉢(5)が倒立状態で埋設されていた。6は5の底部であるが、接合しない。確認面から遺構底部までが20cmほどなのに底部が出土しているということは、底部は土器の内側に落ち込んでいたと推定される。しかし、そのような認識で遺物を取り上げていないため、本来の出土位置が分らない。埋設時にすでに底部を欠いた状態であったか、埋設後につぶれたかは不明である。土器は胴部中ほどに最大径があり、口縁部にかけて内湾する。口唇に面取り、外面に縄文LRが施される。また、煮沸に用いられた痕跡がある。
【堆 積 土】土器内の堆積土は2層に分かれる。焼土粒や炭化物、少量の焼骨片も出土したが、移動元の土に含まれていた可能性もあり、埋設土器の機能に関わるものかどうかは不明である。焼骨は種の同定を試みたが不可能であった。
【伴出遺物】埋納物なし。土器内で自然礫が出土しているが、遺構周辺の包含層や地山には礫が多く含まれているため、埋納されたものとは判断していない。
【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。底部が高台状であることから晩期初頭以前の可能性が高い。

(岡本)

第７号土器埋設遺構（SR07　遺構図25、写真55、遺物図14-7）
【位置・確認】ⅣR-40グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方をしていたものと思われる。7は倒立状態で埋設されていたものと思われ、胴部から底部にかけて欠失する。
【堆 積 土】土器内は黒褐色土の単層である。
【伴出遺物】小礫や土器片が出土しているが、混入したものと考えている。
【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉の遺構である。

(笹森)

第８号土器埋設遺構（SR08　遺構図25、写真55、遺物図14-8）
【位置・確認・重複】ⅣR-44グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。他遺構との重複は見られないが、第９号土器埋設遺構に近接する。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われる。8は埋設土器本体であるが、埋設位は不明である。
【堆 積 土】土器内は暗褐色土の単層である。

【伴出遺物】伴う遺物は出土していない。
【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(笹森)

第９号土器埋設遺構（SR09　遺構図25、写真55, 56、遺物図14-9）
【位置・確認・重複】Ⅳ R-44グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。他遺構との重複は見られないが、第８号土器埋設遺構に近接する。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われる。胴部下半から底部を欠く土器が正位に埋設されていた。9は埋設土器本体である。
【堆 積 土】土器内は黒褐色土の単層である。
【伴出遺物】伴う遺物は出土していない。
【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(笹森)

第10号土器埋設遺構（SR10　遺構図26、写真55, 56、遺物図14-10・11）
【位置・確認】Ⅳ R-44グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われる。胴部下半から底部を欠く土器が正位に埋設されていた。10・11は埋設土器本体である。
【堆 積 土】土器内は黒褐色土の単層である。
【伴出遺物】土器内から小礫が出土しているが、混入したものと考えている。
【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(笹森)

第11号土器埋設遺構（SR11　遺構図26、写真56、遺物図15-1）
【位置・確認・重複】Ⅳ R-43グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。本遺構はSN04・SQ05より古い。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われ、底面は地山に達する。底部を欠く土器が正位に埋設されていたものと思われるが、埋設時に口縁部が存在していたかは不明である。1は埋設土器本体である。
【堆 積 土】土器内は2層に分層され、1層は黒褐色で炭化物粒を含み、2層は暗褐色土である。
【伴出遺物】伴う遺物は出土していない。
【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。　(笹森)

第12号土器埋設遺構（SR12　遺構図26、写真56、遺物図15-2・3）
【位置・確認】Ⅳ R-43グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われ、底面は地山に達する。底部を欠く土器が正位に埋設されていた。2・3は埋設土器本体で

ある。
【堆 積 土】土器内は2層に分層される。共に黒褐色土で、2層には炭化物粒を含む。
【伴出遺物】伴う遺物は出土していない。
【小 結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(笹森)

第13号土器埋設遺構(SR13 遺構図26、写真56、遺物図15-4)
【位置・確認】ⅣR-44グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われ、底面は地山に達する。口縁部と底部を欠く土器が正位に埋設されていた。4は埋設土器本体である。
【堆 積 土】土器内は2層に分層され、上層は黒褐色土、下層暗褐色土である。
【伴出遺物】伴う遺物は出土していない。
【小 結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(笹森)

第14号土器埋設遺構(SR14 遺構図26、写真57、遺物図15-5)
【位置・確認】ⅣR-44グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、土器よりやや大きめの掘方を有していたものと思われ、底面は地山に達する。底部を欠く土器が正位に埋設されていたものと思われるが、埋設時に口縁部が存在していたかどうかは不明である。5は埋設土器本体である。
【堆 積 土】土器内は2層に分層され、上層は暗褐色土、下層は黒褐色土である。掘方埋土は土器内下層に類似する。
【伴出遺物】土器内から比較的大きめの礫が数個出土しているが、混入したものと判断している。
【小 結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(笹森)

第15号土器埋設遺構(SR15 遺構図26、写真57、遺物図15-6)
【位置・確認】ⅣR・ⅣS-43グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われ、底面は地山を掘り込んでいる。底部を欠く土器が正位に埋設されていたものと思われるが、埋設時に口縁部が存在していたかどうかは不明である。6は埋設土器本体である。
【堆 積 土】土器内は2層に分層され、上層はにぶい黄褐色土、下層は褐色土である。
【伴出遺物】土器内から比較的小さめの礫が数個出土しているが、混入したものと判断している。
【小 結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(笹森)

第16号土器埋設遺構（SR16　遺構図26、写真57、遺物図15-7・8）

【位置・確認】ⅣS-44グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われ、底面は地山を掘り込んでいる。底部を欠く土器が正位に埋設されていたものと思われるが、土器埋設時に口縁部が存在していたかは不明である。7は埋設土器本体である。

【堆　積　土】土器内は暗褐色土の単層である。

【伴出遺物】土器内から小礫が数個と浅鉢(8)が出土しており、埋設時に混入したものと判断している。

【小　結】伴出した浅鉢は晩期3期に属すことから晩期3期以降に埋設されたものであり、晩期中葉の遺構と考えられる。

（笹森）

第17号土器埋設遺構（SR17　遺構図26、写真57、遺物図15-9）

【位置・確認】ⅣS-44グリッドに位置し、Ⅳ層検出面で確認した。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われ、底面は地山を掘り込んでいる。口縁部と底部を欠く土器が正位に埋設されていた。9は埋設土器本体である。

【堆　積　土】土器内は暗褐色土の単層である。

【伴出遺物】土器内から小礫が数個出土しているが、混入したものと判断している。

【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

（笹森）

第18号土器埋設遺構（SR18　遺構図26、写真58、遺物図15-10・11）

【位置・確認・重複】ⅣM-40グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。遺構の重複はなく、ⅣM-39の土器埋設遺構集中箇所から5mほど離れている。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できなかった。口縁部・胴部上半を欠く粗製深鉢(10)が正立状態で埋設されていた。口縁が埋設当初から欠失していたかどうかは不明である。遺存状況が悪く、接合が進まなかったため破片で提示している。底部は残存していたが、接合できなかった。

【堆　積　土】土器内は黒褐色土の単層である

【伴出遺物】土器内からアスファルト状の黒色物質が付着した剥片(11)が1点出土したが、遺構に伴うものかどうかは不明である。

【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

（岡本）

第19号土器埋設遺構（SR19　遺構図27、写真58, 59、遺物図15-12）

【位置・確認・重複】ⅣM-39グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。群集する土器埋設遺構の一つで、確認レベルを同じくするSR20～23・25が近接した位置に重複なく存在する。これらとの前後

関係は不明であるが、お互いの埋設状況が把握できる状態で埋設されたと推定できる。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できなかった。底部を欠く粗製深鉢(12)が正立状態で埋設されていた。口縁が埋設当初から欠失していたかどうかは不明である。遺存状況が悪く、接合が進まなかったため破片で提示している。
【堆積土】土器内は黒褐色土の単層である。
【伴出遺物】埋納物なし。
【小結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。本遺構検出面と同レベルのSR22北側では晩期前葉の土器がまとまって出土しており、掘り込みを考慮すればそれと同時期かそれより新しいと考えられる。

(岡本)

第20号土器埋設遺構（SR20　遺構図27、写真58,59、遺物図15-13）
【位置・確認・重複】Ⅳ M-39グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。群集する土器埋設遺構の一つで、確認レベルを同じくするSR19・21～23・25が近接した位置に重複なく存在する。これらとの前後関係は不明であるが、お互いの埋設状況が把握できる状態で埋設されたと推定できる。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できなかった。粗製深鉢(13)が正立状態で埋設されており、口縁から底部までの完形で復元された。土器の器高が30㎝を超えるのに対して遺構自体の深さは10㎝ほどであることから、口縁部付近の破片は土器内に落ち込んでいたと推定される。しかし、そのような認識で遺物を取り上げていないため、本来の出土位置が分らない。土器は底部から口縁にかけて屈曲部がなく立ち上がる器形で、外面に縄文LRが施される。底部は凹底気味の平底である。また、煮沸に用いられた痕跡がある。
【堆積土】土器内は黒褐色土の単層である。
【伴出遺物】埋納物なし。
【小結】埋設された土器底部が高台状ではないことから、晩期前葉～中葉の遺構と考えられる。本遺構検出面と同レベルのSR22北側では晩期前葉の土器がまとまって出土しており、掘り込みを考慮すればそれと同時期かそれより新しいと考えられる。

(岡本)

第21号土器埋設遺構（SR21　遺構図27、写真58,59、遺物図16-1）
【位置・確認・重複】Ⅳ M-39グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。群集する土器埋設遺構の一つで、確認レベルを同じくするSR19・20・22・23・25が近接した位置に重複なく存在する。これらとの前後関係は不明であるが、お互いの埋設状況が把握できる状態で埋設されたと推定できる。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できなかった。口縁を欠く粗製深鉢(1)が正立状態で埋設されていた。口縁が埋設当初から欠失していたかどうかは不明である。土器外面には縄文LRが施され、底部は平底である。また、煮沸に用いられた痕跡がある。
【堆積土】土器内は黒褐色土の単層である。
【伴出遺物】埋納物なし。

【小　結】埋設された土器底部が平底であり、晩期前葉～中葉の遺構と考えられる。本遺構検出面と同レベルのSR22北側では晩期前葉の土器がまとまって出土しており、掘り込みを考慮すればそれと同時期かそれより新しいと考えられる。

(岡本)

第22号土器埋設遺構（SR22　遺構図27、写真58，59、遺物図16-2）

【位置・確認・重複】ⅣM-39グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。群集する土器埋設遺構の一つで、確認レベルを同じくするSR19～21・23・25が近接した位置に重複なく存在する。これらとの前後関係は不明であるが、お互いの埋設状況が把握できる状態で埋設されたと推定できる。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できなかった。口縁部を欠く粗製深鉢(2)が正立状態で埋設されていた。口縁が埋設当初から欠失していたかどうかは不明である。底部は存在するが遺存状態が悪く、接合・図化できなかったため胴部破片のみを提示している。

【堆 積 土】土器内は黒褐色土の単層である。

【伴出遺物】埋納物なし。

【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。本遺構検出面と同レベルのSR22北側では晩期前葉の土器がまとまって出土しており、掘り込みを考慮すればそれと同時期かそれより新しいと考えられる。

(岡本)

第23号土器埋設遺構（SR23　遺構図27、写真58，59、遺物図16-3）

【位置・確認・重複】ⅣM-39グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。群集する土器埋設遺構の一つで、確認レベルを同じくするSR19～22・25が近接した位置に重複なく存在する。これらとの前後関係は不明であるが、お互いの埋設状況が把握できる状態で埋設されたと推定できる。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できなかった。底部を欠く粗製深鉢(3)が正立状態で埋設されていた。遺存状況が悪く、接合が進まなかったため口縁破片のみを提示している。

【堆 積 土】土器内は黒褐色土の単層である。

【伴出遺物】埋納物なし。

【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。本遺構検出面と同レベルのSR22北側では晩期前葉の土器がまとまって出土しており、掘り込みを考慮すればそれと同時期かそれより新しいと考えられる。

(岡本)

第24号土器埋設遺構（SR24　遺構図28、写真59、写真195-17）

【位置・確認・重複】ⅣN－39グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。遺構の重複はなく、ⅣM-39の土器埋設遺構集中箇所から２ｍほど離れて単独で立地する。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できなかった。土器は正立状態で埋設されていた。遺物の取り上げ時に遺構名を記載せずに取り上げた破片が多いようで、埋設土器本体破片の

多くが特定できず、復元もできていない。遺構名を記載して取り上げた破片の一部について写真で掲載した(17)。外面に縄文LRが施された粗製深鉢で、煮沸に用いられた痕跡がある。

【堆 積 土】土器内は黒褐色土の単層である。

【伴出遺物】掲載していないが、土器内から晩期有文深鉢の口縁破片が出土しており、混入と判断した。

【小 結】埋設された土器の特徴および土器内で出土した有文土器から、晩期の遺構といえるが、詳細な時期は確定できない。

(岡本)

第25号土器埋設遺構(SR25 遺構図27、写真58, 59、遺物図16-4)

【位置・確認・重複】ⅣM-39グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。群集する土器埋設遺構の一つで、確認レベルを同じくするSR19～23が近接した位置に重複なく存在する。これらとの前後関係は不明であるが、お互いの埋設状況が把握できる状態で埋設されたと推定できる。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できなかった。底部を欠く粗製深鉢(4)が正立状態で埋設されていた。口縁が埋設当初から欠失していたかどうかは不明である。遺存状況が悪く、接合が進まなかったため胴部破片のみを提示している。

【堆 積 土】土器内は黒褐色土の単層である。

【伴出遺物】埋納物なし。

【小 結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。本遺構検出面と同レベルのSR22北側では晩期前葉の土器がまとまって出土しており、掘り込みを考慮すればそれと同時期かそれより新しいと考えられる。

(岡本)

第26号土器埋設遺構(SR26 遺構図28、写真60、写真195-23)

【位置・確認】ⅣR-44グリッドに位置し、Ⅳ層検出面で確認した。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、やや土器より大きめの掘方を有していたものと思われ、底面は地山を掘り込んでいる。口縁部と底部を欠く土器が正位に埋設されていた。23は埋設土器本体であるが遺存状態が悪く、器面の劣化も激しかったため、掲載は写真のみとする。外面に縄文LRが施された粗製深鉢である。

【堆 積 土】土器内は暗褐色土の単層。掘方埋土はにぶい黄褐色土で、Ⅲ・Ⅳ層の混土層と思われる。

【伴出遺物】図示はしていないが、後期7-4期の有文土器片が2点出土してる。また、焼骨片と炭化物が出土している。焼骨片についてはサンプル採取したが、同定は不可能であった。いずれも遺構に直接伴うものとは認めがたい。

【小 結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(笹森)

第27号土器埋設遺構(SR27 遺構図28、写真60、遺物図16-5)

【位置・確認】ⅣQ-45グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、土器に沿った掘方を有していたものと思われる。5は台部を欠く台付鉢で、正位に埋設されていた。口縁部には四単位の山形突起を有し、胴部には縄文LRが施される。
【堆 積 土】土器内は黒褐色土の単層である。
【伴出遺物】埋納物はない。
【小　結】埋設された土器の特徴から、後期末葉～晩期初頭の遺構である。

（笹森）

第28号土器埋設遺構（SR28　遺構図28、写真60、遺物図16-6）
【位置・確認】Ⅳ Q-45グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、やや土器より大きめの掘方を有していたものと思われる。6は埋設土器本体で逆位に埋設されていた。胴部下半から底部を欠く。
【堆 積 土】土器内は黒褐色土の単層で、掘方埋土は暗褐色土を主体とする。
【伴出遺物】やや大きめの礫が1点、土器内から出土しているが、混入したものと判断している。
【小　結】埋設された土器の特徴から晩期初頭の遺構である。また、土器の外面付着炭化物について放射性炭素年代測定を行い、測定結果は2,950±20yrBPである。

（笹森）

第29号土器埋設遺構（SR29　遺構図28、写真60,61）
【位置・確認】Ⅳ R-46グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われる。口縁部を欠く粗製深鉢が正立状態で埋設されていたものと思われるが、土器は遺物取り上げ時に他の出土遺物に混在した可能性が高く行方不明となり、整理段階でも発見することはできなかった。
【堆 積 土】土器内の堆積土は3層に分層され、いずれも黒褐色土を主体とする。
【伴出遺物】埋納物はない。
【小　結】後期後葉～晩期の遺構と考えられる。

（笹森）

第30号土器埋設遺構（SR30　遺構図28、写真61、遺物図16-7）
【位置・確認・重複】Ⅳ T-49・50グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。重複する遺構はないが、群集する土器埋設遺構の一つで、3m圏内にSR31～33が存在する。
【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できなかった。粗製深鉢(7)が倒立状態で埋設されていた。埋設当初から底部が欠失していたかどうかは不明である。遺存状況が悪く、接合が進まなかったため破片で提示している。
【堆 積 土】土器内は黒褐色土の単層である。
【伴出遺物】埋納物なし。

【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(岡本)

第31号土器埋設遺構（SR31　遺構図28、写真61、写真195-20）

【位置・確認・重複】ⅣS-49グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。重複する遺構はないが、群集する土器埋設遺構の一つで、3m圏内にSR30・32・33が存在する。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できなかった。底部を欠く粗製深鉢が正立状態で埋設されていた。口縁破片は見当たらないが、埋設当初から口縁を欠失していたかどうかは不明である。本体の摩滅や劣化が激しく接合・復元できなかったため、写真のみを掲載した(20)。外面に縄文LRが施され、煮沸に用いられた痕跡がある。

【堆　積　土】土器内は黒褐色土の単層である。

【伴出遺物】土器内でミニチュア土器の破片（遺物図192-2）が出土したが、混入したものと判断している。

【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(岡本)

第32号土器埋設遺構（SR32　遺構図28、写真61、遺物図16-8）

【位置・確認・重複】ⅣS-49グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。重複する遺構はないが、群集する土器埋設遺構の一つで、3m圏内にSR30・31・33が存在する。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できなかった。底部を欠く粗製深鉢(8)が正立状態で埋設されていた。遺存状況が悪く、接合が進まなかったため破片で提示している。

【堆　積　土】土器内は黒褐色土の単層である。

【伴出遺物】土器内で自然礫が1点出土しているが、混入したものと判断している。

【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(岡本)

第33号土器埋設遺構（SR33　遺構図28、写真62、遺物図16-9）

【位置・確認・重複】ⅣT-49グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。群集する土器埋設遺構の一つで、3m圏内にSR30～32が存在する。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】掘方は確認できなかった。底部を欠く粗製深鉢(9)が正立状態で埋設されていた。土器の劣化が激しく接合が進まなかったため、破片のみを掲載した。

【堆　積　土】土器内は黒褐色土の単層である。

【伴出遺物】土器内から微細剥片が1点出土しているが、混入したものと判断している。

【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

(岡本)

第34号土器埋設遺構（SR34　遺構図28、写真62、遺物図16-10）

【位置・確認】ⅣS-44グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に確認した。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われる。口縁部及び胴部下半から底部を欠く土器(10)が正位に埋設されていた。口縁部が埋設当初から欠失していたかどうかは不明である。

【堆　積　土】土器内は黒褐色土の単層である。

【伴出遺物】土器内からやや大きめの礫が数点出土しているが、混入したものと判断している。

【小　結】埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

（岡本）

第35号土器埋設遺構（SR35　遺構図28、写真62、遺物図16-11・12）

【位置・確認】ⅣR-44グリッドに位置し、Sec3内でⅢ-8層掘削中に確認した。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われる。胴部下半から底部を欠く土器(11・12)が正位に埋設されていた。

【堆　積　土】土器内の堆積土は2層に分層され、共に黒褐色土を主体とする。

【伴出遺物】土器内から比較的大きめの偏平礫が2点出土しているが、遺構に伴うものかどうかは不明である。

【小　結】検出層位から、後期末葉～晩期の遺構である。

（笹森）

第36号土器埋設遺構（SR36　遺構図28、写真62）

【位置・確認】ⅣS-44グリッドに位置し、Sec3内でⅢ層最下層を掘削中に確認した。

【掘方・土器埋設状況・埋設された土器の状態】土層断面から、ほぼ土器に沿った掘方を有していたものと思われる。口縁部および胴部下半から底部を欠く土器が正位に埋設されていたものと思われるが、埋設当初から口縁を欠失していたかどうかは不明である。土器は劣化が激しく図化できなかった。写真掲載もしていない。粗製深鉢で、縄文LRが施されている。外面にスス、内面にはコゲが見られることから、煮沸に用いられていたものと思われる。

【堆　積　土】土器内は黒褐色土の単層である。

【伴出遺物】埋納物はない。

【小　結】確認層位および埋設された土器の特徴から、後期後葉～晩期の遺構である。

（笹森）

第2節 出土遺物

1 遺物の出土状態

2003年調査について 今回の報告範囲には2003年調査区のほぼ全体が含まれているため、当時の調査について説明しておきたい。この調査の報告は2006年になされており(青埋文編2006)、以下既刊報告書とする。調査地点やグリッド呼称の対応は図Ⅵの通りである。2003年調査では川原平(1)遺跡の範囲をC区としていた。調査はC区トレンチ01(以下トレンチとする)部分とND-176以西の9箇所のグリッド部分(4×4mの調査。以下グリッド調査とする)に分かれる。トレンチ調査は基本的に重機掘削、グリッド調査は人力で行っている。トレンチ調査では表土にあたるⅠ・Ⅱ層を重機で除去した後、包含層であるⅢ層も重機で掘りあげ、地山を露出させた。その後一部残っている包含層の最下部と地山面をジョレンがけして地山を掘り込む遺構の有無を確認し、トレンチの土層断面を記録して調査を終了した。排土はトレンチの脇に積んであり、トレンチの埋め戻しはしていない。地山面のジョレンがけに前後して排土中の黒色土に多量の遺物が含まれていることが判明したため、排土から遺物の回収を行った。たまたまグリッドラインに沿った1グリッド幅のトレンチであり、排土はトレンチ脇の北側に積んであったので、遺物が見つかった場所のすぐ南側のグリッドを遺物が本来あった場所ということにして出土位置とした。例えばND-166の北側に置かれた排土で見つかった遺物はND-166・Ⅲ層出土としたのである。遺物包含層はⅢ層のみであり、遺物が本来あった場所と排土の場所はそれほど離れていないとはいえ、発掘調査の報告として掲載遺物が排土から回収されたものであることを記さなかったことは誤りである。なお、包含層最下部の一部の遺物は排土回収ではないはずだが、どれが排土回収品で、どれがⅢ層から取り上げたものであるかは報告時点では不明となってしまった。このため、トレンチにかかる範囲(既刊報告書で出土位置がND-156～174・C区トレンチ01とされているもの)で出土した遺物は、本来の出土状態が分からない排土回収品として扱わざるを得ない。また、排土遺物すべてを回収しきれたわけではないため、胴部下半から底部の接合率が低くなっている。掲載にあたっては明確な基準を定めていなかったため、実際は出土している晩期後半の土器や粗製土器が掲載されていない。晩期後半の土器についていえば、既刊報告書第3章で付着物の放射性炭素年代測定を行っている大洞C2式に相当する土器(試料A0MB-44)は図化されていない。

トレンチ出土遺物が排土回収品であることを明記していないため、報告書掲載遺物を扱った論文で誤解を生じている例が明らかとなっている。鈴木克彦氏は、既刊報告書の土偶3点(409集図18-1・3・5)について「図27の後期末葉とした土偶(1～3)は、青森県西目屋村川原平遺跡から出土した一括資料」(鈴木克2015:89ページ)としているが、これら3点はいずれもトレンチで出土しているため、原位置は押さえられておらず、共伴する土器も不明で一括資料とは言いがたい。鈴木氏に誤解の責任はなく、報告書の不備によるものであるため、ここで改めて説明を加えた。

グリッド調査はすべて人力で掘削しており、遺物の取り上げは通常の発掘調査の方法で行い、遺構らしい場所(NJ-180配石1・2など。配石1・2はそれぞれ本報告のSQ1・2である)は確認のみにとどめた。報告書には写真2・3で遺物の出土状態も掲載されており、完形で出土した注口土器があることや、その場でつぶされたように出土した深鉢のあることが知られる。

今回の報告にあたってトレンチと周辺グリッド出土土器との接合も試みたが、既刊報告書に掲載さ

れた実測図を作成し直すような接合例はなかった。掲載土器で2003年出土土器と接合したものは、図83-11・117-16などわずかであり、同一個体の破片はそれほど広範囲には散布していないのであろう。

遺物の分布　今回報告範囲におけるグリッド別の土器・石器分布状況は、図④が土器、図⑤が剥片石器であり、表5-5・5-6にそれぞれの重量を数値で示した。この重量は遺構として取り上げたもの以外を合計しており、Ⅲ層だけでなくⅠ・Ⅱ層を含んだものである。土器重量は接合前の状態でグリッドごとにキログラム単位で計量しており、ブロックやセクションベルト出土分は該当するグリッドに算入している。0.1kg未満の出土量に対しては0の数字を割り振った。未記入のグリッドは土器が出土していないことを表す。土器は合計で5000kgを超える量が出土している。土器が多く出土するグリッドは、調査区北西からC区トレンチ01を通り北東にかけて弧状に分布している。各グリッドの出土量を比較すると、土器が集中するグリッドとそれほど出土しないグリッドの差が極めて大きいことが読み取れる。1グリッドで最大の出土量を示したのは、175.7kgを出土したⅣS-35グリッドである。剥片石器重量は製品と剥片の合計であり、石核や石核転用礫石は除いている。重量はキログラム単位で表示しており、0.1kg未満の出土量に対しては0の数字を割り振った。未記入のグリッドは剥片石器が出土していないことを表す。剥片石器は合計で1000kgを超える量が出土している。1グリッドで最大の出土量を示したのは、36.3kgを出土したⅣS-48グリッドである。剥片石器の分布はおおむね土器と同じといってよい。調査時の印象では、土器が出土しない場所でも剥片は一定量が出土していたようであったが、図化するとそのような印象は根拠のないものであった。土器の出土量が1kg未満のグリッドの一部で石器重量が土器を上回っているので、そのようなグリッドが強く印象に残ったのであろう。なお、Ⅰ層に含まれる量は土器より剥片石器の方が多かった。土器重量には第3節で示した十腰内Ⅳ群以前の土器を含むが、今回報告範囲の出土土器は後期7-4期から晩期の土器が圧倒するので、この分布は後期7-4期以降の分布の傾向を示しているものと考えて問題はない。石器や土製品・石製品についても土器と同じ時期と考えて差し支えない。

区域区分　土器掲載のための区域区分は図⑥に示し、区分の根拠は下記の通りである。旧地形では区域B・Eがそのほかの区域に比べてやや低い場所に位置している（図Ⅵ参照）。これは掲載にあたっての便宜的なものである。2003年トレンチや調査過程の区切りとしたセクションベルト（Sec2・3）、土器の分布状況（図④）、微地形から区分している。なお、十腰内Ⅳ群以前の土器は、区域を区分せず一括掲載している。

区域A：遺物が多量に出土する範囲のうち、2003年トレンチより南側。
区域B：遺物が多量に出土する範囲のうち、37グリッド列から西側。
区域C：遺物が多量に出土する範囲のうち、2003年トレンチより北側、Sec2・Sec3ベルトの西側。区分上ベルトを含んでいるが、遺物の掲載はベルト部分は別になっている。
区域D：遺物が多量に出土する範囲のうち、2003年トレンチより北側、Sec2・Sec3のベルトの東側。
区域E：遺物が多量に出土する範囲から外れる西側の範囲。
区域F：遺物が多量に出土する範囲から外れる東側の範囲。Ⅲ層の発達が弱く、水田造成の際に削平された可能性がある。

出土状況　青森県内ではこれまで出土数が限られていた瘤付土器後半～晩期初頭の土器がまとまっていることや、復元率の高い土器が多いため、接合にはできる限りの時間を割いた。土器だけで段ボール700箱以上が出土しており、整理作業員の不足もあって接合には2年近くを費やした。グリッドをま

たぐ接合は十分に行えなかったが、ほとんどの遺物は出土した近辺での接合にとどまる。土器の半分が欠けているものは、広く探しても接合破片を見つけることはほとんどできなかった。注口土器は注口部を欠失するものが多く、他のグリッドで単体で出土した注口部との接合も試みたが接合することはなかった。このことから、完形土器を特定の場所に集めて壊したのではなく、壊れたものを持って来て捨てるという廃棄行為を想定できる。土器が多く出土する場所では石器などその他の遺物も多く出土しており、特定の遺物を集中して捨てているわけではないようである。また、複数個体の土器が折り重なるように出土した例は少なく、遺物が多い場所では包含層自体も厚く堆積している。遺物と同時に多量の土砂や自然石も捨てられた様相が窺える。完形に近く復元できる土器が多数あることから、一度堆積した包含層は後代にそれほどの撹乱を受けていないと考えられる。器表面が摩滅した土器とそうでないものの差が大きく、廃棄後に地表に露出している期間が長かったものは摩滅が進み、土とともに捨てられたり土をかぶせられるなどで外気に触れにくかったものは器面の残存状態がよいのではないかと思われる。乾燥した遺跡から出土することの少ない漆製品が多数出土していることも、外気に触れにくい状態で捨てられる遺物があったことを想定させる。

2011年調査では、Sec1～Sec3としてセクションベルトを残した部分以外は、包含層を一括でⅢ層として取り上げている。土器には取り上げた日付を注記しているので、取り上げ日が早い方が相対的に出土標高も高いことが想定されるが、絶対ではない。セクションベルトの部分や、取り上げ番号を付けて出土座標を記録したものでしか出土標高の上下関係は押さえられない。セクションベルトの部分では大規模な撹乱はみられず、型式的に古い土器がより下部から出土している。細かく取り上げればその他の場所でも上下関係は押さえられたはずだが、調査期間や配置人員等の制約もありより細かな調査方法を採用することはできなかった。2013年調査では、土器が集中する範囲に対して「ブロック」の名称を与えて取り上げている。現地で視認できた集中範囲を表すものであって、一回の廃棄単位を捉えてブロックとしているわけではない。

掲載方法　今回の報告範囲において縄文時代の包含層はⅢ層のみであり、包含層中での上下はセクションベルト部分でしか区分できていない。遺物は本来層ごとに掲載すべきものであるが、その層が細かく掴めていない。しかし、Ⅲ層として一括するには報告範囲が広すぎる。このため包含層遺物の掲載にあたっては一貫した方針をとらず、遺物ごとに異なる掲載方法をとった。土器は同一個体の接合範囲が狭い範囲に収まることが分かっているため、調査区を前述したA～Fの6区域に区分した上でグリッド別に掲載する。石器類は後期後葉～晩期のなかで劇的に組成や製作技術が変化する見通しがないため、包含層出土分を一括して器種ごとに提示する。土製品・石製品・その他の遺物は掲載単位を細かくすると検索が困難になると思われるため、遺構出土分を含めて種類別に提示し、必要に応じて遺構やブロック、セクションベルト、あるいはグリッド出土土器の項で触れることとした。

まとまりのある資料　下記の地点では時期的にまとまりのある土器が出土した。掲載土器すべてが一括資料というわけではなく、詳細は地点ごとに記載している。晩期2期、晩期5期については一括性の高い出土状況は確認できなかった。

後期7-4期：Ⅳ0･P-43、ⅣR-47、ⅣS-49風倒木

後期8期：ブロック09、ブロック旧SI03、ⅣP-44、ⅣP-45(土偶を含む)、ⅣT-34

後期7-4～後期8期：ⅣQ-46

晩期1a期：ブロック07、Ⅳ0-42、Ⅳ0-44

区域A
区域B
区域C
区域D
区域E
区域F
0
40m
0kg～
10kg～
25kg～
50kg～
75kg～
100kg～
125kg～
150kg～
175kg～

図④ 重量分布（土器）

表5-5　グリッド別土器出土重量（数字はkg）

	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42
X																		
W							29.3	20.4	4.6									
V						17.8	15.4	28.0	49.3	14.5								
U					14.0	100.7	2.5	22.8	100.4	130.0	27.4	2.2						
T				0.8	9.8	0.5	1.1	5.8	45.1	166.3	90.2	13.0	0	0	0.3		0.1	0.2
S			10.0	1.9	0.3	0.8	1.3	6.4	28.3	131.3	175.7	57.9	6.4	4.2	4.4	4.8	5.2	3.2
R		0	0.3	0.1	0.4	1.0	0.1	0.4	6.8	39.3	110.0	90.8	33.0	8.8	13.1	20.1	21.0	38.9
Q		0	0	0.1	0.2	0	0.1	0.3	4.7	5.6	29.4	52.2	67.4	30.7	14.2	26.0	38.3	64.4
P	0.1	0	0	0	0.1	0	0.1	0	0.8	0.2	2.8	9.5	15.9	5.0	13.7	20.8	18.7	33.2
O			0.1			0		0	0		0.1	15.5	18.7	9.1	14.8	36.8	60.5	84.0
N						0					0.2	2.8	2.5	3.8	20.9	49.5	27.7	27.9
M								0				0.2		2.6	20.7	3.8	4.6	0.2
	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42

	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	
X																			X
W																			W
V																			V
U							0			5.6	3.1	5.5	8.2	8.0					U
T	1.0	9.9	5.9	5.5	14.2	25.9	68.0	28.1	25.5	18.3	8.9	5.5	1.3	7.4					T
S	27.6	50.2	41.4	54.4	78.0	147.2	125.7	63.8	16.7	13.5	5.0	2.3	1.0	0.5	1.5	0			S
R	49.2	54.7	112.8	125.0	105.3	88.6	139.5	47.9	7.3	1.0	0.5	0.9	0.2	1.3	1.9	0			R
Q	62.5	59.4	128.4	71.9	42.0	44.6	55.4	18.9	3.3	0.1	5.2	0.8	0.1	0.5	0.2	0.2	0		Q
P	36.0	40.6	36.9	11.2	16.2	0.1	1.9	8.6	0.7	0.4	0.5	0.6		0.2	0	0	0.3		P
O	98.3	106.5	95.9	42.6	14.2	1.4	0.6				0.3	0.9	0.2	0.7	0	0			O
N	57.5	125.7	27.5	24.1	2.1	0.3	0			0		0.4	0.2		0.1	0.1		0	N
M	0.3	1.5	5.3	4.1	3.8	4.8	0	0		0		0.2	0	0.8	0.2		0	0.4	M
	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	

SI03	30.3 kg	Q42に含む
SQ19	8.1 kg	R35に含む
ブロック07	28.4 kg	R34、S33・34、T33・34に含む
ブロック08	11.1 kg	U34、V34に含む
ブロック09	19.2 kg	T33・34、U33・34に含む
ブロック11	50.1 kg	S34・35、T34に含む
ブロック12	30.2 kg	S34・35、T34・35に含む

図⑤　重量分布（剥片）

表5-6　グリッド別剥片出土重量（数字はkg）

	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	
X							0.5																													X
W						9.9	4.1	2.2	0.5																											W
V					15.8	5.8	7.1	7.3	5.3																											V
U				20.1	36.2	0.6	5.2	13.9	16.3	3.6	0.2												0			0.3	0.4	0.8	1.9	1.3					U
T			3.4	23.0	0.6	1.6	2.4	4.1	20.8	14.8	1.9	0.3	0.4	0.1	0	1.5	0.6	2.5	9.3	0.3	1.9	9.1	6	14.5	0	6	7.3	3.3	2.1	0	3.7					T
S		0.5	3.5	1	0.8	1.5	2.7	3.7	18.1	25	9.8	2.4	6.9	6.1	1.7	3.1	3.5	9.4	21.5	9.2	10.9	12.8	36.3	19.8	7.2	2.6	3.5	1.1	0.8	0.6	0.6	1.1	0			S
R		0.3	0.1	0.5	0.9	0.2	0.1	3.7	3.1	10.3	8.9	7.4	6.1	4.8	4.7	5.6	7	2.3	9.1	20.6	13.9	15.5	13.4	24.2	12.2	2.9	0.4	0.3	0.2	0	0.4	1.8	1.1			R
Q		0.1	0	0.3	0.4	1.1	0.7	2.4	2.7	4.7	5.9	11.3	3.2	4.4	7.7	11.9	10.2	6.1	13.1	20.7	11.7	7.3	9.6	7.5	21.6	2.5		0.5	0.6	0.1	1.7	0.1	0.2	0.3		Q
P	0	0.1		0.1	0.4	0.2		0.6	0.3	0.7	1.8	3	1.6	1.8	1.8	4.8	6.1	5.3	7	4.3	1.7	0.8	0.1	0.4	8.3	0.5	0.2	0.2	0.2		0.1	0	0.2	0		P
O		0.2	0	0	0	0	0	0.2	0	0.3	2.5	3.7	2.3	3.5	8	16.4	11.9	13	25.5	12.3	6.3	7.2	0.8	0.4	0.3		0	0	0.3		0.1	0	0			O
N					0			0		0	0	1.1	2.1	3.3	8.6	7.8	10.9	21.4	26.1	19.4	7.4	4.9	0.7	0.2	0.1	0.2	0			0.1		0	2.2	0		N
M											0.8	0.1	4.2	3.6	0.1	0.9	1.3	0.3	1.2	0.9	4.3	4.7	2.5	0.1	0.1	0.1	0.8		0	0	0.1		0	0	0.1	M
	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	

晩期1b期：ⅣM-39
晩期3期：Sec2-Ⅲ-7層、ⅣN-44、ⅣN-45・46、ⅣO-45
晩期3期～晩期4期：ⅣR-42、ⅣR-43、ⅣR-44、ⅣS-44

遠距離接合の事例　「ほとんどの遺物は出土した近辺での接合にとどまる」と先述したが、少量の遺物は数十メートル離れた地点で出土したものと接合する。図⑦では接するグリッド以外で出土した遺物同士が接合したものを「遠距離接合」として、実際の接合状況を示した。多量の遺物が出土した範囲内(区域A～D)で出土した遺物同士の接合が多いが、一部は今回報告の範囲外で出土したものと接合する。図ではすべての事例を示したわけではないが、出土量からみると遠距離接合の事例は極めて少ない。離れた地点で同一個体の遺物が出土する理由については、現段階で十分に検討できていないが、調査区内の高低差や出土地点間の距離を考えると流水等の影響で自然に移動したものではない。なお、今回報告範囲以外の場所で出土した破片と接合する遺物については、整理中のものもあり全容を把握できていない。接合後の実測図は次年度に刊行する報告書で掲載する予定である。

・土器(図21-2)：今回報告の範囲内で出土したものは比較的近い場所(ⅣS-34、ⅣT-35、ⅣU-34)で出土しており、二面の顔を確認していた。2014年に調査したⅤK-34、ⅤL-44(いずれも北捨場)で一面ずつ別の顔が出土し、接合している。北捨場で出土した破片は、やや器表面が摩滅している。
・土器(図81-8)：ⅣU-35とⅣV-33で出土した。ⅣV-33で出土した破片は器表面が摩滅し、色調は明褐色である。
・土器(図27-10)：残存度は胴部の1/2である。ⅣR-36とⅣO-43で半分ずつが出土し、接合した。器表面の摩滅や色調に差異はない。
・土器(図77-3)：ⅣR-48とⅣU-34で出土した破片が接合し、器表面の摩滅や色調に差異はない。
・土器(図82-8)：ⅣQ-41・49、ⅣS-49、ⅣT-49に分散しているが、ⅣS-49で最も多く出土した。器表面の摩滅や色調に差異はない。
・土器(図102-6)：ⅣR-47・48、ⅣT-51で出土した破片が接合し、器表面の摩滅や色調に差異はない。
・石斧(図163-5・6)入稿後に判明したので図⑦には示しておらず、接合後の実測図は掲載していない。ⅣP-29で出土した基部とⅣR-49で出土した身～刃部が接合して完形となる。ⅣP-29グリッドは多量の遺物が出土する範囲から外れた場所にあり、他の遠距離接合の事例とはやや様相が異なる。器表面の摩滅や色調に特に差異は認められない。
・土偶(図185-2)：左腕がⅣQ-46、右肩がⅣW-32、胴部がⅣR-36と広範囲に散布している。胴部前面は他の部分より摩滅している。後期末葉の土偶と考えられ、後期末葉の土器は各部位が出土したどのグリッドでも出土している。
・土玉(図191-5)：貫通孔の部分で破損しており、ⅣV-33とⅣQ-45で出土したものが接合し完形となる。器表面の摩滅や色調に特に差異は認められない。
・石棒(図200-5)：ⅣW-31とⅤO-24で出土したものが接合し、完形となる。ⅤO-24は斜面下の西捨場である。図200-5はⅠ層で出土したもので、西捨場で出土した部分より器表面がやや風化している。
・石棒(掲載外；特-15、S-168)今回報告範囲内のⅣQ-41、ⅣS-48で出土していたものとⅤM-38(北捨場)で出土したものが接合した。本報告書に図は掲載していない。　(岡本)

図⑥　区域区分図

※図21-2、図200-5、掲載外石棒は今回の
報告範囲外にも接合、接合後の図は未了。
※石棒
(図200-5)
※土器(図21-2)
土偶(図185-2)
土器(図102-6)
土製(図191-5)
※石棒
(掲載外；特-15・S-168)
土器(図82-6)
土器(図81-8)
土器(図27-10)
土器(図77-3)
分布の主体はIVS-49
VK-34
VL-44
VM-38
VO-24
0
40m

図⑦　遠距離接合の例

2　土器集中域(ブロック)について

2013年調査では、土器が集中して出土した範囲に対して「ブロック」という名称を与えて遺物を取り上げた。見かけの上で土器が集中しているため一括性が高いのではないかと考えてブロックとしたものであり、一括して廃棄されたものだと考えたわけではない。ブロックとして取り上げた遺物には土器以外も当然含まれているが、一括廃棄でないのであればこれらはたまたま近くで出土したに過ぎず、土器以外の遺物からは時期的な検討が難しいためこの項では土器のみを扱うこととした。土器のみを扱うという意味で、報告にあたって項目名を「土器集中域」とした。調査ではブロックという用語しか用いていない。本書で取り上げていないブロック番号は今回の報告範囲外に属すため、来年度以降に刊行される報告書に掲載する。また、ブロック旧SI03は2011年調査のSI03である。SI03は建物跡と認定できなかったため遺構番号としては欠番としたが、遺物が集中していたことは確かなので本項で取り上げるものである。

ブロック07（図⑧、写真63、遺物図17-1～10）

[位置・確認状況・規模・形状]Ⅳ T-34杭付近を中心に、Ⅳ R-34、Ⅳ S-33・34、Ⅳ T-33・34グリッドにまたがる。Ⅲ層掘削中の早い段階で、完形に復元できそうな個体が近接して複数出土する状況を確認した。確認日は5月22日である。隣接するブロック11より確認日が早く、本ブロックの形成時期が早いと考えられる。Sec7では本ブロックがⅢ-2層に含まれ、ブロック09・11がⅢ-10層上面にあたることから新旧関係が裏付けられる。本ブロックとしてまとめた範囲は、6．7×3mの範囲に不整楕円形に広がる。

[堆積土]Sec5の西端で断面にかかっており、堆積の厚さは20cmほどである。小型の自然石が多量に含まれる黒褐色土を主体とし、遺物はその中に点々と出土する。取り上げ層位は、「ブロック07」と「ブロック07下層」としている。ブロック07を取り上げた下部から出土したものをブロック07下層としたが、明確に線引きできるわけではないので一括して掲載している。

[出土遺物]復元可能な土器はブロックの北側で多く出土した。掲載遺物は遺物図17で、個体ごとの出土位置は図⑧で示した。復元実測可能な個体を図示した。掲載外の口縁部は46点、底部は48点ある。17-5は小片で摩滅しているが、粗製土器の器形に文様が描かれたもので本遺跡の後期8期に特徴的な土器である。1・2・4・6は晩期1a期に属する。残存度が高く本ブロックの主体となる時期である。3は晩期1b期のものである。7～10は粗製土器である。有文土器と同じく晩期初頭の所産であろう。7・9・10は底部が高台状で、後期後葉～晩期初頭に特徴的な作りである。なお、ブロック07下層の掲載外破片に晩期中葉の浅鉢が1点含まれるが、本ブロックの堆積土に接してSec5-A・B層のように上部から切り込む堆積土が認められるため混入と判断したい。

4点の土器について放射性炭素年代測定を実施しており、測定結果は下記のとおりである。詳細は来年度以降に刊行される報告書に掲載する。1(KAWA(1)-54)：2，945±20yrBP、2(KAWA(1)-36)：2，930±20yrBP、4(KAWA(1)-38)：2，930±20yrBP、6(KAWA(1)-52)：2，910±20yrBP。

[小結]残存度の高い有文土器から、晩期初頭のまとまりと考えてよい。5のように古い土器が混じるのは問題ないが、3のようにやや新しいと考えられる土器も含まれている。土器とともに多量の自然石

が出土しており、遺物とともに石を含む土砂が廃棄された状況が窺える。

ブロック08（図⑨、写真64、遺物図17-11～13）

［位置・確認状況・規模・形状］ⅣV-34杭付近を中心に、ⅣU-33・34、ⅣV-33・34グリッドにまたがる。Ⅲ層掘削中に黄褐色の土を含んだ自然石の集中する範囲として確認され、ブロックとして認定した。確認日は6月5日である。完形に復元できそうな個体は当初から少なかった。隣接するSI101の範囲外にあたる。SI101の構築によって東側は破壊された可能性があり、本ブロックはSI101より古い。ブロック09とは同一標高で併存する。本ブロックとしてまとめた範囲は、2.8×3.5mの範囲に不整円形に広がる。

［堆積土］やや大型の自然石が多量に含まれる黄褐色土・黒褐色土を主体とし、遺物はその中に少量含まれる。断面図は作図していない。取り上げ層位は、「ブロック08」と「ブロック08下層」としている。ブロック08を取り上げた下部から出土したものをブロック08下層としたが、明確に線引きできるわけではないので一括して掲載している。17-12・13は上部の石を除去したところで出土したものである。

［出土遺物］復元可能な土器は3点出土し、遺物図17に掲載した。個体ごとの出土位置は図⑨で示した。11は後期7-4期の深鉢、12は後期8期の注口である。13は12と同じ地点で出土しており後期末葉の粗製深鉢と考えられる。掲載外の口縁部は24点あり、このうち5点が有文土器ですべて後期7-4期に属す。底部は20点ある。

［小結］遺物は少なく自然石を多く含むため、土砂を主体に廃棄されたものと考えられる。伴う土器から後期末葉の廃棄単位であろう。

ブロック09（図⑩、写真65、遺物図18）

［位置・確認状況・規模・形状］ⅣU-34杭付近を中心に、ⅣT-33・34、ⅣU-33・34グリッドにまたがる。Ⅲ層掘削中に自然石と土器の集中する範囲として確認され、ブロックとして認定した。確認日は6月5日である。SI101と重複するが、本ブロックはSI101より古く、検出面も低い。ブロック08とは同一標高で併存する。本ブロックとしてまとめた範囲は、2.3×3mの範囲に不整円形に広がる。

［堆積土］自然石を多く含む暗褐色土である。断面図は作図していない。Sec7-Ⅲ-10層上面にあたる。

［出土遺物］復元可能な土器を遺物図18に掲載した。個体ごとの出土位置は図⑩で示した。3・4・7は同一標高で接して出土した。1は後期7-4期の深鉢、2・3・5が後期8期に属す。4・6は晩期1a期と考えられる。7は粗製深鉢で後期8期の可能性が高い。掲載外の口縁部は38点、底部は15点ある。有文土器は12点含まれ、晩期1b期を含まない。共伴する炭化材や漆の年代測定を現在委託中である。

［小結］後期末葉のまとまりと考えられ、やや新しい様相の土器を少量含む。

ブロック11（図⑪、写真66、遺物図19）

［位置・確認状況・規模・形状］ⅣS-34グリッドを主体に、ⅣS-35、ⅣT-34・35グリッドにまたがる。Ⅲ層掘削中に土器の集中範囲として確認し、ブロックとして認定した。確認日は6月13日である。ブロック12との境界は明瞭でなく一部で重複する。本ブロックとしてまとめた範囲は2.6×4mの帯状に広がり、南端はセクションベルトに重なって遺物の広がりを追えなくなってしまった。

[堆積土]Sec7-Ⅲ-10層の上面に多数の土器が貼り付くような状態であり、自然石は少ない。ブロックとしての断面図は作成していない。

[出土遺物]復元可能な土器を遺物図19に掲載したが、出土量の割に復元された個体は少ない。個体ごとの出土位置は図⑪で示した。1・6が後期、2・8～12が晩期1a期、3が晩期1b期に属す。4・5・7は晩期1期であるが細別できず、13は粗製深鉢である。本ブロックで出土した破片とSecで出土した破片が接合したものはSecの項で掲載しており、35-7、37-5・6がこれにあたる。いずれも後期の土器である。35-7はSec5-Ⅲ-5層出土破片と接合している。37-5・6はSec7-Ⅲ-10層出土破片と接合しており、5はブロック12とも接合関係がある。掲載外の口縁部は37点、底部は23点ある。有文土器は20点含まれるが晩期1b期を含まないため、同時期の土器は混入の可能性がある。

[小結]層位としてはブロック12より古いが、遺物はブロック12より新しいものが多い。やや時期幅があり、一括性は低い。共伴する炭化材と焼骨の年代測定を現在委託中である。

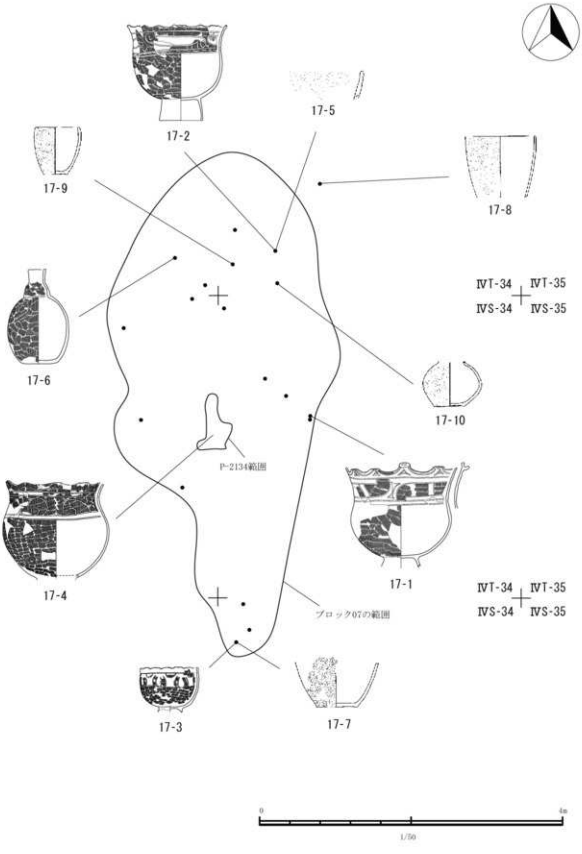
ブロック12（図⑫、写真67・68、遺物図20・21）

[位置・確認状況・規模・形状]ⅣS-35、ⅣT-34・35グリッドにまたがり、1.5×6.3mの帯状に広がる。周辺のⅢ層を掘り下げて行く中で最後に遺物が集中する場所として残った範囲である。ブロックとしての認定は7月4日である。SI101と重複するが、確認位置は床面より下であり、本ブロックが古い。ブロック11と一部で重複する。Sec7ではブロック11の確認面より上位に位置するが、ブロック11と12はそれほどの時間差を持つものではないと考えられる。

[堆積土]堆積土はSec7-Ⅲ-9層にあたり、自然石を含む暗褐色土である。一部の土器片はSec7-Ⅲ-7層でも出土している。

[出土遺物]復元可能な土器および特徴的なものを遺物図20・21に示した。個体ごとの出土位置は図⑫で示した。20-1・4・11が後期7-4期、20-2・3・6・7、21-1・2が後期8期、20-8が後期のうちに収まるもの、20-12・13が晩期1a期、20-9が晩期1b期、20-5・10が晩期1期である。粗製土器はあまり接合が進んだものはなかった。21-1は香炉である。内面にススが付着している。頂部突起は欠損し、体部外面に数カ所の円形剥落がみられる。装飾に3面の人面表現がみられ、三叉文を含む透かしが施される。21-2は注口の口縁部と考えられる。人面表現の装飾があり、ブロック12付近で出土したものを図化している。実測後、ⅤK-35、ⅤL-44両グリッドでも接合する顔の破片が出土しており、推定される5単位のうち4単位の顔を確認している。21-3は内面に赤色顔料が付着しており、顔料精製に用いられた粗製深鉢である。伴う有文土器の時期から考えて、晩期初頭までには遺跡内で顔料精製が始まっていたことを示すものである。本ブロックで出土した破片とSecで出土した破片が接合したものはSecの項で掲載しており、37-5、38-4がこれにあたる。いずれも後期の土器である。37-5はSec7-Ⅲ-10層およびブロック11と、38-4はSec7-Ⅲ-9層と接合している。掲載外の口縁部は29点、底部は29点ある。有文土器は12点含まれるが晩期1b期を含まないため、同時期の土器は混入の可能性がある。Sec7で掲載した38-4について放射性炭素年代測定を行っている。測定結果の詳細は、来年度以降に刊行される報告書で掲載する。38-4(KAWA(1)-50):2,950±20yrBP。

[小結]層位としてはブロック11より新しいが、遺物はブロック11より古いものが多い。やや時期幅があり、一括性は低い。



図⑧ 土器の出土位置（ブロック07）

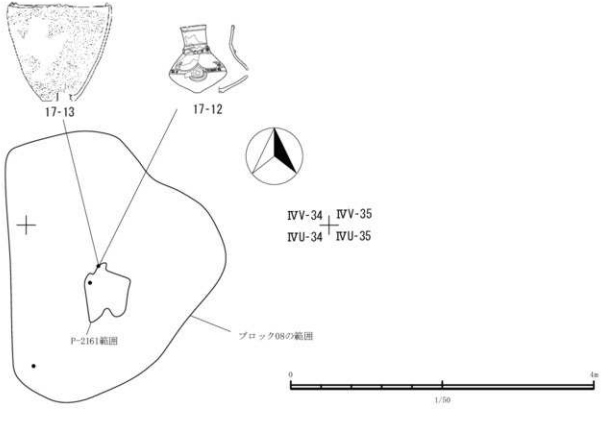
ブロック旧SI03（図⑬、写真69・70、遺物図22～24）

［位置・確認状況・規模・形状］ⅣQ-42グリッドに位置する。周囲のⅢ層に比べて堆積土が黒みを帯び、復元可能とみられる土器が多く確認されたため、SI03として調査を進めた。床面、炉、壁の立ち上がりおよび柱穴が確認できなかったため、最終的に遺構としては認定しなかった。直径約4mの円形に広がっていたと推定される。

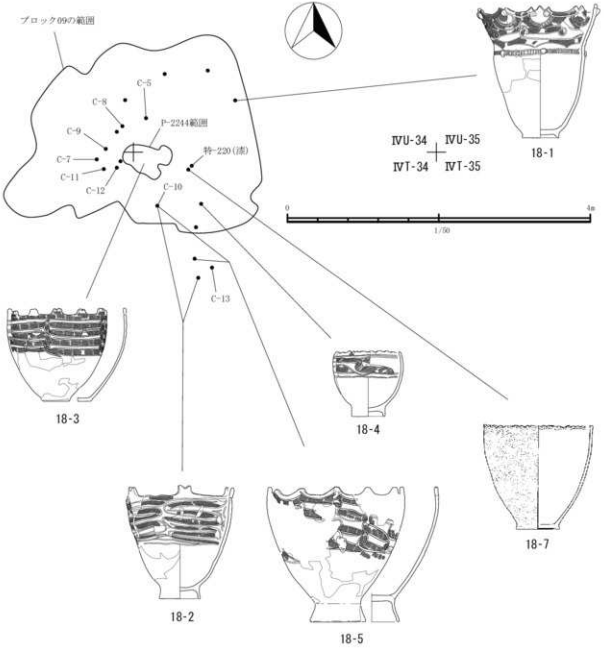
［堆積土］掘り込みを伴うわけではなく、黒褐色土が約20cmの厚さで堆積していた。上面では遺物が平面に貼り付くように多数出土し、下部では遺物量が減少する。晩期に属すと考えられる土器も後期末葉の土器と同じような状態で出土している。

［出土遺物］遺物図22～24に掲載した。個体ごとの出土位置は図⑬で示した。上層で取り上げた土器には晩期を含むが、2回目、3回目の取り上げ分には晩期を含まない。後期7-3期は22-3、24-10・11、後期7-4期は22-1・2、24-1・5、後期8期は22-4～7・9～11・15、24-3・4・13・14、このほか後期と考えられるものは24-2である。後期末葉～晩期初頭と考えられるものは22-12は晩期1a期、22-8は晩期1b期である。粗製土器は単独での時期判断が難しいが、伴う有文土器からみて後期末葉のものが主体であろう。写真197-8は内面に漆とみられる黒色物が付着しており、写真のみを掲載した。掲載外の土器破片数は数えていない。中空の土偶破片（図182-1）が出土しているが、晩期中葉頃の製品とみられ、混入の可能性がある。

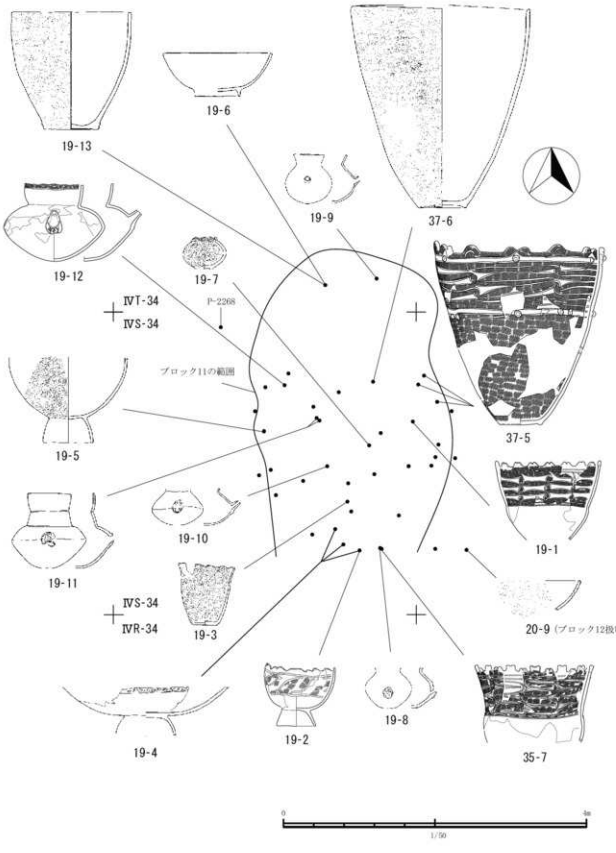
［小結］前後の時期を含むが、後期末葉の遺物が主体である。（岡本）



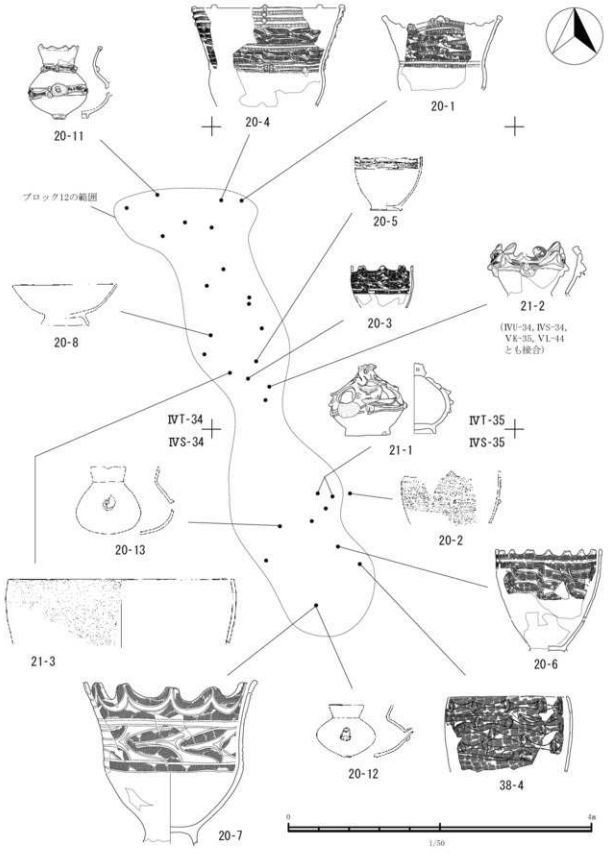
図⑨ 土器の出土位置（ブロック08）



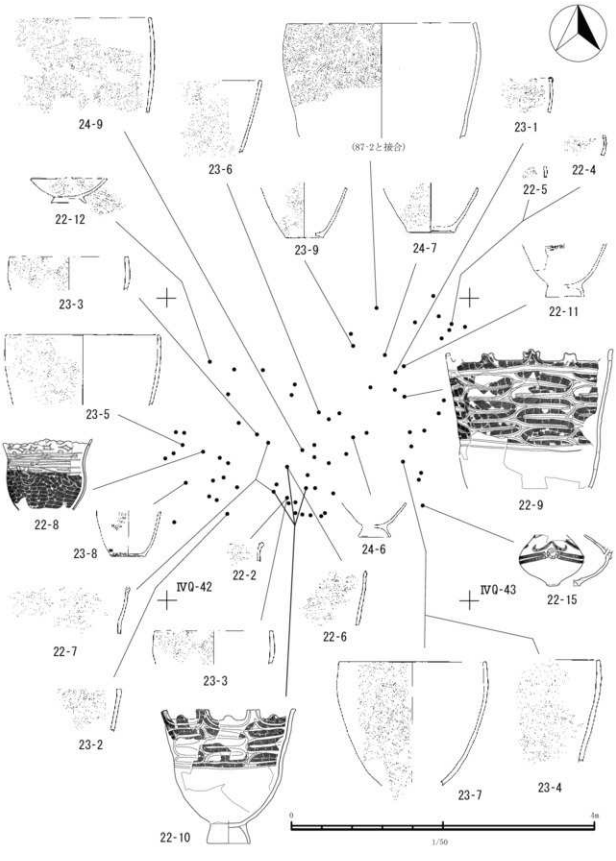
図⑩ 土器の出土位置（ブロック09）



図⑪　土器の出土位置（ブロック11）



図⑫　土器の出土位置（ブロック12）



図⑬　土器の出土位置（ブロック旧SI03）

3　剥片集中域について

Ⅲ層の中で剥片がまとまって出土した場所を「剥片集中域」として報告する。調査では剥片集中域という名称は使用していない。報告にあたって前項の土器集中域に対して剥片がまとまって出土したということが伝わるよう項目名を付けた。2013年調査の集中域2～4は部分的に剥片が集積された状況を示し、2011年調査の集中域1はやや広い範囲に剥片が散布している。そのため剥片が集中することとなった要因は複数あることが考えられる。土器集中域と異なり、剥片集中域は時間的にかなり限定された期間(具体的には一回の廃棄)で成立した可能性が高い。

剥片集中域1（調査時：SX01　図⑭、写真71、遺物図25-1～3、写真112・218）

[位置・確認状況]ⅣM・N-39グリッドに位置し、Ⅲ層掘削中に周囲より密に剥片が出土したため、SX01として調査を進めた。掘り込みを持たないことが明らかとなり、遺構ではないと判断した。

[規模・形状]遺構ではないので特に形状はない。1.1m×80cmほどの範囲から多くの剥片が出土した。目立つ剥片はできるだけ原位置を保ちながら検出したが、半数以上は検出過程で取り上げ、残すことができた剥片は番号を付けて取り上げた(図⑭)。

[堆積土]1・2層はⅢ層中の土色の違いで、この剥片集中域に伴う掘り込みは認められない。堆積土は土のう袋に集め、水洗により剥片を回収した。剥片は1層とした部分に多く含まれ、2層では量が減る。集中域が形成された当時の地表付近に散らばったものではないかと推定される。集中域内に礫も認められたが、明確に伴っていると判断できないのでグリッドで取り上げた。

[出土遺物]　石核7点に剥片をあわせ計1438.8gが出土した。剥片は数種類の母岩からなる。石器素材として本遺跡でよく使用される4cmを超える剥片は厚みがあるものや、礫皮に近い軟質部分があるものがほとんどである。2～3cmの剥片では、幅広の縦長剥片と横長剥片が多い。そのほかに長さが1cmに満たない砕片は630点出土しており、ほぼすべて水洗により回収されたものである。内訳は5mm以上が341点、4mm以上5mm未満が166点、3mm以上4mm未満が117点、2mm以上3mm未満が5点、2mm未満が1点である。写真の中央部に石核と接合資料をおいたが、石核には同一母岩と考えられるものがある。2点の剥片の接合資料(1)、石核(2)、剥片(3)を図示した。接合作業に十分な時間がとれなかったため、さらに接合可能と考えられる。剥片と一緒に回収した土器片は直接この集中域の形成に関わるものではなく、少量かつ小片のため図化できなかった。後期後葉～末葉の注口土器片、面取りのある粗製深鉢などもあるが、頚部で括れ、立ち上がる口縁部に沈線のある有文土器は晩期前葉と考えられる。

[小結]石核と剥片の接合資料が得られているが、石器製作に適した剥片が少ないことから、目的的な剥片を抽出したあとの石器製作残滓と考えられる。捨場である遺物包含層から出土していることから廃棄の可能性が高いと考えられる。形成時期は晩期前葉以降である。

(岡本)

剥片集中域2（調査時：遺構外S-244　遺物図25-4～10、写真112）

[位置・確認状況]　ⅣT34グリッドの第Ⅲ層を掘り下げ中に、剥片が集中する地点として確認した。取り上げ日は6月27日である。

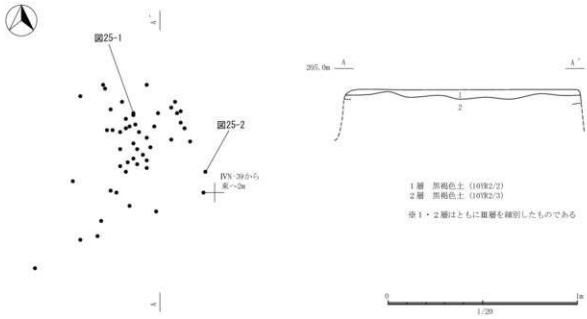


図25-1
図25-2
JVN-20から
東へ2m
205.0m
A
A'
1
2
1層 黒褐色土 (10YR2/2)
2層 黒褐色土 (10YR2/3)
※1・2層はともにⅢ層を細別したものである
0
1m
1/20

図⑭ 剥片集中域１

［規模・形状・堆積土］ごく狭い範囲に剥片が集中しており、堆積土は周囲の第Ⅲ層と区分できない
［出土遺物］石核9点に剥片をあわせ計1455.4gが出土した。写真の中央部に石核は5点おいたが、いずれも礫皮付近が淡黄色であり、剥片の多くは同一の石質である。剥片は2～3cmの剥片が多く、石核も小形である。5点の石核(図25-4～8)と剥片2点(図25-9・10)を図示した。
［小結］周辺の出土土器から縄文時代後期後葉～晩期前半に形成されたものと考えられる。石核・剥片ともに小形であることから石鏃等の小形の石器製作に関する資料の可能性がある。遺物包含層から出土し、剥片等が分布する範囲が狭いことから、一括廃棄されたものと考えられる。

(齋藤)

剥片集中域3(調査時：遺構外S-207　写真71・113・218)
［位置・確認状況］ⅣV34グリッドの第Ⅲ層を掘り下げ中に、剥片が集中する地点として確認した。取り上げ日は5月21日である。
［規模・形状・堆積土］ごく狭い範囲に剥片が集中しており、堆積土は周囲の第Ⅲ層と区分できない
［出土遺物］石核2点に剥片・二次加工剥片をあわせ計861.4gが出土した。10種類程度の母岩からなる。写真の中央部に石核と剥片の接合資料(左上)、緑色凝灰岩製の剥片(中央)、剥片の接合資料(右下：写真右上の礫皮の残る3点の剥片の接合資料も同一母岩)を、そして他に二次加工剥片2点、石核1点をおいた。
［小結］周辺の出土土器から縄文時代後期後葉～晩期前半に形成されたものと考えられる。遺物包含層から出土し、剥片等が分布する範囲が狭いことから、一括廃棄されたものと考えられる。

(齋藤)

剥片集中域4(調査時：遺構外S-201　写真71、遺物図25-11～13、写真111・113・218)
［位置・確認状況］ⅣU33グリッドの第Ⅲ層を掘り下げ中に、剥片が集中する地点として確認した。取り上げ日は5月10日である。
［規模・形状・堆積土］ごく狭い範囲に剥片が集中しており、堆積土は周囲の第Ⅲ層と区分できない
［出土遺物］割れた石核1点に剥片・二次加工剥片をあわせ計771.4gが得られた。数種類の母岩からなり、写真の中央部に石核と二次加工剥片を各1点おいた。2点の剥片の接合資料(図25-11・12)と剥片1点(図25-13)を図示した。資料の中で大きなサイズである4cmを超える剥片は礫皮に近い軟質部分があるものがほとんどである。1～2cmの小形の剥片が多い。剥片とともに出土した土器片は40点程度である。有文土器は少なく後期後葉の瘤付土器、晩期の半精製鉢の破片が各1点である。節が非常に細かい縄文を施した深鉢または鉢の破片を5点程度伴う。調査日の5月10日は調査の最初期であり、同日の包含層取り上げ土器は晩期土器が多数を占める。
［小結］出土土器から晩期前半の石器製作に関する資料と考えられる。石核が1点のみで少ないことが特徴的である。二次加工剥片を含め、剥片類は小形のものが多く、石鏃など小形の石器製作に関係する可能性がある。遺物包含層から出土し、剥片等が分布する範囲が狭いことから、一括廃棄されたものと考えられる。

(齋藤)

4　セクションベルトにおける遺物取り上げ

包含層の細かな堆積状況を把握するために、調査区内にセクションベルトを残して発掘を進めた。ベルトの設定場所は図Ⅷに、堆積状況は図Ⅸ・Ⅹに示した。以下、セクションベルトを地点名として用いる場合は、Sec2のように省略する。ベルトが異なる細別層名は、数字が同じであっても同じ層を指しているわけではない。つまり、Sec1・Sec2・Sec5・Sec7の各ベルトにⅢ-5層が存在するが、各々無関係の別層である。ただし、Sec2・3は例外的に一連の続き番号であり、Sec2・Sec3にそれぞれ存在するⅢ-6・8・11・12層は同じものである。

2011年調査では厳しい時間的制約の中、少数の職員で広い包含層を完掘する必要があった。そこで調査区のほとんどの部分で包含層の細分を行わず、斜面に沿って2本のセクションベルトを残すことによって全体の堆積状況を推定しようとした。また、ベルト部分では細別層ごとに遺物を取り上げることとした。このようにして残されたベルトがSec1～3である。Sec2・3は本来一連のベルトであるが、2003年トレンチで分断されているため別番号になっている。2013年調査ではSec1に平行して2本のセクションベルトを追加し、Sec5・7として調査した。なお、Sec4は今回報告範囲に含まれない場所に設定されており、Sec6は欠番である。

細別層ごとに取り上げられた遺物は、細別層の堆積時期の推定に資する土器のみを本項で取り上げることとし、その他の遺物はセクションベルトで出土したことを特別視せず種類ごとに掲載した。土器の一部は付着炭化物の放射性炭素年代測定を行っている。また、Sec1～3では花粉・植物珪酸体分析および土壌の水洗選別で回収された種子等の同定を行った。自然科学分析の詳細は、来年度以降に刊行される報告書に掲載する。

Sec1（図Ⅸ・⑮、写真14・72、遺物図26～29、30-1～6）

ⅣQ-35～37グリッドに設けた約2m幅のベルトである（図Ⅷ）。調査区中央の平坦部の西縁緩斜面に包含層が堆積している。ベルトの南側断面を図化した（図Ⅸ）。出土土器は遺物図26～30に掲載した。遺物の出土位置は図⑮に示した。同図において、赤点（取り上げ番号付きの土器片出土位置を示す）の集中範囲が本来のSec1範囲である。ただし、ⅣR-36グリッドの一部にもⅢ-3層・Ⅲ-2層の広がりが確認できたため、ベルト以外で出土した土器の一部をSec1-Ⅲ-3層あるいはSec1-Ⅲ-2層として取り上げ、図版掲載もSec1出土土器と一括した。図⑮においてⅣR-36グリッド内の赤点がそれらの分布を示す。

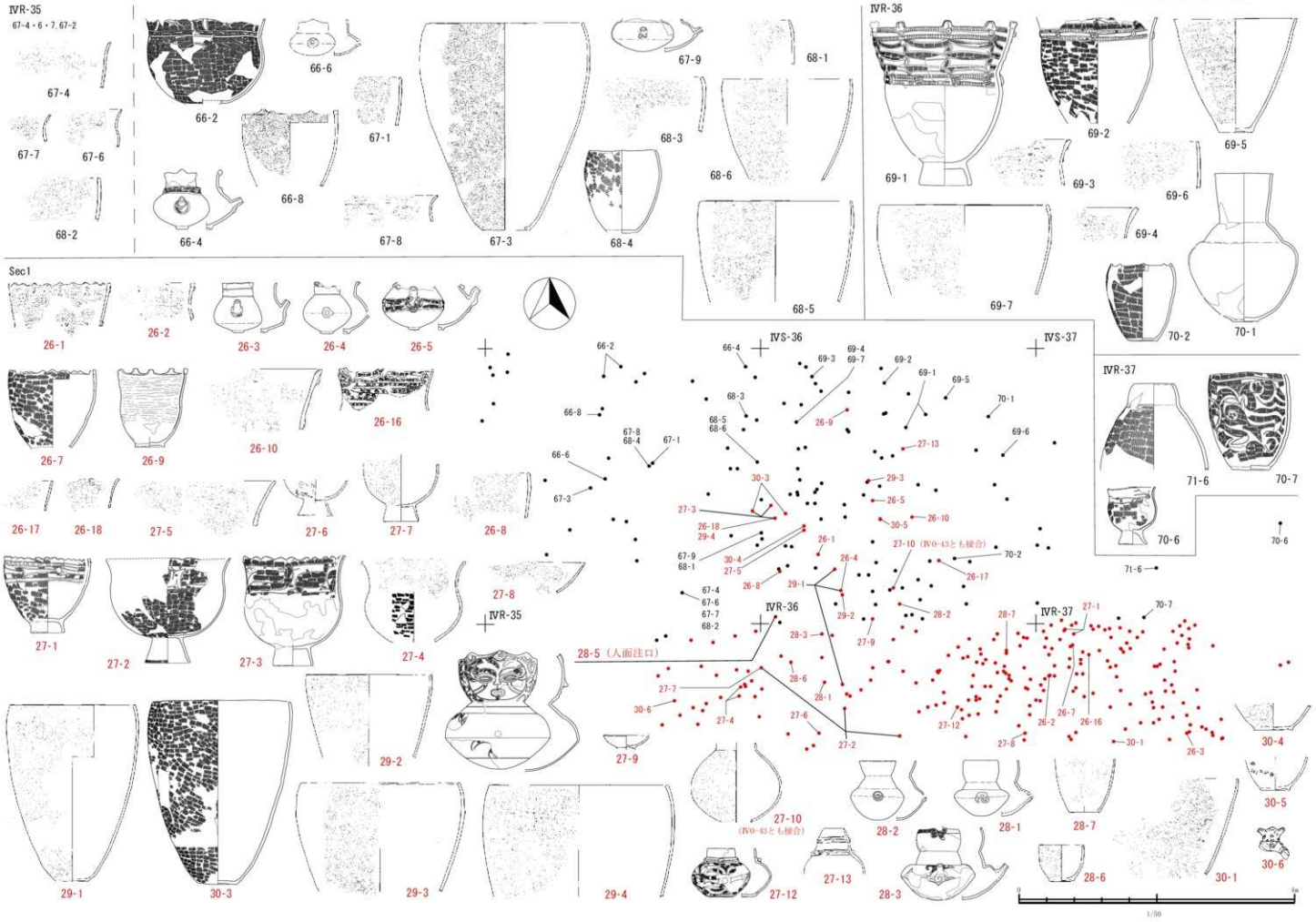
混礫黄褐色土であるⅣ層を基盤とし、その上部にほとんど遺物を含まない漸移層と考えられるⅢ-5層・Ⅲ-4層が堆積している。両層の出土土器は掲載していないが、出土量はごく少ない。Ⅲ-5層では口縁部破片は出土しておらず、底部は後期後葉～末葉の注口が1点のみである。Ⅲ-4層も口縁部破片は出土しておらず、深鉢底部4点が確認されている。比較のために掲載外の破片数を記すと、Ⅲ-3層は口縁部30・底部16、Ⅲ-2層は口縁部84・底部44、Ⅲ-1層は口縁部76・底部13点である。Ⅲ-1層は小片となっているものが多く、遺物は図化していない。Sec1全体で後期7-4期より古い土器、あるいは晩期1b期より新しい土器は出土していない。後期後葉～晩期前葉の遺存状態が良好な包含層である。Ⅲ-3層は斜面から平坦地にかけて形成された黒色土である。掲載した有文土器は後期のもの

に限られ、掲載外の口縁破片にも確実に晩期といえるものは含まれない。後期7-4期と8期は混在している。遺物図26に図化した土器を掲載した。4～6はベルト外で出土したものである。1・4・5は後期7-4期、2・3が後期8期と考えられる。その他も後期のうちに収まるものであろう。漆製品はJ18が出土している。Ⅲ-2層は斜面途中で盛り上がるように堆積し、平坦部にかけて層厚を減じる黒褐色土である。図化した土器は遺物図26～30に掲載した。28-5は人面付注口で、破片は数メートルの範囲にバラバラになって出土しており、取り上げ番号が付いている破片は1片である。4は接合しないが5の体部正面の破片で、注口基部が外れた部分に黒色物質が付着している。土製品では土偶の胴部が出土した(185-2)。漆製品はJ05・09・10・16が出土している。Ⅲ-1層は表土直下の黒色土で、堆積は薄い。

Sec2・3（図X・⑳、写真14～16・73、遺物図30-7、31～34）

2003年トレンチで分断されているが、調査区南側の平坦面から北側に傾斜する緩斜面の堆積状況を把握するための一連のベルトであり、まとめて記載する。出土土器は遺物図30～34に掲載した。トレンチより北がSec3、南がSec2である。ⅣM-44～ⅣT-44グリッドにかけて約1m幅で設定しており、グリッドラインに対してやや傾いているため、Sec2の一部は45グリッドにまたがる(図Ⅷ)。ベルトの西側断面を図化しており、細別層は通し番号である(図X)。Sec2ではⅢ-4層中で細かな筋状の土層堆積が確認されたため、東壁も一部を図化した。地山はトレンチ付近がやや窪むものの全体としては平坦で、ⅣRグリッド付近から緩やかに北に傾斜している。晩期後半になってⅢ-4・2層が70cmほどの厚さで堆積したため、今回報告範囲外である北側(柱穴が多数確認された場所)との比高差が顕著になり、さらに水田造成によって1mほどのはっきりとした段差が生まれたようである。縄文時代には緩やかな傾斜となっており、段差は存在していない。包含層はⅢ-2・4層を除き、おおむね水平に堆積している。Ⅲ-2・4層は土量が多く、別の場所の土を削るなどして運搬し、廃棄された可能性がある。

基盤のⅣ層はローム部分と混礫部分がある。漸移層的な部分をⅣ層として取り上げたようで、2点の円筒下層d式(写真195-21・22)が含まれていた。前期後葉が本遺跡で確認された最も古い時期の遺物である。最下層の包含層はⅢ-12層で、2003年トレンチ付近の地山が窪んだ場所に堆積している。掲載した土器はなく、円筒下層d式、中期の土器、後期7-4期の土器が含まれる。Ⅲ-11層は非常に薄い堆積層で、確認された有文土器は後期7-4期のみである。復元できた30-7、33-1は該期の深鉢である。33-2は香炉の頂部突起であるが、円筒状の突起端部片面に3箇所、もう一方に4箇所の刺突が施されている。Ⅲ-10層は地山の傾斜変換点付近に形成された堆積層、Ⅲ-9層はトレンチ付近で部分的に確認された堆積層で、掲載した土器はない。Ⅲ-8層はSec2・3にまたがってほぼ水平に堆積している。遺物を多量に含む包含層としてはこの地点では最も下部にあたる。掲載外の破片では後期7-4期～晩期3期が確認でき、復元された土器は31-1・33-3が後期8期、31-4が晩期1b期、31-2が晩期2期である。31-3は無文の粗製土器で、晩期の所産と考えられる。層厚は20cmほどで、後期後葉～晩期中葉にかけてそれほど堆積が進んでいない様子が窺える。Ⅲ-7層は上面に土器が集中する。ⅣN-44グリッドの晩期中葉の遺物集中(図⑳)はこの層に対応するものとみられる。掲載外の破片では晩期1a期～晩期3期まで確認できるが、31-5～9、32-1～3など主体は晩期3期であり、グリッド出土分を含め良好な一括資料である。Ⅲ-6層は掲載外の破片では後期7-4期～晩期5期が確認できる。33-4が後



図⑮　土器の出土位置（Sec 1・IVR-35～37）

期7-4期、32-7が晩期1b期、32-4・5・8が晩期1期、32-6が晩期3期である。粗製土器は時期の特定が困難だが、晩期前半までの所産と考えてよい。Ⅲ-5層は堆積範囲が狭く、出土遺物の内容からはⅢ-7層との関連が強い。32-13が晩期2期、32-11・12が晩期3期である。また、土偶(182-3)が出土している。Ⅲ-4層は斜面部に厚く堆積する。ベルト東壁では層内が細分できる状況が確認でき、焼土や炭化物、自然石などを含む土砂の堆積が繰り返された様子を知ることができる。晩期4期の堆積層であり、復元可能な土器は34-1～8に掲載した。また、土玉(191-15)が出土している。Ⅲ-3層は遺構の可能性もあるが平面では確認できなかった。Ⅲ-2層はⅢ-4層を覆うように形成され、遺物は少ない。破片資料では晩期中葉の半精製鉢が多く、Ⅲ-4層と同じく晩期4期の堆積層と考える事ができる。34-9は後期7-3期の土器であり、運搬元の土に含まれていたものではないだろうか。土製品(192-12)も出土しているが、晩期4期に下るものではないように思われる。Ⅲ-1層は包含層形成の最終段階の堆積層であり、32-16は晩期4期、32-15は晩期5期に属す。一方でⅢ-7層を覆っているため、写真のみ掲載とした写真196-2を含め、直下に含まれる晩期3期の土器も多く出土している。32-14はⅢ-7層と接合しており、Ⅲ-7に帰属させるべき土器である。Ⅱ層では弥生土器が1点出土している(図206-1)。

掲載外の破片数は下記のとおりである。Ⅲ-12層：口縁6、底部1。Ⅲ-11層：口縁9、底部2。Ⅲ-10層：口縁15、底部4。Ⅲ-9層：口縁1。Ⅲ-8層：口縁168、底部43。Ⅲ-7層：口縁49、底部13。Ⅲ-6層：口縁132、底部44。Ⅲ-5層：口縁30、底部12。Ⅲ-4層：口縁85、底部12点。Ⅲ-3層：口縁3、底部2。Ⅲ-2層：口縁19、底部7。Ⅲ-1層：口縁139、底部46。Ⅲ層(細別不明)：口縁19、底部8。Ⅱ層：口縁105、底部13。Ⅰ層：口縁64、底部25。

Sec5（図Ⅸ、写真16・17・74、遺物図35・36）

ⅣS-34～36グリッドに設けた約50㎝幅のベルトである(図Ⅷ)。Sec1・7に平行し、調査区中央の平坦部の西縁緩斜面に包含層が堆積している。斜面が次第に埋まり、平坦になっていく様子が読み取れる。晩期1b期までに大部分の土層が堆積したと考えられる。ベルトの南側断面を図化した(図Ⅸ)。細別層の数字はSec1・7と対応関係になく、あくまでも本ベルト内での区分である。土層細別以前にもⅢ層上・中・下として遺物を取り上げており、Ⅲ層下がⅢ-12層、Ⅲ層中がⅢ-9層、Ⅲ層上がⅢ-7～8層に相当する。出土土器は遺物図35・36に掲載した。

Ⅲ-12層は安定した黒褐色土である。遺物は少なく、後期7-4期の土器が確認される。Ⅲ-11・10・9層は斜面に堆積している。いずれも遺物は少なく、後期末～晩期初頭の土器が確認できる。35-1は後期8期の深鉢、35-2は粗製鉢である。Ⅲ-8層でやや遺物が増える。35-3は後期7-4期の深鉢、35-4は晩期1a期の注口である。特-238として取り上げた漆櫛(写真240)の出土層である。Ⅲ-7層も遺物が多いが、復元できるものはなかった。35-5は内面に漆かアスファルトの付着した壷である。Ⅲ-6層は層厚の薄い炭化物の密集層で、焼土は含まない。Sec1ではⅢ-2層の下部でこのような炭化物の密集が確認されている。Ⅲ-5層は遺物をやや多く含む。35-7は後期8期の深鉢、35-6は晩期1a期の台付鉢、35-8は晩期1～2期の壷である。35-9は粗製深鉢で、底部が高台状になることから晩期前葉頃までの所産である。Ⅲ-4層はSec5の中で最も遺物の出土量が多く、礫も多く含まれる。SQ19を覆う堆積層である。復元された土器は晩期1b期までのものであるが、晩期5期の体部破片を1点含む。堆積の状況や出土遺物から、Ⅲ-4・5・6層を合わせたものがSec1-Ⅲ-2層に対応するものと考えられる。

36-2・4・5は晩期1a期の土器である。5は出土数が少ない大型の有文注口である。36-1(KAWA(1)-35)は晩期1b期の深鉢で、外面付着炭化物の放射性炭素年測定結果は2,960±20yrBPである。36-3は晩期1期の台付鉢である。Ⅲ-3層より上部では出土量が減り、復元可能な個体も出土していない。有文土器はⅢ-3層で晩期2期、A層で晩期1b期と3期の破片がそれぞれ1点出土しているほかは、晩期1a期までのものである。A層は礫をほとんど含まない。西端はブロック07に対応する堆積土である。

掲載外の破片数は下記のとおりである。記載のない層では出土していない。漸移層:口縁1、底部2。Ⅲ-12層:口縁4。Ⅲ-11層:口縁2。Ⅲ-9層:口縁7、底部1。Ⅲ-8層:口縁11、底部4。Ⅲ-8・9層:口縁6、底部2。Ⅲ-7層:口縁30、底部8。Ⅲ-7・8層:口縁73、底部24。Ⅲ-5層:口縁57、底部17。Ⅲ-4層:口縁107、底部36。Ⅲ-3層:口縁6、底部4。Ⅲ-2層:口縁2、底部2。Ⅲ-1層:口縁5、底部2。Ⅲ層(細別不明):口縁3、底部1。A層:口縁8、底部3。

Sec7(図Ⅸ、写真17・74、遺物図37～39)

ⅣS-34～36グリッドに設けた約50cm幅のベルトである(図Ⅷ)。Sec1・5に平行し、調査区中央の平坦部の西縁緩斜面に包含層が堆積している。晩期1b期までに大部分の土層が堆積したと考えられる。ベルトの南側断面を図化した(図Ⅸ)。細別層の数字はSec1・7と対応関係になく、あくまでも本ベルト内での区分である。斜面途中では一部の遺物をⅢ上・中・下層として取り上げており、Ⅲ下層がⅢ-10層、Ⅲ中層がⅢ-8・9層、Ⅲ上層がⅢ-2・7層に相当する。出土土器は遺物図37～39に掲載した。

Ⅲ-10層は安定した堆積層で、Sec5-Ⅲ-12層と対応する。遺物は上面に多く、晩期1a期までの遺物を含む。また、ブロック11に接合する破片が出土している。37-1・5は後期7-4期の台付鉢と深鉢、37-3は後期7～8期の注口である。37-2・4・7は晩期1a期に属す。37-7(KAWA(1)-37)は外面付着炭化物の放射性炭素年代測定を行っており、測定結果は2,910±20yrBPである。37-6は粗製深鉢で、後期7-4期～晩期初頭に伴うものである。このほか土偶(186-3)も出土している。Ⅲ-9層はSec7の中で最も遺物の出土量が多く、ブロック12に接合する破片が多く出土している。38-1～4は後期7-4期～8期に属す。1は沈線間の連続した短沈線と低平は貼瘤が特徴的である。4は粗製土器の器形に沈線で粗雑な文様を施しており、本遺跡に特徴的な土器といえる。また、外面付着炭化物の放射性炭素年代測定を行っており(KAWA(1)-50)、測定結果は2,950±20yrBPである。38-5～7は粗製深鉢で、底部や口縁の形状から後期7-4期～晩期初頭に伴うものである。Ⅲ-8層は堆積の単位が小さく、図化した遺物はない。Ⅲ-7層は晩期1b期を含む堆積層であるが、接合が進んだ個体は後期のものである(38-8～11)。Ⅲ-6～3層はそれまでの堆積層と傾斜角度が異なる。堆積の単位が小さいためか遺物は少なくなり、接合が進んだものもほとんどない。39-1・2・4・5は晩期1a期の所産である。4・5は同一個体の壷で、底部の破損部にアスファルト様の黒色物質が付着している。Ⅲ-2層はSec7全体を覆うように堆積し、西端でブロック07を含む。39-3は単独で出土した晩期1b期の壷である。土製品では耳飾りが出土している。Ⅲ-1層、Ⅰ層は部分的に確認される。

掲載外の破片数は下記のとおりである。記載のない層では出土していない。Ⅲ-10層:口縁54、底部13。Ⅲ-9層:口縁116、底部35。Ⅲ-8層:口縁16、底部4。Ⅲ-7層:口縁81、底部14。Ⅲ-6層:口縁49、底部9。Ⅲ-5層:底部1。Ⅲ-4層:口縁7。Ⅲ-3層:口縁8、底部2。Ⅲ-2層:口縁38、底部11。Ⅲ層下:口縁7、底部2。Ⅲ層上:口縁4、底部1。Ⅲ層(細別不明):口縁2。Ⅰ層:口縁1。　(岡本)

5　土　　器(縄文時代後期後葉から晩期)

明確な掲載基準は設定しなかったが、口縁から底部まで接合した土器は原則として実測し、実測できなかったものも写真掲載(写真196-1～3・5～9・12)することですべて資料化した。完形個体として扱ったものは、後述のように428個体(小型土器含む)である。また、接合・復元後、残存率が高いものは有文・無文に関わらずできるだけ実測した。出土数が少ない香炉やミニチュア土器は本来の組成率が極端に低いと考えられるため、図化に耐えるものは実測した。器形・文様に特徴があるものは破片でも掲載しているが、この選別に一貫性はない。また、一つのグリッドで晩期前半の掲載遺物が多いが、晩期後半の遺物も出土している場合などは、時期の新しい土器を示したいために小片でも無理に掲載した。このほか、遺構等の時期決定に重要なものは小片であっても掲載することとし、図化が不可能なものも写真掲載に努めた。接合にはできるだけ時間をかけたが、隣り合うグリッドでも接合するものは少ない。図⑦のような遠距離接合は極めて少数である。

Ⅰ・Ⅱ層出土のものも少量あるが、本来の包含層はⅢ層だけなので、調査区内をA～Fの6区域に区分(図⑥)した上でグリッドごとに掲載した。帰属時期が不明なもの、文様・器形が珍しいと思ったもの、胎土に特徴があるものなどは小片でも掲載しているため、掲載量は出土量に比例するわけではない。これまで津軽地域での出土事例が少ない後期7-4期、8期、晩期1a期は掲載量が多い。粗製土器は時期が特定できなくても残存度が良好なものは掲載している。帰属時期は決定が難しいが、出土している有文土器と一致する可能性が高い。グリッドごとにどの時期の土器が出土したかという詳細な記録は取っていない。土器の特徴やスス・コゲ等の使用痕は観察表に詳細を示すこととし、本文での記述は大幅に省略した。土器内面のコゲ付着は、容量が小さい晩期の土器で顕著にみられる。

i)時期区分

青森県史で示された後期から晩期の時期区分(関根2013)を準用した。本文では県史の後期7期第4段階を後期7-4期と略したほか、観察用では晩期1a期を晩期1aのように記している。また、主要な時期以前は十腰内Ⅳ、榎林のように型式名で記載し、型式に対応できないと判断したものは後期末～晩期初頭のようにまとめた。土器ごとの帰属時期については、関根達人氏(関根2005)、小林圭一氏(小林2010)の論文を参考に担当者が個別に判断した。文様・器形等に基づく型式的な区分であり、出土時の共伴関係はあまり考慮していない。遺物の帰属時期は、後期後葉から晩期後葉までが主体を占める。十腰内Ⅳ群以前の土器は少量である。後期7-1・2期は出土しておらず、後期7-3期も極めて少ない。包含層の形成は後期7-4期に開始され、晩期5期まで継続する。晩期6期の土器は出土していない。後期7-4期・8期、晩期1a期・3期の出土量が多い。

表5-1　時期区分(再掲載)

					本報告		青森県史(関根2013)	型式等		備考
後期		後葉		瘤付土器	7-3期		7期3段階	十腰内Ⅴ群		本文中で7-3期以前を瘤付土器前半とした
					7-4期		7期4段階	(十腰内Ⅴ群に欠落する時期)		瘤付土器第Ⅲ段階(小林2008)
		末葉			8期		8期	(十腰内Ⅵ群)		瘤付土器第Ⅳ段階(小林2008)
晩期	前半	初頭		亀ヶ岡式土器	1期	1a期	1a期	大洞B	大洞B1	
		前葉				1b期	1b期		大洞B2	
					2期		2期	大洞BC		
		中葉			3期		3期	大洞C1		
	後半				4期		4期	大洞C2		
		後葉			5期		5期	大洞A		
		末葉			6期		6期	大洞A'		

ⅱ)器種と器形区分

器種　縄文土器は、深鉢、鉢、浅鉢、皿、壷、注口、香炉の7器種に区分した。深鉢、鉢、浅鉢、皿については台(脚)部が付くものもあるので、大別7、細別11ということになる。脚付というよりも台付の方が通りがよいので、台付深鉢などと呼称する。高台と台部の区分は明瞭にできないが、おおむね1㎝を超える高さのものを台とした。台の有無が不明のものは深鉢、鉢、浅鉢、皿に区分している。器種区分のための比率を求める器高は、台部を除いた容器部分(口縁部から体部)の数値を用いた。最大長がおおむね5㎝以下の土器は小型(ミニチュア)土器として土製品扱いとした。各器種の区分は下記のとおりで、鉢系統(深鉢・鉢・浅鉢・皿)は口径と器高の比率で区分した。比率は弘前大学による今津遺跡の報告書を準用した(藤沼ほか編2005)。

・深鉢：口径に対する器高の比率が1を超えるもの。台部が付くものは台付深鉢とする。
・鉢：口径に対する器高の比率が0．5以上1未満のもの。台部が付くものは台付鉢とする。器高が不明な粗製品は深鉢に区分している。
・浅鉢：口径に対する器高の比率が0．3以上0．5未満のもの。台部が付くものは台付浅鉢とする。
・皿：口径に対する器高の比率が0．3未満のもの。台部が付くものは台付皿とする。器高が不明なものは基本的に浅鉢としている。
・壷：体部に最大径をもち、口縁がすぼまった器形である。内面は丁寧に調整されない場合が多い。
・注口：筒状の注ぎ口が付けられた土器で、口縁がすぼまった器形が多い。なお、注ぎ口の形態が筒状ではない片口が付された土器は、本器種ではなく器形に応じて深鉢や鉢に区分している。
・香炉：球状に近い体部で、側面に透かし等を有す土器。

本報告書では小型土器を含め下表(表5-7)のように428点を完形個体として扱った。ここでの完形個体とは、図上で口縁部から底部までが復元できるものを指している。なお、口縁に付属する突起頂部が欠損しているもの、丸底が想定されるが底面が欠損しているもの、台部が端部まで残存していないが台付であることが判断できる個体など、報告者が軽微な欠損と判断したものを含めて完形として扱っている。完形扱いの土器は、観察表の図番号の欄に網掛けを施している。鉢系統の器種区分は後述のように比率に基づいているため、連続して変化している土器を無理に分けている場合がある。深鉢と鉢の場合、口径と器高の比率1：1付近では製作時の区分は窺えない。浅鉢と皿においても、皿に区分した中に文様等の特徴は浅鉢であるものが含まれる。

表5-7　完形土器の個体数　※完形扱いの土器は観察表の図番号の欄に網掛けを施している(小型土器は288ページ)

時期		器種 深鉢	台付深鉢	鉢	台付鉢	浅鉢	台付浅鉢	皿	台付皿	壷	注口	香炉	小型	合計
後期	7~4期	9	2	5	9	2	3			1	28	1		60
	8期	6	8	6	11		4			6	13	1		55
	7~8期	7		2	1	4	6			2	3			25
後期後葉~晩期		46	3	33	4								5	91
後期末~晩期初頭					1	1			1	3	3			9
晩期	1a期	1		5	23	2	3		1	4	17			56
	1b期	2	1	2	4	2	2			6	4			23
	1期				1					2				3
	2期			1	3	1				2	1			8
	前葉	1			2					1				4
	3期			8	17	23		4	2	16				71
	4期			2	4	1		3		2				12
	5期	2		1	1	1	2							7
	詳細不明									4				4
合計		74	14	67	79	37	20	7	4	49	70	2	5	428

各個体は下記に示す口縁形状と器形区分の組み合わせにより、深鉢ⅡBa3t、浅鉢Ⅱ1などのように分け、観察表の「器形」欄に示した。細別不明のものは空欄とし、一方のみ区分した場合もある。

口縁形状　口縁形状は器種によらず下記のように区分し、図⑯に模式図を示した。

1：水平な口縁。

2：刻目が連続する口縁。

3：波状口縁。

4：小波状口縁。

5：突起もしくは装飾が連続する口縁(小波状口縁と区分できないものがある)。

なお、口縁の一部に突起をもつものには上記1～5に加えて記号 t を付し、1t、5tのように表わす。5の場合は連続する突起の中に一際大きな突起がある場合に t を付した。

器形　深鉢・鉢、浅鉢・皿はそれぞれ一括し、下記のように区分した。図⑯・⑰に模式図を示した。香炉と小型土器(土製品扱い)は区分していない。

深鉢・鉢

Ⅰ：くびれがないもの。

・ⅠAa：内湾する。

・ⅠAb：内屈する。

・ⅠBa：口縁付近が直線的に立ち上がる。

・ⅠBb：体部から口縁にかけて緩やかに立ち上がる。

・ⅠC：体部から口縁にかけて直線的に開く。

Ⅱ：くびれがあるもの。

・ⅡA：変換点が明瞭でない。

・ⅡBa：変換点が明瞭で、口縁までが長い(器高の1/4以上)。

・ⅡBb：変換点が明瞭で、口縁までが短い(器高の1/4未満)。

・ⅡBc：変換点が明瞭で、口縁までが極端に短い(2cm以下)。

浅鉢・皿

Ⅰ：くびれがないもの。

・ⅠA：屈曲をもつもの。口縁が内側に傾くか、直立するもの。

・ⅠB：屈曲なく緩やかに立ち上がるか、直線的に開くもの。

・ⅠC：体部から口縁部にかけて外反するもの。

Ⅱ：くびれがあるもの。

壺

・Ⅰ：無頸または短頸の壺。

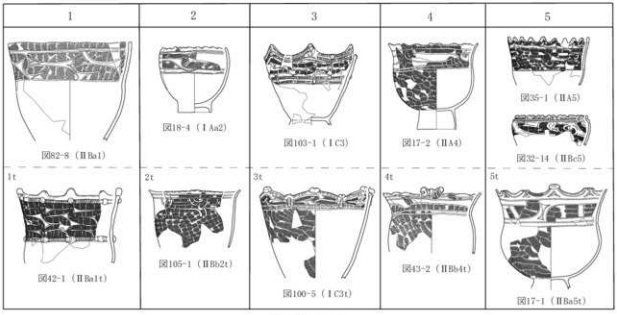
・Ⅱ：広口の壺。

・Ⅲ：通常の壺。

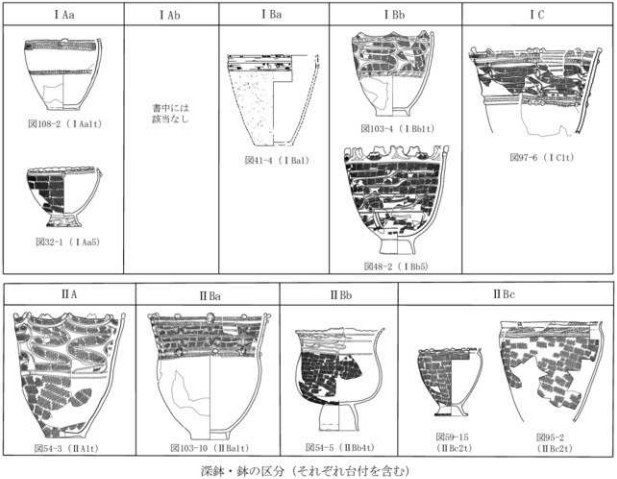
・Ⅳ：細頸の壺。

注口

・Ⅰ：体部上半と頸部・口縁部が一体で、作り分けがないもの。



口縁形状の区分

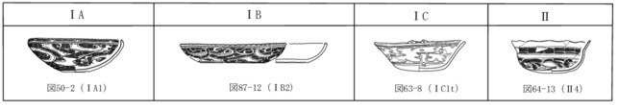


深鉢・鉢の区分（それぞれ台付を含む）

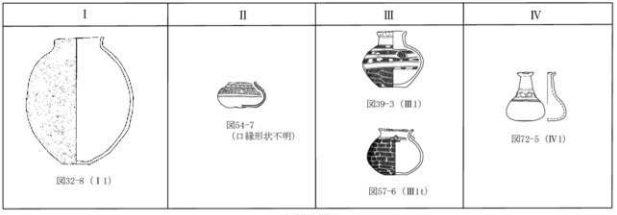
図⑯ 器形区分図（1）

・Ⅱ：体部と頸部・口縁部の作り分けがあるもの。
・Ⅲ：体部・頸部・口縁部の作り分けがあるもの。
ⅡとⅢの区分では作り分けを重視した。Ⅱとした中には装飾によってⅢのように見えるものがある。

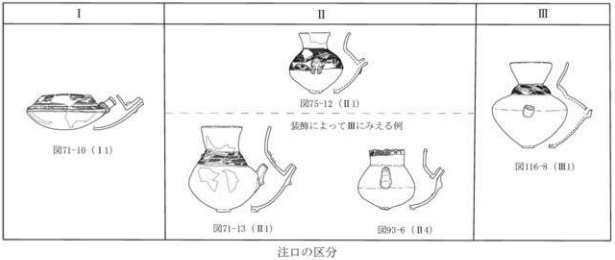
形態的な区分の他、各器種の中に精製、半精製、粗製の区分がある。また、文様が確認できるものは有文土器と呼称する場合もある。精製は文様が施文されたり外面全体にミガキが施されるなどの飾られた土器である。半精製は部分的(口縁部から頸部であることが多い)に沈線など簡単な文様が施された土器、粗製は地文のみあるいは無文(口縁突起は施される場合がある)の土器である。皿・台付皿・注口には粗製や半精製のものがほとんど確認できない。図70-7などは粗雑な文様をもつが、形態などの特徴から粗製土器と判断した。観察表の器種の欄では、精製の場合「精製」を省略して「深鉢」、「浅鉢」などとのみ表記し、半精製・粗製の場合は「半精製鉢」、「粗製深鉢」のように表記した。



浅鉢・皿の区分（それぞれ台付を含む）



壺の区分



注口の区分

図⑰　器形区分図（2）

ⅲ)区域A出土土器

平坦な地形である。地点的に一括性の高い出土状況が確認される。晩期3期の遺物が充実しているほか、ⅣP-45グリッドでは一括資料中に土偶を伴っている。

ⅣM-39(図40-1～6)1～4は隣り合って同一レベルで出土しており、晩期1b期の一括資料としてよい。1・3・4は取り上げ番号も同一である。5・6は1～4よりも10cmほど下位で出土したため、やや時期が遡る可能性がある。6は写真58-3で埋設土器に接して出土している土器であり、土器埋設遺構の検出面で出土している。埋設土器掘方の掘り込み面は不明であり時期の前後を論じても正確ではないが、土器を埋設する掘方があった可能性が高いため、6は土器埋設遺構設置と同時期かそれより古いと考えられる。

ⅣN-39(図40-7～9)復元実測が可能な個体を掲載した。特にまとまりはない。掲載した個体は後期7-4期から晩期初頭頃に収まるものと考えられる。

ⅣN-40(図40-10・11、図41-1～3)遺物の出土状況は写真75-1に示した。同一平面で遺物が密集した場所とそうでない場所がある。遺物が密集しているといってもその中に復元された個体が複数あるわけではなく、一括遺物は得られなかった。掲載したものは個別に復元が進んだ個体である。

ⅣN-42(図41-5)遺物量は少なく、復元できた個体はない。変わった文様の深鉢を図化した。

ⅣN-43(図41-6～10)復元が進んだ個体を掲載した。それぞれ単独で出土しており、一括性はない。7は晩期1b～2期の台付深鉢である。

ⅣO-38(図42-1・2)2点が復元実測できた。1は後期7-4期の深鉢、2は後期8期の台付浅鉢である。

ⅣO-39(図42-3～7)遺物の出土状況は写真75-2に示した。復元が進んだ土器は後期7-4期のものが多い。一括性は保証できないが、このあたりが後期7-4期に廃棄場所とされていたということであろう。

ⅣO-40(図42-8)遺物の出土状況は写真75-2・3に示した。出土量は多いが接合の進むものは少なく、掲載したものは粗製深鉢1点である。

ⅣO-41(図43-1～8)遺物の出土状況は写真75-4・5に示した。土器は小さい破片となっているものが多く、礫も目立つ。復元が進んだ有文土器を掲載した。1は晩期1b～2期、2は晩期1b期の深鉢である。3～8は同一個体と考えられる台付浅鉢の台部で、晩期3期に比定される。完形に復元できないが、透かしなどの装飾に富み、器面には赤色漆が塗彩される。上尾駄(1)遺跡(青埋文編1988・第137図-9)や亀ヶ岡遺跡(青森県立郷土館1984・図27-1)に完形品の類例がある。異形石器も出土しているが、共伴する土器は特定できない。

ⅣO-42(図43-9～14、図44-1～8、写真196-10)遺物の出土状況は写真75-6に、土器の出土位置は図⑱に示した。後期7-4～晩期2期の資料が確認される。44-5～8は近接して出土した後期8期の一括資料である。6は文様帯の下端を水平線で区画しておらず、文様も他に類例のない異質な土器である。5のような条痕調整の深鉢も該期に伴うものと考えられる。44-4は晩期1a期の注口である。注口基部に二股に分かれた袋状の膨らみを有するのは該期の特徴であるが、この土器には袋状の膨らみの間に、頂部刻みをもつ低平な突起が付されている。同一個体の中に男女性器を表現したと考えられる。写真196-10は口縁装飾の形状から、晩期2期に比定される有文深鉢である。頸部に短沈線と沈線が交互に施文される例はこのほかに出土していないが、向様田B遺跡に類例があり(秋埋文編2005・第45図-7～10)、秋田県方面との関連が考えられる。44-1は付着炭化物の年代測定を行っている。

ⅣP-39(図45-1)1は後期7-4期の波状口縁深鉢である。貼瘤剥落箇所が複数あり、沈線や刻目の施文後に貼瘤が付されていることが観察できる。

ⅣP-40(図45-2・3)遺物の出土状況は写真75-3に示した。2は後期8期に比定される台付浅鉢、3は後期7-4期に比定される鉢で、ともに単独で出土している。3は縄文施文後に沈線と刻目を施しており、縄文の磨消しは行っていない。

ⅣP-42(図45-4～8)復元が進んだ土器を掲載したが、時期は後期末葉から晩期前葉までを含む。遺物取り上げ番号からみて同一日に異なる時期の遺物を一括して取り上げており、出土状況に一括性はない。アスファルト塊(写真75-7)も出土しているが、共伴する土器は特定できない。

Ⅳ0-43・ⅣP-43(図46-1～12、図47-1～10、図48-1～12)ⅣP-43の出土状況は写真75-8に、土器の出土位置は図⑲に示した。図46・47に掲載したものは、ⅣP-43とⅣ0-43グリッド北辺で出土したものである。出土地点の標高がほぼ同じで、型式的には後期7-4期と8期の両者が認められるが、出土状況からは一括性が高いと判断できる。47-4は口縁部に沈線をもつ粗製土器である。図48に掲載した土器はやや出土標高が高く、晩期に属すものを含む。2は晩期1a期の台付鉢である。本遺跡では入組文が二段に施文されているものは少ないが、本例はさらにその下に文様があり、三段構成の文様となっている。8は晩期後葉の可能性がある半精製台付鉢である。12は器台のように図化しているが、台付土器の台の一部で透かしのある場所の破片とも考えられる。27-1はSec1で出土した破片とⅣ0-43グリッドで出土した破片が接合している。

ⅣN-44(図41-4、図49-1～13、図50-1～15、図51-1～3)図⑳に土器の出土位置を示した。関連する遺物はSec2でも出土している。晩期3期の資料にまとまりがある。49-1～3は同一地点で出土し、ひとつの取り上げ番号が付されていた一括資料である。2・3のように頸部に沈線のみが施文されたものも、晩期3期として捉えることが可能である。49-4・5も同一地点で出土した。この場所では41-4も標高差をもたずに出土した。晩期3期(49-4・5)と晩期5期(41-4:N-44とN-41の注記を読み違えたため掲載が別の場所になった)が混在して出土している。49-6～13は同一地点で一括して出土した。49-8・9のような皿は晩期4期の混在ではないかという指摘もあろうが、写真76-1で示したようにP-1023・1024では皿が正位で重ねられて出土しており、これらはすべて晩期3期に属すと考えている。図50・51に示したものは一括廃棄されたものではないが、本グリッドでは晩期3期以外の有文土器が極めて少なく、これらも晩期3期に比定される。

ⅣN-45・ⅣN-46(図52-1～12、写真196-3・9・12)図㉑に土器の出土位置を示した。ⅣN-44と同じく、晩期3期が主体である。1・2は晩期5期に属し、出土標高はやや高い。8は後期8期に属し、晩期3期の土器に混じって出土している。

Ⅳ0-44(図53-1～6、図54-1～10、図55-1～5)図㉒に土器の出土位置を示した。写真77-1は53-1・4の出土状況である。また、接合状況から53-1～6が一括遺物と判断される。ただし、これらは型式的に晩期1a・1b期に分けられる。その他の土器は復元率が高いものを含めそれほどのまとまりを持っていない、後期8期～晩期1b期の土器である。54-7は写真76-2に示したように単独で出土した。54-4と55-3は同じ場所で出土している。

ⅣP-44(図56-1～7、図57-1～3)図㉓に土器の出土位置を示した。写真76-3のまとまりの中で56-1～4・7が出土している。このほか、56-5・6が同一標高で出土しており、これらを一括遺物と捉えた。3

は後期8期の台付深鉢であるが、頸部のくびれが強く、類例のない器形である。図57掲載分は出土標高がやや高い。

Ⅳ0-45(図57-4～12、図58-1～7、図59-1～15、図60-1～9、図61-1～3、写真196-6)図㉙に土器の出土位置を示した。写真76-4・5は遺物の出土状況で、折り重なるように土器が出土している。57-4～12、58-1～7は同一標高で出土しており、晩期3期の一括遺物と捉えられる。このほかにも晩期3期に属す復元個体は多く、写真196-6もその一つである。底部が高台状の60-7～9のような粗製深鉢は、より低い標高で出土した。高台状の底部は59-3など晩期初頭以前の有文鉢でも認められる。

Ⅳ P-45(図61-4～8、図62-1～12、写真196-11)図㉙に土器の出土状況を示した。本グリッドでは遮光器成立以前の土偶(図185-1)が出土している。写真77-4は土偶の出土状況で、破損した状態の前頭部と後頭部が近接して出土している。写真77-3は土偶周辺の土器出土状況で、写真77-5は土偶出土位置より下部の土器出土状況である。土偶の出土面とその下部とで接合することが多く、後期末葉における一括廃棄の状況を示していると理解される。図62に図化した土器を掲載した。写真196-11もこの中に含まれる。平口縁にB突起が一単位付けられた粗製深鉢である。62-1・2は貼瘤がはっきりしておりやや古い様相、7・8は口縁に三叉文が施されやや新しい様相を示す。61-7・8など時期が下る土器は、やや離れた場所で出土している。61-5は香炉の突起で、両端に動物の口のような表現が認められる。

Ⅳ0-46(図63-1～7)晩期前半の土器が復元されている。1は晩期1b期、2は晩期2期、3～6は晩期3期に比定される。2・3はともに伏せられた状態で隣接して出土した(写真77-2)。2は特殊な形状の注口である。7は粗製の小型壺で、晩期初頭頃の所産と考えられる。

Ⅳ P-46(図63-8)8は晩期3期の浅鉢で、全面に赤彩が施されている。

ⅳ)区域B出土土器

比高差1m弱の斜面と斜面下の平坦部に遺物包含層が形成されている。Sec1・5・7はこの区域の堆積状況を把握するために設けられたセクションベルトである。

Ⅳ0-35(図64-1～6)遺物は小片が多く、一括性はない。1・2はSec1のⅢ-3層に連続する部分で出土しており、それぞれ後期・晩期1b期に比定される。そのほかはSec1の層位と対応関係が不明なもので、晩期前半の土器を提示している。

Ⅳ0-36(図64-7～11)後期後葉～晩期の土器が出土している。9は香炉の頂部突起で、中央に横方向の貫通孔をもつ。目・鼻は刺突、口は押引によって長軸の片側に動物の顔のような表現が施されている。11は晩期1a期の台付深鉢で、小波状口縁と肩部の眼鏡状突帯が特徴的である。また、付着炭化物の年代測定を行っている。

Ⅳ0-37(図64-12～16)後期末葉～晩期の土器が出土している。出土の一括性はない。12は四角形の高台をもつ浅鉢の底部で、体部片がないため詳細な時期は不明である。高台の隅には低い突起が付されている。類例は少ないが向様田D遺跡の例(秋理文編2005・第104図-6)をあげておく。13は出土数の少ない晩期1a期の浅鉢で、体部に玉抱三叉文が施される。14は晩期1a期の注口で、体部に磨消縄文が施される。15・16は後期8期に比定される有文深鉢である。写真78-1は本遺跡において確認された漆製品の初例であり、この後多数の漆製品が出土することになった。櫛の一部と考えられる。

ⅣR-34(図65-1～6：別グリッドの関連資料含む)後期末葉～晩期前葉の土器が出土しており、一括性はない。1は晩期1b期の鉢で、縄文地に浅い沈線で文様が描かれる。2は晩期1a期の注口で底部は丸底、注口基部には袋状の膨らみが貼付けられている。3は土製品または蓋形土器のようにもみえたが、側面に摩滅した破面が確認できる箇所があり、土器の覆いの部分と考えられる。覆い部分をもつ土器ならば香炉と考えるのが妥当である。外面は貼瘤と沈線で施文され、赤彩が施されている。頂部にも突起など何らかの装飾があったと考えられるが、欠損している。貼瘤の直上にある沈線内には摩滅が認められ、本来褐色である器面が失われて明褐色の胎土が露出している。この摩滅は土器を全周しており、紐をかけるなどの行為があったことを窺わせる。内面は炭化物が付着し、覆いの内側で火を焚いていたものと考えられる。秋田県堀ノ内遺跡に類例(秋埋文編2008・図195-9)があり、同報告書では蓋に分類され、後期末葉に位置づけられている。4～6は3と同一個体とは言い切れないが、胎土の質感や縄文、赤彩の状態が類似し、器形が不明なものを集めた。鳥の足形のように3条の沈線を膨らみの部分にあしらうことが3・4・6に共通する。6は内部に炭化物が付着している。

ⅣR-35配石下(図66-1～8、図67-1～3)SQ19の構築面より下部で出土した土器である。土器の出土位置図は図⑮に示した。晩期1a期までの土器を含む。写真78-2はSQ19(左側に並ぶ石)の構築面より下部で出土した遺物を撮影している。奥に見える白い粘土は67-1の粘土入り土器で、その拡大写真は写真90-6に掲載している。手前に見えている土器は接合が進まなかったものなので掲載していない。67-3は胴部下半に補修孔と考えられる穿孔が施されている。

ⅣR-35(図67-4～10、図68-1～6)図⑮に土器の出土位置を示した。SQ19の構築面より上位で出土した土器で、晩期1b期(67-10)、晩期2期(67-8)を含む。粗製土器には68-1・5のように薄手で口唇の面取りが弱いものが含まれる。写真78-3・4は遺物の出土状況である。平らな面に広がるように遺物が出土している。67-4・6・7・68-2、67-9・68-1、68-5・6はそれぞれ同一地点で出土した。

ⅣR-36(図69-1～7、図70-1～5)図⑮に土器の出土位置を示した。後期7-4期～晩期1a期の土器が出土している。本グリッド出土土器にはSec1における細別層の広がりの中で出土したものがあり、それらはSec1の項で掲載した。写真78-5はSec1の北側に隣接する場所で、斜面の落ち込み状況を捉えたものである。写真78-6は斜面裾の出土状況の拡大で、図69-1・2が隣接して出土している。写真78-7・8は遺物の周囲に焼土を含まない炭化物の堆積が認められたことを捉えたものである。70-3は注口口縁の可能性がある。70-5は注口で貫通孔を開け直しており、注口部の途中で孔が二股に分かれ、内面では二箇所の孔が認められる。

ⅣR-37(図70-6・7、図71-1～7)図⑮に土器の出土位置を示した。後期7-4期～晩期1b期の土器が出土している。図70-6・7はそれぞれ単独で出土しており、写真79-2・3がその出土状況である。7の検出時には内底面の上部に自然石があり、その上で胴部破片が出土している。胴部破片が塊のように出土しており埋設された状況とは理解できなかったため、遺構には認定しなかった。当該土器は粗製土器の形態に稚拙な文様が施文された特異な例であり、時期は異なるが向様田D遺跡に類例を求めることができる(秋埋文編2005・第51図-6・7)。なお、この土器は付着炭化物の年代測定を行っている。図71には、小片であるが特徴のある土器を掲載した。1はボタン上の貼瘤。2は小さく連続した貼瘤。3は時期が不明な土器の一つであるが、内そぎの面取りが特徴的で、後期末頃かと思われる。4は晩期の注口、5は晩期1b期の浅鉢、6は後期の粗製壺である。7は深鉢であるが、凹底気味の平底で晩期前

半と考えられる。底部から胴部にかけての立ち上がりに非常に強い稜が形成される。写真79-1は漆製品の出土状況である。

Ⅳ S-34(図71-8～11)晩期前葉の遺物が散見され、出土状況には特にまとまりがない。

Ⅳ S-35(図71-12・13、図72-1～4)71-12は後期8期の鉢、13は後期7-4期の注口であるが、12の方が下位で出土した。出土層位のⅢ層下はSec5-Ⅲ-12層、Ⅲ層中はSec5-Ⅲ-9層に対応する。72-3は写真68-5左の注口であり、ブロック12に属す写真中央の香炉(図21-1)より上位で出土している。72-1は胴部下半まで文様が描かれており、胴部下半に文様が施される例は少ない。

Ⅳ S-36(図72-5～11：別グリッドの関連資料含む)写真79-4はⅢ層を掘り下げていく過程で、72-5・6が隣接して出土した状態である。共に晩期1b期の壷で、5は倒立して出土した。7は後期7-4期、8は晩期1期の深鉢、9は後期7～8期の注口である。10・11は壷か注口の頚部付近に表現された人面で、同一個体と考えられる。11の出土位置はⅣU-34であり、両者はやや離れた場所で出土している。眉毛から鼻にかけては低平な粘土紐を貼付けており、鼻の部分は貼瘤のようにさらに突出する。目の表現は隆帯が丸く完結しているかどうか不明である。

Ⅳ S-37(図72-12)12は粗製土器の胴部下半であるが、底部が完全な平底を呈すことから、晩期2期以降に比定される。

Ⅳ T-33(図73-1～10)後期8期～晩期2期の土器が出土している。図㉟に土器の出土位置を示した。73-1～4は重なり合うように出土しており、晩期1a期の一括遺物といえる。5は入組文の中に縄文ではなく細かな刻目が加えられており、本遺跡では大きく復元されたものがない。6は単独で出土しており、写真79-5はその出土状況である。8は晩期1b期、10は晩期2期に比定される。

Ⅳ T-34(図74-1～12、図75-1～13、図76-1～9、図77-1～8、写真196-1)後期8期の復元個体が多く出土したが、他の時期と完全に分離できないため一括性はやや低い。晩期前葉以降は出土数が少ないが、77-8のように晩期5期の破片を含む。図㉟に土器の出土位置を示した。グリッド出土土器はブロックのくくりから外れた場所で出土したものを主体とし、位置が重複する場合はブロックの検出前に出土したものである。74-1・2は隣接して出土しており、写真79-6に出土状況を示した。1は「逆くの字」形の縄文部と三叉文を伴う磨消部が交互に繰り返されるようにみえるが、沈線の本数が異なるなど文様に乱れを生じており、写真155で示したように器体の四分の一の範囲では文様構成が全く異なる。75-11は形を保ち、横転して出土した(写真79-7)。74-9・12も同一地点で出土している。75-8は晩期1b期の壷で、内部に黒色物質塊(現時点で分析はしていない)が付着している。土器は半分が被熱により劣化し、色調も変色している。器体が熱により膨張してヒビ割れを生じている。穴は接合する破片によってヒビ割れ以外は閉じられるため、打ち欠かれたものではない。

Ⅳ T-35(図78-1～5)写真79-8はⅢ層掘削開始直後の状況で、5がⅢ層の上部で出土したことを示している。4もⅢ層の上部で出土しており、これらはSI101の上部で出土しているため、SI101は4・5よりも古い時期の建物といえる。

Ⅳ T-36(図78-6)復元された土器はない。6は小型の深鉢で、後期8期に属すと考えられる。

Ⅳ U-33(図78-7～12、図79-1～11)写真80-1はブロック09よりも上部の遺物出土状況である。後期7-4期～晩期1b期を含み、一括性は低い。78-11・79-7、78-7・10、78-9・12はそれぞれ隣接して出土した。79-7は付着炭化物の年代測定を行っている。

ⅣU-34(図79-12～14、図80-1～9、図81-1～6)写真80-2はⅢ層下部におけるP-2447(写真193-18)の出土位置を示している。写真80-3は奥に見えるSI101の炉やセクションベルトより下部での遺物出土状況を示している。同一平面上に遺物が分布しているが、遺物同士はやや空間を空けて出土しており、廃棄の同時性をを認めることは難しい。また、まとまって捨てられたようにみえる土器も、接合が進まず図化できなかったものが多い。80-1は香炉で、内底面にはススが付着する。80-2は香炉の頂部突起で、突起としてはやや大きい。器体との剥離面にアスファルト状の黒色物質が付着している。80-5は内部に粉末状の赤色顔料が収められており(写真90-1)、後期後葉におけるベンガラの保管状況を示している。80-6は付着炭化物の年代測定を行っている。鑑胎漆器小型壷(図205-4)が5月21日取り上げ土器の中に含まれていた。81-2の壷は同日に取り上げられており、鑑胎漆器も晩期に属すると考えられる。

ⅣU-35(図81-7)出土土器は少ない。7は晩期1b期に属す。

ⅣV-33(図81-8～12)後期7-4期～晩期1b期の土器が出土している。8は口縁部に一山と二山、二種類の突起が交互に配され、一山の突起口唇に沈線が施されている。9は入組帯状文が上下対称の構成で描かれていない。写真80-4・5は土玉(191-5)の出土状況で、この土玉はⅣQ-45グリッド出土のものと接合している。

ⅴ)区域C出土土器

区域Aからの連続した平坦部が、ⅣRグリッド付近から緩斜面となり北側に傾斜する。写真81-1はこの区域におけるⅢ層上部掘削中の状況である。Ⅲ層の堆積はそれほど厚くなく、所々に自然石が密集する。ブロック旧SI03を除いては土器の出土量は多くなく、復元個体は他の区域に比べて少ない。

ⅣQ-39(図82-1)写真81-3はⅢ層上部掘削中の状況である。82-1は単独で出土した後期7-4期の深鉢である。文様帯は二段に分かれ、上下に同じ文様が施される。

ⅣQ-40(図82-2)写真81-4はⅢ層上部掘削中の状況である。2は接合が進んだ粗製深鉢である。口唇がしっかり面取りされており、晩期初頭以前に属すと考えられる。

ⅣQ-41(図82-3～12)写真81-5はⅢ層上部掘削中の状況である。土器を伴わない焼土遺構が3基確認されたグリッドで、時期推定の一助として時期が特定できるものは小片も図化した。晩期1b期までの土器が出土している。5は付着炭化物の年代測定を行っている。8はⅣQ・S・T-49グリッド出土破片と接合している。

ⅣR-40(図83-1)1が完形に復元された。底部が高台状の痕跡をとどめ、晩期前葉と考えられる。

ⅣR-41(図83-2～8)SI02が検出されたグリッドである。有文土器は2が後期8期、4が晩期1a期である。

ⅣQ-42(図83-9～15)写真82-1はⅢ層上部掘削中の状況である。写真中央の石が少ない範囲を掘り下げてブロック旧SI03を確認した。9～15はブロック検出以前の出土土器であるが、すべて後期のもので、ブロックとの時期差はない。14は付着炭化物の年代測定を行っている。

ⅣQ-43・ⅣQ-44(図84-1～17、図85-1～13)写真82-2はⅢ層上部掘削中の状況である。ブロック旧SI03とSec3の間のグリッドで、遺構はほとんど検出されていない。後期7-4期～晩期1b期の土器が出土している。Ⅲ層を少し掘り下げると写真82-3・4のようにやや大きい破片が出土し、これらには晩期の有文土器が含まれない。粗製土器でも85-9・11のように接合が進んだものは後期に属するも

のと判断される。細かな装飾が施された石製品(特-2:写真82-8)は写真82-3の撮影目に出土しており、後期後葉～末葉の所産と考えられる。

Ⅳ R-42(図86-1～23、図87-1～3)後期後葉～晩期初頭の破片も出土しているが、86-8～10のように晩期3～4期の赤色塗彩された土器がまとまっている。図㉜に土器の出土位置を示した。写真82-5・6は土器の出土状況である。

Ⅳ R-43(図87-4～19、図88-1～6)図㉜に遺物の出土位置を示した。写真82-7、写真83-1～4は遺物の出土状況である。上面には礫が多く含まれているが、Ⅲ層を少し掘り下げて礫が少なくなった所から土玉や櫛が出土している。後期後葉～晩期初頭の破片も出土しているが、これらの出土位置はグリッドの南にあり、晩期中葉の土器がⅣR-42グリッドから連続するようにグリッド北で出土している。このまとまりと重なるように土玉や櫛などが出土しているため、櫛や土玉は晩期中葉に属す可能性が高い。また、これらの遺物を包含する層は、Sec3-Ⅲ-4層に対応するとみられる。

Ⅳ R-44(図89-1～4)写真83-5はⅢ層掘削中の状況であり、本グリッド北半で平坦地から緩斜面に移行する様子が分かる。図㉜に土器の出土位置を示した。晩期中葉の土器のまとまりがⅣR-43グリッドから連続している。2の鉢は沈線内に細かい刺突が連続している。沈線内に連続する刺突を施した鉢は黒内ⅩⅢ遺跡(岩埋文編1994・第47図-74)で確認できるが、珍しい特徴である。

Ⅳ S-43(図89-5)5は晩期中葉の深鉢であるが、胴部上半で強く屈曲し、今回の報告では類例がみられない器形である。

Ⅳ S-44(図89-6～10)復元されたものは粗製土器ばかりだが、晩期中葉の土器がまとまっている。

ⅵ)区域D出土土器

地形は全体としてほぼ平坦で、Sec3付近にだけ区域Cから続く北向きの緩斜面がみられる。遺物の出土量は全体に多く、T列でやや少ない。

Ⅳ Q-45(図90-1～10、図91-1～11、図92-1～12)復元可能な個体は後期7-4期～晩期1a期のものである。晩期に属するものは取り上げの日付が早いため、遺物の取り上げ方によっては層位による時期区分ができた可能性もあるが、調査では廃棄のまとまりを捉えることができなかった。掲載外の破片資料の型式は記録していないため、晩期1b以降の土器が出土していた可能性もあり、写真84-2の異形石器や土偶がどの時期の土器に伴うかは明らかでない。写真84-1は91-5の出土状況である。91-6・7・11のように定型的でない文様が施文された土器がみられる。92-9・10は同一個体で、香炉の体部上半とみられる。11は香炉の頂部突起で、一方に人面が、もう一方に獣面が表現されている。人面の下半部を含む香炉体部上半が本グリッドで、人面の上半と獣面部分がⅣR-47グリッドで出土した。色調の違いは埋没環境の違いと思われ、赤みがかった部分は摩滅が認められるため本来は全体が黒褐色を呈していたものと考えられる。12は手捏ねの小型浅鉢である。

Ⅳ Q-46(図93-1～13、図94-1～9、図95-1～7)後期7-4期～晩期2期の復元個体がある。型式的に区分したものの出土標高は、母数が少ないながら晩期2期～晩期1b期が204.7m、晩期1a期が204.6～204.4m、後期8期が204.5～204.4m、後期7-4期が204.4m以下となっており、古いものが下部で出土する傾向が確認できる。93-1・2は一まとまりで出土した(写真84-6)。型式的な区分では1は後期7-4期、2は高台幅が広いため後期8期としたが、廃棄時期にそれほど差があるようにはみえない。

93-3～6もまとまりを持って出土している(写真84-5)。こちらも後期7-4期と後期8期の両者が含まれる。3は付着炭化物の年代測定を行っている。5は口縁突起の両脇に装飾的な小突起を付加する変わった形態である。その他の土器は出土時のまとまりを指摘することはできない。7は文様帯の上下に三列ずつの刻みをもつ。刻みをもつものには貼瘤が付されることが多いが、本例には貼瘤が付加されない。8は文様帯の中に斜めの隆帯があり、類例のない文様構成である。9～11は同一個体で、入組帯状文の中に細い刻みが施される。94-3は晩期1a期の壷で、頸部に縦長の突起と横位沈線を伴う横長の隆帯が交互に配されている。このような突起や隆帯は4でもみられ、晩期1a期に通有といえるが、3の場合は横長の隆帯が短いため目のようにみえ、突起を鼻と見立てることによって人面表現が簡略化されたものと考えることもできる。7には定型的でない文様が施文される。

Ⅳ Q-47(図96-1～5)96-1は典型的な晩期1a期の鉢で、付着炭化物の年代測定を行っている。写真85-1はその出土状況である。3は後期の香炉で、体部には貼瘤が付される。内底面にはスス状の黒ずみが認められる。4は晩期の壷で、内面に漆状の黒色物質が付着する。5は晩期1a期の注口で、体部に入組文が巡る。

Ⅳ Q-48(図95-8～10)9は後期8期、8は晩期1a期の深鉢である。10は香炉の体部上半で、円形の窓の下側に当たる部分とみられる。写真85-2は十腰内Ⅰ式土器(118-15)の出土状況である。左側は後期末葉～晩期の土器が出土する面、写真右側は当該土器が出土したⅢ層の下部に当たり、遺物量が少なくなり土色も黒褐色から褐色に変化している。

Ⅳ Q-49(図96-6・7)6の粗製深鉢、7の注口は単独で出土している(写真85-3)。

Ⅳ Q-50(図96-8)8には入組帯状文が施文されるが、文様帯の上部は沈線によって区画されていない。

Ⅳ R-45(図97-1～11、図98-1～9、写真196-8)97-1・2は同一地点で出土し、接合する破片は狭い範囲に分布する(写真84-4)。欠失部が多いため、破損後にこの場に捨てられたと推定できる。後期7-4期の有文土器、晩期中葉の粗製鉢が多く復元されたが、地点的に集中して出土しているわけではない。

Ⅳ R-46(図99-1～8、図100-1～11、図101-1～7、図102-1)図㉙に土器の出土位置を示した。99-1・2は隣接して出土している(写真85-4)。1には二種類の貼瘤が認められる。2の口縁には大小四個ずつの突起が配され、大突起は交互に形状が異なる。99-3～8はまとまった出土状況を示す(写真85-5)。3・4は後期7-4期の注口であり、5～8は該期の粗製深鉢と考えられ、7・8のように内湾する器形や面取りがはっきりした口唇、5のような高台状の底部が特徴的である。図100は後期7-4期～8期の土器である。2の内面には赤色顔料の付着が確認される。4は付着炭化物の年代測定を行っている。11は香炉の体部上半で、側面二箇所に円形の窓をもつ。101-4は体部に条痕が施された壷である。体部上半に最大径があり晩期後半の器形に近いが、口縁内面に沈線がない。本グリッドでは晩期後半の復元個体もなく、時期決定は保留とする。写真86-2は大型石皿の出土状況である。

Ⅳ R-47(図102-2～9、図103-1～11)図㉙に土器の出土位置を示した。102-2は晩期1a期の鉢で、緑色凝灰岩製の小玉(特-48)と共伴しており(写真86-4)、凝灰岩製の小玉が晩期初頭まで遡る可能性がある。103-6は出土地点が重なるが、鉢と玉よりも下位で出土している。102-3は後期8期の注口で、体部下半に穿孔が施される。単独で出土しており、異形石器が付近で出土している(写真87-2・3)。6は後期7-4期の深鉢で、文様帯の上下区画に細いヘラ状の刻みが施されている。接合する破片はⅣ R-48・Ⅳ T-51グリッドでも出土している。103-1～3はまとまって出土した(写真86-3)、後期7-4期

の一括資料と考えられる。4・5は後期8期に属し、文様帯の下端が類例の少ない刺突帯によって区画される。この2点は1～3とは出土地点がやや離れるが、同一標高で出土しているため一連のまとまりの可能性がある。6・7は後期7-4期の注口で、晩期1a期の鉢(102-2)の下部で出土している(写真86-5)。8～11は取り上げ番号がP-1254～1256で、これらは折り重なるように出土した後期7-4期の一括資料である(写真87-1)。なお、この周囲ではP-1726～1730というまとまり(写真87-4)があり、接合関係をもつものもあって、102-8・9、108-1・8も103-8～11の一括資料と関連する可能性がある。103-5・10・11は付着炭化物の年代測定結果を行っている。

Ⅳ R-48 (図104-1～11)まとまりをもって出土した土器はなく、接合が進んだものや文様が特徴的なものを選択した結果、掲載土器は古い時期のものだけになった。1・2は後期7-4期に比定され、付着炭化物の年代測定を行っている。写真87-5・写真88-1はその出土状況で、それぞれ単独で出土した。

Ⅳ R-49 (図105-1～12)目立つ時期は晩期前葉であるがまとまった出土状況を示さず、掲載した時期以外の土器も出土している。8・9は条が細く荒い縄文が施された粗製深鉢である。10～12は同一個体の粗製深鉢であるが、内外面に赤色顔料が認められ内底面には塊状に付着しており、顔料の精製に用いられた可能性が高い。写真90-3はその出土状況である。写真90-5は黄褐色粘土が内部に入った土器の出土状況である。この土器は接合が進まなかったため図化していないが、後期後葉～晩期の粗製土器である。

Ⅳ R-50 (図105-13～16、写真196-4・5)出土量がやや少なくなり、接合が進む個体も少ない。15・16の注口は単独で出土している。写真196-4は小型の粗製壺だが、今回報告分に類似の器形は含まれない。5は丸底の小型鉢である。

Ⅳ S-45 (図106-1～8)復元された有文土器は晩期中葉のものである。区域Cにおける該期のまとまり(Sec3-Ⅲ-4層相当)が本グリッドに連続している可能性が高く、粗製土器も中葉のものが多いと推定できる。1・2は同一地点で出土している。異形石器は単独で出土しており(写真88-2)、帰属時期は特定できない。

Ⅳ S-46 (図107-1～7)復元された土器に晩期中葉の個体がみられるため、Sec3-Ⅲ-4層に相当する層は本グリッドまで延びていたものと推定される。1は頚部が強く屈曲する晩期4期の鉢であるが、この器形は報告範囲ではこの1点しか出土していない。口縁は小波状を呈し、四単位の突起部では口唇に沈線が施される。頚部は沈線内にヘラ状の刻みが連続し、体部の縄文には二種類の原体が用いられている。突起や縄文の特徴は図117-19に類似している。7は体部が球状を呈す晩期4期の壺で、文様帯に縦区画線を伴う。この文様の壺も報告範囲ではほとんど出土していない。6は粗製壺で、器壁が非常に厚い。3は晩期5期に下る可能性もある。5は外面に接合痕が残存する粗製深鉢である。図の表現にやや不備があり、縄文は口縁部まで施文される。4は片口付きの鉢で、外面は無文である。2は口縁下に沈線を巡らす深鉢である。口唇の面取りがはっきりしており、後期後葉に伴う可能性が高い。

Ⅳ S-47 (図108-1～12)1～3は後期7-4期、7・9は後期8期に比定される。粗製土器は4～6・8がこの時期に伴うものであろう。10～12は晩期中葉に属するものである。

Ⅳ S-48 (図109-1～5、図110-1～5、図111-1～5、図112-1～6)遺物は大小の自然石に混じって出土した(写真88-3・4)。図㉘に土器の出土位置を示した。後期7-4期～晩期1b期の土器が復元されているが、出土標高にそれほどの差はなく、異形石器はどの時期の土器に伴うか明らかにできない。写真88-5・

6はその出土状況である。109-1・2は同一個体で、正立状態で単独で出土した(写真88-7)。完形のまま埋まっており内部には隙間なく土が入っていたが、器体の劣化が激しく復元できなかった。109-3～5は同一地点で出土している。4は器高が50cmを超える、非常に大型の深鉢である。文様帯は二段構成で、上下で異なる文様が施文される。器高の中央付近にも補修孔が認められる。スス・コゲは付着しているが、器面の荒れが少なく丁寧に扱われていた土器のように感じる。110-1～5は同一地点で出土しており、晩期1b期のまとまりの可能性がある。111-1・2は隣接して出土している。1は有文深鉢、2は粗製深鉢であるが、器形に共通性があり同時期のものとみてよい。口縁は小波状を呈し、台形状の突起が一箇所に付される。112-1はやや離れた場所で出土した破片とも接合関係をもつ。2は内部に赤色顔料が収められていた壷で、写真90-2はその出土状況である。4は口縁内側に刻み目のある隆帯をもつ。大型岩版(特70)は、本グリッドで出土している土器の様相から、晩期前葉までの所産と考えられる。

ⅣS-49(図113-1～9、114-1～11、115-1～5、写真196-7)図㊾に土器の出土位置を示した。グリッド西側の風倒木(写真89-1・2)とその土部(写真88-8)で出土量が多い。図113と114-1・2が風倒木に関連する土器である。深鉢は完形に復元できないものが多く、壊れたものを廃棄しているように思われる。5の内部には粉末状の赤色顔料が収められていた。114-1・2など晩期1a期をわずかに含むが、後期7-4期の土器がまとまっている。113-1・3は付着炭化物の年代測定を行っている。115-2は無文の鉢であるが、今回報告範囲では類似した器形が出土していない。3は晩期1b期の小型壷で、粗雑な文様が施文される。4は晩期4期の壷で、体部文様は三条一組の縦沈線と横位沈線間の刻み列が二段で構成される。5は底部に穿孔のある深鉢である。孔が外面に向けて広がるため、内底面を加撃していることが分かる。口唇や突起の形状から後期の所産と考えられる。口縁突起は一山から三山があり、残存部位では山の数が3-2-1-3-1のように確認される。

ⅣS-50(図115-6・7)遺物量はやや少なく、復元できた土器も単独で出土している。写真89-3は土偶(187-2)の出土状況だが、伴う土器は不明である。

ⅣT-48(図116-1)1は口縁から下がった位置にも補修孔が確認できる。また、Ⅲ層中で白色粘土塊が出土している(写真90-7・8)。

ⅣT-49(図116-2～8)3は貼瘤が付された粗製土器である。4は沈線が規則性なく施されており、胎土の特徴から後期8期と推定される。6は波状口縁深鉢で、波頂部下の刻みを伴う円形文が特徴的である。写真89-4(左)は土玉の出土状況である。

ⅣT-50(図116-9～13)9は底部が高台状で、後期後葉～晩期初頭の壷と考えられる。11は口縁突起の形状や貼瘤が用いられることから、沈線間の短沈線など晩期に近い要素をもつとはいえ後期8期の深鉢と判断される。口縁の割れ口にアスファルト状の黒色物質が付着している。12は底部に黄褐色の粘土が充填された状態で出土した。写真89-5は漆製品の出土状況である。

ⅶ)区域E出土土器 (図117-1～15)

この区域はⅢ層の堆積が薄く、遺物量も少ない。口縁から底部まで復元できる個体は出土しておらず、珍しいものや区域内で認められる最も古い時期と最も新しい時期のものを掲載した。グリッドごとの重量でⅣU-30が突出しているが、耕作地を造成する際に斜面側に押し出された土の中に遺物が

多く含まれていたためで、斜面地に包含層が形成されているわけではない。1～7・15は後期、8～13は晩期である。14は蓋形の土器で時期が確定できない。3は二条沈線とその間の刺突で不規則な文様が描出されている。6に用いられた原体は条や節が不規則で、オオバコなどの植物を利用した擬縄文の可能性がある。7は人面表現のある土器の口縁である。8は底面に二箇所、穿孔途中の盲孔がある。

ⅷ)区域F出土土器（図117-16～19）

この区域は遺物出土量が少なく、口縁から底部まで復元できるものは18・19の2点である。2点は写真89-6に示したように接して出土しているので、同時期の遺物と考えてよいかも知れない。16・17は珍しいものなので掲載した。16は1a期の壷または注口で体部に玉抱三叉文が施文されるが、中央の刺突の周囲に刻目を伴う円形文が巡る。17は晩期2期の深鉢で、崩れた羊歯状文が施文されている。大粒のパミスを含む胎土は他の土器に見られない特徴である。19の縄文は原体が二種類ある。写真89-7～9の土偶はそれぞれ単独で出土したものである。

ⅸ)写真のみ掲載土器（写真196-1～12）

1～3・5～9・12は口縁から底部まで接合したもので、図化しなかったものである。4は粗製壷と思われるが、類似した器形のものは他に出土していない。10は長い頸部に多段に短沈線が施されており、類似した文様は他に出土していない。11はⅣP-45で土偶(図185-1)に伴って出土した土器である。

このほか、写真197にアスファルト付着土器と漆付着土器を掲載した。

写真197-1～7はアスファルト状黒色物質が付着した土器である。分析は行っておらず、アスファルト以外の付着物を含む可能性もある。また、すべてのアスファルト付着土器を抽出したわけではない。注口基部に付着するものは後期7-4期～晩期1期のものに多い。欠損時の補修と考えられるが、この時期の注口部は外れやすく作られているようである。2・7は内面に付着しており、アスファルトを注口土器に入れて保存したか、アスファルト自体に何らかの加工を施す際に注口土器が使われた可能性がある。図205-5(写真241上段左)は後期7-4期～8期の注口底部である。内面に付着した光沢ある黒色物質は、漆とアスファルトの混合物であることが分かっている。

写真197-8～17は漆付着土器である。肉眼観察で漆と判断した。すべての漆付着土器を抜き出したわけではないので、全体量は不明である。後期に遡ることが確実な漆付着土器は出土していない。9は晩期4期の鉢で、内面に生漆(顔料が混ぜられておらず、縮み皺が認められるもの)が付着している。生漆が付着しているものは出土数が極めて少ない。13・14は粗製土器の内外面に漆塗膜が付着している。15は浅鉢で、内面には赤漆と黒漆が確認され、彩文土器の可能性がある。

ⅹ)年代測定をした土器

今回付着物の年代を測定した土器は、26点である。時期ごとに文様・器形が分かるものを選択し、形態から時期を特定できなかったSK05出土の1点を加えた。測定結果は時期別に下記のように整理される。なお、測定結果の詳細は次年度以降に刊行される報告書に掲載する。

・時期不明（1点）

図8-7(KAWA(1)-46・SK05・外面付着炭化物)：3,020±20yrBP

・**後期7-4期**（9点）

図82-5(KAWA(1)-09・ⅣQ-41・内面付着炭化物)：3,300±20yrBP

図103-11(KAWA(1)-40・ⅣR-47・外面付着炭化物)：3,030±20yrBP

図113-1(KAWA(1)-42・ⅣS-49風倒木・外面付着炭化物)：3,005±20yrBP

図93-3(KAWA(1)-41・ⅣQ-46・外面付着炭化物)：3,000±20yrBP

図100-4(KAWA(1)-43・ⅣR-46・外面付着炭化物)：3,000±20yrBP

図103-10(KAWA(1)-51・ⅣR-47・外面付着炭化物)：2,995±20yrBP

図113-3(KAWA(1)-45・ⅣS-49風倒木・外面付着炭化物)：2,985±20yrBP

図104-1(KAWA(1)-53・ⅣR-48・外面付着炭化物)：2,985±20yrBP

図104-2(KAWA(1)-44・ⅣR-48・外面付着炭化物)：2,970±20yrBP

・**後期8期**（6点）

図83-14(KAWA(1)-12・ⅣQ-42・内面付着炭化物)：3,080±20yrBP

図70-7(KAWA(1)-11・ⅣR-37・外面付着炭化物)：3,030±20yrBP

図38-4(KAWA(1)-50・Sec7ほか・外面付着炭化物)：2,950±20yrBP

図103-5(KAWA(1)-47・ⅣR-47・外面付着炭化物)：2,935±20yrBP

図80-6(KAWA(1)-49・ⅣU-34・外面付着炭化物)：2,930±20yrBP

図44-1(KAWA(1)-48・ⅣO-42・外面付着炭化物)：2,910±20yrBP

・**晩期1a期**（9点）

図64-11(KAWA(1)-10・ⅣQ-36・外面付着炭化物)：2,980±20yrBP

図96-1(KAWA(1)-39・ⅣQ-47・外面付着炭化物)：2,970±20yrBP

図16-6(KAWA(1)-13・SR28・外面付着炭化物)：2,950±20yrBP

図17-1(KAWA(1)-54・ブロック07・外面付着炭化物)：2,945±20yrBP

図17-2(KAWA(1)-36・ブロック07・外面付着炭化物)：2,930±20yrBP

図17-4(KAWA(1)-38・ブロック07・外面付着炭化物)：2,930±20yrBP

図79-7(KAWA(1)-34・ⅣU-33・外面付着炭化物)：2,915±20yrBP

図17-6(KAWA(1)-52・ブロック07・外面付着漆塗膜)：2,910±20yrBP

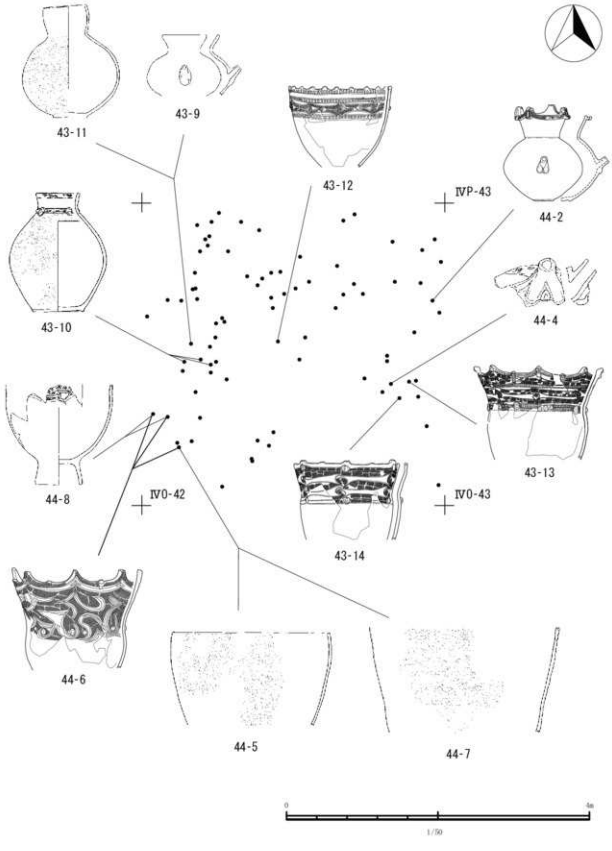
図37-7(KAWA(1)-37・Sec7・外面付着炭化物)：2,910±20yrBP

・**晩期1b期**（1点）

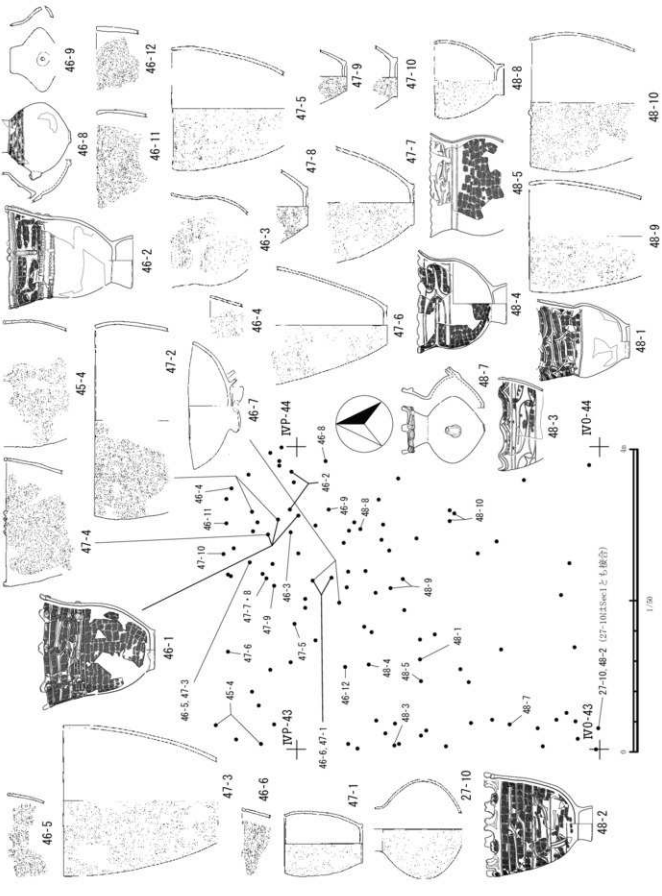
図36-1(KAWA(1)-35・Sec5・外面付着炭化物)：2,960±20yrBP

時期不明の1点は得られた年代から後期と判断される。後期7-4期の中央値は、3,300yrBPがやや離れており、3,030～2,970yrBPに8点が分布する。後期8期の中央値は3,080～2,910yrBPに分布する。後期7-4期と重なる部分もあるが、4点は明らかに新しい測定値である。晩期1a期の中央値は2,980～2,910yrBPに分布する。晩期1b期の中央値は2,960±20yrBPである。該期の測定が1点なのは、測定依頼時には36-1を晩期1a期と考えていたためである。後期8期～晩期1b期は中央値の分布が重なっており、炭素年代のみで新旧を論じることはできない。なお、既刊報告書ではこれらとは別に、晩期1a期・1b期・4期が各1点、晩期2期が3点の計6点が測定されている(小林ほか2006)。また、本報告書に掲載された土器の付着炭化物および付着漆計22点の年代測定を別途実施中であり、測定資料については観察表備考欄に「測定中」と記したことを付記する。

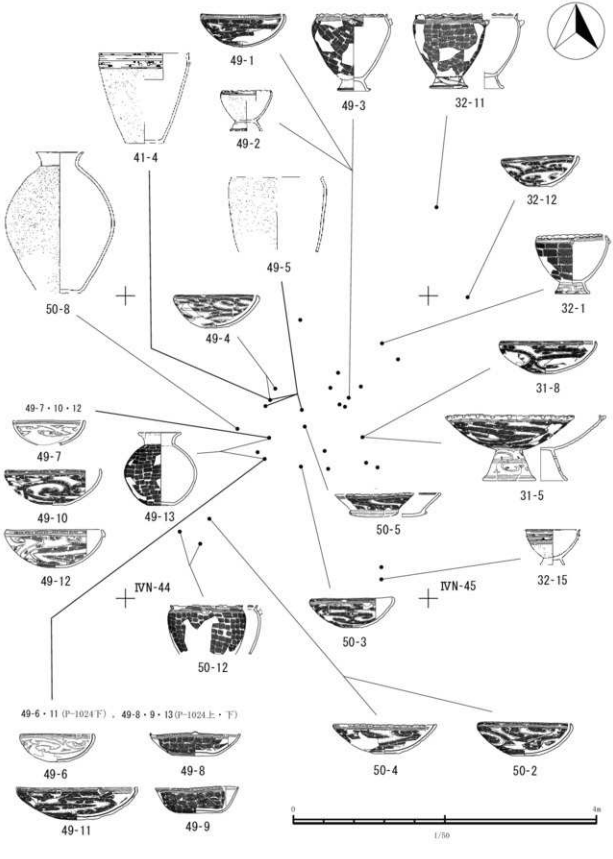
（岡本）



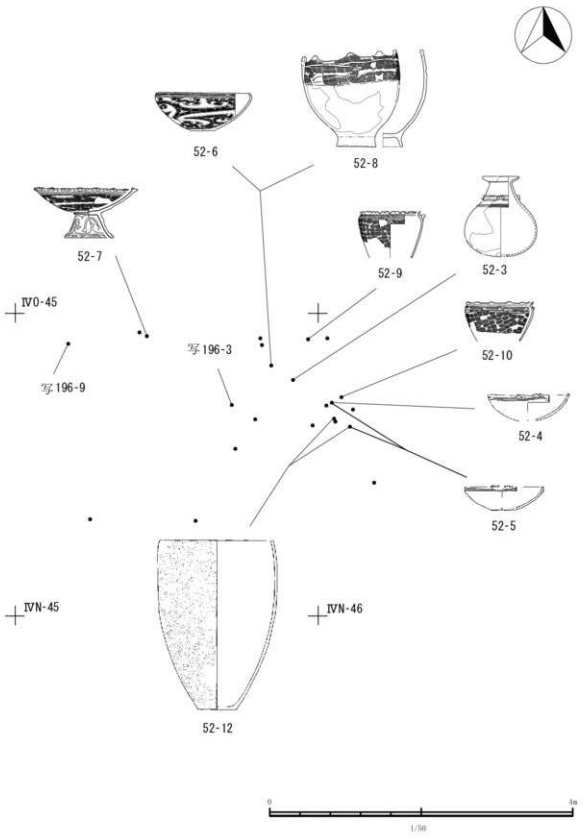
図⑱ 土器の出土位置（ⅣO-42）



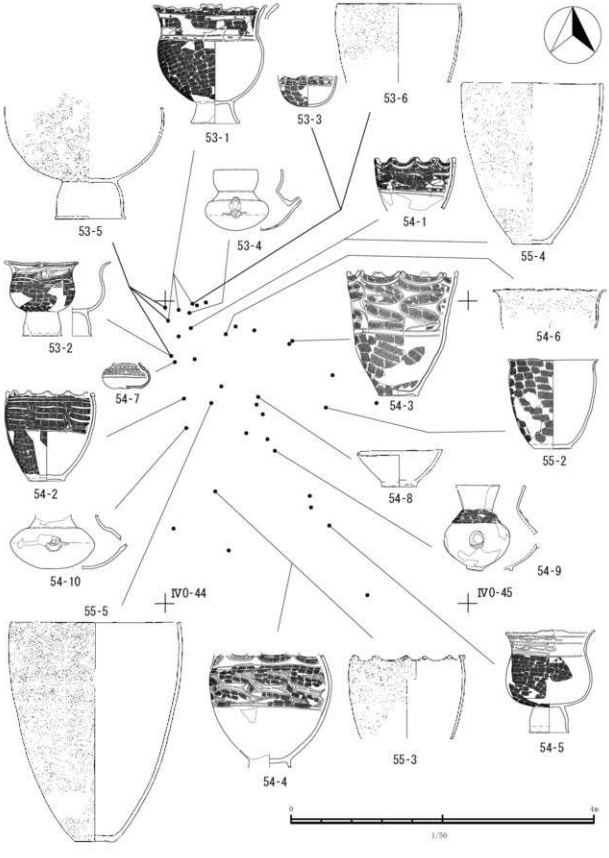
図⑲ 土器の出土位置（IV0・P-43）



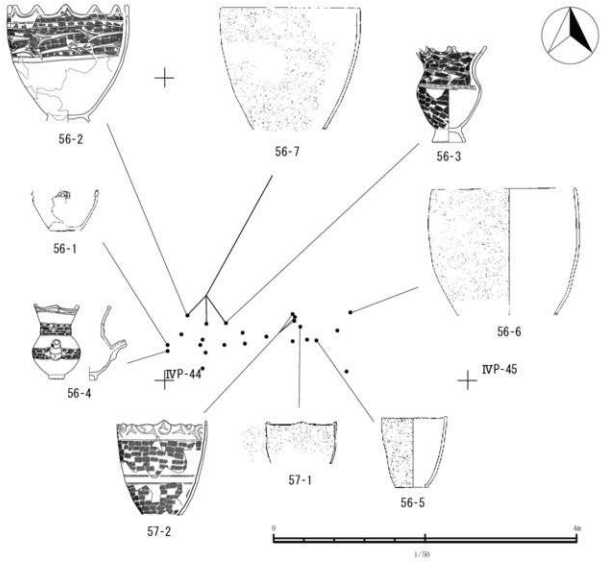
図⑳　土器の出土位置（Ⅳ N-44）



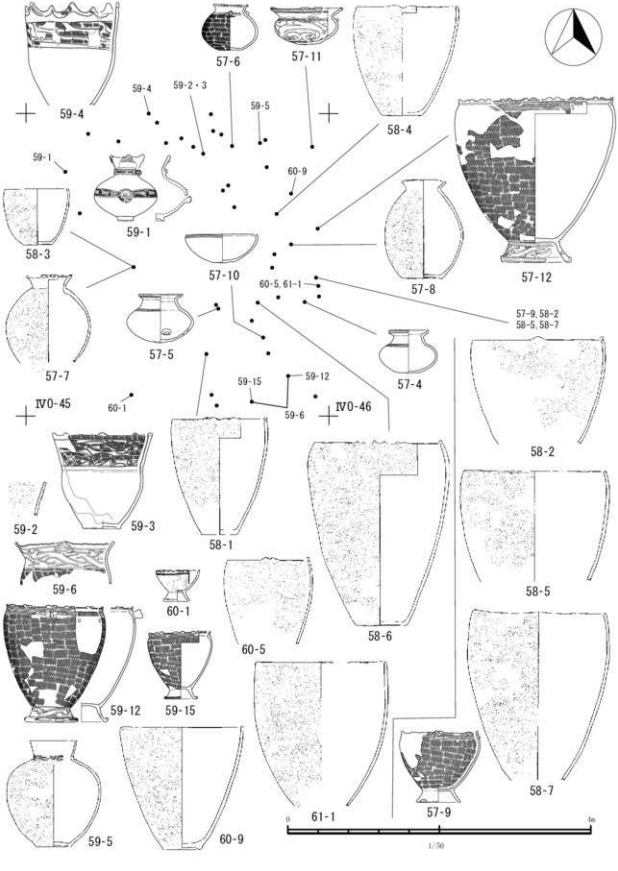
図㉑　土器の出土位置（ⅣN-45・46）



図㉒　土器の出土位置（Ⅳ0-44）



図㉓　土器の出土位置（ⅣP−44）



図㉔ 土器の出土位置(Ⅳ0-45)